
遼州戦記 墓守の少女

橋本 直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遼州戦記 墓守の少女

【Nコード】

N2516E

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

従軍記者クリストファー・ホプキンスは反政府武装組織の首魁、嵯峨惟基の取材の約束を取り付けた。そこで彼を待っていたのは残酷な戦場の掟と一人の廃村で墓を守る少女、シャムだった。保安隊日乗でのコスプレ娘シャムの過去の物語。設定資料等は次のブログで。<http://blogs.yahoo.co.jp/tt1933mania>

従軍記者の日記 1

クリストファー・ホプキンスは記事を書いている携帯端末から目を離して窓の外に目をやった。

昨晚央都宮殿府に突入した親衛旅団と防衛する教条派の武装警察の銃撃戦の中、親衛旅団を支持する市民をかき分けて銃撃戦を見つめていた光景がまるで夢か幻のように思えてきていた。街の戒厳令が明けたばかりだと言つのに安宿の窓から見える町には熱気のようなものが漂っていた。

遼南人民党教条派の支配の下、秘密警察の恐怖に怯えながら生きてきたこの貧しく若い国の人々は、大通りを闊歩しながら自由を満喫していた。銃声はほとんど聞こえないが街を行く車の祝福のつもりらしいクラクシヨンで何度眠りを妨げられたかを思い出すと苦笑いさえ浮かんできた。

クリスはそのまま窓に歩み寄る。眼下の大通りを車道などを無視して闊歩する人々の顔は明るい。そんな明るい表情の人々を見つめていたクリスの耳にノックの音が響いた。その音にひきつけられるように窓から離れるとクリスはドアに向かった。

クリスのたぶん最後になるだろう取材旅行に同行してくれた旧友の戦場カメラマン、ハワード・バスがそこに立っていた。アフリカ、中央アジア、南米、そして遼州。数知れない戦場を二人で駆け巡ってきた。どれも懐かしくもあり激しくもあり、多くは語るのは止めたい様なさまざまな生と死を二人で見つめてきた。

アフリカ系らしいの澄んだ瞳。がっちりとしたその手の中のカメラがおもちゃのようにも見えてしまう大きな手。そして寡黙でいながら深い教養を持つ。安心して背中を任せられる相棒として彼を得たことは自分にとって最大の幸福だとクリスは信じていた。

「やはり首謀者は吉田少佐だ。あと三時間後に行政院でクーデター首謀者の記者会見があるそうだ」

淡々と手に入れた情報を伝えるとその大男は冷蔵庫の隣の棚のコーヒーメーカーに手を伸ばした。昨日の取材でも親衛旅団の副官である吉田俊平少佐の指示でクーデターが始められたと言うことは親しい人民軍の中尉から聞いていた。彼もまた決起軍の目印である赤い腕章をつけて匂いの悪い両切りタバコをくゆらせていたことを思い出す。

昨日、宮殿の攻防が親衛旅団側の勝利に終わるのを確認した二人は通信社に送る材料を選ぶ為に語り合った。テーブルの上にはその時のままのコーヒーカップがおかれていた。結局眠ったのは夜明けの直前。時計を見ればもう昼を過ぎようとしていた。まだ眠そうなクリスの顔を見て呆れたと言う表情のハワードは白いコップを手にとると洗いもせずそのままコーヒーを注いだ。部屋に香るコーヒーの匂い。地球なら銘柄とかで文句をつけ絶対に口にしないインスタントコーヒーだが特に気にすることもなく、ハワードは口にカップを当ててみる。

「特等席は取れるんだろうな？お前のコネが頼りなんだからな」

一口コーヒーを飲んだハワードがようやく一息ついたというように表情を緩めながらクリスに向き直った。ハワードはデジタル技術を信用しないアナログな人間だった。手にしたカメラもスチールフィルムを使用する。そんな骨董じみた趣味のカメラマンだったからこそクリスは彼と組むことを選んだのかも知れないと思った。

「安心してくれ。ちゃんと次期皇帝の許可は得ているよ。最前列に陣取れるはずだ」

クリスはそう言うとうち自分もコーヒーを飲もうと窓から離れる。

「そいつはすごいな。いつもの事ながらあのお人の記憶力には頭が下がるね。それとかわいとお客さんだ」

ハワードはカップをテーブルに置いて笑みを浮かべた。

クリスには彼女がやってくることは予想が付いていた。紅いスカーフは、典型的なこの国の高校生らしく首に巻かれて、その上に乗った幼く見える顔の笑顔とをもち印象に残る。

「クリスちゃん！来たよ！」

その脳天気な言葉で再会を喜ぶ姿は、とても高校生とは思えないものだった。確かにこの国の東アジア系と区別のつかない原住民族の出身とはいえ、クリスから見ても幼すぎるように見える。

「もう3年ぶりか。どうだね学校の方は？」

彼女、人民軍の英雄でもあるナンバルゲニア・シャムラードはたじろがずにどんだん部屋に入ってきた。

「野球やってるんだよ！しかもアタシ、レギュラーなんだ！」

うれしそうに話す彼女の姿と外の解放を喜び、赤地に紺色の星の描かれた遼南帝国の国旗を降りかざす民衆の姿をクリスは重ねてみている。

「それは良かった。だが勉強もした方が良い。私も6年かかってハーバードを卒業した口だからね。ちゃんと勉強もしておくことだ」

「良いことを言うじゃないか。俺は大学中退だよ。コーヒーでも入れるとするか、シャムは甘いのが良いんだよね？」

ハワードはそう言うのと再び母国から持ち込んだコーヒーメーカーの方に向かった。ハワードも仕事に没頭しているここ数日は自分ではインスタントを飲むが彼のプライドが客にインスタントを出すことを許さなかった。

「北兼王ムジャンタ・ラスコー、嵯峨惟基大佐か。あの人物が次期皇帝とは。君はどう思う？」

ソファアに腰掛けようとしたシャムにクリスはそうたずねた。コーヒーメーカーに向かう大男からクリスに目を向けたシャムが目を輝かせながら微笑を浮かべる。

「隊長は優しいから大丈夫だよ」

思わず噴出したハワード。クリスも自分が戸惑った笑みを浮かべていることは予想が出来た。

「優しいだつて？あのマフィア崩れに優しさがあるのなら俺はとっくに死なばつてたよ！」

コーヒーメーカーの前でハワードはそう叫んだ。一般的な用語で

『優しい』という言葉の意味を探したなら、クリスマスも彼に同感せざるを得なかった。

嵯峨の優しさは戦場という特殊な空間でこそ有効な『優しさ』だった。嵯峨の信念、敵味方問わず最小限の被害で最大限の戦果を得るという状況を作り出す。それを『優しさ』とシヤムは呼んでいることはクリスマスにも分かっていたことだった。

「ああ、君が来ることが分かっていたれば珍しいものも用意しただろうが、こんなものしかなくてね」

クリスマスは昨日、久しぶりに教条派が立てこもった国防省を攻撃する親衛旅団との市街戦を取材に行ったときに親衛旅団の下士官に分けてもらった親衛旅団特製だというアンパンを彼女に手渡した。ただでさえ再会に満面の笑みのシヤムがさらにうれしそうに大きく目を見開く。

「これ！大好きなんだ！」

彼女はそう言うと、さっそくアンパンにかぶりついた。

「おいおい！レディーはこんな時はコーヒーが入るのを待つものだぜ！」

ハワードは満面に笑みを浮かべながらシヤムにそう言った。シヤムは口にアンパンをくわえながらハワードが差し出したコーヒーのカップを受け取った。

従軍記者の日記 2

受け取ったコーヒーをテーブルに置き、そのまま口にくわえたア
ンパンを手にとって純真そうな笑みを浮かべるシャム。それを見て
安心したのか、ハワードは自分のコーヒーを一口飲むと話を切り出
した。

「ほぼ市内は親衛旅団と呼応した人民軍部隊が制圧したらしい。教
条派に呼応する動きは無いようだ。遼北の亡命組や東海の花山院
軍閥や南都軍閥の動きが無いのが不気味だが」

そんなハワードの言葉に答える代わりにクリスは記事を書いてい
た端末を切り替えた。

その画面はここ央都を中心にして展開されている人民軍の状況を
図で示していた。多くの部隊に赤い旗のマークがつけられ、残りの
部隊には×が記されている。そして下半分には嵯峨のシンパと以前
から言われていた軍幹部や政府、人民党の高官の東海・南都両軍閥
首脳との会合の予定表が見て取れた。

「吉田少佐からの情報か」

ハワードは納得したようにコーヒーをすすする。その間にも赤いし
るしの部隊が次々と白旗と×のしるしに変わりつつあった。

「まあ教条派の幹部が央都宮殿で捕らえられて親衛旅団の管理下に
ある以上、抵抗するだけ無意味だとわかっているんだろ。それ
に恐らく根回しもしてあっただろ。それに実際勝ち目が無いの
は誰にでもわかる。多くの教条派の部隊では兵士が脱走して動くに
動けない状況だと言う話だ」

そう言うクリスに思わずハワードが頷く。その隣では二つ目のア
ンパンを口に運んでいるシャムがいた。

「脱走は遼南軍の十八番ってわけか。このまま南都と東海が吉田少
佐支持に傾くとすれば、教条派についても得なんか一つもないから
な」

そう言うとハワードはコーヒーカップを握り締める。同じようにクリスもまたコーヒーを啜った。クリスはいつもブラックのコーヒーを好んだ。豆は遼南南部の州、南都産だった。ヨーロッパ風の炒り具合はかなりきつめで、その苦味が口の中にゆっくり広がる飲み口がクリスの好みだった。

「ああ、半年前の政変で遼北の首脳部が改革路線を鮮明にして以降は東和や胡州との関係改善を進んでいるからな。教条派の強権政治を支持する馬鹿はどこにもいないよ。事実、さっき東和、大麗、西モスレムの実務者会議で吉田少佐のクーデターの容認で対応を急ぐことが決まったそうだ。地球もほぼ同じ対応を取るだろう。問題の胡州だが……」

政情不安が続いている胡州が動きを見せることはない。そうクリスは見ていた。国内での官派と民派の対立はいつ内戦に発展してもおかしくない状況であり、他国に関心を向ける余裕などなかった。一方で遼州星系最大にして地球とも伍する力を持つ東和共和国。この国が今回の吉田俊平少佐率いる親衛旅団のクーデターを事前にかんんでいたことはクリスも予想していた。

7年前、遼州星系と地球の間で戦われた第二次遼州戦争。それがこの遼南にもたらしたのはアメリカ軍の基地と強権的な指導者だった。大戦末期に皇帝ムジャンタ・バスバを追放して全権を手にしたガルシア・ゴンザレス大統領。老獪な政治手腕で地球諸国の支援を取り付けて独裁を敷いた怪物。

今、目の前に座って、アンパンにかぶりついている少女、シヤムがゴンザレス將軍率いる共和軍と戦った『騎士』であることなど、知り合いであるクリス達でもなければ信じない事だろう。

「そう言えば俊平からこれを渡してくれて」

「俊平？」

クリスは不思議に思いながら手紙を手にした。そしてそれが吉田少佐からのものであることがわかってつい噴出した。

「電子戦のプロが手書きの手紙とはずいぶんアナクロじゃないか」

そう言つてハワードは笑う。クリスは封筒から一通の手紙を取り出した。それは記者会見場での位置取りの書類だった。A - 8。絶好の位置である。

「ほら、少佐殿からのお祝いだ。仕事はきっちり仕上げてくれよ！」

そう言つとクリスはハワードに目をやる。白目の綺麗なのが売りだといつも語っているハワードが大きく目を見開いてシヤムを見直した。

「しかし、本当に君は変わらないんだな」

クリスはまじまじと頭の前からつま先までシヤムを丁寧に観察する。だがシヤムは外の光景が珍しいと言つるようにアンパンを急いで口に放り込むとそのまま窓に張り付いた。

「でも都会つて凄いなえ。ここには電気もあるし、テレビもあるし、いろんなものが売つてるし凄いなだよ！」

「そうか。確かに君とであつた北兼山地の村には自家発電装置しかなかったもんな。それも北兼軍が駐留するまでは放置されていたし」

クリスがコーヒーの最後の一口を飲み込んだ。町の歓声は途切れることがなかった。彼はじつと窓から身を乗り出すシヤムの後姿を眺めていた。その目の前で、急にシヤムは肩を震わせていた。

「それに、……もう一人じゃないからね」

そう言つと急にシヤムは顔を伏せた。あの廃村、そして一面に広がる墓。クリスもその異様な光景を思い出していた。シヤムが一人取り残された朽ちかけた村。

「泣かなくなつて良いじゃないか」

子供に泣かれるのは気分が悪い。従軍記者として累々と積み重なる死体の山を何度となく見てきたクリスだが、そこに響く数知れない子供の泣き声に慣れる事はできなかった。そんなことを思ったクリスは、同じような顔をしていた男の顔を思い出していた。これからこの国を治めるだろつある男の顔。その男との出会いがなければ

クリスはここにいることは無かつたろう。

北兼軍閥の首魁、嵯峨惟基。次期遼南皇帝、ムジャンタ・ラスコ
Iである。

従軍記者の日記 3

北兼への補給路である街道を走り続ける車があった。その外には視界の果てまで続く茶色い岩山だけが見えた。

クリスは照りつける高地の紫外線を多く含んだ日差しに閉口しながら、疾走する車の助手席で雑誌を読み続けていた。

「まったく、遼州では紙媒体のメディアが主流を占めているというのはどうということなんだろうな。この禿山だ。このままでは地球の二の舞を舞うことになるぞ」

クリスはそう言いながら後部座席の大男に叫んで見せた。

「そんなことは無いだろ？この星の人口は地球の五分の一だ。それに技術レベルは地球のそれとはあまり変わらない。紙をはじめとする製品のリサイクル技術は見るべきものがあるよ。むしろこういう紙媒体とかにこだわると言うポリシーは俺は好きだぜ」

窓を開け外の空気を吸いながら、相棒である大男ハワード・バスは黒い筋肉質の右腕で体を支えながら、時折見える遊牧民達を写真に収めていた。

「あまり刺激しないでくださいよ。山岳民族との共存は人民政府の成立宣言の中にも明記されている重大事項ですから」

クリスの右隣の運転席^{いっしょはやく}。そこには岩山の色によく似た遼南人民軍の大尉の制服を着た伊藤隼^{いっしょはやく}が運転を続けていた。その腕の鎌にハンマーのワッペンが縫い付けられている。それは彼が人民党の政治将校であることを示していた。

道は千尋の谷に沿って延々と続いている。

「しかし、誰もが必ず銃を持っているな。危険では無いのですか？」

クリスの質問に伊藤は笑って答える。

「彼らの銃は我々を撃つためのものではありませんよ。残念ながら我々には彼らを守るだけの戦力が無いですから。その為に自衛用の

武器として北兼軍団が支給しているものです。まあ、野犬達から家畜を守るために発砲するのに使った弾丸の数まで申告してもらっていますから問題はありませんよ」

そう言いながら決して路面から目を離そうとしない伊藤。遼南人民共和国の首都とされる北天州最大の都市北都を出て二日目になる途中、北兼山脈に入ったばかりの地点で、三ヶ月前の北天包围戦に敗れ孤立した共和政府軍の残党との戦闘がやむまで足止めを食らったものの、クリス達の旅は非常に順調なものと言えた。

「このトンネルを抜ければかなり景色が変わりますよ」

伊藤はそう言うと言った巨大なトンネルの中に車を進める。点々とナトリウム灯の切れているところはあるものの、比較的手入れが行き届いているトンネルに入る。オレンジ色に染まった自分の手を見ながら、クリスはトンネルの内部を観察した。

「このトンネルは北兼軍閥の生命線ですから、常に点検作業と補修は行き届いています。まあ、三ヶ月前の北天攻防戦以降は補修スタッフも軍への協力が求められているんでこれからの管理については頭が痛いですが」

相変わらず真正面から視線を外そうとしない伊藤の言葉に、助手席のクリスは苦笑いを浮かべた。

「しかし、なぜ我々を指名で呼んだのですか？私の経歴は調べたと言っていました、当然その中には私の記事も含まれていると思うんだけど」

その言葉によろやく伊藤は一瞬だけクリスの顔を見た。そして再び視線を正面に据えなおした。

「まず言葉の問題ですね。あなたの日本語は非常にお上手だ。遼南では日本語が話せれば一部の例外的地域を除いて事は済みます。我々には通訳付きの環境が必要な記者を必要としていない。それに記事についてなら隊長が言うには『信念の無い記者は百害あって一理も無い』ということを言われましてね。それが理由です」

そう言うと、伊藤は車を左の車線に移した。コンテナを満載した

トレーラーがその脇をすれ違っていく。クリスはそれでも納得できなかつた。

自分では信念が無い記事を書いてきたと思っていた。どれも取材を依頼した軍の広報がすべての記事をチェックしてそれから配信が認められるのは戦場では良くある話だつた。それに逆らうつもりはクリスには無かつた。捕虜が無慈悲に射殺され、難民が迫撃砲の的になっていることもただ担当士官の言うようにその記事を消し去つて記事を作ってきたのが現状だつた。

クリス達を指名した嵯峨惟基が胡州の大貴族の出身であることを知っているだけに、伊藤の言葉は嫌味にしか聞こえなかつた。

従軍記者の日記 4

今相手にしているのは遼南人民党党員の政治将校。そんなクリスの視線は悪意に変わった。

「つまり日本語のしゃべれるアメリカ人の戦場ジャーナリストなら誰でも良かったということですね」

クリスは皮肉をこめて言ったつもりだった。だが再びクリスに向き直った伊藤はあっさりと頷いた。

「たとえお前さんがタカ派で知られる合衆国上院議員の息子で、前の仕事がベルルカン大陸での海兵隊展開のプロパガンダ記事を書いた記者だろうがどうでも良いということだ」

薄暗い車内でカメラのレンズを磨いているハワード。彼の口に思わず笑みが漏れる。

「しかし、伊藤大尉。あなたは人民政府代表ダワイラ・マケイ教授直属で、高校時代からシンパとして活動しているそうじゃないですか。そのあなたがなぜ嵯峨惟基中佐の飼い犬のようなことをやっているのですかね」

皮肉には皮肉で返す。挑発的に伊藤を見るクリスの目が鋭くなる。記事で書くことと、取材で得た感想は多くの場合切り離して考えなければやっていけない。それはクリスにとってもはや常識としか思えなくなっていた。家を出て、アルバイトをしながらハーバード大学を卒業した彼がジャーナリストを目指したのは、彼に取材を頼む軍の幹部や政治家達を喜ばせるためでない。はじめのうちはそう思っていた。

しかし、この世界に身を置いていくうちに、彼の正義感や真実を求めようとする情熱が、どれほど生きていくという現実の前で無意味かということは彼自身が一番理解していた。彼が出かける先に広がっているのは、すでに結論が出尽くした戦場だった。状況を語る人々は怯えるように版で押したような言葉を口にするだけだった。

ただそれを脚色し、クライアントの機嫌を損ねず、そして可能な限り大衆を退屈させないような面白い文章に仕上げることに。それがクリスの仕事のすべてだった。

これから向かう北兼州。そしてそこを支配する北兼軍閥の首魁、嵯峨惟基。父バスバにこの国を追われ胡州に逃れ、先の大戦では敗戦国胡州の非道な憲兵隊長としてアメリカ本国に送られ、帰還してきたと思えばこの内戦状況で対立した弟を肩一つ動かさずに斬殺した男。

クリスには少なくとも彼に好感を抱く理由は無かった。それはハワードも同じだった。それ以前にハワードはこの仕事をつけること自体に反対だった。

破格の報酬。検閲は行わないと言う誓約書。そして、地球人のジャーナリストとして始めての北兼軍閥の従軍記者となる栄誉。それらのことを一つ一つ説明しても、ハワードはこの話を下りるべきだと言いつづけた。時に逆上した彼はコンビを解消しようとしてまで言いきった。

しかし、宥めずかして北天まで連れてきて、遼北からの列車を降り立った時、ハワードは急に態度を変えた。

『子供の顔が違うんだ』

ハワードはそう言った。カメラマンとして、彼は彼なりに自分の仕事に限界を感じていたのだろう。監視役としてつけられた伊藤はハワードがシャッターを切るのを止めることは一切無かった。

それどころか督戦隊から逃げてきたという脱落兵を取材している時に、駆け寄ってきた憲兵隊を政治将校の階級の力でねじ伏せて取材を続けるよう指示した伊藤にはたとえその思想がクリスには受け入れられないものだとしても伊藤と言う男が信念を持って任務を遂行していることだけは理解した。

もうトンネルに入らずにぐんたつというのに、伊藤は相変わらず正面を見つめているだけだった。この政治将校が何故クリス達を優遇するのか、クリスは早くそのわけを知りたかった。

「ずいぶん長いトンネルですね」

沈黙にたまりかねたクリスの声に伊藤は頷く。その表情を見たあと、クリスはそのままナトリウム灯の光の中、じっと周りの気配を探っていた。そしてクリスはあることに気づいた。

すれ違う車が少ない。あまりにも少ないと言ったことだった。嵯峨惟基中佐に率いられた北兼軍団は現在、北兼州南部に広がる北兼台地と西部と西モスレムとの境界線に展開しているはずだった。西モスレムとの複雑に入り組んだ国境は山岳地帯であり、その地の確保を狙う共和軍とアメリカ軍の合同軍と対峙しているはずだった。

先の大戦で皇帝ムジャンタ・バスバを追放したガルシア・ゴンザレス大統領貴下の共和軍は遼南北部で遼北人民共和国の支援を受けた北都の人民軍の拠点北天攻略に失敗し、北兼山脈を越えて敗走していた。これに危機感を抱いたアメリカ軍は出兵を決断、在遼州アメリカ軍を出動させ孤立した共和軍部隊の救助に向かうと同時に人民軍や北兼軍閥、さらに北兼軍閥とともに人民軍側での参戦を決めた東海州の花山院軍閥に対する攻撃を開始していた。そのような状態で物資はいくらあっても足りないはず、クリスはそう思っすれ違う車を待った。

遼南の分裂状況とアメリカなどの地球軍の介入に危機感を抱いていたこの崑崙大陸の東に浮かぶ大国東和共和国は、遼南上空における人道目的を除くすべての航空機の使用に関して実力行使を行うとの宣言を出していた。この声明が出された直後、東和の決断など口先だけだと飛ばした輸送機を撃墜されて以降、東和の介入を恐れた共和軍は物資の多くを北兼山脈の北側、人民軍の勢力圏に放棄しなければならなかった。

その事実を嵯峨は知っているはずである。遼北での大粛清を逃れてきた嵯峨の従妹、周香麗大佐率いる『魔女機甲隊』と言う切り札

的機動部隊を有しているとは言え、現在は物量の優位を生かすために物資を北天の人民軍本隊に依存するのが自然だとクリスは踏んでいた。

だが物資を積んだトレーラーとすれ違うことは無かったひたすら車は猛スピードでトンネルの中を進んでいる。

「もうすぐ出口ですよ」

そう伊藤に言わせたくらい、この沈黙は重苦しいものだった。この前線に向かう旅の間、クリスには質問したいことが次々と出来ていた。伊藤は多くを答えてくれるが、逆にその回答の正確さにこれまで情報統制の戦場ばかりを経験してきたクリスには違和感ばかりが先にたつた。

「そう言えば、ほとんど車が通っていないようだが……」

我慢しきれなくなつたクリスがそう語りかける。伊藤は再びクリスの顔を一瞥する。かすかに小さく光り輝く点が視界に入った時、ようやく伊藤は口を開いた。

「現在、北兼軍は西部ルートを通して物資の補給を行っています。それと遼北軍部の理解ある人々や遼州星系の企業、組織には我々を支援する勢力も存在します。北天の教条主義者に頼る必要は無いんですよ。まあ戦争では何か起きるか分かりませんがこうしてルート確保だけはしていますかね」

丁寧な言葉だが、最後の一言に伊藤は力を込めた。最近、遼北への訪問を繰り返す人民政府高官の動きはクリスもつかんでいた。遼南人民政府ダワイラ代表が病床にあると言う噂も耳にしていた。そしてこれまでの伊藤の言葉の端からクリスはそれが事実であるという確信を得ていた。

共和軍の北天包囲作戦発動まで中立を守っていた北兼軍閥の突然の参戦。独自の補給路を確保し、人民政府に揺さぶりをかけようとするその姿勢は嵯峨と言う男が優れた軍政家であることと何かしらの野心を持っていることを示しているように見えた。

視界の中の光が次第に強さを増し、次の瞬間には緑色の跳ね返る

森の中に車は入り込んでいた。

「まるで別世界だな。さつきまでが地獄ならこちらは天国だ」

再びカメラを外の風景に向けるハワード。確かにトンネルまでのあちこちに放棄された先頭車両や輸送用ホバーの群れを見てきた彼らにとつて森の緑と涼しい風は天国を思わせるものだった。

遼南中部から広がる湿地帯を北上してきた湿った空気が北兼の山々にぶつかりこの緑の森を潤す。自然の恵みがどこまでも続く針葉樹の森とはるか山々に見える万年雪を作り上げた。その事実にくリスは言葉を失っていた。

心地よい風に酔うこともできないタイミングで車内のスピーカーから無線連絡を信号音が流れる。伊藤はすぐさま受信に切り替えた。『12号車、12号車応答せよ』無線機の声にインカムに手を伸ばす伊藤。

「こちら12号車」

伊藤は静かに答えた。クリスは後部座席でシャッターを切り続けているハワードを無視して伊藤の言葉に集中した。

『第125混成連隊は現在、夷泉にて待機中！繰り返す夷泉にて待機中』

「了解」

無線が切れたのを確認すると伊藤は車のスピードを落とす。インカムなのだから当然その音声が二人に聞こえないようにすることも出来た。だが伊藤はわざと人民軍の勢力圏から抜けた時点でそれが車内に流れるように設定していた。

「嵯峨中佐は現在夷泉に駐留しています。ここからですともうすぐのところですよ」

そう言っただけクリスを見つめる伊藤の表情が穏やかになる。クリスはそれまでの緊張しきった彼の顔の印象が強いだけに、このような表情も浮かべられる伊藤に少しばかり彼の中での評価を上げた。

「まるで我々を待っていたみたいじゃないですか」

ハワードがそう言いながら、森の中に点々と見える焼畑の跡を写真に収める。そんな彼を無視してハンドルを切る伊藤。そのまま車は側道へと入り込み、激しい揺れが三人を襲う。

「ハワードさんの言うことは間違いないかもしれませんが。まああの人はそう言う人ですよ。いい意味でも悪い意味でも」

そう言っただけ伊藤はまた少しスピードを落とした。針葉樹の森が続いている。その根元には先の大戦時の胡州の軍服に赤い腕章をつけ

た北兼軍の兵士がちらほらと見えていた。

「軍服の支給はまだのようですね」

「ご存知でしょうか？北兼軍には胡州浪人達が多く参加していますから。どうせ支給しても着替えたりはしませんよ」

再び伊藤は運転に集中した。目の前に検問所のバリケードが立ちはだかり、牛を載せたトラックと水の入ったボトルを背中に三つもくくりつけた女性が兵士に身分証を提示していた。

ハワードはその光景にカメラを向ける。しかし、兵士は気にする様子も無く、女性から身分証を受け取って確認を済ませると笑顔でその後ろに続くクリスの車に歩み寄ってくる。

兵士はその運転手が伊藤であることを確認すると一度敬礼した。

「良いから続きを頼む」

フリーパスでもいいというような表情の兵士に伊藤が身分証を手渡した。

「伊藤大尉。別にこれを見せられなくても……」

そう言ったクリスに向ける伊藤の目は鋭かった。

「それが軍規と言うものですよ。お二人とも取材許可証を出してください」

伊藤の言葉に従って、クリスとハワードはそれぞれの首にかけられた取材許可証を手渡した。兵士達はそれを手持ちの端末にかざして確認した後、にこやかに笑いながら手を振った。

そのまま細い砂利道を走り続けクリスを乗せた車がたどり着いた夷泉は村とでも言うべき集落だった。藁葺きの粗末な農家が続き、畑には年代モノの耕運機がうなりを上げ、小道には羊を追う少年が犬と戯れていた。ハワードは彼を気遣って車を徐行させる伊藤の心を読み取って、三回シャッターを押すとフィルムとの交換を始めた。

「まるで四百年前の光景ですね」

クリスはそう漏らした。彼が見てきた戦闘はこのような村々で行われていた。貧困が心をすさまじく人々に武器を取らせる。そしてさらに貧困が国中に広がる。貧困の再生産。貧しいがゆえに人は傷つけあう。はじめに従軍記者として提出した記事にそんな感想を書いて検閲を受けたことを思い出していた。

「見えてきました」

それは遼南では珍しいものではない仏教寺院だった。大きな門を通り過ぎ、隣の空き地に車を乗り入れる。フィルムの交換を終えたハワードは彼の乗った車を追いかける少年達をカメラに収めることに集中していた。寺の隣の鉄条網の張られた駐留部隊基地の門の前、クリスはそこで子供達が一人の青年士官の周りに集まっている光景を目にした。

佐官の階級章をつけた男は手にした竹の板を削っている。一番年長に見える少女は将校から受け取ったヘリコプターの羽だけを再現したようなおもちゃを空に飛ばし、子供達はそれを追いかけていた。こやかに子供達を見て笑っている青年士官はクリス達の車に目を向けてきた。制服は伊藤と同じ人民軍の士官の型のもので、その腰に朱塗りの鞘の日本刀を下げているところから見て胡州浪人の一人だと思いつつクリスはその士官に微笑を返した。

「ホプキンスさん。あの方が嵯峨中佐です」

サバイバルナイフを鞘に収め、そのままゆっくりとクリスのとこ

るに歩みよってくる男。その突然の紹介にクリスは驚きを隠せなかった。

正直、クリスが資料用の写真で見た印象とはその軍閥の首魁の姿はかなり違っていた。資料では32歳のはずだが、その子供と遊ぶ姿はどこと無く幼く見えた。常に無精髭を生やし、眉間にしわを寄せて、見るものを威圧するような視線を投げている写真はかりを見してきたが、目の前にいるのは髭をきれいに剃り、満面の笑みを浮かべている明るい印象のある青年将校の姿だった。

クリスはとりあえず止まった車から降りた。子供達は嵯峨の周りに固まってクリス達を不思議なものでも見つけたような目で見つめている。中央の嵯峨は、とりあえず彼らの輪から脱出すると、クリスに握手を求めた。

「ご苦労さんですねえ。まあしばらくは一緒の飯を食うんですからよろしく頼みますよ」

そんな心の中を見透かしたように笑みを浮かべる嵯峨。資料の写真とかつて遼南派遣の胡州軍憲兵隊長として狂気さえ感じる残忍なゲリラ狩りを行い『遼州の悪霊』とまで言われた男。

今、目の前にいる青年将校嵯峨惟基中佐とその印象をどうつなげて良いのかクリスには分からなかった。ただ呆然と立ち尽くしているクリスは、ハウードのカメラのレンズがこちらを向いていると言う事実に基づいてようやく握手をすることが出来た。

「伊藤、すまねえな。あれだろ？どうせ党本部じゃあ司令部のお偉いさんの小言の嵐くらったんだろ。お偉いさんは現場のことは知らないし知るつもりもねえからまあ気にするなよ。早めに仮眠でも取っとけ。仕事なら山ほどあるんだから」

そう言う嵯峨は荷物を降ろすのを手伝おうと言うように車の後ろに回り込んだ。

「良いですよ、嵯峨中佐！取材機器は我々が運びますから！」

そう言う嵯峨の前に立ちはだかろうとするクリスを泣きそうな目で見つめる嵯峨。

「信用がないんだねえ。大丈夫、あんた等の持ち物に細工するほど暇じゃねえよ」

そう言うと車の後ろのドアを開いて、嵯峨は丁寧にハウードのカメラケースを取り出した。

ハワードが神経質そうにカメラの入ったケースを下ろし、嵯峨はクリス達の身の回りのものを入れた荷物を降ろす。空になった後部座席を見ると嵯峨は軽く屈伸運動をする。子供達はその様子を遠巻きに見ていた。

「これから仕事だから」

頭を掻きながら嵯峨がそう言うのと子供達は手を振って別れを告げる。次々と走って帰路に着く子供達。ようやくそこで嵯峨はクリスに向き直った。

「やっぱり結構ありますね荷物。部下に後で運ばせますよ。あのグラウンドの向こうに見えるのが宿舎です。まあそれほど長くは使わないでしょうがね」

そう言い残して嵯峨は歩き始めた。クリスが見回すと、巨大な格納庫の前で部隊員が野球に興じていた。だが荷物を指差す嵯峨の姿を見つけると、やんやと野次を飛ばしていた野次馬達が群れを成してクリスとハワードの荷物に駆け寄ってきた。

「カメラケースは慎重にお願いしますよ！」

ハワードの叫び声に頭を下げる兵士達。嵯峨はただ先ほど指差したプレハブの建物に歩いていく。

「ずいぶん余裕があるようですね」

クリスは自分の私物と通信機器が入ったバッグを背負いながらその後続いた。

「ああ、うちの軍閥には正規部隊出身の精強部隊がありますから。現在ここから700キロ離れた地点で合衆国の軍隊と対峙していますよ」

さらりと言う嵯峨の口元に笑みがこぼれる。クリスは嵯峨の他人事のように話す口ぶりが気になっていた。

「しかし、北兼軍閥の指揮権はあなたにあるんじゃないですか？」

その言葉に嵯峨は歩みを止めた。

「それは違いますね。確かにこの軍閥が私を中心に成長したことは認めますよ。だが、適材適所という言葉があるでしょ？私は正直これだけの大部隊を指揮した経験がないんでね。そこに周香麗と言う実績のある指揮官が来た。勝つ戦争をしようと思ったら、それにふさわしい指揮官が必要になるわけですよ」

嵯峨はそう言いながら胸のポケットからタバコを取り出す。クリスはあまりタバコは好きではなかった。そんなクリスを見て嵯峨が微笑みを浮かべる。

「なるほど、タバコはお気に召さないようですね」

そう言うのと火も付けずにタバコをくわえたまま歩く嵯峨。衛兵の敬礼に手を振りつつ彼はプレハブの建物に入った。

一階のオペレーター室は通信、監視、物資管理の人員が忙しく行きかっている。嵯峨はそれに一々頭を下げながら階段を上り始める。「私を知る限り一番便利な兵器は情報ですよ。まあ、そんな説教をされる覚えはホプキンスさんには無いでしょうがね」

「クリスで結構です」

苦笑いの嵯峨の後ろについていくクリスとハワード。階段は木製で野戦用ブーツの三人の足音が大きさに響く。上りきった二階の踊り場、嵯峨を見つけて駆け上がったきた女性下士官が一枚の書類を嵯峨に渡した。嵯峨はそれを持ったまま二階の踊り場で頭を掻いた。そしてクリスを振り返り彼が手荷物を持っていることに気づいた。

「ああ、荷物持ってきてちゃったんですか。この隣なんですよ宿舎はまあ面倒ですからそこに置いてついて来て下さい」

そう言うのと嵯峨は手に書類を持ったまま廊下を静かに歩き始めた。クリスとハワードは顔を見合わせると、荷物を廊下の端に置いて、嵯峨の入った司令室に入り込んだ。

司令室に入ったとたんに猛烈なタバコの匂いが入るものに容赦なく襲い掛かる。クリスは思わず鼻を押さえた。

「すいませんねえ、今、窓開けますから」

そう言つて窓を開く嵯峨。その妙に人懐っこいところが鼻に付く。クリスはそう思いながら部屋を見渡した。そしてすぐにこの部屋の異様に気づいた。室内にしみこんだタバコの匂いだけがクリスを驚かせたわけではなかった。部屋中に広がる書類や銃器の部品。そして暑く積もつている鉄粉のような埃。

「別に面白いものは無いでしょ。どうにも片付けると言うことが苦手でしてね、私は」

そう言つて嵯峨は連隊クラスの部隊司令にふさわしいゆったりとした皮の椅子に腰掛けた。その目の前では上に置かれたガラクタが積み上げられて完全に機能を失っている大きな机がある。

「私は整理整頓と言うのが出来ない質でしてね。娘にはいつも叱られてばかりですよ」

「娘さん……茜さんでしたね。おいくつになれますか？」

クリスの頬を外からの風が撫でる。ようやく新鮮な空気が入ってきたことで少しばかり表情を和らげることができた。

「12歳になりますよ。今は東和の中学に言つてるはずですがね。」

本来はこっちの学校に行かせたかつたんですが、本人が東和で弁護士をやりたいと言うものでして」

そう言つと嵯峨はくわえっ放しだったタバコに火をつけた。この奇妙な人物に子供がいる。しかも娘が二人いることをクリスは思い出していた。

「そう言えばもう一人、双子のお子さん……楓さんでしたか。そちらは？」

嵯峨はタバコの煙を胸いっぱい吸い込むと、ようやく落ち着い

たと言うように腰の刀をベルトから外そうとした。

「ああ、あいつは胡州の海軍予科前期校に受かったって言ってたな。知ってます？胡州の軍学校もようやく男女共学になったらしいんですよ。俺のときは野郎ばかりでむさ苦しくってねえ」

「はあ」

そう言いながらテーブルの埃を指でかき回している嵯峨。クリスはまだこの男のことが図れずにいた。

「失礼します」

扉が開き、女性の士官が一人と女性技官が二人、書類を持って現れた。背の高いライトグリーンのツインテールの髪の女性士官と、幼く見える技官の徽章をつけたショートカットの黒い髪の士官の切れ長な目が不審そうにクリス達を見つめる。その攻撃的な視線を避けた先、銀色の髪の女性技官の姿にクリスの目は釘付けにされた。

ボーイッシュなショートカットのその技官の頬を機械油のはねた後が飾っている。そんなクリスの視線に気がついたのか、技官は軽く微笑むと、上司らしい小柄な東アジア系のように見える先ほどの厳しい目つきの士官の横で直立不動の姿勢をとった。

先頭を歩いてきた士官はクリスをまるで無視すると書類を嵯峨に手渡した。

「こちらが二式の運動性能テストの結果です。すべて隊長が出された必要運動性能はすべてクリアーしています」

嵯峨はそれしか言わない少女に目を向けた後すぐに手にした書類をめくり始める。

「やるねえ、菱川の技術陣も。前の試作機はかなりぼろくそにけなしてやったからな」

そう言うつと嵯峨はクリスの方を見た。部屋を出るべきタイミングらしいと思い、埃だらけのソファから立ちあがろうとしたクリスとハワードを手で制する嵯峨。

「ああ、この人達が例のお客さんだ。クリストファー・ホプキンスさんにハワード・バスさんだ」

「失礼しました。私がセニア・ブリフィス大尉です。そしてこちらが……」

地球人にはなりライトグリーンの髪。おそらくこの遼州系ではよく見るクローン人間だろうとクリスは思った。だが彼の先入観にある神の禁秘に触れた忌むべき存在と呼ぶには彼女はあまりに生き生きとした表情を浮かべている。むしろ手前の小柄なアジア系の少女士官の方がどこかぎすぎすした空気をまとっていた。

「許明華技術中尉です。そして彼女がキーラ・ジャコビン曹長」

たぶん自分が地球のそれも敵対するアメリカ軍にも顔の効く記者だと知っているのだろう。少女は不機嫌だと言うことを強調するようにそう言った。

「キーラ・ジャコビンです！」

赤みを帯びた瞳でクリスを見つめるキーラに、思わずクリスは自分の顔に動揺が出ているのではないかと焦りを覚えた。人造人間の開発は遼州外惑星の国家ゲルパルトが大々的に行っていたことは有名な話だった。技術上の問題点から女性の生産が先行して行われたものの戦争に間に合わず彼女達の多くが培養ポッドの中で終戦を迎えた。

生まれるべきでない彼女達の存在。アメリカ等の地球諸国は培養ポッドの即時破壊を主張し一方で彼女達の保護を主張する東和や遼北との間の政治問題となったことを思い出した。そしてそのを主張する保守派をまとめていたのがクリスの父親だったことを思い出して自分の頬が引きつるのをクリスは感じていた。

「そう言えば、ホプキンスさん。先月号のソルジャーオブフォーチュンの記事は興味深かったですね」

そして悪意は別のところから飛んできた。皮肉のこめられた明華の視線。確かに軍の機関紙で北兼軍閥の危険性を説いた記事をクリスが書いたのは事実だった。にらみ合う二人。それに負ければ技術系の説明はすべて軍事機密で通されるかもしれないと、気おされずににらみ返すクリス。だが、その幼げに見える面差しの明華は嘲笑

のようなものを浮かべてクリスとハワードを眺めるだけでただ沈黙を続けるだけだった。

「それはどうも。それと失礼ですが許中尉。失礼ですがずいぶんお若く見えますが……」

明らかにクリスのその言葉にさらに不機嫌な顔になる明華。

「私に会うと皆さん同じ事を言うんですね。十六ですよ。これでも一応は、私、ちゃんと遼北人民軍事大学校工業技術専攻科を出てるんですけど」

「天才少女って奴だねえ……」

嵯峨の添えた言葉にキツと目を見開いてにらみつける明華。嵯峨は机に置かれた扇子を取り出して仰ぎながら目を反らした。

「そうですね」

そう言いながら二人の女性士官とはかなげな印象が残る女性下士官を観察するクリス。

遼北に多い中華系遼州人の女性将校。遼北で進む軍内肅清運動から逃れて来たと考えれば、彼女の存在はそれほど珍しいものではない。

「隊長、私の紹介はしていただけなのですか？」

柔らかい声で彼女は嵯峨に声を掛けた。いかにも待っていたと言うように笑う嵯峨。

「そうだな、じゃあこいつがセニア・ブリティス大尉、当部隊最強のペッター娘だ」

「隊長！セニアをからかうのはいい加減止めなさいよ！」

嵯峨の声が終わるや否やきつい口調で食って掛かる明華。

「おっかないねえうちの技官殿は。ただな、日常に潤いを、生活に笑いを求めてだな……」

わけの分からない言い訳をしながら扇子で顔を扇ぐ嵯峨。ハワードが笑いを漏らそうとして、明華ににらみつけられてクリスに目をやってくる。

「私は？」

銀色の髪のつなぎを来た下士官が挑戦的な瞳で嵯峨を見つめている。嵯峨はどこか含むところがあるように大きく咳払いをしてから口を開いた。

「こいつがキーラ・ジャコビン曹長。二式の整備責任者と言つこと
で」

「二式。アサルト・モジュールの型番ですね」

クリスは場に流されまいと、そう切り出した。あからさまに面倒
そうな顔をする嵯峨。

「隊長、よろしいのですか？」

クリスの言葉に、明華は静かに嵯峨を見つめた。嵯峨はそれを聞
くと背もたれに寄りかかって大きく伸びをする。

「どうせ明日からの作戦には出すつもりだからな。知つていてもら
つてもいいんじゃないの？明華、キーラ。案内してあげてよ。俺は
これからセニアとパイロットの指導について話があるんでね」

嵯峨は投げやりにそう言うのと再びタバコに火をつけた。

「それではお二人ともよろしいですか？」

すでにドアを開いてきつい視線でクリスを見つめる明華と静かな
物腰でクリス達を待つキーラ。

「写真は撮らせてもらえるんだね」

ハワードはカメラを掲げる。明華は嵯峨の方を一瞥する。セニア
に机の上のモニターに映ったデータの説明を始めようとしていた嵯
峨が大きく頷く。

「隠し事するほどのこともねえだろ？アメリカさんの最新鋭機に比
べたらあんなの子供だまじだよ」

嵯峨のその言葉で、明華は大きく頷いた。

「名称からすると遼北開発のアサルト・モジュールです。ですがその名前はライセンス生産とかではないような」

そんなクリスの言葉にあからさまに嫌な顔をしながら明華は口を開く。二式という名称は胡州と遼北の人型兵器「アサルト・モジュール」の呼称としては一般的なものだった。その後に「特戦」と付けば胡州、「特機」と付けば遼北の名称になる。ちなみに似た呼称を付ける東和だが、こちらの場合は現在最新式の呼称は「01式特戦」であり「まるいち」と言う呼び方に決められていた。そんなことを悟ってかちらりと明華が後ろを付いてくるクリスの方を振り向く。

「正式名称は二式特機試作局戦型です。開発は遼北陸軍工廠ですが、まあ見ればどこに委託して開発していたか分かりますけど」
そう言うとも明華は司令室を出る。嵯峨が視線を投げ、キーラも二人の後ろに続いて部屋を出た。

「ああ、荷物なら部屋に運んでおきましたよ」
階段で待つていた伊藤の突然の声がそう告げる。彼はクリスの前を歩く明華を見て少しばかり意外そうな顔をしていた。

「二式のお披露目をするんですか？」
「ええ、隊長命令よ」

そう言うとも明華は伊藤を無視して階段を下っていく。
「いきなりスクープじゃないか。さっき『委託』って言ってたって事は、どこかの国か企業が開発に協力したって事だろ」

「相談事は小声でしてただけですか？ 菱川重工ですよ」
さらりと明華が話した言葉にクリスは目を見開いた。

「菱川？ つまり東和共和国首相、菱川重三郎の会社じゃないですか！」

クリスは一言だけ言って隊舎から出て行くこうとする明華に叫んだ。

「東和は遼南でのアメリカの利権獲得に危機感を抱いているのはご存知よね？悪名高い『遼南航空戦力禁止宣言』にあるとおり、遼南共和政府のアメリカ軍との共同作戦開始と言う事実に対抗する布石として二式の開発を遼北から請け負っていたわけ。まあ、遼北国内の教条主義勢力の反対で試作段階で計画は頓挫しちゃったけど」

明華は振り向かず、そのまま隊舎の隣の巨大な格納庫群に向かって歩き続けている。野球に興じていた隊員、そのピッチャーをしていた色白の男がクリス達に向かって歩いてきた。

「明華！何してるんだ？」

男は作業服の袖で流れる汗を拭きながら明華の前に立った。

「邪魔よ！」

男を避けるとそのまま隣の格納庫へ向かおうとする明華。男はそれでも諦めずに彼女について歩く。

「あのなあ、一応、この人たちはプレス関係者だろ？ここの中のもの見せちゃって大丈夫なのか？」

男はそう言うと、キーラの方に目をやる。キーラは黙って明華を見つめた。そんなキーラに視線を奪われるクリス。キーラの銀色の髪が風になびいている。

「御子神中尉。これは隊長の許可を取っているのよ。どうせ明日からは敵にもその姿をさらすことになるんだから」

御子神中尉と呼ばれた男は頭をかきながらクリスの方を警戒しながら見つめている。いつの間にかこの騒動を聞きつけて、野球をしていた隊員や、観戦していた女性兵士までもが集まり始めた。

「それじゃあ入るわよ」

そう言うともまるで生徒を引率する教師のように、明華は先頭に立って格納庫の隙間から中へと入る。クリスとハワード、キーラが続く。その後ろにはそろそろと御子神達野次馬連が続く。

薄暗い光の中、そびえ立つ12・05メートルの巨人。

「これが通称『二式』。北兼軍の誇る最新戦力よ」

誇らしげに明華の声が響く。退屈そうに偽装作業を進めていた隊員がクリス達を眺めている。

「じゃあ、写真撮らせてもらうんで!」

そう言うとはワードは点検中のレールガンを避けるようにしてそのまま六機の二式に向かって歩いていく。

「これが東和製?」

「そうですね。整備性重視の中国や遼北の機体には見えないでしょ?あくまでパワーと運動性の上昇のために各部品は精度はかなりシビアにとってあるわ」

誇らしげに言う明華。確かに見慣れたアメリカの旧式輸出用アサルト・モジュールM5と比べると無骨に見えるその全景。だが、間接部などどちらかと言えばクリアランスを取ることが多い遼北の機体とは一線を画すタイトな作りが見て取れた。

「確かにどこかしら東和やアラブ連盟のアサルト・モジュールっぽいと言えなくも無いような」

頼りなげにつぶやくクリスをかわいそうなものを見るような目で見つめる明華。にらみつけるような明華の視線に困って逸らした目の先にクリスはオリーブ色の二式の機体の向こうに黒い大型のアサルト・モジュールがあるのを見つけた。

「あれは何ですか?」

二式を撮りつづけているハワードを置いて、クリスは歩き出した。

「ああ、あれね。隊長の四式よ」

「四式？」

「まったく遼北と胡州は型番の呼び方が同じだから混乱するわよね。四式試作特戦。先の大戦で胡州が97式特戦の後継機として開発を進めていた機体よ。結局、その当時としてはコンパクトな機体に、おさまるエンジンの出力不足が原因で開発は中止。そのまま胡州軍北兼駐留軍に放置してあったのを前の大戦で使ってからあれがしつくり行くなって言う隊長の為に何とか予備部品を見つけてレストアした機体よ」

黒い、二式より一回り大きな機体。頭部のデュアルカメラが胡州のアサルト・モジュールらしさをかもし出している。

「そう言えば、前の戦争では嵯峨中佐は試作のアサルト・モジュールを愛用したと言うことですが、それがこれですか？」

「違うわよ。隊長の愛機だったのは三号機。でもこれは人民軍に鹵獲された一号機よ」

明華はクリスに寄り添うように付いてくる。クリスは彼女の顔を見た。何かに気づいてもらいたいとも言つように、わざとらしくクリスの視線を漆黒の巨人に導こうとしている。

「すみません！許中尉！ジャコビン曹長！それに御子神中尉」

そんなやり取りをしていたクリス達に格納庫の入り口で角刈りの少年兵が叫んでいる。

「おい、柴崎！なんで俺だけとって付けたように言うんだ？」

御子神は入ってきた少年をにらみつける。だが、気が強そうな伍長の階級章をつけた少年は逆に皮肉めいた笑みを浮かべて突っ立っている。

「ああ、紹介しておくわ。第二小隊の二番機の専属パイロット柴崎浩二伍長。うちでは隊長が太鼓判を押した期待の新人よ」

「へっへっへ。どうも」

どこか粗野な雰囲気のある少年士官が右手を差し出す。クリスは彼の握手の申し出に応じた。

「外人さんですか。わざわざうちに来るとは変わってますね」

言葉のどこかに棘があるような語調に少しばかりクリスは嫌悪感を感じた。

「それと紹介しておいたほうが良いかしら？」

そう言つと明華の言葉を察したと言つように二人の女性士官と小柄な一人の男性下士官が前に出た。

色黒で、がっしりとした体格の青年下士官。赤い髪を肩の所で切りそろえたような長身の女性士官。そして紺色の髪を後ろで編み上げた女性士官が敬礼をしている。

「まず彼が飯岡小十郎軍曹。胡州出身で海軍のアサルト・モジュール部隊に在籍していたベテランよ。それに柔道家なんですよね」

「自分はそれほどでもありません！」

頑丈そうな腕をさらして敬礼する飯岡。そして隣で赤い髪の女性士官が釣られて敬礼する。そんな様子を見ながら紺色の女性士官は笑いをこらえていた。

「そして、彼女がルーラ・パイラン少尉。遼北の周大佐が先の大戦で率いた『魔女機甲隊』は有名でしょ？パイロット不足ということですから私のコネで見つけてきたのよ。二式の試験ではパイロットでは一番良い成績だったわね」

静かに敬礼するルーラ。そして自分の番だと言うように敬礼する紺色の髪。

「じゃあ柴崎君。何で私達を……」

「紹介してくださいよ！」

取り残された准尉の階級章の女性士官。仕方が無いというように明華は咳払いをした。

「彼女が……」

「レム・リスボン准尉です！第一小隊三番機担当です！みんな拍手！」

周りを取り巻く隊員達がいかにも仕方が無いというように拍手を送る。目を細めてその歓声に答えるレム。

「遊んでると怒られんじゃないですか？明日の作戦の説明があるとかで楠木少佐が待ってますよ！」

その言葉を聴くと、女性陣はなぜか大きくため息をついた。

「あのスケベ親父、帰ってきてるの？」

レムが露骨に嫌そうな顔をしながら柴崎を見つめる。その状況が滑稽に見えて思わずクリスは思わず後ろに立つキーラの顔を見つめた。彼女もレムの言葉に同意するように首を縦に振っている。じりじりと近づいてくるレムに柴崎は諦めたように叫ぶ。

「俺に言っても仕方ないじゃないですか！まあ、あの人の情報は確かだつて、隊長も言ってますし」

「確かに情報網は認めるけど……この戦争が終わったら訴えましよう」

そう言つと明華はハンガーを後にする。クリスは彼女達の態度で招かれざる情報将校の人となりを知った。

「クリス！俺はしばらく写真を撮らせてもらつよう！」

ハワードは相変わらず、整備兵に案内を受けながら二式の撮影を続けていた。

「楠木少佐。もしかして名前は伸介じゃないですか？」

当たりをつけてクリスは明華に聞いてみた。先頭を歩いていた明華がその言葉で立ち止まる。めんどくさそうに明華が彼を見上げる。

「そうですね。先の大戦時に当時の胡州陸軍特別憲兵隊遼州派遣隊の副官をしていた人物」

明華はそこまで言つと言葉を止め、クリスを振り返る。

「そして上級戦争犯罪被告人」

先の大戦。強権政治で戦争に踏み出した遼南皇帝ムジャンタ・ムスガ。革命勢力と民主化を要求するゲリラ達により悪化した治安を引き締めるために、胡州から呼び寄せた『悪魔』の異名を持つ特殊部隊があつた。情報収集と拠点急襲に特化した恐怖の憲兵部隊は『人斬り新三』の異名を取る嵯峨惟基に率いられ、多くのゲリラやレジスタンスの殲滅活動を実行した部隊だつた。

その活動の主力を担っていた男の存在に、クリスは興味を引かれた。生死不明。それが米軍の情報網の結論だった。圧倒的な物量で胡州・遼南連合軍を駆逐した遼北の紅軍の波に飲み込まれ、彼らは死に絶えたと言つのが普通の見方だった。そしてその戦死者のリストの中に楠木という情報将校の名も並んでいた。

「楠木氏ですか。ずいぶんと微妙なところから来た人材ですね。大丈夫なんですか？」

先の大戦の激しさを知るクリスは一人の将校の生死など終戦協定の取りまとめの中で外務官僚にとつて取るに足らない事実として扱われていたことは知っていた。そんな彼の問いにめんどくさそうな表情の明華が答える。

「そう？ 適材適所つて奴よ。敵地潜入、情報操作、かく乱作戦。人格はともかく最高の人材じゃないんですか」

明華はそう言つと再び隊員達を引き連れて本部の建物に入る。

「よう、姉ちゃん」

中背中肉。四角い顔に、小さな目鼻が並んでいる男が明華に声を掛けた。露骨に不機嫌そうな顔で男を見つめる明華。ルーラとレムそしてキーラもあまり良い顔はしていない。

「そう邪険にしてくれるなよ。いい話が出来そうだって言つのに」
男はそう言つとがっちりとした口元から、タバコのヤニに染まった黄色い歯をむき出して笑みを浮かべる。確かにこれでは好感を持つてというほうが難しいだろう。楠木はそのまま手を振ると、階段の方へと消えていった。

明華は不愉快な気分をどうにかしようと、大きく深呼吸をしてから二階への階段を上りだした。クリスもキーラ達の後に続いて急ぎ足で階段を上る明華を追いかけた。

先ほど楠木少佐を見つけてからというものの女性士官に微妙な気配が漂い、会議室まで奇妙な沈黙が続いた。それでも戦場と言うものを職業上汁しかなかったクリスはこのような沈黙には慣れていた。

フリーライターと言うのは戦場では歓迎される存在ではない。幹部ならどこで足をすくわれるか警戒し、兵卒は自分の行動が監視されていると言う妄想に襲われて黙り込むことになる。嵯峨の妙に馴れ馴れしい態度の方がクリスには余計気になるものだった。そしてその手足として情報を管理する将校が根っからのスケベ親父であつても聞いてみればなんとなくしっくりする話だった。

不愉快が作り出す沈黙が会議室のドアを開き、席に腰を掛けても一同にはまとわり付いていた。さすがにそこまで嫌われると言うことの意味を知りたいという好奇心から楠木少佐をもう一度クリスは観察してみた。好意を抱かれると言うこととは無縁に生きてきたらしいその鷲鼻の胡州軍人は、下卑た視線を時々女性隊員に向けている。これでは嫌われるはずだと苦笑するクリス。

だが、敵との接触が予想される最前線でこういふてぶてしい表情を浮かべられると言うのはそれなりの自信があつてこそとクリスは思っていた。別にどこの軍隊でも見かけるクレバーな指揮官に共通の顔。だが、そのにやけた目の奥に何が映っているかはクリスにもわからなかった。明華達が明らかに楠木を毛嫌いしているにもかかわらず、黙って彼の舐めるような視線に耐えているのは彼の情報の精度ゆえなのだろう。

そんな状況を放任している嵯峨と言う人物の部隊長としての能力については現段階でクリスはかなり疑問を持っていた。そして戦闘指揮官としての成果をあまり上げていないこともクリスの嵯峨の評価を下げる原因の一つだった。

先の大戦では、枢軸陣営の最後の大打として胡州軍が行った遼

南軍との共同作戦による遼北への越境攻撃、『北伐作戦』。その作戦に借り出された嵯峨はアサルト・モジュールと機械化歩兵部隊で構成された混成連隊を指揮しているが、圧倒的な遼北の物量と開戦直後にゴンザレス將軍のクーデターによる遼南の地球側との停戦協定成立により、彼は戦果らしい物を一つも上げてはいない。

東海軍閥が嵯峨の実弟ムジャンタ・バスバ擁立を諦めて人民軍に協力するまでの何度かの戦闘を彼が指揮したという未確認情報もあるが、一般的には実績の無い嵯峨が手持ちの情報をどう料理して物量に勝る共和軍に対峙するのか、クリスにはまるで予想がつかなかった。

そんな事を考えているうちにクリスはそのまま会議室を一望できる席まで案内されていた。

「どうぞ、ここに」

キーラの銀色の髪がひらめくのを目にしてクリスは現実世界に引き戻された。彼女はクリスとハウードの椅子を用意するとそのまま部屋を出て行った。

誰一人としてクリスとハウードの二人の外部の人間、しかも報道の人間がこの部屋での会議に列席するというのにそれが当然と言う顔をしている。まるでこれからの会議の内容が外部に漏れることを歓迎しているようにも感じられる。

「文屋さん。どうですか、北兼軍と言う奴は。まあ、一日二日じゃあ分らないかもしれませんがね」

そう言うつと楠木は静かにタバコを取り出す。周りの将校達は別にそれをとがめる風でもなく、隣の席に腰を下ろした胡州浪人と思しき青年将校が彼のために灰皿を用意している。そして上座、嵯峨が座るだろう席にも汚らしいアルミの灰皿が置かれていた。

「あの、すいませんが。ちよつと窓を開けてもらえますか？」

クリスはいつものようにそう言って周りの反応を試してみた。ちよつとした日常会話から戦線に関する見方などが見て取れることもある。従軍記者を十年ほど続けてきたクリスはそう言うところを推

し量る力には自信を持っていた。

「ああ、そうですねアメリカの方はあまりタバコはやらんでしょう。柴崎！窓開ける」

言葉に性格が表れるというが、その媚びたような口調はクリスには気分の良い物ではなかった。その時クリスの背後で物音がした。思わず振り返ってみてそこにこの会議を仕切る男が頭を書きながら手を合わせて入ってくる様子が目に入る。

「遅くなったね。紅茶おばさんがうるさくてさ」

そう言いながら嵯峨が部屋に到着する。誰一人席を立つて敬礼する者はいない。紅茶おばさんと言う嵯峨の言葉も誰のことか特定できるようで何人かの士官は笑いを堪えながら議長席に向かう嵯峨を見つめていた。

「それじゃあはじめようか」

そう言いつつ、嵯峨はクリスの方を向いた。

「あの、一応これは戦争なんで、秘匿したい情報が出そうになったら退席してもらいますが……いいですか？」

突然の質問にクリスは絶句した。当たり前の話だがそんなことを前もって言った指揮官にクリスははじめてであった。隣のハワードにいたつてはつい噴出してむせていた。

「かまいませんよ。私達の為に戦争をしているんじゃないでしょうから」

クリスはそう言うのととりあえず笑っておいたほうが良いと、経験上わかっていた。それを見ると嵯峨はクリスが存在しないかのような真剣な目つきで楠木に目をやった。そして楠木は立ち上がると、手にした情報端末をテーブルの中央にあるプロジェクターにつないだ。

立体的な、北兼台地の情報が表示される。

『北兼台地？希土類の鉱山以外は戦略的価値は無いはずでは……』
速記代わりのレコーダーのスイッチを入れながら心の中でこれまでクリスが手にしていた情報からは意外としか思えない攻略目標を

知って、次に楠木が何を話すのかに注目した。

「驚きましたか？」

静かにクリスを見つめてつぶやく楠木。クリスは呆然としながら周りを見回した。嵯峨をはじめ部隊の主要人物はすべてそろっている。その視線は特にクリスなどいないと言うようにモニターに目を向けていた。そして隊員は一人としてこの状況を意外とは思っていないことはクリスも理解できた。さすがに情報屋だ。クリスが置かれた状況が他の軍ではありえないことを知り抜いている楠木の口元に下卑た笑みが浮かぶ。

「それじゃあ入手した情報を反映させますか」

一転して嵯峨に目をやると楠木は端末を操作する。いくつかの赤い点、そして縦横に伸びる青いラインと、それにいくつかが群がる紫、緑、黒の点の群れ。

「現状、この赤い点にあるのが菱川鉦山の所有鉦山と菱川の民間軍事会社である東和安全保障の拠点になりますねえ。そして青いラインが物流の要となる交通網で現在×印の地点は地雷や自動防衛装置が配備されて検問が行われている場所。そして紫が共和軍、緑がこちら側に協力的なゲリラの拠点。そして、黒は米軍を中心とした地球連邦平和維持軍のキャンプになるわけだ」

明らかにこの地図の読み方の説明をしたのはクリスに読み方を教えるためのサービスのようだった。隊員達の顔は早く本題に進めと言うように厳しくなっている。だが楠木はそれだけ話すとそのまま席に着いてしまった。それにより新たに楠木が得た情報が部隊の配置ではないことを理解してテーブルについている士官達は腕組みをして考え込んでいた。

「東和安全保障の方はどうなっているんですか？先週と拠点の位置の移動は無いようですが……噂になっている伝説的傭兵が部隊長として雇われたと言う話もありますか」

ルーラのその言葉に、楠木は眉をひそめた。

「吉田俊平のこと？まあな。ここしばらくおとなしくしていたんだが、金が尽きたんあじやないのかね、相当な額の報酬で提携を結んでいるのは本当だよ」

忌々しげに楠木が吐き捨てるように言葉を荒げるのはもったもなことだ。クリスは従軍記者として10年近く戦場を歩いてきたが、『吉田俊平』の名は何度と無く耳にしてきた。残忍、冷酷、そして金に汚いことで知られる名の知られた傭兵。勝つ戦い、それも勝者に多額の報酬を支払う能力があるときにのみ動くというクレバーな戦争屋。特に電子戦、諜報戦に優れた能力を発揮するところから、体の多くの部分をサイボーグ化しているとも言われ、その写真はどれも違う顔違う体つきをしていた。そもそもそれが一人の人間であるということ自体、かなり疑わしいのではないかとクリスはにらんでいた。

「確かに共和軍もアメリカも積極的に部隊を展開するつもりは無いようですね。東和軍の権益がある北兼台地に人民軍の息のかかった我々が手を出すはずが無いと思っっているんでしょうね」

明華はその部隊配備状況を一言で片付けた。東和共和国は現在展開されている遼南内戦に重大な関心を寄せていた。その強力な航空戦力は遼南全体を飛行禁止空域と設定し、偵察機を飛ばして内戦を続ける人民軍と共和軍を監視していた。間抜けな共和軍や人民軍のアサルト・モジュールがこれに発見され上空に待機している対地攻撃機のレールガンで蜂の巣にされた事例はいくらでもある。直接介入を嫌う東和軍。その関心を引く行動が禁じ手だと理解しているのは人民軍も共和軍も同じだった。

だがそんな中一人忌々しげに画面を見上げて頭を掻いている男がいた。

「もしこれが上層部から届いた命令書も無くて、共和軍殲滅の為に央都への道を作る方法を考えろって言うのならかなり楽だったかもしれねえけどなあ」

嵯峨は懐から一枚の情報カードを取り出す。そのカードは楠木の端末に挿入された。目の前の立体画像が、一枚の命令書に変わる。

強い調子での北兼軍への命令書だった。鉦山の無傷での接收作戦とアメリカ軍の排除指示書。明らかにそれが不可能であると言うことを分かりきった上で出されたような文面は自分へ出されたものでないと言うのにクリスにも憤りを覚えさせるものだった。

「鉦山の接收？何を考えているんですか？北天の連中は？」

叫んでいたのは伊藤だった。クリスにも彼の言葉の意味は理解できた。政治将校である彼にはすでに胡州軍の制服を着ている胡州浪人らしい男達の非難するような視線が向けられている。

「伊藤さんの言うとおりですよ。鉦山の接收なんかしようものなら東和の全面介入の口実を与えることになるじゃないですか？無謀すぎます……でもまあ北天の偉い人には我々は信用なら無いならず者扱いですからね」

そう言うと御子神は店を見上げて自虐的に笑う。嵯峨はだまって腕を組んでいる。

だが、クリスは気づいていた。嵯峨がにんまりと口元に笑みを浮かべていると言う事実を。そして彼が何かをつかんでいると言う記者としての確信が嵯峨の言葉を待つと言う体勢にクリスを持って行った。

「伊藤ちゃんに御子神の。それは最初からわかってたことだろ？うちが人民軍の連中から見れば外様だ。この作戦の結果、東和からクレームが来たら俺等の独断先行として俺の首で話をつけようと言う魂胆だろ？俺が人民軍の参謀総局にいたら今頃そのときの言い訳でも考えてるよ」

嵯峨は笑っている。まるで他人事のように言っている。クリスはそんな彼の態度で周りの部下達の雰囲気はどう変わるかを読み取るうとした。

「もし外交問題に発展すれば北兼軍を切り捨てるつもりでことですね」

そう言う御子神の頬が震えていた。セニアは彼を心配そうに眺めている。まるで敗戦が確定した部隊のようだった。そのくせ指揮官の嵯峨は悠然とタバコに火をつけてもうすでに笑みと読んでいい表情を浮かべていた。

「よろしいですか？」

沈黙が続く中でクリスは恐る恐る手を上げた。会議を仕切るような風に見えた明華が視線を投げてくる。

「どうぞ。客観的な視点も参考になるでしょうから」

どこか棘のある明華の言葉にクリスは立ち上がった。

「北兼台地の鉾山群への攻撃は、できるだけ避けるべきだと思いません。私はジャーナリストですから、それが共和軍の遼州星系国家郡に対して『我等こそが遼南の利益を代表する』という格好のプロパガンダの材料になるのは間違いないですよ。どんな政権であれ自国の利益を守ってくれるならそれに越したことは無いでしょうから。それに相手は『殺戮機械』の異名をとる吉田俊平。戦力を消耗するだけ無駄ですね」

それだけ言うくとクリスはへたり込むように椅子に座り込んだ。会

議の席にいる誰もがそんなことくらいはわかっているとゆうような顔で招かれざる客である二人の記者を見つめていた。

「誰が見てもそうですよねえ。でもまあ一応、人民軍本部の指示は無視するわけにはいかないですよ。それに逆にここで俺の狙い通りの筋書きに持っていければ、人民党の偉いさんの鼻をあかせるかもしれないもんでね」

嵯峨のその言葉に、この場のメンバーは彼のにやけた面を凝視した。そんな突然の部下達の食いつきに、驚いたようにタバコを灰皿に押し付けた嵯峨。

「先に言っておくぜ。別に相手を潰すいい作戦があるとか言うことじゃないんだ。ただいくつかの情報があってね、それが面白い結果を出しそうだというだけの話なんだ。共和軍の隙間って奴に手が出そうな話でね」

自分が何かを知っている、情報を握っているとにおわせる嵯峨の余裕の表情に会議に列席している士官達は目の色を変えて自分達の上官である嵯峨を見た。

「俺の情報には無い話でしょうね。御前」

一人その流れに乗り遅れたと言うように楠木が頭を掻く。嵯峨は特に気にすることもなく再び取り出したタバコに火をつけた。

「じゃあこれから先は身内だけでやりたいんで」

そう言うのと嵯峨は扉近くの将校に目配せした。クリスも音声レコーダーを止めて立ち上がった。部下達は、嵯峨の言葉を待っているような表情を浮かべながら去っていくクリスを眺めていた。

「ハンガーの方にはホプキンスさんが行くことは伝えてありますから！」

明華の緊張感のある声が会議室に響いた。クリスが振り向くとそこにはもう明華は後ろを向いていた。

「東和の介入を抑える……菱川重工でも脅すのかね。『社長の首が飛ぶぞ』とでも言っつて」

ハワードは笑顔でそう言った。その言葉を聞いてクリスにはひら

めくところがあった。

嵯峨家は地球の交渉がある星系を代表する資産家である。胡州の外惑星コロニー群の領邦には2億の民を抱え、そこでの領邦経営での利益や各国への投資した資産により地球の中堅国家以上の流動資産を握っている嵯峨惟基。彼が経済学の博士号の持ち主であることもクリスはこれから嵯峨を値踏みするには必要な知識だと思い返した。

「金持ちは喧嘩をしないものだと言うが、例外もあるんだな」
そう言うところクリスはそのまま廊下を歩き続けた。

会議室の扉は閉められ、会議が再開されたようだった。クリスは嵯峨の最後の言葉が気にかかった。

「ホプキンスさん！」

そこに駆けつけたのはつなぎを着た整備員キーラだった。どこも無く慣れていないクリスにどう話しかければいいのか戸惑うキーラ。「君か」

そう言つてクリスに向き合うように立つキーラになぜかクリスは興味を引かれた。それは神に挑戦するにも等しい『人間の創造』を行つたゲルパルトの技術者に対する興味とは違う何かだ。そう自分に言い聞かせるクリス。

「珍しいですよね、『ラストバタリオン』の整備員なんて」

そう言うときーラはさわやかに笑つた。自分の考えが見透かされたことにクリスは驚くとともに当然だと思えた。少なくとも彼女はこうして生きている。それだけは誰も否定が出来ない。白い肩の辺りで切りそろえられた髪がさわやかな北兼山地の風になびく。同じような赤いくりくりとした目がどこかしら愛嬌があるように見えた。「二式についてはいろいろ聞きたいことがあつてね」

自分の戸惑いを見透かされまいとそう言つとクリスは再び格納庫に向かうべく階段を下りた。

「あまり政治向きの話は答えられないですよ。嵯峨中佐がほとんど糸を引いていたつて噂くらいしか知りませんから。それに整備班に転向してから日が浅いんで、細かいところは後で許中尉に確認してください」

あつけらかなとした調子で話すキーラ。そのおおらかな言葉の響きにクリスは好感を持った。木製の階段を降りる。彼女のきびきびとした所作にはさわやかな雰囲気がかもし出される。

「あ、ジャコビン曹長。ちょっと村を撮りたいんだけど……」

ハワードにそんな風に言わせたのはキーラのまとう雰囲気なのだろうとクリスは思いながら柔らかな表情を浮かべるキーラを見ていた。

「ああ、良いですよ。なんなら整備の手のすいたのを見繕ってドライバーにつけましょうか？」

「お願いできるんですか？それはいいや！」

ハワードが子供のような笑みを浮かべる。クリスは窓から見える高地の風景を見ていた。まだ日は高い。案内が着くのなら日暮れまでには帰るのだろう。キーラは通信端末に何かを入力しながら本部の階段を降り終えた。作戦会議。おそらく北兼台地の攻防戦が始まるうとしているだけのことはあり、格納庫のアサルト・モジュール群には火が入れられているようで、静かに震えるようなエンジンの稼働音が響いている。

「四式も準備中か。戦力はこれだけじゃないんだろ？」

三号機の肩の辺りで談笑していた整備員から敬礼されているキーラに尋ねた。

「まあ、あとはホバーが二十三機、それに装甲トレーラーが六台、200ミリ榴弾自走砲が十二門。兵員輸送車が33両ありますよ」

「結構な戦力ですね」

そう言うところクリスは二式を眺めた。親米的姿勢を見せる南都軍閥の依頼で出動しているアメリカ軍は共和政府と距離をとる南都軍閥を率いるブルゴーニュ家に配慮して、最新式のアサルト・モジュールの投入を行うつもりはないことは知っていた。アメリカ国内でも今回の出兵に異論が出ているのは事実だった。しかし、負ければ次の選挙は野党に傾くのは確実とされており、最新鋭機の試験的投入による戦局の一気に逆転を狙っていると言う噂は彼の耳にも届いていた。

「そう言えば、ジャコビン曹長。君は『魔女機甲隊』の出身かね」

クリスは何気なく尋ねた。振り向いたキーラはしばらく黙ったままクリスを見つめた。

先の大戦で遼北のプロパガンダの一翼を担った周香麗大佐率いる『魔女機甲隊』の噂はクリスも知っていた。女性ばかりの隊員で構成され、一線級の装備を与えられた彼女達は遼南侵攻を図った遼北軍でも飛びぬけた戦果を上げた。戦後、ゲルパルトによる人造兵士計画『ラストバタリオン計画』とそのプラントを接收した遼北軍は二千万人と言う女性人造兵士を軍に編入した。そしてその中でも優秀な成績を残した兵士を周大佐の責下に編入し、その後も内戦の続くベルルカン、アステロイドベルトコロニー群、外惑星区域等での目覚しい戦果を上げた。だが、現在まで続いている軍内粛清の嵐により周大佐は故国を追われて嵯峨の北兼軍閥を頼り現在は北兼軍閥の主力と目されている部隊としてアメリカ軍と対峙していた。

現在の北兼の総兵力9万のうち、一割程度は周大佐に呼応して亡命した『ラストバタリオン』であることは公にされている事実だった。そんなことを考えていたクリスの顔をキーラは聞き飽きたと言う表情で振り返った。

質問に答えずに手元の携帯端末に目を通すキーラを見てクリスはつまらないことを言ったと思い返した。しかし同様の質問にうんざりとした表情は一瞬のことで、彼女の顔にはすぐ笑みが浮かんだ。

「別に不思議なことは無いですよ、セニアさんやレムなんかもそうですから。特にレムなんてちょっと変わってるでしょ？まるで普通の人間みたいじゃないですか」

そう言ったキーラの口元に浮かぶ笑み。自分の偏見が抜けきらないことに恥じながらクリスは言葉を続けた。

「私から見たら君も立派なレディーだよ」

「何言ってるんですか！」

そう言っただけで叩いたキーラの一撃で、クリスは少しよろめいた。さすがに筋組織のつくりが違う人造人間に殴られれば大柄なクリスもよろめく。

「すみません！大丈夫ですか？」

キーラが傾いたクリスを起こした。苦笑いのクリスはハンガーを走り回るキーラの部下達を見ながら言葉を続けた。

「それにしても本当に一個旅団規模で北兼台地を制圧するつもりなのかねあの人は」

「十分その素地は出来たって言うてましたよ、隊長が」

上官の考えに同調するのはそう作られたからなのかとクリスは思った。戦力差はあまりに大きい。ゲリラの支援を受けたとしてもとても対抗できる実力があるようには思えない。

「直接君が聞いたのかい？」

また余計なことを言った。クリスはそう思いながらキーラを見つめる。

「ええ、隊長はよくその喫煙所の隣で七輪でスルメとか焼いて飲んだくれていることがありますから……まあ時々どう見てもそこで

言うのはおかしいと思うようなことまで手の空いた隊員に話して
いますよ」

クリスは意外に思った。

非情冷徹な典型的胡州軍人と言う嵯峨のイメージがここで本人に
出会うまではあった。だがはじめてみた子供と遊ぶ指揮官の姿、そ
してキーラの口からそんな言葉を聞くと改めて嵯峨と言う人物の全
体像がわからなくなり始めた。そんな彼の隣にいたキーラを二式の
足元で装甲版をはがした脚部の調整をしていた技官が手招きしてい
る。

「すみません、ちょっと仕事なんです」

そう言っただけで立ち去るキーラ。ハンガーで作業するキーラ達整備員
達を眺めながらクリスは二式の機体に張り付いて作業を続けている
整備兵に身振りを交えて説明するキーラを見つめていた。ふと横を
見ればハンガーの入り口には嵯峨がよくつまみを焼くと言う七輪が
ある。暇に任せてそれに近づいてみれば七輪はかなり使い込んでい
るようで、あちこちにひび割れが出来ていた。

「壊さないでくださいよ。あの人泣きますから」

そう言いながら今度はコックピットの調整に手間取っている部下
のところを這い上がるようにするキーラが叫んだ。その表情は相変わ
らず笑っていた。

「しかし、君は良く笑うね」

クリスの言葉にキーラが頬を赤らめる。周りで作業をしていた整
備兵がそれを見て一斉に笑い声を上げる。

「そうですか？戦争の道具として生み出された私が自分で自分の人
生が決めるんですから。いろいろ大変だってセニアは言いますけ
ど、私はそれなりに幸せですよ」

またキーラに笑みが浮かぶ。クリスは嵯峨の七輪から離れて格納
庫を一望した。殺伐とした北天の人民軍の格納庫とはかなり違っ
ていた。又聞きになるが、北天周辺のアサルト・モジュール基地では
あちこちに政治将校と彼等の部下がにらみを効かし、時には雑談を

聞かれて連行されていく兵士もいるとクリスは聞いていた。だがここにはそのような雰囲気は無かった。

一仕事終え談笑する整備員達。オペレーターの女性隊員もその中に混じっている。よく見れば伊藤の部下である政治局員の袖章をつけた兵士も大きな手振りで彼らの笑いに花を添えている。

「ずいぶん違うものですね、人民軍の本隊とは」

そう言いながらクリスはようやく部下に指示を出し終えて戻ってきたキーラに向き直った。

「まあ隊長の個性というところじゃないですか？」

そう言つとキーラはまた笑みを浮かべた。それを見てクリスは何事も急ぐべきではないと言つことを察した。二式の情報は北兼軍閥の最高機密である。今キーラを問い詰めても彼女は誰でもなく自分の意思で何も話さないだろう。クリスは直接の質問をあきらめて自分の身の回りを片付けようと思った。

「そう言えば私達の荷物は？」

「ああ、裏の宿舎の326号室に置いておきました」

そう言つとキーラはクリスと一緒に立っているハンガーの入り口まで駆け足でやってきた少年兵から渡された仕様書に目を向ける。

「ありがとう。ならばしばらく休ませてもらうよ」

クリスはそれだけ言つと、話し足りなそうなキーラを置いて自分の仮住まいへと向かった。

彼はこれほどの笑顔が見れるとはクリスは思っていなかった。

正直この仕事を請けるまでの人民軍に対する印象は悪かった。自由の敵。母国アメリカではこの遼南の紛争をその敵に対する聖戦だという世論まであった。クリスもこれまでは遼北による勢力拡大のための戦争と言つイメージでこの内戦を見ていた。そしてある意味それは正解だった。北天では脱走兵が広場などに集められ機銃で処刑される光景も見た。政治将校が徴兵されたばかりの新兵を殴りつけている様などは日常のものだった。

だが、この北兼軍ではそのような雰囲気はまるで無かった。綱紀

肅正を主任務とする憲兵隊出身の嵯峨が全権を握っていると言つのに、どの兵士達の目にも自分で選んでここにいるとでも言つような秀囲気が見て取れた。

そう思った時、自然と自分にもキーラの笑みがうつっていることに気づいてクリスは苦笑いを浮かべた。

夕暮れを告げる風が大きなもみの木を揺らす。少女が一人、そんなもみの木のこずえに座っていた。

「なんか変……」

そう言う少女の手には横笛が握られ、器用にバランスを取りながら笛を口に乘せる。悲しげな旋律が木の上を旋回するように始まった。元の色が分からなくなるほど着古されたポンチョ、破れかけたズボンは澄んだ木々の陰に広がる闇の中でも彼女が一人でこの森に暮らしていることを知らせるものだった。峠から吹き降ろす風は冷気を帯びているもののやわらかく、彼女の埃まみれの髪の毛を撫でていった。頬はあかぎれと炭で煤けている。

まもなく日は沈もうとしていた。日が沈めば風の向きは反転し、彼女のいる高地から峠へと押し戻すような湿り気を帯びた風に変わることを彼女は知っていた。

旋律を一通り吹き終わると彼女は笛を腰の帯に押し込み、もみの木を転がり落ちるようにして大地に降りた。降りた先のもみの巨木の根元には、子供のコンロンオオヒグマが座っている。去年の秋に生まれた小熊はすでに地球のヒグマの大人よりも一回りも大きい巨体に成長していた。降りてきた少女を見ると元気良く彼女の前に座って巨体を揺らして少女に甘える。

「大丈夫。怖くないからね」

少女は小熊の頭を撫でた。小熊は嬉しそうに彼女の頭に静かに前足を乗せる。

「そうだ、これ食べる？」

アカギレだらけの手で背中の中のスダ袋を探ると、鹿の肉を干したものを小熊に与えた。小熊はそれに噛み付くと、一心不乱に鹿の肉を噛み砕き始めた。

「大丈夫だよ、そんなに急がなくても」

そう言いながら微笑む少女。山並みに夕日が隠れると一気に森は暗闇の中に沈む。

「熊ちゃんもお友達が出来ると良いのにね」

口の中で肉を噛み続ける小熊を見ながら少女はどこか寂しげな表情を浮かべた。その瞬間、それまで峠から吹き降ろされていた冷たい風が止んだ。小熊は不安に思ったのか、口の中の鹿の肉の破片を飲み込むと、潤んだ眼で少女を見つめた。

「大丈夫だよ。ずっと一緒なんだから」

そう言っつて小熊の頭を撫でた。小熊はそのままおとなしく彼女の前に座った。

「絶対大丈夫、大丈夫」

その言葉は小熊に対してではなく、自分自身に言い聞かせているようにも聞こえる言葉だった。そして静まり返った彼女の為だけに、あるようにも見える森に彼女の視線は走った。

「これまでだつて大丈夫だったんだから」

そう言っつと少女の視線に殺気のような物が走る。何か敵視するものがそこにあるとでも言っつように彼女は峠の方を見つめた。

「悪い人はね、あの峠を越えられないんだよ。もし越えてきても私がやつつけるんだから」

そう言っつと彼女は小熊の後ろに置かれた巨人像のようにも見えるアサルト・モジュールを見上げた。

その剣を持った白いアサルト・モジュールはアイドリング状態の鼓動のような音を立てながら戦の神を模した神像のように立っている。その姿を見上げる少女の目に涙が浮かんでいるのを見つけた小熊は甘えるような声を上げて少女に寄りかかる。

「大丈夫、大丈夫」

そう言いながら少女は小熊の頭を撫でながら巨大人型兵器を自信に満ちた目で見上げていた。

出撃の朝の緊張感は、どこの軍隊でも変わりはない。昨日まで野球に興じたり山岳部族の子供達と戯れていた兵士達の様子は一変し、緊張した面持ちで整列して装備の確認をしているのが窓から見える。クリスは表で爆音を立てているホバーのエンジンのリズムに合わせて剃刀で髭を剃っていた。

「別にデートに行くわけじゃないんだ。そんな丹念に剃ること無いじゃないか」

ベッドに腰掛けたハワードはカメラの準備に余念が無い。

「一応、北兼軍閥の最高指導者の機体に乗せていただけなんだ。それなりの気遣いと言うものも必要だろ？」

口元に残った髭をそり落とすと、そのまま洗面器に剃刀を泳がせる。大きな音がして建物が揺れるのは大型ホバーが格納庫の扉にでもぶつかったのだろう。罵声と警笛が響き渡り戦場の後方に自分はいらんだという意識がクリスにも伝わってくる。そんなクリスにハワードが整備が終わったカメラのレンズを向けた。

「確かにそうかもしれないがな。それより大丈夫なのか？四式は駆動部分や推進機関のパルス波動エンジンは最新のものに換装してあるって話だぞ。あんな時代遅れの機体に最新の運動システムが付いていけると思うのか？それに重力制御式コックピットの世代は二世代も前のを使っているって話だ。Gだつて半端じゃないはずだろ」

「なに、私もM3くらいなら操縦したことがあるからな。それに今回は後部座席で見物するだけだ。大して問題にはならないよ」

そう言うところクリスは戦場でいつも身につけているケプラー防弾板の入ったベストを着込んだ。そして、出かけようという時、ノックする音に気づいた。

「どつぞー！」

迷彩のカバーにピースマークをペンで書き込んだフリッツヘルメ

ツトを被るクリス。ドアが開く。そこにはクリスの見たことの無い戦闘帽を被った嵯峨が立っていた。

「すいませんねえ、早く起こしちまって。朝食でも食べながら話しましょうや」

何かをたくらんでいそうな笑みを浮かべた嵯峨に、クリスはハワードと顔を見合わせた。

「ええ、まあよろしくお願いします」

断るわけにも行かない。そう思いながらクリスはそのまま歩き出した嵯峨に続いた。嵯峨が着ている昨日と同じ半袖の軍服は人民軍の夏季戦闘服である。そして足元はなぜか雪駄を履いていた。その奇妙な格好にハワードは手にしていた小型カメラのフラッシュを焚く。嵯峨はそれを咎めもせず、そのまま立て付けの悪い引き戸を開いて食堂に入った。

「食事があるってのはいいものつすねえ」

そう言うつと嵯峨は周りの隊員達を見回す。食堂にたむろしているのはまだ出番の来ない補給担当の隊員達だった。その体臭として染み付いたガンオイルのよんどんだ匂いが部屋に充満している。兵士達は攻撃部隊が出撃中だというのに大笑いをしながら入ってきたクリス達を見ようともしせず食事を続けている。

「俺と同じのあと二つ」

カウンターに顔を突っ込むと嵯峨は太った炊事担当者に声をかけた。嵯峨の顔を見ても特に気にする様子も無く淡々と鍋にうどんを放り込む料理担当兵。

「そう言えば嵯峨中佐は前の大戦では遼南戦線にいたそうですね」

クリスの言葉に嵯峨の表情に曇りが入った。だが、カレーうどんが大盛りになったトレーを受け取った頃にはその曇りは消えて、人を食ったような笑顔が再び戻ってきていた。

「そうですよ。ありやあ酷い戦場だったねえ」

そう言いながらテーブルの上のやかんに手を伸ばすと、近くに置いてあった湯飲みにはうじ茶を注いだ。聞かれることを判っている、何度と無く聞かれて飽きた。嵯峨の大げさな言葉とは裏腹に表情は暗い。それを見てクリスは少しばかり自分が失敗したことに気付いていた。

「ここから三百キロくらい西に新詠という町がありましたね。そこで編成した私の連隊の構成員は千二百八十六名。うち終戦まで生きていたのが二十六名ってありさまですからね」

圧倒的な遼北の物量を前に、敗走していく胡州の兵士の写真はクリスも何度も見ていた。胡州から仕掛けた戦いだった遼南戦線は見通しの甘さと胡州の疲弊振りを銀河に知らしめるだけの戦いだった。

初期の時点でアサルト・モジュールなどの機動兵器の不足がまず胡州の作戦本部の意図を裏切ることになった。作戦立案時の三分の一の数のアサルト・モジュールはほとんどが旧式化していた九七式だった。その紙の様な装甲で動きは鈍いが重武装で知られるロシア製のアサルト・モジュールをそろえていた遼北軍を相手にするのは端から無理な話だった。すぐに駆けつけた西モスレムの機動部隊は胡州・遼南同盟軍の横腹に襲い掛かり、宇宙へ上がる基地はアサルト・モジュールを使った大規模な電撃戦で瞬時に陥落した。

彼らが無事に胡州の勢力圏へと帰ろうと思えば、遼南帝国ムジャンタ・ムスガ帝を退位に追い込んだ米軍とゴンザレス政権同盟軍への投降以外に手はなかった。遼北による捕虜の処刑の噂は戦場に鳴り響いており、反枢軸レジスタンス勢力による敗北兵狩りは凄惨を極めていた。さらにそんな彼らの前に延々数千キロにわたって続く熱帯雨林が立ちはだかった。指揮命令系統はずたずたにされ、補給など当てに出来ない泥沼の中、彼らは南に向かつて敗走を続けた。

嵯峨の指揮していた下河内混成特機連隊も例外ではなかった。彼らは殿として脱路兵を拾いながら南を目指した。当時の胡州陸軍部隊の敗走する姿は胡州軍に投降を呼びかけるビラを作成する為、民間人を装い彼らに近づいた地球側の特殊潜行部隊に撮影されていた。兵士の多くが痩せこけた頬とぎらぎらした眼光で弾が尽きて槍の代わりにしかならないだろう自動小銃を構えて膝まで泥につかり歩いている。その後ろには瀕死の戦友を担架に乗せて疲れたように進む衛生兵。宇宙に人類が進出したと言うのにそこにあるのは昔ながらの敗残兵の姿だった。

文献を見ても蚊を媒介とする熱病が流行し、生水を飲んだものは激しい下痢で体力を失い倒れていったと言う記述ばかりが目立つ戦いだっただと言う。住民は遼北、アメリカの工作員が指導したゲリラとして彼らに襲い掛かるため昼間はジャングルの奥で動くことも出来ずに、重症の患者を連れて行くかどうかを迷う指揮官が多かったと伝えられている。置いていくとなると負傷者には一発の拳銃弾と拳銃が手渡されたと言う記録もある。

その地獄から帰還した歴戦の指揮官。しかし、そんな面影など今日の前でカレーうどんを食べ続けている嵯峨には見て取ることができなかつた。

「食べないんですか？」

嵯峨はそう言ってクリスとハワードを眺めるが、すぐに切り替えたようにうどんにカレーの汁をなじませながらぱくついていた。

「いえ、やはりあなたでも昔のことを思い出すんですね」

クリスの言葉に一度にやりと笑ってからどんぶりに箸を向ける嵯峨。その表情がゆがんだ笑みに満たされているのが奇妙でそして悲しくもあるようにクリスには見えた。

「まあ、私も人間ですから。思い出すことだってありますよ。ここ土地には因縁がある。特に私には特別だね」

そう言うと今度は隣のサラダを口に掻きこみ始める。クリスもそれに合わせて慣れない箸でうどんを口に運んだ。

「ああ、そう言えば攻略地点を知らせてなかったですね」

呆れるようなスピードでサラダを口に掻き込んだ嵯峨はそう切り出した。胡州の最上流の貴族の出だと言うのにまるで餌のようにサラダを食い尽くした嵯峨には驚かされた。

「攻略と言うか、上手くいけば戦闘をせずに行けるところなんですがね。この夷泉の南にある兼行峠の向こう側に村が一つあるんですよ」

嵯峨は落ち着いたというようにほうじ茶に手を伸ばす。細かい地名を図も無く教えられてぼんやりと話を聞くことしか出来ないクリスとハワード。そんな彼等を気にする様子も無く嵯峨は言葉を続ける。

「まあ、かなり前に廃村になっているんですが、そこならこれから先の北兼台地の鉱山施設制圧作戦の拠点になると思っていますね」

そのままほうじ茶を一息で飲み干す嵯峨。クリスもハワードもまだカレーうどんを半分以上残していた。

「そこを橋頭堡にするわけですね」

クリスの言葉を否定も肯定もせず嵯峨は胸のポケットに入れたタバコの箱を取り出し、手の中でくるくると回して見せた。

「まあそう言うことです」

嵯峨の頭が食堂の入り口に向いた。クリスが振り向くとそこには先日会議室で見た胡州浪人らしい眼鏡をかけた士官がヘルメットを抱えて立っていた。

「遠藤！ちよつと待つてる。ハワードさん、ドライバーが来ましたよ」

遠藤と呼ばれた少尉はハワードの隣までやってくると敬礼した。いかにもギクシャクとした態度、胡州で訓練を受けた士官らしく視線は厳しい。

「ハワード・バスさんですね。第一機械化中隊の遠藤明少尉と言います」

ハワードを見上げる青年に握手を求めて手を伸ばす。遠藤はぎこちなく大きなハワードの手を握り返すとようやく笑みを浮かべた。

「ずいぶんとお若い方ですね。出身は胡州ですか？」

流暢なハワードの日本語に戸惑ったような表情を浮かべた後、遠藤と言う士官は首を横に振った。

「いえ、遼南ですよ。北兼軍閥の生え抜きですから」

頷きながらハワードは椅子に腰掛ける。そしてそのままクリスよりも上手く箸を使ってうどんを食べていく。遠藤はそのままハワードの脇に立ってその様子をじっと眺めていた。

「おいおいおい。そんなに見つめたら食事が出来なくなるじゃないか。とりあえずこれでも飲め」

そう言うつと嵯峨は遠藤にほうじ茶を注いでやった。遠藤はそのままハワードの隣に座るとほうじ茶を口に含んだ。

「遠藤少尉。いい写真は撮れそうかね」

ハワードはサラダのトマトを口に入れながらそう尋ねる。

「それはどうでしょうか……それは私の仕事ではありませんから」

きつぱりとそう答える遠藤にハワードは手を広げて見せた。それを見て渋い顔をする嵯峨。

「うちの宣伝になるかもしれないんだぜ。もうちょっと色をつけた話でもしろよ」

嵯峨はそう言つとクリス達が食事を終えたのを確認した。嵯峨に向けられた目で合図されたと言つように少尉が立ち上がる。

「それじゃあ先に行つてるぜ」

ハワードはそう言つとジユラルミンのカメラケースを肩にかけて遠藤のあとを追つて食堂を後にした。

「そう言えば嵯峨中佐は戦闘は無いようなことをおっしゃってましたね」

ほづじ茶を口に運びながらクリスはこの言葉に嵯峨がどう反応するのかを確かめようとした。

「そんなこと言つたっけかなあ。まあ、現状としてさっき言った目的地とその経路には敵影が無いのは事実ですがね」

嵯峨は笑いながら立ち上がる。そしてそのままタバコを口にくわえて手にしたトレーをカウンターに運んだ。

「戦場では希望的観測は命取りですから。まあ今のうちに樂觀できるところはしておいた方がいいと言つのが私の持論ですので」

そう言つと嵯峨はおもちゃにしていた口のタバコによつやく火をつけた。

「それじゃあ行きましようか？」

トレーを棚に置くとクリスを振り返った嵯峨がそういった。くわえるタバコの先がかすかに揺れていた。さすがにポーカーフェイスの嵯峨も緊張しているようにクリスには見えた。肩を何度かも見ながらクリスを引き連れて食堂を出た嵯峨。そのまま駐屯地の広場に出た二人。出撃は続いており、偵察部隊と思われるバイクの集団が銃の点検を受けているところだった。

「俺の馬車馬ですが……結構狭いですけど大丈夫ですか？」

格納庫の前の扉で嵯峨が振り返る。それを合図にバイクに乗った隊員達が一斉にゲートのある南側に向けてアクセルを吹かして進む。「まあ無理は覚悟の話ですから」

そう言う嵯峨についていくクリス。さらにバイクの部隊のあとには掃討部隊と思われる四輪駆動車に重機関銃を載せた車列が出撃しようとしていた。

「かなり大規模な作戦になるようですね……ほぼ全部隊ですか？」

答えなど期待せずに嵯峨の表情を読もうとするクリス。

「そうですね」

嵯峨ははぐらかすようにそう言うハンガーの中に入った。すでに二式は全機出動が終わっていて奥の嵯峨の四式の周りに整備班員がたむろしているだけだった。

「間に合いましたね？」

その中に白い髪をなびかせるキーラがコックピットの中で作業をしている部下に指示を出している姿がクリスにも見えた。キーラはわざとクリスと目が合わないようにして嵯峨に声をかけてきた。

「誰に言ってるんだよ？キーラ。補助席の様子はどう？」

「ばっちりですよ！元々コックピット内部の重力制御ユニットを搭載する予定の機体ですからスペースは結構ありましたから」

四式のコックピットから顔を出す少年技官から書類を受け取ると
キーラが叫んだ。

「ほんじゃあよろしく」

そう言うのと嵯峨は雪駄を履いたまま自分の愛機まで歩いていく。
クリスは注意するべきなのか迷いながら彼に続いて階段を上った。

「予備部品どうしたんだ？」

「こんなボンコツにそんなもの無いですよ。二式の部品を加工して
充ててるんですから、注意して乗ってくださいね」

キーラはそう言うのとコックピットの前の場所を嵯峨とクリスに譲
った。中を覗きこむと全面のモニターがハンガーの中の光景を映し
出しているのが見える。

「全周囲型モニターですか。こんなものは四式には……」

「ああ、これは二式の予備パーツを改造して作ったんですよ。まあ
明華は良い仕事してくれてますから」

嵯峨はそう言うのとコックピットの前にある計器類を押し下げた。

「どうぞ、奥に」

嵯峨の好意に甘えて完全にとつてつけたと判る席に体を押し込む
クリス。嵯峨も遼州人としては大柄なので体を折り曲げるようにし
てパイロットシートに身を沈める。

「御武運を！」

キーラの言葉を受けた嵯峨は手で軽く挨拶をした後、ハッチを下
げ、装甲板を下ろした。モニターの輝きがはつきりとして周囲の景
色が鮮やかに映し出される。そんな状況を楽しむかのように鼻歌を
交えながら嵯峨はそのままシートベルトをつけた。

クリスも頼りないシートベルトでほとんどスプリングも利いてい
ない硬いシートに体を固定した。

「ほんじゃあ明華によろしく！」

嵯峨はスピーカーを通して叫んだ。黒い四式はゆっくりと格納庫を出る。

「それじゃあ行きますか！」

格納庫の前の広場に出ると嵯峨はパルスエンジンを始動した。小刻みに機体が震えるパルスエンジン特有の振動。クリスはその振動に胃の中のものに刺激されて上がってこようとするのを感じていた。そして独特の軽い起動音。四式はパルスエンジンの反重力作用で空中に浮かんだ。

「いいんですか？東和の飛行禁止空域じゃないですか、ここは」

「大丈夫ですよ。まあそれほど高く飛ぶつもりは無いですから」

そう嵯峨が言うと機体は加速を開始した。針葉樹の森の上ぎりぎりに飛ぶ黒い機体。朝日を浴びている森の上の空を進む。

「レーザーフラッグもきっちり作動してるねえ。さすが明華の仕事には隙が無いや」

クリスが上を見ると、日本の戦国時代の武将よろしく、笹に竜胆の嵯峨家の紋章を記した旗指物がたなびいているような光景が写った。

「これは目立つんではないですか？」

心配そうに口を出したクリスを振り向いて余裕の笑みを浮かべる嵯峨。

「良い読みですね、それは。もっとも、目立つんじゃなくて目立たせているんですけどね」

そう言うと嵯峨はそのまま峠ではなく目の前の南兼山脈に進路を取った。

「そちらは共和軍の勢力下じゃないですか！」

驚いて前に顔を出そうとするクリスだがシートベルトに阻まれて

止まる。そんな彼を楽しんでいるかのように前を見ずに嵯峨が振り返る。

「そうですよ」

淡々と嵯峨は機体を加速させる。彼が無線のチャンネルをいじると、共和軍の通信が入ってきた。

『未確認機！当基地に向け進行中！数は一！』

『無人偵察機！上げる！前線には対空戦闘用意を通過！』

共和軍の通信が立て続けに響く。まるでそれを楽しむように笑顔でクリスを見つめた後、嵯峨は肩を揉みながら操縦桿を握りなおす。

「さて、共和軍の皆さんには心躍るような挨拶ができそうだねえ。そこでアメリカさんはどう動くか」

前の座席の嵯峨の表情は後部座席のクリスには読み取れない。だがこんなことを言い出す嵯峨が満面の笑みを浮かべていることは容易に想像できた。

「遊撃任務ですか。それにしてもわざわざ司令官自身がやる仕事ではないんじゃないですか？」

そんなクリスの言葉にまた振り返ろうとする嵯峨だがさすがに冷や汗をかいているクリスを見ると気を使おうと思いついたように正面を向き直る。

「陽動つてのは引き際が難しいんですよ。うちの連中は勝ち目の無い戦いをしたことがないですからねえ。下手をすれば相手に裏をかかれて壊滅なんているのも……困るんでね。そこは勝ち目の無い、と言うより勝つ必要の無い戦いの経験者がお手本を見せるが当然ですよ。」

そう言うつと嵯峨はさらに機体を加速させた。Gがかかり、さらにクリスの胃袋は限界に近づいていた。

「熱源接近中……なんだ、無人機じゃねえか」

そう言うのと嵯峨は四式の左腕に固定されたレールガンを放つ。視界に点のように見えた無人偵察機が瞬時に火を噴くのが見える。クリスを驚かせた嵯峨の素早いすべてマニュアルでの照準と狙撃。

「この距離で狙撃用プログラムも無しでよく当てられますね」

「まあ、俺もこの業界長いですからねえ。慣れっつて奴ですよ。まあ次は有人機をあげてくるかな？この近辺だと配備中は97式改つてところですかね」

嵯峨はそう言うとそのまま機体を空中で停止させた。きつと不敵な笑みでも浮かべているのだろう。後部座席で嵯峨の表情を推察するクリス。そして自分に恐怖の感情が起きていることに気付いた。

「大丈夫なんですか？相手も有人機なら対応を……」

「97式はミドルレンジでの運用を重視する先の大戦時の胡州の機体ですよ。多少の改造やシステムのバージョンアップがあったとしても設計思想を越えた戦いをするほど共和軍も馬鹿じゃないでしょ？真下にはいないのは確認済みですからそれなりに距離を詰めてから攻撃してきますよ」

そう言うのと嵯峨は操縦棒から手を離し、胸のポケットからタバコを取り出す。

「すいませんねえ。ちよつと気分転換を」

クリスの返そうとする言葉よりも早く、嵯峨はタバコに火をつけていた。

「さてと、97式改では接近する前に叩かれる。となると北兼台地の基地から虎の子の米軍の供与品のM5を持ち出すか、それともアメちゃんに土下座して最新鋭のM7の出動をお願いするか……どうしますかねえ」

嵯峨はタバコをふかしながら正面にあるだろう敵基地の方角に目

を向けていた。

「北兼台地に向かった本隊の負担を軽くするための陽動ですか。しかし、そんなに簡単に引つかかりますか？」

クリスは煙を避けながら皮肉をこめてそう言った。だが、振り返った嵯峨の口元には余裕のある笑みが浮かんでいる。

「共和国第五軍指揮官のバルガス・エスコバルという男。中々喰えない人物だと言う話ですがねえ。共和軍にしては使える人物らしいですがどうにもプライドが高いのが玉に瑕って話を聞きかじりまして。簡単にアメちゃんに頭を下げるなんて言う真似はしないでしょうね」

「なぜそう言いきれるんですか？」

タバコを備え付けの灰皿で押し消した嵯峨クリスは自分の声が震えているのを押し隠そうとしながらそう尋ねた。

「だから言っただじやないですか。プライドが高いのが玉に瑕だつて。それに今の状況はアメリカ軍にも筒抜けでしょうからどう動いてくるか……さてエスコバル君。このまま俺がのんびりタバコ吸ってるのを見逃したらアメリカさんも動き出しちゃうよー！」

ふざけたような嵯峨の言葉。だが確かに制圧下にある地域で堂々と破壊活動を展開する嵯峨の行動を見逃すほどどちらも心が広くは無いかとはわかる。だが一度に襲い掛かられれば旧式の四式では対抗できるはずも無い。

「同時に出てきたら袋叩きじゃないですか！」

状況を楽しんでいる嵯峨にクリスが悲鳴で答える。しかし、振り向いた嵯峨の顔には相変わらず状況を楽しんでいるかのような笑みが浮かんでいる。

「そうはならないでしょ。少なくとも俺が知っている範囲での俺についての情報。まあ色々とまああることあること書いてくれちゃつて……。俺も数えていない撃墜数とか出撃回数とかご丁寧に……。どこで調べたのかって聞きたいくらいですよ。エスコバルの旦那も俺の相手が務まるパイロットを見繕ってくれるとなると慎重になるで

しようね。アメちゃんも今年は中間選挙の年だ。無理をするつもりは無いでしょう」

そう言っていると嵯峨はそのまま機体を針葉樹の森に沈めた。

「あなたは何者なんですか？一人のエースが戦況をひっくり返せる時代じゃないでしょ！」

嵯峨の自信過剰ともいえる言葉に悲鳴を上げるクリス。振り返った嵯峨の笑みに狂気のようなものを感じて口をつくむ自分を見つけて背筋が凍った。しかし、その狂気は気のせいかと思うほどに瞬時に消えた。そこにいるのは気の抜けたビールのような表情をした人民軍の青年士官だった。

「まあねえ……それが正論なんです……それにしても出てこないねえ。こりゃあ上で揉めてるなあ。仕方ない、こっちから遊びに行つてやるか」

各種センサーに反応が無いのを確認すると軽くパルスエンジンを始動させて森の中をすべるように機体をホバリングさせて進む。嵯峨惟基は百戦錬磨のパイロットでもある。それくらいの知識は持っていたクリスだが、巨木の並ぶ高地を滑るように機体を操る嵯峨の腕前には感心するばかりだった。進路は常にジグザグであり、予想もしないところでターンをして見せた。

「そこ！砲兵陣地ですよ！」

クリスが朝日を受けて光る土囊の後ろに砲身を見つけて叫ぶ。しかし、嵯峨は無視して進む。自走砲、と観測用のアンテナが見える設置されたばかりのテント。嵯峨の四式はあざ笑うかのようにその間をすり抜けて進む。

「なかなか面白いでしょ」

嵯峨は完全に相手を舐めきったかのように敵陣を疾走する。

「後ろ！アサルト・モジュール！」

クリスの言葉は意味が無かった。左腕のレールガンの照準がすでに定まっていた。レールガンの連射に二機の97式改は何も出来ずに爆風に巻き込まれた。

「さあて、エスコバル大佐。ちょっとはまともな抵抗してみてくださいよ」

嵯峨の言葉はまるで遊んでいる子供だった。共和軍は焦ったように戦闘へりを上げてきた。嵯峨はまるで相手にするそぶりを見せずに基地のバリケードを蹴り飛ばした。

「任務ご苦労さん」

そう言うつと右腕に装着されたグレネードを発射する。敵前線基地の施設が火に包まれていった。

「やりすぎではないんですか？」

前進に火が付いて転げまわる敵兵が視線に入る。クリスはこの狂気の持ち主である嵯峨に恐れを抱きつつそう聞いた。

「なに、条約違反は一つもしてませんよ。戦争つてのはこんなもんでしょ？ 従軍記者が長いホプキンスさんはそのことを良くご存知のはずだ」

そう言うつと嵯峨はきびすを返して森の中に向かう。重火器を破壊された共和軍は小銃でも拳銃でもマシンガンでも、手持ちの火器すべてを嵯峨の四式に浴びせかけた。嵯峨はただそんな攻撃などを無視して元来た道を帰り始めた。

「まずはこんなものかなあ」

対アサルト・モジュール装備を一通り潰し終えた嵯峨は吸っていたタバコをコンソール横の取ってつけたような灰皿に押し付けると森から機体を浮き上がらせた。クリスはそこで先ほどまで押さえてきた吐き気が限界に近づいてきたのを感じていた。

「ちよつといいですか？」

「吐かないでくださいよ！今からちよつと寄り道しますから」

相変わらずあざ笑うような顔の嵯峨。彼の言葉に従うように機体を北へ転進させる。クリスに気を使っているのか、緩やかな加速で胃の中のもの逆流は少し止まりクリスはほつと息をついた。

「前衛部隊は峠に差し掛かった頃じゃないですか？」

吐き気をごまかすためにクリスはそう言った。

「まあ、そんなものでしょうね。ですが、あそここの峠は峻険で知られたところでしてね。確実な前進を指示してありますから全部隊が越えるには一日はかかるでしょう」

嵯峨はそう言つと再び振り向く。うつそつと茂る森を黒い四式が滑つていく。向かっている先には北兼の都市、兼天があるはずだとクリスにもわかった。北兼軍閥の支配地域。目を向けた先にはそれほど高い建物は無いものの、典型的な田舎町が広がっていた。

視線を下ろせば畑の中に瓦葺の屋根が並び、その間を舗装された道路が走っている。

「北兼軍総司令部に戻るんですか？」

「いやいや、そんなことで紅茶オバサンとご対面したら『何やつてるんだ！』ってどやされるのがおちですから弾薬補給したらまた動きまますよ」

そう言つと嵯峨は機体を急降下させた。

「嵯峨機！進路の指定を……！嵯峨機！」

管制官の叫び声を無視して強行着陸を行う嵯峨。着いたのは兼天基地。『魔女機甲隊』と呼ばれる周香麗准将率いる北兼軍閥最強の部隊『北援軍』が後衛基地として運用している土地だった。

「やはりこっちは物資も豊富だねえ」

嵯峨は説得をあきらめた管制官から誘導を引き継いだ基地の誘導員にコントロールを任せながらつぶやいた。

「あれはM5じゃないですか？」

片腕が切り落とされ、コックピット周りに被弾したM5がトレーラーに乗せられて運ばれていくのが見える。

「アサルト・モジュールは貴重だからね。回収したんでしょう。それにしても贅沢な戦争してるよなあ、周のお嬢様の部下達は」

たしかに整備された管制塔付きの基地。どちらが軍閥の長かわからない有様だ。そんな基地を誘導されるまま倉庫に向かう嵯峨の四式。修理を終え、前線に送られる胡州の輸出用アサルト・モジュールの一式が並んでいる。几帳面に並べられたミサイルやレールガンの数は嵯峨の貴下の部隊の比ではない。

「嵯峨中佐。補給ですか？」

モニターに映し出されたのはプラチナブロンドの女性オペレーター。たぶん彼女もセニア達と同じ人造人間なのだろう。ピンク色の髪に違和感を感じるクリス。

「ああ、早くやってくれ。お客さんを待たすのは趣味じゃないからな」

そう言うつと嵯峨は装甲版とコックピットハッチを跳ね上げた。北の遼北国境から吹きすさぶ冷たい風が心地よく流れ、クリスはそれまで耐え続けていた吐き気から解放されることになった。

「トイレ行つといたほうがいいですよ。ちょっと次に仕掛ける時は敵さんも腹をすえて来るでしょうから」

どこまでも舗装された基地の中央に着地して平然とそいいながら誘導員の指示でコックピットから降りた嵯峨。そのタラップのそばに秘書官らしい青い髪的女性を引き連れた女性士官が歩み寄ってきた。黒い髪が流れるように強風の中たなびいている。肩の階級章を見れば金のモールがついている。將軍クラスの階級であることはすぐにわかった。

「惟基！何のつもりでこんなところに来たの！」

表情は怒ってはいない、むしろ感情をかみ殺したような無表情を浮かべている。周香麗准将。現在は北兼軍閥の総司令官に君臨する彼女は、元はこの崑崙大陸北部を領有する遼北人民共和国人民軍第二親衛軍団司令官であった。遼北の政府における権力闘争で父、周喬夷軍務長官が事実上の幽閉状態に陥ると部下を伴ってこの北兼軍閥への亡命を求めた。

周喬夷は本名がムジャンタ・シャザーン。遼南帝国女帝ムジャンタ・ラスバの次男であり、嵯峨惟基にとっては叔父に当たる人物である。ある意味目の前で雑談している二人が妙になじんだ様子なのも従兄妹同士ということもあるのだろうとクリスは思った。

「タバコが吸いたくてね。ホプキンスさんはタバコをやらないから機内じゃあ吸えないじゃないの。それに香麗にも紹介しておいた方が……」

「まあいいわ。どうせあなたに何を言っても聞かないでしょうから」

「いやあ、そんなつもりは無いんだけどね」

そう言つと嵯峨は胸のポケットからタバコを取り出そうとする。

「基地内は禁煙よ。ちゃんと喫煙所で吸いなさい」

「硬いこと言うなよ」

「それが組織と言うものです！」

ようやく怒りが香麗の表情に浮かんできた。嵯峨はタバコをあきらめるとそのまま補給が始められた愛機の方に歩き出した。

「あの……トイレは？」

クリスの質問に指で答える香麗。クリスはそのまま彼女の指差した方に駆け出した。噂どおりだった。

『魔女機甲隊』

遼北人民共和国建国の父と呼ばれる遼北の首相周喬夷の一人娘、周香麗はアサルト・モジュールパイロットとしては天才と評される人物だった。先の大戦時、胡州の勢力化である濃州アステロイドベルトの戦いで宇宙艦隊の半数を失って遼州、崑崙大陸北部に押し込められた遼北は英雄を必要としていた。

それが彼女率いる『魔女機甲隊』だった。第二次世界大戦におけるロシア空軍の『魔女飛行隊』から取ったその異名は、エースの香麗の活躍で遼州にその名を轟かせた。戦後、接収した人造人間製造プラントで造られた人造人間達がこの部隊に参加し、一個師団規模に拡大され、遼北を代表する部隊となった。

しかし、遼北で唐俊烈国家主席と父である周喬夷との軋轢が生まれると、その勇名は仇となった。解散、そして幹部の肅清が行われるとの噂に、香麗は部下たちの安全を図るために従兄の嵯峨がいる遼南に亡命を決意した。そうして北兼軍閥は人民軍、共和軍、花山院軍閥、南都軍閥、そして東モスレムと言った割拠する軍閥に伍する地位を得ることとなった。

女性指揮官の厳しい視線から逃れて走り去ったクリスの前に立派過ぎるアサルト・モジュール専用のハンガーには大きな入り口の女子トイレと、申し訳程度の男子トイレがあった。クリスは用を済ませるとそのまま辺りを見回してみた。パイロットスーツを着ているのは例外なく女性パイロット達であった。たまに整備隊員や連絡将校などに男性がいるものの彼らは非常に居づらそうにしている。クリスもまたそそくさと嵯峨の四式の前まで来た。

「惟基ならタバコを吸いに行つたわよ」

香麗はベンチに腰をかけていた。その前にはテーブルが置かれ、従卒の長身の女性将校に紅茶を入れさせていた。

「まあ、おかけになつたらどう？今の情勢をアメリカ人記者がどう見ているか意見も聞きたいですし」

静かに紅茶の匂いを嗅ぎながら切れ長の目から鋭い視線がクリスに伸びる。

「そんな、私の意見が合衆国の意見だとは……」

「そういうことでは無いのよ。あなたのこれまで遼州を取材した感想を聞きたいわけ。ああ、紅茶はお飲みになる？」

「いえ、結構です」

残念そうな顔をしながら紅茶を入れていた赤い髪の将校を下がらせた。

「それは好奇心、ですか？」

「そうとも言えるし、そうでないとも……。見たでしょ？惟基の部隊の様子は」

無表情に見えた香麗がようやく笑みをこぼした。きついイメージの美女と言う感じが少し抜けてきた。

「まあ、かなり変わった人ですね、嵯峨中佐は。あの人は外務武官や憲兵隊などの後方任務上がりなのになつたく規律と言うものを気

にしていけないのは興味深かったですね」

「確かにそうかも知れないわね。一応あれでも私の従兄だから、子供の頃一回だけ会ったことがあるのよ。当時、惟基は遼南帝国の皇太子。はじめてみた時はまるで女の子みたいと思ったわよ」

「あの人がですか？」

クリスは意外に思った。どちらかといえば嵯峨は下品な行動が目立つ人物であることは一日彼の近くにいればわかる。

「青白い顔をして、大人の顔色ばかり窺っている変な子供。でも話してみれば彼がそうだった理由もわかったのよ。生まれて初めて会った同じくらいの年の子供が私だったんですって。確か私は十歳くらい……彼は二歳上よね。弟のバスパにも会うことを許されず、一人で御所で勉強ばかりしてたって言ってたわ」

「青い顔でシャイな嵯峨中佐ですか。想像もつきませんね」

「でしょ？それで……」

「あの一。香麗さん。何話してるんですか？」

いつの間にか香麗の後ろに立っていた嵯峨が声をかけた。

「別にいいじゃないの。昔話よ」

香麗は微笑を浮かべながらそう言っていると再び紅茶のカップを手にとった。

「それにしても立派なもんだねえ」

嵯峨は一糸乱れぬ更新を続ける前線に向かう歩兵部隊の行進を眺めていた。

「それ、皮肉？」

鋭い視線を投げる香麗。嵯峨は頭を掻きながらごまかそうとしていた。

「もうそろそろ終わらないかねえ、補給」

「なんならついでにそちらの連隊までの護衛もつけてあげましょうか？中佐殿」

紅茶を飲み終え立ち上がる香麗。嵯峨は走ってきた女性の整備員から伝票を受け取っていた。

「じゃあ、いずれこの借りは……」

「気にしないでいいわよ。いずれ倍にして返してもらおうから」

そう言つと嵯峨は四式に向かつて歩き始めた。

「紅茶勧められませんでした？」

嵯峨はコックピットに上るはしごに手をかけるとクリスにそう言った。

「ええ、それが何か？」

「いやあ、香麗のすることは誰でも同じだねえ。もう少しひねりが欲しいな」

そう言つと嵯峨はコックピットに座り込んだ。クリスもその後ろに座る。

「ちょっと荒い操縦になりますけど勘弁してくださいよ」

そう言つと嵯峨はパルスエンジンに火を入れる。甲高いエンジン音が響く。そのままコックピットハッチと前部装甲版が降り、全周囲モニターが光りだす。

「さてと、お休みしてた間に敵さんはどう動いたかな？」

そう言つと嵯峨は機体を浮上させた。高度二百メートルぐらいの所で南方へ進路を取り機体を加速させる。明らかにはじめの出撃の時とは違い、重力制御コックピット特有のずれたような加速感が体を襲つ。

「ちよつとここからは乱暴にしますから注意してくださいよ！」

そう言つと森林地帯に入った機体を森の木すれすれに疾走させる。迎撃するために出撃したらしい97式改が拡大されてモニターに映る。

「あらあら。結構てぐすね引いて待つてるじゃないの。まあ、星条旗の連中はお見えじゃないみたいだけどな」

そう言つと嵯峨は朝とは違い狙撃することなく、機体を森の中に降下させ、そのままホバリングで敵部隊へと突入していった。

「なっちゃんねえ。まったくなっちゃんねえな！」

突然の黒い機体の襲撃に耐えられないというように寄り合う敵97式改に、嵯峨は容赦なく弾丸を浴びせる。次々と火を噴く敵。眼下には恐怖し逃げ惑う敵兵が見える。

「なんだよ……逃げるの？もうちょっと踊ってくれないとつまらねえな」

嵯峨はわざと敵のミサイル基地の上空に滞空する。当然のように発射されるミサイル。それを紙一重でかわすと、ミサイル基地に四式の固定武装であるヒートサーベルをお見舞いする。ミサイルを乗せた車両が一刀両断される。担当の敵兵は泣き叫びながら爆発から逃れようと走り始める。

「これじゃあまるで弱いもの虐めだ。感心しないねえ」

そう言うミサイル基地の司令部があると思われるテントに榴弾を打ち込む。火に包まれる敵陣地。そこで急に嵯峨は機体を上空に跳ね上げる。徹甲弾の低い弾道が、かつて嵯峨の機体があった地点を低進してバリケードを打ち抜く。

「どこまでも同じ場所にいる？そんなアマチュアじゃないんだよ！」

嵯峨はすぐさま森の中にレールガンを撃ち込んだ。三箇所のアサルト・モジュールのエンジンの爆発と思われる炎が上がる。

「まあ、こんなものかね」

クリスはこの戦闘の間、ただ黙ってその有様を見つめていた。共和軍の錬度は高いものではないことは知られている。特にこうして最前線の穴埋めに回されてきているのは親共和軍の軍閥の予備部隊か、金で雇われた傭兵達である。一方、嵯峨は先の大戦で対した遼北機動部隊から『黒死病』と異名をとったエースの中のエースである。はじめから勝負は見えていた。

「確かにこれは弱いものいじめ、もつと悪意を込めて言えば虐殺です
すね」

皮肉をこめてクリスがそう言う。嵯峨は振り返った。その狂気と
獣性をはらんでいるような鈍く光る瞳を見て、クリスは背中に寒い
ものが走るのがわかった。

「そう言えば腹、減ったんじゃないですか？」

不意に嵯峨がそんなことを口にする。敵前衛部隊は嵯峨一機の働
きで壊滅していた。反撃する気力すらこの前線部隊の指揮官達には
残っていないことだろう。

「まあ、すこしは……」

「敵支援部隊が到着するまで時間がありそうですから、その小山
の下でレーションでも食べますか」

そう言うつと嵯峨はそのまま先ほど徹底的に叩きのめしたミサイル
基地の隣の台地に機体を着陸させた。

「支援は出来ない?!じゃあ何のためにあなた達は遼南に来たんですか!」

そうスペイン語訛りの強い英語で叫んだのは、遼南共和国西部方面軍区参謀バルガス・エスコバル大佐だった。スクリーンに映し出されたアメリカ陸軍遼南方面軍司令、エドワード・エイゼンシュタイン准将はため息をつく、少しばかり困ったように白いもの混じる栗毛の髪を掻き分けた。

「我々は遼南の赤化を阻止するという名目でこの地に派遣されている。そのことはご存知ですね?」

「だから人民軍の手先である北兼軍閥を叩くことが必要なんじゃないですか!」

エイゼンシュタインの曖昧な出勤拒否の言い訳を聞いていると、さすがに沈黙を美德と考えているエスコバルも声を荒げて机を叩きたくもなかった。

「単刀直入に言いましょう。我々は嵯峨惟基と戦火を交えることを禁止されている。それは絶対の意思、国民の総意を背負った人物からの絶対命令です。いいですか?これはホワイトハウスの主の決定なのです。つまり、我々に黒いアサルト・モジュールとの交戦は決してあつてはならない事態と言ふことになります」

聞き分けの無い子供をあやすようなその口調は、さらにエスコバルの怒りに火をつけた。

「つまり、魔女共を潰すことならいくらでもやるということですか?」

大きく息をしたあと、エスコバルはこの言葉を口にするのが精一杯だった。

「そちらは任せていただきます。現在アサルト・モジュール二個中队を魔女共粉碎のために投入する手はずはついている。さらに東モ

スレムの我々に協力的なイスラム系武装勢力にも十分な支援を行う準備もしています！」

エスコバルの怒りに飲まれないうちにと注意しながら画像の中のエイゼンシュタインは額の汗をハンカチで拭った。

「そちらの方は期待していますよ」

「嵯峨惟基には賞金がかかっています。撃墜した際にはぜひ……」
エイゼンシュタインの言葉が終わる前にエスコバルは通信を切った。

「なにが撃墜した際だ！嵯峨惟基との戦闘は禁止されているだ？グリンコはいつからそんな腰抜けになっただんだ！」

エスコバルはグリンコと言うアメリカ兵の蔑称まで叫ぶと、怒りのあまり高鳴る胸を押さえながら執務室の机に腰掛けた。

「あらー。これはだいたい話が違うんじゃないですか？」

ソファアから声が聞こえた。エスコバルは再び胸を押さえながら立ち上がった。そこには遼南共和軍とは違う東和陸軍風の夏季戦闘服に身を包んだ若い男が風船ガムを膨らませながら横になっていた。北兼台地防衛会議を終えたエスコバルにつれられてこの会議でアメリカ軍からの支援を受けるところを見せ付けてやろうと意気揚々とエスコバルがつれてきた男。

「吉田君。グリンコの連中が怯えて……」

「そう言う問題じゃないでしょ？共和国とアメリカ軍は一体となつて北兼台地の菱川鉦山の施設を防衛してくれるという話だから我々は共和国軍に協力してきたわけだ。それが……はあ」

ため息と挑戦的な目つきに再びエスコバルは怒りを爆発させる。

「戦争屋が指図をする気か！」

エスコバルは息を荒げながら再び机を叩いた。ガムを噛む将校。

吉田俊平はそんなエスコバルを同情と侮蔑の混じった目で見つめていた。

「戦争屋だからですよ。我社の目的はあくまでも北兼台地の鉱山群と、それに付随するインフラの警備。これまでの協力体制はアメリカ軍と共和軍の協調体制が保たれていることを前提に契約された内容を履行しているに過ぎないわけですが。現在そのアメリカ軍との共同作戦に問題が発生している以上……」

そう得意げに言葉を続ける吉田はエスコバルの歪んだ口元を見て言葉を呑んだ。エスコバルは吉田の表情を観察している。

『なんだ、コイツの顔は？まるで餓鬼がゲームを楽しんでいるみたいじゃないか！』

エスコバルはそんなそれを口にするつもりは無かった。菱川警備保障。遼州だけでなく地球のアフリカや中東の紛争地帯にまで部隊を派遣する大手民間軍事会社。その一番の切れ者として知られる吉田俊平少佐。相手が悪すぎることぐらいエスコバルにもわかった。

「我社は現状では本来の業務である鉱山とインフラの警備に全力を割かせて頂きます。防衛会議の我々の協力事項はすべて白紙に戻させてもらいますのでご承知おきを」

そう言つと吉田は立ち上がった。呆然と彼を見送るエスコバル。

吉田は部屋を出るとドアの前で待っていた副官の中尉を呼びつけた。

「やはりアメリカ力は嵯峨との直接対決を避けましたか」

吉田は頷きながら満足げに笑みを浮かべた。

「良いじゃないか。これで懸賞金を独占できるんだ。せいぜい共和軍には我々が嵯峨の首を取るためのお膳立てに奔走してもらおう」

そう言つて歩き始める吉田に端末を示して見せた副官。

「また懸賞金が上がったという連絡が入りましたよ」

その言葉に吉田はにんまりと笑顔を作った。

「それはいい！それと各部隊員には通達しておけ。黒いアサルト・モジュールには手を出すなとな。あれは俺の獲物だ」

「了解しました。少佐の思惑通り動きますよ、我々は」

それなりに実戦をくぐってきたのだらう、頬に傷のある副官はそう言つとにやりと笑つて見せた。

「黒死病だか人斬りだか知らねえが、所詮は青っ白い王子様の成れの果てだ。それほど心配する必要はないだらう？」

そう言つと目の前で談笑していた共和軍の将校を避けさせて二人は進む。北兼台地の中心都市アルナガの共和軍本部。そのビルの中は黒いアサルト・モジュールが現れたということで、吉田が会議に出席するために三時間前に到着した時からの喧騒が続いていた。

「しかし、共和軍はあてになるのですか？」

「まあ、ならないだらうな。そのことは端から織り込んで俺がここにいるんだらう？ 嵯峨惟基。いや、ムジャンタ・ラスコー！ 今度こそ奴の首は俺が取る」

そう言つと吉田は晴々とした顔で共和軍本部の建物をあとにした。

「はいはい！お湯が沸きましたよー。カップを出してくださいな」
歌うようにそう言うつと嵯峨は慣れた手つきでバーナーの上の鍋を持ち上げた。小型のコンロを扱うのに慣れているその手つきにエリートとして育ってきたはずの嵯峨の器用なところにクリスは関心させられていた。

「ずいぶん慣れた手つきですね」

クリスはレーションの袋に入っていた折り畳みのコップを差し出す。中にはインスタントコーヒーが入っており、お湯が注がれるにつれてコーヒーの香りが辺りをただよう。

「まあ、やもめ暮らしも今年で7年目になりますからね。ホプキンスさんは名門の出でしょ？誰かいい人いませんかね」

そう言うつと嵯峨はアルミ製のマイカップに味噌汁の素を入れた。
「そんなこと必要ないんじゃないですか？嵯峨公爵家の奥方となればそれこそ……」

「王侯貴族なんか生まれれるもんじゃありませんよ。ただ面倒なだけですわ。それに家柄で見られるつてのはどうにも性に合わなくてね」

嵯峨は十分に湯を注いだカップを箸でかき混ぜ、弁当として持ってきた握り飯四つとタクワンを食べ始めた。

「しかし、ここは安全なんですか？」

クリスは辺りを見回した。針葉樹の深い森の中。四式は森に潜んでいる形だが、下草のほとんど無い森の下は百メートル以上は視界が利く。もしここに歩兵部隊などが投入されれば勝負にはならないだろう。

「心配なのはわかりますがね。混乱している共和軍に、それほど気の効く前線指揮官がいるとは思えないですがねえ」

そう言うつと嵯峨は握り飯にかぶりついた。

「さつきから不思議に思っていたんですよ。あなたのその余裕のある態度はどこから来るもののですか？最初の一撃。あれだっけいから共和軍の指揮官が無能でも、もう少しましな対応の仕方があったのにまるで混乱しているかのような泡を食つての反撃じゃないですか。さつきだっけ……」

「混乱しているかのように？違いますね。混乱させているんですよ。そう言つと嵯峨は不敵な笑みを浮かべたあと、カップから味噌汁を飲んだ。

「俺の下河内連隊時代からの部下で大須賀と言つ技官がいますね。現在は成田と言つ名前の胡州浪人と言つことで共和軍の通信将校を務めているわけですが、まあそこまで言えばわかるでしょ？」

嵯峨は二つ目の握り飯を手に取る。

「通信妨害？」

「そんな甘い人間に見えますかねえ俺が。通信器機にウイルスを仕込んだ上で、さらに作戦部にシンパを作つて上層部の指揮命令系統をかく乱。そして、前線部隊の補給物資の要求リストを改ざんして拳銃の弾の口径さえまちまちで使い物にならない、今の共和軍の最前線はそんなありさまにしておいたんですよ。戦争と言つものは始める前にはそれなりの準備をしておくものですよ。」

得意げに話し続ける嵯峨。クリスはレーシヨンのピーナツバターをクラッカーに塗りながら聞きつづける。

「最初から勝つ戦いをしていたわけですか」

「あのねえ、戦争つてのは勝てるからやるんですよ。まあ、俺も人のことは言えませんが」

そう言つと嵯峨はタクワンをぼりぼりと齧りだした。

「なるほど、しかし、先ほどの戦闘での撃墜数は5機を越えていましたね。見事なものですよ」

そう言ったクリスの目を鋭い嵯峨の視線が射抜いた。

「あのねえ、ホプキンスさん」

感情を押し殺すように一語一語確かめながら、真剣な表情の嵯峨が話し始めた。

「撃墜数を数える？自分の殺した人間の数を数えて何になるんですか？あいにく俺にはそんな趣味はないですよ」

「はあ……」

初めて直接的な嵯峨の殺気を感じた。いつもの皮肉屋で自虐的な笑みを浮かべている中年男の姿はそこには無かった。

「さてと、腹も膨れたしちょっと仕事をしようかねえ」

そう言うつと嵯峨は脇に置いてあった通信端末を開いた。正面に展開される画像。まずそこには地図が映し出された。クリスも自然とそれを覗き込んでいた。

「合衆国陸軍が移動していますが……この方向は？」

「三日前に共和軍から香麗さんが奪い取った湖南川沿岸地域ですね。まあ順当な作戦ですね。この地域を押さえれば東モスレムへの街道が開ける。当然アメちゃんとしてもこの地域の確保は最優先事項というわけですか」

嵯峨はそう言うつと後方の補給部隊の動きをあらあわすグラフを展開させた。

「この情報も大須賀さんの絡みですか？」

「まあ、大須賀は元々楠木の部下ですからね。大須賀経由の話もあります。それ以外に楠木が築いたネットワークだとかいろんな情報をまとめてあるんですわ。まあ俺にも一応は遼南帝国の末裔としてのコネもあるもんで」

そう言つと嵯峨は携帯端末をいじりながらタバコを取り出し火をつけた。

「なるほどねえ。東和の支援物資の共和国軍への移送が停止されたか。足元がお留守になつてるじゃないですかエスコバル大佐」

「バルガス・エスコバルですか？確か共和国軍西部方面軍参謀長でしたね」

クリスは携帯端末上の画面に映された画像を見つめていた。遼南共和国、ゴンザレス大統領の腹心中の腹心であり、その残忍な作戦行動から王党派や人民軍を恐れさせた非情の指揮官。

「そして非正規戦闘部隊の通称バレンシア機関のトップでもある男ですな」

嵯峨の言葉は衝撃的だった。バレンシア機関。實在さえ疑われているゴンザレス大統領の私兵。不穏分子の抹殺や外国人ジャーナリストの拉致などを行っているとされる特殊部隊である。その過激な活動に、資源輸出条約の締結のために訪問した使節団が各方面からの圧力に負けてその存在の確認を求めた時にはゴンザレス大統領は『そのような機関はわが国には存在しない』と明言した暗殺組織。

「あちらも本気。こちらも本気。まああれですな、根競べですよ。そう言つと嵯峨は味噌汁を飲み干した。

「やはりこちらの行動はある程度予測してますか」

嵯峨はそう言うのと皮肉めいた笑みを浮かべる。現在を表す地図には、彼の部隊の侵攻している廃村を示す星に向かい、エスコバル貴下の部隊が進撃を開始していた。

「やばいなあ」

そう言うってタバコをもみ消す嵯峨。クリスはその規模が中隊規模であることを確認しながら不思議に思った。

「勝てないことは無いですよ。まあ、間違いなくうちの馬鹿共が勝つでしょう。でもそこから先が問題なんだよね」

またタバコに手を伸ばし火をつける。

「がら空きの拠点を取るのに消耗は避けたいという訳ですか」

「まあね。それに部下が死ぬのは散々経験しましたが、どうにも慣れなくてね」

嵯峨はそう言うのと携帯端末を閉じた。クリスも立ち上がる。風が止み、高地独特の突く様な強い日差しが気になる。

「まあ、こっちはこれくらいにして援護に回りますか」

そのままタバコをくわえて伸びをする嵯峨。彼は四式の陰に向かって歩き始めた。

「さすがに日差しは堪えるねえ、帽垂でもつけるかな」

そんな言葉を言いながら準備が出来たクリスと共に四式のコックピットに乗り込んだ嵯峨。

「しかし、ここからだとかかなり距離がありますよ。低空飛行で行くんですか？」

「さすがにあれだけ派手にやったんだ、東和の戦闘機が警戒飛行しているでしょう。まあ少し時間は食いますが、ホバリングでなんとか間に合っはすですから」

そう言うのとアイドリング状態だった四式のエンジンを本格始動さ

せる。パルス推進機関の立てる甲高い振動音がクリスの耳を襲った。
「それじゃあ行きますか」

クリスがシートベルトをしたのを確認すると嵯峨は加速をかけた。森が続く。針葉樹の巨木の森が。嵯峨は器用にその間を抜いて四式を進める。

「まるでこういう土地で戦うことを前提にして造られたみたいですね」

「そうなんじゃないですか？少なくとも四式はこういう使い方が向いていますよ」

嵯峨は軽口を言いながらさらに機体を加速させた。

「ずいぶんと森が深くなりましたね」

クリスは退屈していた。食事を済ませ、こうして森の中を進み続けてもう六時間経っている。時折、嵯峨は小休止をとり、そのたびに端末を広げて敵の位置を確認していた。敵は北兼台地の鉾山都市の基地に入り、動きをやめたことがデータからわかった。

「なるほど、あちらも持久戦を覚悟しましたか」

そう言って笑った嵯峨だが、正直あまり納得しているような顔ではなかった。

「あと三十分で合流できそうですね」

嵯峨はそう言うのと吸い終わったタバコを灰皿でもみ消した。

「この森には、人の手がまるで入っていないみたいですけど。なにかいわれでもあるのですか？」

クリスは変わらない景色を眺めながら、自分用の端末で今日の出来事を記事にまとめ終わると嵯峨にそう尋ねた。

「遼南王家にはこんな言い伝えがありますね。初代女帝ムジャンタ・カオラが地球人移民達と独立のために立ち上がった時、この森に眠っていた騎士の助けを借りて戦ったと。その騎士はまるで幼い少女のような姿でありながら、一千万の地球軍に立ち向かい勝利した。独立がなりカオラが即位すると、騎士は再びこの森に帰り長い眠りについた。まあ良くある与太話ですよ」

そう言って皮肉めいた笑いを浮かべる嵯峨。

「なるほど、そんな話があっても不思議ではない森のたたずまいです」

感慨深げにモニターの外を見るクリス。

「なあに、実際今じゃあ『悪魔の森』と呼ばれて遊牧民も近づかない秘境ですよ。共和軍の兵隊も本音はここに入り込みたくない……！」

嵯峨は不意に機体に制動をかけた。

「なんですか？」

「敵さん動きましたね。相手も頭を使っただってことですか？」

そう言うとはやく四式のサーベルを抜いてモニターに地図を表示させる。

「この動き、新手だな。しかも配置は悪くない。それなりの手だれが隠れてたってわけですか」

嵯峨はしばらく敵の動きを待っていた。地図上のレーダーで捕らえた敵アサルト・モジュールの他に北兼軍の機体を示す笹に竜胆のマークが三つ動いている。

「セニア、御子神、柴崎か。対して相手は七機。行くしかないか！」

そう言うと嵯峨は一番手前の敵を示すランプの方へと機体に向けた。

「プリフィスの。大丈夫か？」

嵯峨はいきなりセニアへの通信画面を開いた、驚いたような顔をするセニア。

「いきなり通信入れないでください！」

声は驚いているようだったが表情にその面影は無かった。クリスはやはり彼女が作られた存在であることを確認する。

「悪かったねえ。本隊はどうした？」

嵯峨は戦闘中だというのにまたタバコを取り出して口にくわえた。「本隊は現在拠点予定の村の下にある保養所跡に本部を建設中です」

「そうか、ならいい。敵さんも狙いは良いんだが！」

そう言うつと嵯峨はパルスエンジンを全開にして機体を飛び上がらせる。隠密侵攻中であつた敵の胡州からの輸入アサルト・モジュール一式は完全に裏をかかれる形になり、レールガンの掃射の煙の中に飲み込まれて火を噴いた。

「隊長！俺達の分も取つといてくださいよ！」

「柴崎。お前なあ、一機でも敵を倒してからその台詞吐けよ！」

地図の上の御子神の機体が敵編隊の左翼に接触したのを示している。嵯峨に気づいた御子神の表情が変わつた。それを合図に柴崎とセニアも緊張したような表情を浮かべていた。

「ホプキンスさん。これからちよつと無茶しますんで！」

そう言つて着地した嵯峨の四式。一気に一番近い二機の一式への攻撃を開始する。強襲型の装備を積んでいるらしく、ミサイルの雨が降り注いだ。

「それは織り込み済みだ！」

嵯峨は制動をかけると、いったん森の中に引いた。

「火力で押す？それにしてはさっきのミサイルの使用は命取りだつ

たな」

爆炎で見失った嵯峨を確認しようと飛び上がった一式の強襲仕様。しかし、嵯峨のレールガンはそのコックピットに照準をつけていた。「さよならだ！」

次第に赤みを帯びていく空に閃光が走る。一式のコックピットが貫かれて、そのまま大地に墜落していった。後ろに回り込もうとホバリングして森を走る標準装備の一式。嵯峨はそのままレールガンの銃口を向け、そのわき腹にレールガンを叩き込んだ。一式はエンジンを破壊されて炎に包まれる。

「隊長！支援お願いします！御子神が！」

「セニア、そんなに焦りなさんな。まだ後方に一機動いていないのがある、それをやれ」

そう指示を出すと、三機の敵機に苦戦している御子神と柴崎の援護に回った。

「あいつ等も戦闘経験は積んでるんだがねえ」

嵯峨は一人つぶやくと火線の行きかう戦場へと低空を突っ切りながら進む。

「みんなあなたのように戦えるわけじゃないでしょう」

そんなクリスの言葉に、皮肉のこもった笑みで振り返る嵯峨。

「また、無理させてもらいますよ！」

火の付いていないタバコをくわえながら、嵯峨は敵の背後に着地した。共和軍のマーキングを取ってつけたような塗装の一式は背後に一機、警戒のために残してあった。

「コイツはアメリカ組だな！」

そう言うつと嵯峨はタバコを手にとつて胸のポケットに戻した。格段に動きの違う三機の一式。嵯峨の『アメリカ組』の意味は米軍との軍事交流でアメリカでの訓練を経験したエースと言うことなのだろうとクリスは推察した。

動きだけではなく、嵯峨の激しい機動を持つてしても死角を取ることが出来ない。嵯峨の四式はフレーム以外の部品がすべて換装されているとはいえ、先の大戦末期に開発された古い機体である。胡州が輸出用に5年前に開発した一式に比べれば性能面の差は歴然としていた。

「おい！御子神！もつと一機に火線を集中しろ！」

「しかし！このままでは柴崎が！」

「浩二！テメエは下手なんだ！逃げて囮になれ！」

嵯峨はそう言いながら後方に陣取った指揮官機らしい一式の射撃に耐えていた。

「セニア！まだそつちは片付かないか！」

「動きは止めました！どうにか……うわ！」

今度は明らかに驚いた表情のセニア。クリスも突然の出来事に目

を見開く。

「ブリフィス大尉！」

御子神の叫び声が響く。

「動きを止めても油断するな！下手に情けをかければ死ぬぞ！」

嵯峨はそう言つと、背後に気配を感じたように振り向いた敵一式に強襲を掛けた。虚を突かれた一式はレールガンを向けようと振り返つたが、それは遅すぎた。嵯峨の四式のサーベルがコックピットに突き立てられる。

「上には上がいるんだ。あの世で勉強しな！」

一式はそのまま仰向けに倒れる。嵯峨は地図を見た。明らかに残り二機の敵の動きが単調になった。

「御子神。そいつ等お前にやろうか？」

「大丈夫です！柴崎！俺に続け！」

御子神と柴崎の二式が遅れていた共和軍の一式を捉えた。

「じゃあ、残りは俺が食うかねえ」

そう言つと嵯峨は敗走する一式の到達予測地点へと愛機を進めた。

「中佐！弾が切れました！」

柴崎の声が響く、思わず頭に手をやる嵯峨。

「お前、バカス力撃ち過ぎなんだよ！もっと狙って撃て。御子神、援護しろ！敵さんも疲れてきているはずだ」

嵯峨はようやく捉えた敵の一式を追う。森の色と同じ色の二式が、灰色の一式に火線をあわせた。

「馬鹿！正面から食らわしても無駄だ！動いて側面を取れ！」

嵯峨の言葉に不器用に反応する御子神の二式。

「セニア・ブリティス！敵機狙撃ポイントを確保しました！」

「よし！喰っちまえ！」

嵯峨の言葉と共に、嵯峨から逃げることで精一杯の一式の背中をロングレンジでのレールガンの火線が貫いた。火に包まれる僚機を見て背を見せて逃げ出す一式。

「追いますか？」

「御子神の。お前の目は飾りか何か？レーダーを見る」

クリスも地図に目を移す。そこには北兼軍以外の所属を示すランプが点滅していた。

「残存戦力？」

クリスの言葉に嵯峨が振り返り笑みを浮かべた。

「ホプキンスさん。共和軍もこの森には手を出していないという報告は受けてるんですよ」

殺気の消えた嵯峨の顔がにやりと笑みを浮かべてクリスの前にあった。

「柴崎！お前が一番近い。確認しろ。それとセニアと御子神はバツクアップにまわれ。俺はそのまま距離をとって追走する」

嵯峨の言葉に不承不承従う柴崎。

「どこかの工作部隊ですか？」

「アサルト・モジュールで潜入作戦ですか？アステロイドベルトならいざ知らず、ここは地上ですよ。それに偵察のためだけの俺達の目に触れないでの高高度降下なんて突飛過ぎますよ。上を警戒飛行している東和軍の偵察機や攻撃機もそれほど無能ぞろいじゃないでしょう……」

「うわ！」

嵯峨の言葉が終わらないうちに、柴崎の悲鳴が四式のコックピットに響いた。

「柴崎！」

「御子神焦るな！柴崎、状況を報告しろ！」

地図の上で所属不明機と柴崎の二式が重なっている。嵯峨はすぐさま加速をかけた。

「食いつかれました！この馬鹿力！コックピットを潰す気か！」

森のはずれ、二式が見たことも無い白いアサルト・モジュールに組み付かれている様がクリスの目に飛び込んできた。

「中佐！助けてくだ……うわ！」

柴崎の二式の右腕がねじ切られる。不明機の左手は二色のコックピットの装甲版を打ち破ろうとしていた。

「御子神！組み付け！」

嵯峨はそう言つとさらに白いアサルト・モジュールへと接近した。

着陸した御子神機がレールガンを構えながらじりじりと柴崎機に組み付いている白いアサルト・モジュールに近づく。

「馬鹿か！発砲したら柴崎に当たる。とつとと組み付け！セニアもついてやれ！」

嵯峨の言葉にレールガンを捨てた御子神の二式が白いアサルト・モジュールに組み付いた。しかし、白い機体は止まるうとしない。御子神機を振りほどき、さらに柴崎機のコックピットに右腕を叩きつける。

「セニア、手を貸してやれ！いざとなったら俺も組み付く」

振りほどかれた御子神機、それにセニアの機体が絡みつくときさすがに動きが鈍くなる。

「助けてください！嵯峨中佐！」

相変わらず涙目で懇願する柴崎。サーベルの届くところまで来た嵯峨はそのまま白い機体見つめていた。その圧倒的なパワーはクリスの想像を絶していた。これほどの出力を出せるアサルト・モジュールなど聞いたことが無かった。

「ちよつと待つてる！」

嵯峨はそう言うとき白いアサルト・モジュールの右足の付け根にサーベルを突き立てた。白い機体はバランスを崩し倒れる。絡み付いていた御子神、セニアの機体がもんどりうって倒れこんだ。

「おい！柴崎。生きてるか？」

「ええ、まあ……イテエ！」

柴崎の悲鳴が響く。ばたばたとバランスを崩して逃げようとする白いアサルト・モジュール。セニアと御子神は関節を潰しにかかる。だが、抵抗は衰えるようには見えなかった。そこに増援として森の中からホバー二機が現れた。

「海上、少し待て。とりあえず御子神とセニアがそいつを拘束する

まで……」

タバコに火をつけた嵯峨の言葉が切れる前に白いアサルト・モジュールのコックピットが開いた。小さな影が中に動いているのが分かる。

「子供？」

クリスは驚きの声を上げた。開いたコックピットから身を乗り出して辺りを見回すのは、ぼさぼさの髪の毛の十歳くらいの子供だった。

「海上！撃つんじゃないぞ」

ホバーから飛び出していく機動歩兵部隊を制止した嵯峨は四式のコックピットを開いた。彼は朱塗りの鞘の愛刀長船兼光を手に、そのまま地面に降り立つ。クリスもまたその後続いた。ホバーから歩兵部隊隊長で先の大戦からの嵯峨の部下である海上智明大尉に率いられた部隊が銃を構えて白いアサルト・モジュールを取り巻いた。その後ろにはハワードがカメラを構えてコックピットの子供を撮るタイミングを計っていた。

「とりあえず下りろ！」

兵士の一人が子供に銃を向けた。

「おいおい、待てよ。餓鬼相手にそんな本気にならなくても」

嵯峨はそう言つと歩兵部隊に銃を下げるように命じた。

「おい、ちびっ子。言葉はわかるか？」

「ちびっ子じゃない！アタシはナンバルゲニア・シャムロード！青銅騎士団団長だ！」

ぼろぼろの山岳民族の衣装を着た少女はそう叫んだ。

「青銅騎士団ねえ。ムジャンタ王朝末期のムジャンタ・ラスバ女皇の親衛隊だな。じゃあナンバルゲニア団長。君の仕える主は誰だ？騎士なら主君がいるだろう？」

タバコをくわえたままニヤニヤしながら嵯峨は少女に近づいていく。

「アタシの主はただ一人。ムジャンタ・ラスコー殿下だ！」

少女がそう言いきると嵯峨は腹を抱えて笑い始めた。クリスは一瞬なにが起きたのかわからないでいたが、少女の主の名前を何度か頭の中で再生すると、その言葉の意味と嵯峨の笑いがつながってきた。

「おう、そうか。で、そのムジャンタ・ラスコー殿下はどこに居られますか？騎士殿」

笑いを飲み込んだ嵯峨はそう言うとともにさらに少女に近づいていく。重機関銃を載せた四輪駆動車が到着した、そこから下りた明華とキーラは歩兵部隊を下がらせて一人、笑顔で歩いている嵯峨を見つけた。彼は白い見たことも無いアサルト・モジュールのコックピットに立つ少女に向けてニヤニヤと笑いながら近づいていく。二人ともいつもの嵯峨の悪い癖を見たとでも言うように半分呆れながら状況を観察していた。

「それは……わからない！」

「威張れることじゃねえが俺は知ってるよ。その青っ白い王子の成れの果てが何してるか」

嵯峨はそう言うとも再び笑いそうになるのに耐えていた。少女は不思議に思いながら歩いてくる嵯峨の前に降り立った。彼女も恐る恐る嵯峨に近づく。

「意外にそいつはお前さんの近くに居たりするんだなあ」

嵯峨はここまで言うとも耐え切れずに爆笑を始めた。取り巻く彼の

部下達は半分は呆れ、半分は笑いをこらえていた。ハワードは先ほどからシャッターを切っている。彼なりにこの光景が一つの歴史の転換点になると思っっているのだろう。クリスはただ嵯峨の言葉がどこに着地するのかを見守っていた。

「ムジャンタ・ラスコー。前の遼南帝国の最後の皇太子。父、ムジヤンタ・ムスガに疎まれ追放の憂き目に会う。そしてそのまま北兼王として流罪にされるわけだが、ムスガに愛想をつかした譜代の家臣と反乱を起こすが、戦い敗れて東和を経て胡州帝国西園寺家の養子に迎えられた」

そこまで言うとは嵯峨は吸っていたタバコを放り投げもみ消した。

「西園寺家では、三男、西園寺新三郎と名乗り、胡州陸軍に入り外務武官として東和に赴任。その後エリーゼ・フォン・シュトルベルグと結婚。これを機に胡州四大公家嵯峨家を継ぎ嵯峨惟基と名乗った」

少女は嵯峨の言葉を一語も漏らすまいと聞き耳を立てている。

「嬢ちゃん。その嵯峨とか言う軍人が今どこで何しているか、知りたいだろ？」

「うん……」

少女は静かに頷いた。

「今な、そいつはお前さんの目の前で身の上話をしているんだ」

嵯峨のその言葉に少女はただ呆然として腰の短刀の柄から力なく手を離れた。

にらみ合う二人。少女はしばらく嵯峨の言葉の意味が分からないと言つ顔をしていた。しばらくして嵯峨が言つた事が自分がその主君であると言つ意味だと理解すると口を尖らせて嵯峨に歩み寄つた。「なら！血の誓いが出来るでしょ！」

からかわれているとでも思ったのか、少女はむきになってそう叫んだ。

「血の誓いか。ムジャンタ王室に伝わる眠れる騎士を部下に迎える時の儀式。まあ俺の祖母さんの時は儀礼として行われていたそうだが……やりましょ」

そう言つと嵯峨は腰の兼光を抜いた。そのまま彼は右手の親指に傷をつけ、少女の前に差し出した。一礼をすると少女は嵯峨の血を舐める。その時クリスは奇妙な光を見た。日は落ちかけていた。紺色に染め上げられようとしている空の下、少女の体が薄い緑色の光に包まれていった。クリスは驚きつつも冷静を保つべく周りを観察する。

誰もがその光景を見て呆然としていた。

「何？何が起こっているの？」

明華がそうつぶやいた。

「騎士、シャムラードはここに誓う。我は汝の剣にして盾、矛にして槍。我ここに汝の臣として久遠の時を生き汝を守らん」

少女の声は凜としてクリスの耳の奥に届いた。薄緑色の光は次第に弱まり、そのまま少女は倒れこんだ。

「おい、誓うだけ誓ってお寝んねはねえだろ」

そう言つと嵯峨は少女を抱き起こした。

「殿下……」

「ああ、そうらしいな。それよりお前の名前何とかならんか？ナンバルゲニア・シャムラード。一々面倒くさくていけねえ」

嵯峨はそう言つと少女が自分で立てるのを確認するとタバコを取り出した。

「シヤム。シヤムでいいよ」

少女が明るくそう答えた。それまでのどこか怯えたような目の色は消え、好奇心が透けて見える元気そうな瞳がその埃で汚れた顔の中に浮かんでいる。

「じゃあ、シヤムって呼ぶ……お前等何してんの？」

白いアサルト・モジュールのコックピットに取り付いていた兵士達が転がり落ちる。嵯峨は火をつけたタバコをくゆらせながら声をかけた。

「熊です！熊がコックピットの中に！」

コックピットから現れたのは二メートルはあろうかと言う熊だった。

「なんだ。コンロンオオヒグマの子供じゃねえか。銃なんてしまえ。おい、シヤム。あれはお前の連れか？」

嵯峨はそのまま熊に向かって歩き出しながらシヤムに尋ねた。

「そうだよ。アタシの一番のお友達！」

元気に答えるシヤムを見ながら嵯峨はコックピットから降りようとしている熊のそばまで歩いていった。

「元気で賢そうな熊だな。おい、シヤム。コイツの名前はなんだ？」

嵯峨のその言葉にシヤムは元気よく答えた。

「クマだよ！」

その言葉に嵯峨は呆れたように天を見上げた。

「熊なのは見ればわかるんだ。そうじゃなくて名前のこと聞いてるんだがね」

シヤムは首をひねる。しばらく考えるが、答えが出てこないと言う様に嵯峨の顔を見つめている。

「もしかして無いのか？」

「無いと困るの？」

再びシヤムは不思議そうに嵯峨の顔を覗き込んだ。

「そりゃあそうだろう。他の熊と混じった時とか区別つけなきゃいけないわけだから」

「じゃあ無い」

あつさりとそう言い切るシヤム。さすがの嵯峨も呆れたように頭に手を当てた。しばらくの沈黙。嵯峨は擦り寄ってくる熊の頭を撫でながらひらめいたように話し出した。

「じゃあ熊太郎。熊太郎でいいだろ？強そうで」

「うん！それがいいね！熊太郎、こつちにおいで」

熊太郎と名づけられた熊はそのままシヤムのところをやってくる。隊長。そんないい加減に決めちゃって良いんですか？」

シヤムの隣に立って熊太郎の頭を撫でている明華がそう言うのは当然のことだとクリスは思っていた。

「いいじゃん。なんか本人も気に入っているみたいだし。ああ、この場合は本熊か？」

「馬鹿なこと言わないでくださいよ。もしかしたら熊太郎ちゃんは女の子かも知れないのに。シヤム、この子は男の子？女の子？」

「女の子だよ！」

全員の視線が嵯峨の方に向く。嵯峨はごまかすようにタバコをくゆらせながら白いアサルト・モジュールのコックピットを眺めている。

「ああ、これはちょっと掃除した方がいいなあ……」

「掃除なら隊長の機体のほうをお願いしたいですね。キーラ！この子達を本部に連れてってシャワーを浴びさせてあげて」

「了解しました。シャムちゃん。車に乗ったことある？」

シャムはキーラが指差す車を不思議そうに眺めている。

「ジャコビン曹長、私も同乗させてもらっていいかな？」

クリスはそう言うとキーラに軽く頭を下げた。キーラは笑顔で頷くとシャムを後ろのハッチから乗り込ませた。

「隊長！俺のことは何とか言わないんですか！」

柴崎が御子神に支えられながら歩いてくる。その足首が反対方向に曲がっていることから見て骨折していることは誰の目にも明らかだった。

「ああ、早速負傷者一か、面倒だねえ。ああ、そうだ。ホプキンスさん。俺、五機は敵機落としましたよねえ！」

嵯峨の叫び声に四輪駆動車の助手席に乗り込むところだったクリスは頷いた。

「スコアーお前にやるわ。これでお前もエースだから入院しても個室に入れるぞ」

「ああ、そうですか。ありがとうございます」

柴崎はいまいち納得できないような顔をして到着したばかりの四輪駆動車から下りてきた衛生兵の抱える担架に乗せられていた。

「それじゃあ行きますよ、ホプキンスさん」

キーラはそう言うと急いでドアを閉めたクリスに乗せて本部への道を走りはじめた。

「シャムちゃん。ずっと一人だったの？」

しばらくの沈黙のあと、ハンドルを握るキーラが耐え切れずに口を開いた。

「そうだよ。ずっと一人」

こんな少女がただ一人で森の中でひっそり生きてきたのか、そう思うとクリスはやりきれない気分になった。地球人がこの星を征服して以来、遼南の地が安定したことはほとんど無かった。常にこういう子供達が生まれては死んでいく。そんな歴史だけがあった。

「大変じゃなかったのかい？食事だって……」

「一人で暮らすのは慣れてるから大丈夫だよ。それに最近では熊太郎と一緒にいてくれるから。ねえ！」

後ろの荷台に乗った熊太郎がシャムの言葉に答えて甘えた声を出す。

「キーラさん。新しい基地の方は」

クリスの言葉に、キーラは彼の方を見据えた。複雑な、どこか悲しげな瞳にクリスは違和感を感じた。

「廃村と聞いているのですが……」

「ええ、人っ子一人いないわよ。まあ、あれを見ればどうして居ないのかよくわかると思うけど」

キーラの棘のある言葉にクリスはそれ以上質問するのをやめた。

この20年ほどの戦乱で北兼の村が廃村になることは珍しいことではない。ある村は軍に追われ、ある村はゲリラに攻められ、ある村は共和政府の憲兵隊に追い散らされた。周辺国に、あるいは国境の手前に難民キャンプを作っている人々の数は三千万を軽く越えていることだろう。遼南ではありふれた風景、クリスもその住人の絶望した表情を嫌と言うくらい見てきた。そして彼はクライアントの気に入るように、彼らの敵をクライアント達の敵であると決め付ける

文章を書くことを生業としてきた。

「見えてきたわね」

キーラが高台の開けた道に車を走らせる。彼女の視線の先には、北兼ではそれほど珍しくも無いような山岳民族の集落が広がっている。その向こうに異質な存在を誇示している、嵯峨が保養所と呼んだ大きな宿泊施設がみえる。その周りでは、機材を運び込んでいる部隊員の姿がちらほらと動いている。

「普通の村ですね」

クリスの言葉にキーラの鋭い視線が飛んだ。不思議そうな顔をするクリスに彼女はあきらめたようにヘッドライトの照らす道に視線を戻した。

「そうね、ここから見る限りは普通の廃村よ。私もそうだと思い込んでいたから」

車は次第に山を下り、崩れかけた藁葺きの屋根が続く村の大通りに入った。

「あれ、こちらでは本部には……」

「いいのよ。ホプキンスさんには見てもらいたいものがあるから」

キーラの声は冷たく固まっていた。クリスは後ろのシヤムにも目を移してみた。そこには真剣な顔で熊太郎の頭を撫でているシヤムの姿があった。

速度を落とした四輪駆動車は、村の中心の井戸の手前で止まった。「着きましたよ」

キーラの言葉をどこと無く重く感じながらクリスはドアを開いた。すぐに目に留まったのは目の前にある塔婆のような石の小山だった。それは一つではなかった。遼州の月、麗州の光にさらされるそれは、広場一面に点在していた。

そしてその一つ一つに花が手向けられていた。

「墓……ですか」

クリスはそう言うのが精一杯だった。キーラはクリスの隣に立つと静かに頷いた。

「これは全部あなたが守ってきたのよね」

淡々と言葉を発したキーラに静かにシャムが頷いた。

「みんな死んじゃったの。南から一杯、兵隊が来て、みんな殺していったの」

シャムはそのままうつむいた。そこに涙が光っているだろうということは、クリスにも理解できた。

「北兼崩れ。ホプキンスさんもご存知でしょう？うちの隊長が遼南の軍閥達に担ぎ上げられて、遼北と南都と激突した事件のこと」

聞くまでも無いことだった。遼南で戦場を取材しようと言う人間なら誰でも知っているこの地の動乱の最初の萌芽。無能な父帝を倒すべく立ち上がった幼い王子、ムジャンタ・ラスコーの物語。

「しかし、待つてくたさいよ。それは二十年前の話じゃないですか。彼女は生まれてないはずですよ……！！」

クリスはすぐさま涙を拭いてクリスを見つめているシャムをまじまじと見つめた。

「彼女、ラストバタリオンですか？」

キーラ達人造人間には老化と言う変化が存在しない。機能が麻痺

して次第に衰えるだけ。それならばシャムと名乗る少女の姿も納得できた。

「まさか。私達の製造がなされたのは先の大戦の末期。確かに私達は古いの遺伝子を持ち合わせてはいないけど」

キーラはそう言うのと悲しげに笑った。遼州の外惑星に浮かぶコロニー群で構成されたゲルパルト帝国。彼らが地球と戦端を開いたのは十年前。もしこの塔婆の群れが作られたのが北兼崩れの時期と言うことならば、『ラストバタリオン』と呼ばれた人造人間の研究の完成の前にシャムはすでに生まれていたことになる。

「そこらへんは専門家にも調べてもらいましょう。それよりシャムちゃん」

キーラは肩を震わして泣いているシャムに顔を近づけた。

「シャワー浴びましょうよ。そんなに汚い格好してたらこのお墓の下に居る人達も悲しがるわよ」

「うん。じゃあ着替え、持ってくる！」

そう言うのとシャムは熊太郎を連れて藁葺きの屋根の並んでいる間の中に吸い込まれていった。

「ホプキンスさんも疲れたんじゃないですか？伊藤中尉が部屋を用意しているはずですから、シャムちゃんが帰ってきたら本部に戻りましょう」

キーラはようやく笑顔に戻った。

クリスとキーラがぼんやりとシヤムの消えていった廃屋を眺めていると、闇の中から現れたシヤムが行李を一つ、熊太郎の背中に乗せて現れた。

「じゃあ、シヤムちゃん後ろに乗って」

キーラの言葉にばたばたとシヤムは四輪駆動車の後ろに乗り込んだ。クリスも再び笑顔を取り戻したシヤムを見て安心しながら助手席に乗り込む。

「回収部隊が出るみたいね」

キーラは車を切り返しながら、本部のある建物の前でアサルト・モジュール搭載用の二両のトレーラが出発する有様を見ていた。クリスは黙り込んでいた。

虐殺の痕跡。その疑いがあるところには何度か足を踏み入れたことはあった。アフリカ、中南米、ゲルパルト、ベルルカン、大麗、そして遼南。その多くがすでに軍により処理が済んでいる所ばかりだった。下手に勘ぐれば命の保障は無い。案内の下士官や報道担当の将校はそんな表情をしながら笑って現場を案内していた。

しかし、クリスはこの場所に来てしまった。戦場を渡り歩いてきた勘で二十年前、この村を襲った狂気を想像することはたやすかった。四輪駆動車は急な坂道をエンジンブレーキをかけながら下りていく。

「隊長が戻ってきてるみたいね」

キーラの言葉通り、闇の中にそびえる黒い四式がライトに照らされていた。その隣では資材を満載したトラックから鉄骨が下ろされ、突貫工事での格納庫の建設が行われていた。

車はそのまま本部を予定している保養施設の建物の横の車両の列の中に止められた。

「着きましたよ」

キーラの声にクリスは我に返り、手にした携帯端末のふたを閉じた。連隊規模の部隊の移動である。本部の前は工兵部隊の指揮官らしい男が部下に指示を与えていた。腰に軍刀を下げているところから見て胡州浪人上がりだろう。キーラが後ろのハッチを開けて中からシヤムと同時に熊太郎が出てくるのを見て少し怯えたような表情を浮かべる。

「大丈夫ですよ。この子、結構賢いみたいですから」

キーラはそう言いながら熊太郎の頭を撫でた。熊太郎も警戒することなく、甘えたような声でキーラの手を舐め始めた。

「ジャコビン曹長！ホプキンスさんは？」

本部の建物から早足で歩いてきた伊藤がキーラに声をかける。キーラは何も言わずにクリスを指差した。

「コイツが熊太郎か。ずいぶんおとなしい熊だな」

伊藤はそう言うと熊太郎から距離をとりながらクリスの方に歩いてくる。微妙に引きつったその顔がつばに入ったのか、キーラが噴出した。

「何だね、曹長！」

「いいえ。ではジャコビン曹長は地元ゲリラへの尋問を開始します！」

「尋問？」

シヤムが不思議な顔をしてキーラを見上げた。

「たいしたことは無いわ。ちょっとシャワーを浴びながらお話を聞かせてもらっただけだから」

そう言うとキーラはシヤムと熊太郎を連れて本部の建物に入ろうとした。

「ジャコビン曹長。その熊も連れて行くのか？」

相変わらずおっかなびつくり熊太郎のほうに視線を走らせている隼がこっけいに見えて、クリスも噴出してしまった。

「何か不都合でも？」

「いや、いい。さっさとシャワーを浴びてきたまえ！」

「でわ！」

キーラは敬礼をするとそのままシャムと熊太郎を連れて本部の建物の中に消えた。

「そんなに笑わなくてもいいじゃないですか！人間苦手なものくらいありますよ！」

伊藤が言い訳をする。クリスもようやく笑いが引いて、一つの疑問を口にしようと思った。

「伊藤中尉、あなたは知っていましたね。彼女の存在を」

そのクリスの言葉に、緩んでいた隼の表情は急に引き締まった。予想はしていた、しかしこれほど早くその質問が来るとは思わなかった。そんな表情でクリスを見つめる伊藤。だが彼は何も言葉を発することも無くそのままクリスを本部の建物へといざなった。

「意外と痛みはないでしょ？とても二十年間放置されてきたとは思えないくらいですよ」

確かにその通りだ。そうクリスにも思えた。コンクリートの建物の天井や壁を眺めて、亀裂一つ入っていない様を確認していた。

「おう、伊藤か。ご苦労だねえ」

灰皿がいくつも置かれたロビーの隅。嵯峨がタバコをくわえて座っていた。

「先ほどの質問なら隊長がお答えしますよ」

そうクリスの耳元でささやくと政治将校である伊藤隼中尉は敬礼して立ち去った。

「あいつも忙しいからねえ」

嵯峨は淡々とそう言いながらタバコをふかす。煙の匂いに眉をひそめながら、クリスは質問をする決意をした。

「あの、嵯峨中佐は……」

「先に答えちゃおうか？知ってた」

まるで質問を読みきったように、嵯峨はそう言いきった。クリスは言葉を継ぐとするが、嵯峨の反応はそれよりはるかに早かった。「俺のばあさんの家臣だったナンバルゲニア・アサドがばあさんが

死んでからここに引っ込んだのは知ってたからな。それに彼にはあの森で見つけたシャムラードと言う養女がいたのもまあ聞いちゃあいたんだ」

そう言うのと嵯峨はすつきりしたとでも言うように天井にタバコの煙をはいた。

「それじゃあ……」

「白いアサルト・モジュールのことか？ホプキンスさんも知ってるだろ？遼南が初めて実戦に使ったアサルト・モジュール『ナイト・シリーズ』のこと。遼南、新華遺跡で発掘された人型兵器のコピーとして東和との共同開発で製作されたアサルト・モジュール。まあ、生産性とか運用効率とか度外視して、しかもワンオフの機体だから当時戦艦三隻分の予算がかかったという話だねえ」

すべては承知の上での行動だった。クリスは嵯峨が悪名をとどろかせている意味がようやくわかった気がしてその隣のソファに腰を下ろした。

「そんな目で見ないでくださいよ。正直こんなにすんなり行くとは思ってなかったんですから」

嵯峨はそう言いながら灰皿に吸殻を押し付ける。

「じゃあなんで……」

「ちよつとはケレンが欲しいところだったんじゃないですか？サービス精神とでも受け取ってくればいいですよ」

まるで他人事のようにそう言いながらまたポケットからタバコを箱を取り出す。最後の一本。嵯峨はそれを慎重に取り出すとゆつたりとソファアールの上で伸びをした。

「それにしても、彼女は何者なんですか？この村が攻撃にさらされたのは二十年近く前になるわけですけど、彼女はどう見ても10歳くらいにしか……」

嵯峨はクリスの言葉を聴きながらタバコに火をつける。そしてそのまま一服すると、クリスの顔を覗き込んだ。

「遼州の伝説の騎士。初代皇帝太宗カオラの剣」

「そんな御伽噺を聞こうと……」

そう言うクリスに嵯峨は皮肉めいた笑みを浮かべた。

かつて地球人に発見されたばかりの遼州は乱れていた。小規模な国家が乱立、それが中世を思わせる剣と盾を振りながらの戦い。そこに宇宙を行き来する地球の軍隊が到着すればたとえ彼等が紳士的な考えの持ち主だったとしてもすぐにそれらの国々が併呑されたのは当然と言えた。その後の棄民政策でだまされるようにして移民してきた人々、それを憂いて決起した軍人。そして資源を求めて移住した技術者達。彼等は手を取り東和・胡州・ゲルパルトなどの国家を築いて地球勢力からの独立を目指した。

そしてその中心には遼州の巫女カオラの姿があり、後に彼女の夫

となる騎士の姿があった。そして巫女カオラを守護する七人の騎士。独立を果たし役目を終えた騎士達は民草にまぎれて消えていった。そして同じく国家の形がなるにいたったところで初代皇帝となった巫女カオラの姿も忽然と消えていたと言う。

だが、それが当時の混乱した遼州の伝説に過ぎないとクリスは思っていた。事実当時の書類の類は多くが永久非公開書類扱いだった。二つの人類の和を乱す『パンドラの箱』。この決定を下した国連事務総長の言葉が今でも残っている。

「じゃあどう言えば納得してもらえますかね？あいつは今ここにいて、そしてあの墓は確かに二十年前の虐殺の跡。これははつきりしていることですよ？まあ米軍にでも頼んでみじん切りにして研究すればわかるでしょうが……連絡しますか？」

そのどこか見るものを恐怖させるような視線を見たクリスは、黙って嵯峨の口から吐き出された煙に目を移した。

「あいつも一人の人間だ。たとえどういう生まれ方をしようが関係ないでしょ。太宗カオラはこう言ったそうですよ。『その身に流れている血が遼州の流れの血であろうと地球の流れの血であろうと遼州に生き、この地を愛する心を持つものであればすべて遼州人である』って」

嵯峨の顔が一瞬真剣になる。クリスは黙って目の前の男を見つめていた。

「あなたは太宗の理想を実現するつもりなのですか？」

そのまじめな瞳にクリスはそう言うしかなかった。

「俺を買いかぶらないでくださいよ。俺はそれほど清廉潔白な生き方はしちやあいません。ただ、俺にも意気地というものがある。こんなふざけた戦争をとつと終わらして、あの餓鬼にも普通の生活を遅らせてやりたいと言うくらい良識はもってるつもりですがね」

そう言う嵯峨が視線をクリスから廊下に移した。そこにはさっぱりした表情のシャムとキーラ、そして熊太郎がいた。

シヤムが身に着けているのは黒い布に赤と緑の刺繍を施した服とスカート。それにこちら黒い布と金の刺繍で飾られた帽子の縁からは緑の糸が五月雨のように垂れ下がっている典型的なこの地方の民族衣装だった。こうして見ればシヤムはありふれた遼南山岳部族の少女に見えた。

「凄いだよ！隊長。上からお湯が一杯降ってきて、あつという間にきれいになるの。それにあぶくがでるときれいになる石があつて、それで……」

「あのなあ、言いたいことなら頭でまとめてから言えよ。おい、キーラ。酒保に行つてアンパン二つ持つて来いや」

それを聞いて敬礼を残し走り去るキーラ。嵯峨は吸いかけのタバコをもみ消して立ち上がる。

「クリスさんも疲れたでしょう。相方も戻ってきたみたいですよ」

嵯峨のその言葉に表を見れば、到着したばかりのホバーから兵員が降車しているのが見える。

「シヤムはそこで待つてる。キーラがアンパン持つてくるからな」

「アンパン？」

その言葉にシヤムと熊太郎は首をひねった。

「ああ、お前さんはパンも知らないんだらうな。小麦粉は知ってるか？」

「うん。水で溶かして焼くと美味しいんだよ」

「何が美味しいんですか？」

そう言いながら本部に入ってきたのはハワードだった。彼は目の前のシヤムを見つけるといかにも興奮した様子で民族衣装を着た姿にシャッターを切った。シヤムは不思議そうにカメラを構えるハワードを見ている。彼の黒い肌、そしてクリスの金色の髪の毛と青い瞳を見て、シヤムは納得したように頷いた。

「もしかして外人さん？」

シヤムの言葉に思わずハワードが噴出した。クリスは嵯峨を見つめる。こちらも腹を抱えて笑いを必死にこらえていた。

「そうだな、外人だな。……ホプキンスさん、外人らしく英語でしゃべってみたらどうですか？」

そんなことまで言い出す嵯峨に頭を抱えるクリス。

「どうしたのみんな笑って？」

キーラはアンパンを持って現れる。そして今度はシヤムがキーラを指差した。

「あ！キーラも外人だった！」

叫ぶシヤムの言葉の意味がわからずに呆然と立ち尽くすキーラ。

「おい、シヤム。それ以前にお前は宇宙人なんだぞ、地球の人から見たら」

ようやく笑いをこらえることに成功した嵯峨がそう言った。その意味がわからず呆然としているシヤムに、キーラはアンパンの袋を二つ手渡した。

「酷いよう。そんな私はタコじゃないよ！」

シヤムが膨れる。嵯峨は頭を撫でながら言葉を続けた。

「じゃあ外人なんて軽く言わないことだな。それより早くアンパン食べてみ」

言われるままに袋を開けてアンパンを手に取る。しばらくじっと見て、匂いを嗅ぐ。首をひねり、何度か電灯に翳す。そしてようやく少しだけ齧る。

「それじゃあアンまで食べねえだろ。もつとがぶつといけよ」

嵯峨の言葉にシヤムはそのまま大きく口を開けてアンパンにかぶりついた。噛みはじめにすぐに、シヤムの表情に驚きが浮かんだ。

そして自分の分を食べながらキーラから受け取った熊太郎の分を熊太郎の口にくわえさせた。

「慌てるな、ゆっくり食べよ。逃げはしないんだから」

何かを話そうとしているシヤムをさえぎった嵯峨。シヤムは安心して最後の一口を口に放り込む。

「ずいぶん必死に食ってるなあ。お前さんはどうだ？」

嵯峨が熊太郎に尋ねる。器用に両手でアンパンを持ちながら食べ続けていた熊太郎だが、嵯峨の言葉に満足げに甘い鳴き声をあげた。

「これ！これ甘いよ。すごく甘い」

食べ終えたシヤムが叫ぶ。キーラは不思議な生き物を見るように驚いた表情でシヤムを見つめていた。

「そうだろ。俺の騎士になるとこんなものが毎日食えるんだぜ。よかったな」

「うん！」

シヤムは元気にそう答えた。熊太郎もアンパンを食べ終え満足そうにシヤムに寄り添っている。

「はあ、今日は疲れたよ。ホプキンスさん達も寝た方が良いでしょうよ。」

作戦初期の高揚感は疲労を忘れさせてくれるのは良いのだが、あとで肝心な時に動けなくなったりしたら洒落になりませんからねえ」

そう言うのと嵯峨は二階に向かう階段を上り始めた。

「ああ、ホプキンスさん。あなたの部屋は三階になります。そう言えは伊藤中尉が……」

キーラが辺りを見回す。外の隊員に指示を出している伊藤を見つけるとキーラはそのまま走っていった。

「どうだった今日は？」

ハワードの言葉にクリスは何を言うべきか迷った。あまりに多くの出来事が起きすぎる一日。それを充実していたというべきなのか、クリスは少しばかり悩みながら、走ってきた隼に導かれて自分のベツドへと急いだ。

次の朝からクリスはこの取材の目的のために動き出した。それは兵士達へのインタビューだった。北兼軍閥。この内戦の勝敗を握り続けてきた中立軍閥が急に共和軍に牙を向けた事実はクリスには非常に不可解に見えた。それを引き起こしたのは嵯峨と言う理解できないカリスマだが、彼になぜついていくことを選んだのか。自分でできる限りの情報を集めてみたい。そう思いながらインタビューを続けた。

先の大戦では人民軍にとって嵯峨は徹底的な赤色ゲリラ掃討作戦を指示した敵である。彼が動いた作戦の残忍さは人民軍と距離をとっていた合衆国でさえ、非人道的な掃討作戦に抗議する声明を何度出したかわからない。そんな男の下で命を掛けて戦おうと言う兵士の生の声を拾いたい。それがこの取材の目的であった。しかしこの三日間で、クリスはいきなり肩透かしを食らうことになった。

北天の人民軍の取材の際には常に張り付いていた政治将校、そして周りに群れる尾行者の監視を感じながらの取材だった。しかしここではまるで自由に出会った兵士達の声を聞くことが出来た。政治将校である伊藤は、気を利かせて本部で事務仕事に専念していた。嵯峨は七輪でシャムから分けてもらった鹿の干し肉をあぶって酒を飲んでいるばかり。楠木は初日からトラックに弾薬や重火器を満載して北兼台地のゲリラ達に届ける作戦に従事していた。

クリスとハワードはただ手の空いた兵士達と話し、彼らがこの戦いになぜ参加するかを自由に聴くことが出来た。また、兵士達も緘口令のようなものは敷かれていないようで、それぞれ談笑しながら世間話でもするように話し続けた。

彼のインタビューを珍しそうに受ける兵士達誰もが戦争はまもなく終わるだろうと話した。北天包囲戦に敗れた共和軍の士気が低下していることは彼らも知っていたし、魔女機甲隊の西部戦域での勝

利の報が入ってきた直後と言うこともあって、中には戦後のプランまで考えている兵士も居た。

しかしそんな彼らとの取材が一時停止することがよくあった。

それはシヤムと熊太郎の闖入である。まるで人見知りせずじやれ付いてくるシヤムと熊太郎は、すぐに部隊の人気者になった。彼女はほとんど読み書きが出来ないこともあって、胡州浪人の士官の一人がなぜか持っていたジエームス・ジョイスの「フィネガンズ・ウェイク」の日本語版を与えて、一行目を何秒で読むかという競争をして遊んでいた。

今日もまた、補給隊の運転手の一等兵が延々と語る猫の飼い方の講義を聴いているところにシヤムが現れた。

「クリス。大変だねお仕事」

シヤムはそう言うとそのままトレーラーの助手席に上がりこんでくる。彼女の取っておきのやわらかそうな黒に赤と白の刺繍のマントの民族衣装が目飛び込んでくる。

「わかったよ。旦那、シヤムと遊んでやってくださいよ。俺の餓鬼もこのくらいの年だね」

兵士はそう言うと言転席で昼寝をしようと足をハンドルの上に乗せた。仕方なく降り立ったクリスは不思議そうに彼を見つめるシヤムと遊ぶことにした。

クリスは好奇心いっぱい目の目でこちらを見てくるシヤムに少しばかり照れ笑いを浮かべた。服はいつも同じような黒い生地に刺繍の服。そして縁に飾りのついた帽子はいつもその頭の上にある。

「あのね、お花摘みに行きたいんだ！」

そう言うときシヤムはクリスの手を引いて歩き始めた。そのまま彼女のアサルト・モジュールを整備している前を通りかかると、元氣よく叫ぶ。

「キーラ！クリスさん連れてきたよ！一緒にお花摘みに行こう！」

納入部品の検品をしている部下を監督していたキーラに声をかけるシヤム。

「行っても良いわよ。私が代わるから」

そう言う明華の言葉に押し出されてつなぎ姿のキーラは白く輝く髪をなびかせて歩いてきた。

「もう！シヤムったら何のつもり？」

「いいじゃん、行こう！」

そう言うとき熊太郎を先頭に歩き始めた。北兼台地に拠点を構えた共和軍は基地の拡大を続けているという話がいくつかの情報チャンネルからクリスにも届いていた。クリスは何度か素人の意見と限定した上でいっこうに動く気配を見せない嵯峨に問いかけたこともある。

「まあ、あちらにも事情があるんでしょ？それに今は動くのはねえ」

嵯峨の言葉はいつもこれだった。そんな仕事のことを思っているクリスを知ってか知らずか、シヤムはそのまま元氣良く焼畑の跡地と思われる高山植物の群生地までやってくる。

「平和ですねえ」

クリスは笑顔を浮かべて蝶と戯れているシヤムを眺めていた。

「そうですね」

少し照れながらクリスの座っている岩の隣にキーラが腰をかけた。空は青空、高地らしく空気が澄んでいる。

「そう言えば許中尉は元気になったみたいですね」

クリスは思い出した。柴崎が後方の病院に移送される時、明華は一人、格納庫の片隅で泣いていたとシャムから聞かされていた。

「あんまりそんなこと部隊では言わない方がいいですよ。班長は公私混同は嫌いですから」

シャムはようやく蝶を追うのに飽きて花を摘み始めた。赤い花、青い花、黄色い花。空には鳥がさえずり、時折この山に住むというヘラジカの雄叫びが聞こえる。

「まるで戦争なんて起きていないみたいですね」

クリスはそう言った。キーラはその言葉に頷きながら、山々に視線を飛ばしていた。

「ちょっと二人とも！そんな黙ってたらつまらないでしょ？」

花を摘むのをやめて口を尖らせたシャムがそう叫んだ。

「二人は仲良しさんなんだからね！キーラなんか私と居るといつもクリスマスさんのこと……」

「シャム！何言ってるの！」

顔を赤く染めたキーラが叫んだ。そしてそのままうつむいてじっとしている。クリスマスも少しばかり恥ずかしいというように目を伏せた。

「じゃあお墓まで行こうよ！」

熊太郎がくわえてきたかごに花を入れるとシャムは再び集落の方へと向かった。クリスマスはシャムの腰に挿された短刀と笛に目が行った。笛は山岳民族が北天の露店で売っていたありふれたもののように見えた。そしてその隣に挿してある短刀の黒い鞘が高地のきつい光に反射しているのがわかる。

「シャム。その刀は結構使い込んでいるね」

クリスマスのそんな何気ない言葉に、シャムは立ち止まった。振り向いた彼女の瞳が潤んでいることはすぐにわかる。彼女はひとたび目にたまった涙を拭くとまた先頭に立って歩き始めた。

「すまない。きつとつらいことがあったんだね」

「グンダリの刀」

前を向いたままシャムは答えた。

「私のね、初めてのお友達。その刀なんだよ」

シャムはきつぱりとそう言った。

「その子も亡くなったんだね」

その言葉にシャムは肩を震わせるが、気丈なことを装ってそのまま村へ続く道を歩き続ける。

「いろいろ教えてくれたんだ。グンダリ。電気が明るいこととか、

車が何で走るのかとか、それに一緒に焼畑の跡地に生える花を摘んだり、村の男の子が喧嘩を仕掛けてきた時は一緒に戦ったり」

「つらいなら良いんだよ」

クリスのその言葉に、振り向いたシャムはクリスに抱きついた。

彼女の涙は絶えることが無かった。

「みんな死んじゃったの！私の友達はみんな死んじゃうの！」

「そんなこと無いわよ。そんなこと」

クリスの隣に立っていたキーラが泣きじゃくるシャムの頭を撫でた。熊太郎も後ろで心配そうな声を上げている。

「もう一人じゃないんだ。泣きたいなら泣くといいよ」

クリスは胸の中で泣く幼い面立ちの少女を抱きしめた。

シヤムは涙を拭う。

「いい子だ。泣いていたら天国のみんなが悲しむだろ？」

そんなクリスの言葉に頷くシヤム。キーラと顔を見合わせたクリスにも自然と笑みがこぼれた。

「じゃあ行くよ！」

元気を取り戻したシヤムは石を積み上げて造られたがけに沿った道を歩く。

「転ぶなよ！」

クリスがそう叫びたくなるほど軽快にスキップをしていた。クリスはキーラと黙って歩いていて。お互いに何かを話すべきだろうとは思っていたが、どちらも口に出せずにいた。

「ホプキンスさん？」

キーラが口を開いた。だがクリスは言葉が中々出てこなかった。

「ああ、別になんでもないよ」

たったそれだけの言葉だったが、キーラは安心したような表情を浮かべたあと、早足でシヤムのほうに向かった。

「ホプキンスさん。シヤムちゃんを見失っちゃいますよ！」

振り返ったキーラという言葉にクリスは笑顔を返すと、そのまま石造りの急な坂道を早足で登り始めた。

村の中央の高台。初めてここに来た時は夜でよくわからなかったが、この墓の並ぶ広場は延々と続く北兼台地の入り口を見渡せる景色のよい場所だとわかった。シヤムは摘んできた花を一本一本墓に手向ける。その隣では静かに花の入ったかごをくわえて待つ熊太郎の姿があった。

泣いていなかった。シヤムは泣いていなかった。

「奴は強いねえ、さすが騎士だ」

クリスは不意に後ろからの声を聞いて振り返った。嵯峨がタバコ

を吸いながら近づいてくる。

「ホプキンスさん。昼飯、一緒にどうですか？」

「ええ、まあ」

曖昧にクリスは答えた。確かにそんな時間になっていた。嵯峨はにやりと笑うと、そのままクリスを誘うように本部の建物に向けて歩き始めた。

「いやあ、午後になんかあった人員補給のイベントがありましたね」

嵯峨は歩きながらそう漏らした。

「この近くに村でもあるんですか？」

クリスのその言葉に、嵯峨はにやりと笑った

「そのところは食事でもしながら」

そう言いながらもう完全に前線基地の格好を取り始めた古びた保養施設の建物に入る。

「ここの食堂の風情はこれらの軍隊には負けないでしょうねえ」

そんなことを言いながらエレベータのボタンを押す嵯峨。

「それでは魔女機甲隊から引き抜くんですか？」

そう尋ねるクリスに嵯峨は振り向くこともせずを開いたエレベータのドアをくぐる。

「いやあ、伊藤がね。良い仕事をしてくれたんですよ」

しばらくの沈黙のあと、言葉を選びながら嵯峨はそう言った。

「伊藤政治中尉。もしかして……」

エレベータの扉が開く。クリスはまじめに嵯峨の顔を覗き込んだ。

「ご推察の通り懲罰部隊ですよ。まあ、人民軍本隊は現在北天南部で反攻作戦で人手不足だ。まともな部隊を送る余裕は無いでしょうね」

そう言うと嵯峨はそのまま食堂に入った。保養所のレストランであったこのフロアーには窓の外の北兼台地の眺望が手に取るようだった。

「ホプキンスさんには良いねたになりそうですね？」

まるで子供が悪戯に成功したあとのように無邪気な笑いを浮かべる嵯峨の姿がそこにあった。

「鰯の干物定食、ホプキンスさんは？」

「とんかつ定食で」

食堂の人影はまばらだった。一応は最前線の基地である。先の大戦の遼南戦線の飢えをくぐった嵯峨が食事を重視していることもあって、十分な補給に支えられてこの基地は機能し始めていた。しかし、だからといって補給部隊は安全とは言えなかった。共和軍の傭兵部隊が山中に侵入したとの情報があったのは昨日。そして、補給部隊のトラックが一台撃破されたとの話もクリスは知っていた。

「しかし、懲罰部隊ですか。どうするんですか？」

クリスの言葉を背中に聴きながら、嵯峨は相変わらず不敵な笑みを浮かべていた。

嵯峨は窓際の椅子に腰掛けた。その正面に座るクリス。

「ああ、大丈夫ですよ。一応、防弾ガラスには交換してあります。それにここを狙撃できるポイントはすべて制圧済みですから」

「そう言つと机の上に置かれたやかんから番茶を注ぐ嵯峨。

「懲罰大隊ですか、いい話は聞きませんね」

クリスは慣れない箸でとんかつをつまみあげる。嵯峨は大根おろしに醤油をかけながら次の言葉を搜していた。

「まあ、そうなんですけどね。機動兵器は敵拠点制圧には便利だが、その維持となるとコスト的に問題がある。まあ兵隊ならいくらでも欲しいというのが本音ですよ」

そのまま鰯の肉を器用にはらして口に運ぶ嵯峨。

「結構いけるんだな。西モスレム産も食ってみるもんだ」

「そう言つとさらに嵯峨は箸を進めた。

「そう言えば取材の方は上手くいってますか？」

目つきが鋭く変わる。かつての鬼の憲兵隊長の視線だ。そうクリスは思いながら箸を置いた。

「なんとか進んでいます。しかし、良いんですか？かなり人民党への不満の声も聞こえるんですが」

「そりゃあそうでしょう、完璧な為政者なんているわけが無いんですから。それにうちは外様なんで。北天の連中が偏見の目で見てることぐらい誰でもわかりますよ」

嵯峨は再びとろんとしたやる気のなさそうな目に戻ると、茶碗の飯を掻きこんだ。

「コメはいまいちな。東和産があればいいんだけど……そうも行かないか」

「そう言つと番茶を口に含む。

「しかし、本当に大丈夫なんですか？この部隊はほとんどすべてが

北兼出身のあなたの直系の部下ですよ。そこに人民党が敗北主義者と規定した懲罰部隊を入れるというのは」

「まあ、北天のお偉いさんからは目をつけられることにはなるでしょうね。また伊藤の奴には苦勞かけちまうことになるでしょうが」
そう言いながらタバコの箱を取り出す嵯峨。

「ここ、禁煙みたいですよ」

クリスの言葉にはっとする嵯峨。そのまま箱を胸のポケットに戻す。

「まあ、いろいろ考えるつもりですがね」

そう言つと嵯峨は最後に骨の周りの肉を口に放り込むと、番茶を茶碗に残った白米にかけてくるくると回し、それを一息に飲み込んだ。

「じゃあお先失礼しますよ。その件での書類のチェックがあるものでね」

そう言うつと嵯峨はトレーを持って立ち上がった。クリスはまだ半分くらいしか食べていなかったたので、そそくさと立ち去る嵯峨を追うことが出来なかった。無理に味噌汁でコメを流し込みようやく食事を終えると、クリスは立ち上がった。

そのままトレーを戻してエレベータから吐き出された工兵の群れに逆流して下の階を目指す。扉が開くと本部の前に人だかりが出来ていた。クリスはそのままその集団に吸い込まれた。

「まるで囚人護送車だぜ」

人だかりの中の一人がそんな言葉を吐き捨てた。目の前に止まったトラックには嚴重に外から鍵が掛けられている。政治部局の兵員がその鍵を一つ一つ開けて回る。

そこから降りてきたのはぼろぼろの軍服に身を包んだ兵士達だった。着ている軍服はまちまちで、あるものは夏用の半袖を着ていたり、あるものは冬物の耐寒コートに身を包んでいた。政治局の兵士達はそれを馬かヤギでも追い立てるように一所に集めた。

そこに現れたのは伊藤だった。彼は懲罰部隊を運んできた少尉から書類を受け取ると静かにそれに目を通す。眼鏡をかけた若い政治局員の腕章をつけた少尉は、時々ぼろ雑巾のような懲罰兵達にさげすむような視線を投げていた。

「同志伊藤！以上二百三十六名。お引渡しします」

「そうか、ご苦労さん」

そう言うつと隼はそのまま懲罰兵の固まっているところまで歩き始めた。

「同志、それ以上近づくと危険ですよ」

「危険？何でそんなことが言えるんだ？」

一人の兵士が落ちていた石を拾うと伊藤に投げつけた。伊藤は避けることもなくそれを額に受けた。額から一筋の赤い線が口元まで走る。眼鏡の少尉はそれを見ると拳銃を取り出し、その石を投げた階級章を剥ぎ取られた将校服の兵士に銃口を向けようとした。

次の瞬間、政治将校の眼鏡が飛んでいた。それが伊藤の右ストリートによるものだとわかるには少し時間が必要だった。

「こいつ等はうちの部隊の隊員だ！勝手に殺すんじゃない！」

眼鏡の少尉は伊藤の啖呵を聞いてもいまひとつ理解が出来ていないようだった。周りの兵士達は伊藤の行動にやんやの喝采を浴びせている。懲罰部隊の隊員も、それを真似て周りの政治局員に罵声を浴びせかけ始めた。

「同志！これは一体どういうことだ！」

「おう、若いのが。俺はな、十四の時から人民党員なんだ！お前みたいな『にわか』に指図されるいわれはねえんだよ！」

その言葉に少尉は口から流れる血を拭って伊藤をにらみつけながら立ち上がった。

「同志伊藤隼中尉！貴様、このことは党に報告させてもらうからな！」

激昂する少尉を押しとどめる政治局員。伊藤も彼の部下の政治局員に囲まれる。彼らは全員腰のホルスターに手をかけて、いつでも北天の兵士とやりあう覚悟は出来ていた。伊藤は部下の肩を叩き、にんまりと笑みを浮かべていた。

「おう、やれるもんならやってみる！人のふんどしで相撲を取るしかとりえの無い餓鬼に俺の首が取れるのならな！」

眼鏡の少尉はそのまま彼の部下に連れられて車に連れて行かれた。取り囲む兵士達は伊藤に歓声を上げる。そんなところにいつの間にかシャムが現れていた。

「隼、かつこいいい！」

「ありがとうな。あとでアンパンもらってきてやるよ」

懲罰兵は歓喜の声をあげ、そのまま伊藤を胴上げしかねない勢いだった。

「やる時はやるんだねえ」

本部から出てきた嵯峨が伊藤の肩に手を伸ばした。

「あいつ等は誰と戦争してるかわかつちやいないですよ。では！同志諸君！整列したまえ！」

片腕だけで心を動かされた懲罰兵が整列を始めた。彼らを運んできたトラックから降りるときの動きとはまるで違う俊敏な反応だった。

「では、隊長。訓示を」

伊藤はすばやく身を引いて嵯峨にその場を任せた。

「俺は貴様等が何のために階級を剥奪されたかは問わない。問うつもりも無い。また、もし共に戦うつもりが無いのなら西モスレム経路で東和に亡命する手段も整えてある。戦う気の無いものを引きと

どめるほど俺は酔狂じゃない」

亡命と言ふ言葉を聞くと何人かの兵士が少しばかり顔をこわばらせているのをクリスは見逃さなかった。

「我等の目的は一つだ。地球諸国の傀儡であり、民衆に恐怖を与え今のこの国の状況を作り出したゴンザレス政権の打倒である。私はそのために人民政府に協力することを決意した。しかし、これは俺の勝手な決意だ。志が違うものならば、去ってくれても俺はそいつを咎めることもしない。それも一つの生き方だ」

そう言つと再び嵯峨は懲罰兵を眺めた。黙つて彼らは嵯峨の言葉を聞いていた。

「もし、この中に俺と目的を同じくしているものがいたら残れ。その命、俺は無駄には使わん！」

その言葉に部隊員が歓声を上げる。懲罰兵の中、先頭に立っていた先ほど伊藤に石を投げた将校が敬礼を返した。次々と懲罰兵達は嵯峨に敬礼を送った。嵯峨はそれに返すように敬礼をすると本部へと消えていった。

「各員以前の階級を申告しろ！直ちに被服の支給を始める！」

伊藤はそう叫ぶと部下達に指示を与え始めた。

伊藤の部下達は素早く本部からテーブルを持ち出し、並べていく様を見つめていた。懲罰兵達も感心する手際で瞬く間に支給の受付が設営され、伊藤達が被服の支給を開始した。それを感心した顔で眺めてしまおうクリス。パトロール部隊に同行していたハワードも戻ってきて軍服を支給されている兵士達をカメラに収める。伊藤もそれぞ咎めることもしない。

「支給を受けたものはしばらく整列している、剥奪前の階級を申告してもらおう！」

伊藤の言葉に目を輝かす懲罰兵達。

「伊藤中尉、全員参戦すると思いませんか？」

先ほどからたまっていた質問をクリスはぶつけてみた。

「それは無いでしょう」

その言葉に先ほど伊藤に石を投げた将校が近づいてきた。

「いえ！我等の意思は決まりました。この戦いを貫徹……」

男の言葉に思わず嵯峨の顔を見る。

「そう言うのが隊長が嫌いな精神論なんだよ」

伊藤は低い声でその将校をたしなめる。

「一時の高揚感で正義を振りかざすのは止めておいた方が良く。結果はつまらないぞ」

「そう言う姿は政治将校とは思えない。クリスはそう見ていた。」

「ああ、そうだった。君の姓名と階級を聞いていなかったな」

「イ・ソンボン少尉です。医師として参戦していました」

「お医者さんですか。うちはそっちの人材足りなくてね。小学校の跡地が野戦病院にする予定ですから、たぶんそちらの勤務になるでしょう」

「そう言うと伊藤は再び書類に目を通し始めた。イはそれが少しばかり不満だというようにその場から懲罰兵がたむろしているところ

へと去った。

「そう言えばシャムは……」

伊藤がそう言ったのでクリスは周りを見渡した。懲罰兵の群れの中、一際小さい黒い帽子がちらちらと見える。クリスはそのままシャムのほうへと歩いていった。

シャムと熊太郎は懲罰兵達に囲まれていた。

「嬢ちゃん。あんたもこの隊員なのかね」

「そうだよ！私は騎士だからみんなを守らないといけないの」

「偉いんだなあ、嬢ちゃんは」

そう言われて照れているシャム。熊太郎は頭を撫でられながら甘い声で鳴いている。

「シャムちゃん。また友達が増えたな」

クリスの言葉に嬉しそうに頷くシャムがそこにいた。

「すいません！ホプキンスさん」

シヤムと懲罰兵が戯れる様子を眺めていたクリスに呼びかける女性の声が届いた。振り返ったクリスの前にパイロットスーツを着た女性の姿が飛び込んでくる。

「隊長が呼んでましたよ！」

そう伝えに来たのはセニアだった。淡い青い髪をなびかせてそれだけ言つとそのまま走つて格納庫の方に向かう。

「相変わらず愛想が無いな」

ハワードはそう言つと再び被服を受け取る懲罰兵の方にカメラを向けた。そう言われて思わず照れた笑いを浮かべるクリス。

「じゃあ、行つてくるか」

そうハワードに告げて、クリスは本部の建物に向かった。比較的閑散としているのは格納庫がほぼ完成しつつあり、多くがその見物に出かけているからだろうとクリスは思った。

そこで珍しく喫煙所でタバコを吸っている楠木が目に入った。

「ご苦労さんですねえ」

そう言つと楠木はくわえていたタバコを手を持った。

「ゲリラの方はどうなっているんですか？動きがあったという話は聞かないんですが」

「ああ、今は隊長が自重するようにと言ってますから。とりあえずにらみ合いですわ」

そのままタバコを灰皿に押し付ける楠木。

「近いうちに動きがあるか？」

「まあそうかもしれませんがね」

そのまま腰を上げ、楠木は管理部門の方に歩き出した。クリスはそのままエレベータの前に立つ。上に上がるボタンを押して静かにエレベータが来るのを待っていた。

「どうですか？慣れましたか？」

そう後ろから尋ねてきたのは明華だった。この部隊の人々は妙に人に絡んでくる傾向がある。それだけ人を信じているのかもしいない、そう思いながら小柄な明華を見た。幼く見える面立ちの中にも技術班を統べる意思の強さを感じさせる瞳にクリスは少し気おされていた。

「まあ慣れたといえば慣れましたがね」

そう言うと開いたエレベータに乗り込むクリスと明華。

「そう言えば柴崎機は誰が引き継ぐんですか？予備のパイロットはいないようですが、もしかして懲罰兵から引き抜くつもりだとか……」

「私が乗る予定です」

明華はそう断言した。いまひとつピンと来ていないクリスを眺めながら明華はもう一度口を開いた。

「一応、私も二式のテストには参加していますから。あれはかなり扱いに癖のある機体ですから。それに機種転換訓練が出来るほど余裕がある情勢では無いですからね」

明華はそう言うと三階のフロアーに停止したエレベータから降りていった。

クリスはそのまま明華が降りた上の階でエレベータを降りた。部隊経営の事務方のエリアらしく。隊員が書類を持って走り回っている。クリスはその間をすり抜けながら連隊長室をノックした。

「どうぞ」

嵯峨の声が響く。入るところではボルトアクションライフルのバレルを取り外して掃除している嵯峨の姿があった。クリスも初めて嵯峨の執務室に入ったが、ある意味、嵯峨と言う人物をこの部屋があらわしているように感じた。

まだ4日も経っていないというのに、この部屋には物があふれていた。ソファーには東洋の楽器と言うイメージしかない琵琶が置かれている。テーブルには拳銃がばらされた状態で放置されている。机の上には決済済みの書類が詰まれ、その隣には通信端末が運ばれた時のまま緩衝材を被った状態で鎮座していた。

「ああ、すいませんねえ。取材中でしたか？」

クリスの方を向き直り、嵯峨がにやりと笑った。

「いえ、いずれ彼らからもインタビューを取りたいんですが……」

「ああ、良いですよ。まああまり愉快な話は聞けないとは思いますがね」

そう言うつと嵯峨は机に置いてあったタバコに手を伸ばした。

「それとこつちでもちよつと愉快とは言えない話が入ってきましたね」

そう言うつと嵯峨は琵琶の隣に腰掛けた。向かい合つてクリスが座るのを確認すると嵯峨はタバコに火をつけた。

「どうしたんですか？」

クリスの言葉を聞いていないのか、嵯峨は琵琶を手に取ると調律を始めた。その慣れた手つきを見て、目の前の男が胡州貴族の名家で琵琶で知られた西園寺家の縁者であることを思い出した。

「一応、嵯峨の家の芸はコイツでしてね。演奏しましょうか？」

「ごまかすのは止めてください。何が起きたんですか？」

苛立つクリスを見てまた笑みを浮かべる嵯峨。彼はそのままタバコの灰をテーパールの灰皿に落とす。

「難民がこつちに向かっているとの情報が入ったんですわ」

嵯峨はそう言うのとクリスの反応を見た。クリスはその言葉についてのめりになっていた。

「共和軍が何かやったんですか？」

「いや、そんなことは無いと思いますよ。あちらさんも馬鹿じゃない。下手にゲリラ狩りを敢行すれば地球から支援に来ている各国の部隊が引き上げるなんて言う最悪のシナリオになりかねない。そのくらいのがわかる分別はあるみたいでね、あちらの指揮官にも」

再び口にくわえたタバコから煙を吸い込む嵯峨。クリスは黙ってその姿を見守っていた。

「そう言えば先日、ゴンザレス政権支持派の民兵組織が東モスレムへの越境攻撃をかけたましてね。あちらではいつ本格的な民兵の侵攻が開始されるかってことで、パニックが起きているそうすわ」

事実ここから東に300kmも行けばイスラム系住民の多く居住する東モスレム州にたどり着くことになる。そこでは先の大戦の時期からイスラム系住民と仏教系住民の衝突が頻発していた。その対立は共和軍の介入で本格的武力衝突へと発展した。

ゴンザレス共和政府支持派。西モスレム系イスラム武装組織。東和に支援されたイスラム、仏教、在地信仰現住部族の三派連合の三勢力が激しい戦闘を繰り広げている無法地帯だった。逼迫した状況だと言うのに嵯峨はのんびりと構えてクリスの出方を窺っていた。

「そうすると南と西には逃げられない住民が保護を求めて逃亡していると言う事ですか。規模はどれくらいですか？」

クリスの言葉に耳を傾けながらも琵琶を触っている嵯峨。静かに彼は口を開いた。

「こう言う状況では次第に雪だるま式に難民は増えるものですよ。うちに協力的なゲリラ勢力には彼らの保護を指示していますからどうにか統制は取れているみたいですがね。それでも少なくとも見積もって一万人。多ければ五万はいるかも知れませんか」

この人は状況を楽しんでいるのではないか？クリスはこの事態でも平然とタバコを吸って表情を崩さない嵯峨に恐怖のようなものを感じた。

「ですが、こちらとにらみ合っている共和軍は黙って通すでしょうか？」

「それが頭の痛いところだね。あまり優しい対応は期待できそうに無いですから。うちが見殺しにすれば地球各国に格好の兵員増派の口実を与えることになりますねえ。ようやく西部戦線で光明が見え

始めたときに水を差すのは……どうもねえ」

嵯峨は頭を掻いている。

「護衛の戦力を出すつもりは？」

クリスは苛立ちながらそう尋ねた。その言葉にやりと嵯峨は笑みをこぼした。

「ありますよ。それなりに少数精鋭なアサルト・モジュールを二機派遣するつもりでね」

その言葉がどうにもクリスには脳に絡みつくように聞こえた。明らかに自分とシヤムで出る。そう言っているように聞こえた。

「それでは私には四式の後部座席を空けて置いてください」

「ああ、わかりましたか。じゃあ相手もわかつてるんでしょ？」

嵯峨はそう言っていると吸いきったタバコを灰皿に押し付ける。

「シヤムちゃんじゃないんですか？そのためなんでしょ？あの機体に二式の部品まで流用して整備を続けてたのは」

そんなクリスの言葉に笑みで答える嵯峨。

「察しがいいですね。さすがフリーで飯を食っている人は考えることが違う。ただ、非常に不満そうなのは……まあ、理由はわかりませんがね」

「あの子の心はまだ子供ですよ！それを戦場に……」

「子供か大人か。そんなことは些細なことですよ。あいつは覚悟を決めた。戦うことを心に決めた。それが重要なんですよ。餓鬼だろうが大人だろうが、選択を迫られることは人生じゃあよくあることですよね。年齢や性別など関係ない。決めるべき時に決めた心を裏切るのは後々後悔を残すことになる。これは俺も経験してますから分かりますよ」

そう言うと嵯峨は再び口にくわえたタバコに火をつけた。

「じゃあ行きますか」

そう言うつと吸いかけのタバコを灰皿でもみ消す嵯峨。そのまま立ち上がると彼は書類に埋まっていた電話を掘り出した。

「ああ、俺だ。ジャコビンはいるか？」

クリスもすぐに立ち上がる。それを制すると嵯峨は受話器を持ち直す。

「ああ、そうだ。じゃあすぐに向かうから起動準備よろしく。それとシャムにも昨日言つといた作戦始めるからつて伝えてくれ」

そう言うつと嵯峨は受話器を置く。嵯峨はそのまま壁に掛けられた軍刀を手にする。

「どうもコイツがないと落ち着かなくてね」

そう言いながら腰に刀を帯びる。『人斬り新三』と呼ばれて憲兵隊長時代に何人と無く人を殺めてきた嵯峨の狂気を示すダンピラ。

「縁起を担いでいるんですか？」

「まあそんなところですよ」

そう言うつと嵯峨は隊長室を出た。

胡州浪人は別として、あまり彼は部下には畏怖の念は持たれていない。むしろいつも七厘でシャムからもらった干し肉をあぶついたり、昼間から酒を飲んでいたりする嵯峨の態度は部下に親しまれる、それ以上に舐められているようなところがあった。そんな作戦部の隊員は笑顔で嵯峨を送り出す。そして嵯峨は軽く敬礼をしながらエレベータにまでたどり着いた。

「作戦部の隊員に伝えたんですか？」

「ああ、これは俺の独断専行だから。そんなわけでこれは俺と家臣のシャムが勝手にやったことにしといた方が後々意味が出てくるんでね」

そう言うつと嵯峨は開いたエレベータの扉に入り込んでにんまりと

いつもの人の悪そうな笑みを浮かべた。

「ですが、アサルト・モジュール二機でやれるんですか？おそらく北兼台地の入り口には共和軍の防衛ラインがあるはずですよ。そこで足止めを食らっている難民に活路を作るなんて……」

「酔狂だと俺も思いますよ。だがね、ホプキンスさん。俺にも意気地と言つものがある。俺の名前を聞いて頼ってくる連中を見殺しにするほど俺の根性は腐っちゃあいないんでね」

もう一度悪党の笑顔を浮かべると一階に到着したエレベータから降りた。そこにはいつもの民族衣装を着たシャムが敬礼をしながら待ち受けていた。

「殿下！」

「殿下は止めてくれ、マジで」

シヤムの言葉にそう言うのと嵯峨はそのまま歩き出す。その後ろをちよこまかと民族衣装のシヤムが付いて回る。懲罰兵達が新しい軍服に袖を通して脇を通り抜けようとするが奇妙な光景に懲罰兵達の視線が二人とその後ろに続くクリスに集まる。

「隊長！何をするんですか？」

伊藤から声をかけられた嵯峨は一度天を仰いだ後にこう言った。

「ああ、偽善者ごっこ」

煮え切らない顔の伊藤を置いたまま嵯峨は歩き続ける。広場に生えた草を食べていた熊太郎も、シヤムが歩き出したことを知って彼女に寄り添うように歩く。

「バスさんに伝えなくて良いんですか？」

「ああ、別に困ることは無いでしょう」

クリスは振り向いた嵯峨にそう返した。ハウードのほうを見れば、懲罰部隊の兵士達と談笑を交わしているのがわかる。まだ格納庫は完成していなかったが、くみ上げられたクレーンの台座の下、嵯峨の黒い四式と白いシヤムのアサルトル・モジュールが鎮座していた。

「おい！ジャコビン！」

嵯峨は四式のコックピットに頭を突っ込んでいるキーラに声をかけた。白いポニーテールが嵯峨を見返してくる。

「隊長！ばっちりですよ。シヤムちゃんの機体も隊長の指示通りのセッティングにしておきましたから」

キーラの額に汗がにじんでいるのがわかる。回りの隊員たちは、交換した部品の再利用が可能かどうかのチェックをしている。戦場での応急処置を機体に施す整備班員独特の緊張感が漂っていた。

「シヤム、一応言っておくがエンジンは10パーセント以下の出力

で回せよ。そうしないと各関節部のアクチュエーターが持たないからな」

「でもパルス推進機関は出力上げても良いんでしょ？」

珍しくシヤムがパイロットらしい口を利いているのにクリスは少し驚いた。

「まあ、リミッターかけてるからな。それでもあんまり出力をかけるなよ。お前さんのクローム・ナイトはエンジン出力が大きすぎるんだ。二式のお古のパルス推進機関だ。出来るだけ抑え気味で頼むぜ」

そう言つと嵯峨はコックピットに伸びるはしごを上り始めた。クリスもまたその後続く。

「歩兵の支援も無しにどうやって難民の逃走路を確保するんですか？」

そう尋ねたクリスににやりと笑つ嵯峨の顔が飛び込んできた。

「それはね……企業秘密つて奴ですよ」

そう言つと嵯峨はコックピットの上に立った。クリスはせかさねるようになつて多少ましになつた四式の後部座席に身を埋めた。

「そんなじゃあ各部チエックでも始めますか」

コックピットに座った嵯峨が計器をいじり始める。油まみれのつなぎの整備員の合図でコックピットカバーと装甲板が下ろされた。

「前部装甲に増加装甲をつけたんですか？」

微妙な前面のイメージの変化を思い出しクリスが尋ねた。

「まあね。今回の出撃は予想できた範囲内の出来事ですね。ジャコビン！ちゃんと不瑕疵金属装甲つけたんだろっな？」

「ばつちりですよ。これならM5のレールガンの直撃の二、三発くらいいならびくともしませんよ！」

開いたウィンドウの中のキーラが叫ぶ。

「二、三発ねえ、まあその程度は食らうのも作戦のうちか」

そう独り言を言うと、嵯峨はエンジンの出力を上げてみた。独特の細かい振動がコックピットを襲う。

「シヤム。何度も言うが抑えて行けよ。一応、OS関係はリミッター装備で出力は上がらないことになっちゃあいるが、感応式操縦システムにはOSに依存しないシステムが組まれてるからな。あくまで抑えていけ」

「うん！わかった！」

クローム・ナイトのウィンドウにシヤムの姿が映っている。当然と言うようにその後ろには熊太郎の顔も入り込んでいた。

「熊と一緒にねえ。まあ良いか。そんなじゃあ出しますよ」

嵯峨はそう言うと四式を立ち上がらせた。各部に設置されていた機器がパージされる。そのまま横に置かれた220ミリレールガンを握って格納庫前で照準機器の接続を行う。クリスが全周囲モニターでシヤムのクローム・ナイトを見た。白銀のその機体は初めての使用にもかかわらず同形の220ミリレールガンを使い慣れているように手持ち、嵯峨の四式に続いた。

「シヤム。とりあえず低空を飛行して敵駐屯地まで進出する。あくまで今回は人道的処置が目的だ。出来るだけ敵さんには構うな」

嵯峨はそう言うとそのまま格納庫前に立つ誘導員の指示の下、パルス推進機関の出力を静かに上げて行った。

「大丈夫なんですか？彼女は」

クリスが尋ねるが、嵯峨はただ笑みを浮かべるだけだった。クローム・ナイトは隣で同じようにエンジンの出力をパルス推進機関に送っている。

「何度も言うけどエンジン出力には気をつけるよ」

そう言うつと嵯峨はそのまま機体を浮上させた。続いて浮上するクローム・ナイト。

「それじゃあ偽善者ごっこ開始！」

そう言うつと嵯峨は北兼台地に向けて進路を取った。

基地を出て5分と経たなかった。

『……繰り返す！北兼軍閥の機体に告ぐ！この空域は飛行禁止空域に辺り……』

上空から現れた東和空軍の攻撃機が押さえ込むように降下してくる。

「ちょっと、はしゃぎすぎたかね」

先日の戦闘で飛行禁止条約を踏みにじられた東和空軍は神経質になっているようだった。嵯峨は高度を森の木ぎりぎりまで落とす。クリスが振り返れば、シヤムも同じ高度で進行を続けている。

「ちゃんと降りましたよ」

そう言うつと嵯峨は通信ウィンドウを開いていた東和軍のパイロットににんまりと笑いかけた。不愉快だと言うように通信が途切れる。「大丈夫ですか？今の通信が共和軍に……」

「それが狙いですよ。難民から注意をそらすのが今回の作戦の目的ですから」

淡々とそう言うつと、北兼台地へ続く溪谷を進む嵯峨。時折ロックオンゲージが点灯する。

「歩兵の対空ミサイルか。ずいぶん時代錯誤なものを使ってるんだねえ」

嵯峨はそう言いながらさらに機体を加速させる。重力制御式コックピットは、そんな急加速にもかかわらず対Gスーツを着ていない嵯峨とクリスにも快適な飛行を保障していた。

「あと、五分で見えてきますよ」

嵯峨はそう言うつとタバコに火をつけた。亜音速で飛ぶ四式のコックピット。いくらクリスがタバコが嫌いだからと言って換気をするわけにもいかない。思わず振り向くが、シヤムの白銀の機体はびっ

たりと嵯峨の四式を追尾している。そこで警告が鳴り、レーダーのモニターが何かを捉えたことを知らせる。

「邀撃機、三機か。シヤムこちらからは撃つんじゃねえぞ」

「わかってるよ！」

通信画面の中でいつもにない真剣な表情のシヤムの姿が映っている。

「M5？おいおい、機種転換訓練もろくにしていないで。もったいねえことするねえ」

嵯峨はそう言うとも目の前に現れた共和軍のM5に突進した。

「それじゃあ戦闘になるじゃないですか！」

クリスの叫びの通り、怯えたM5のパイロットはミサイルを乱射した。嵯峨はそのまま機体を上昇させる。誘導ミサイルは二発が樹に当たり爆発するが、残りの四発が嵯峨の四式を追尾してくる。

「めんどくさいねえ」

嵯峨はそう言うともチャフをばら撒き、指向性ECMをかけた。ミサイルは急に目的を失ったようにはらばらに飛び始め、地面に激突して爆発する。

「間合いがありすぎるんだよ」

嵯峨は再び機体を急降下させる。

「隊長！」

「シヤム。弱いもの虐めは止めとけよ。どうせ突破できるんだから」

嵯峨はそう言うともレールガンを乱射するM5の脇をすり抜けた。

「火器の調整もしていないのに出撃とは、まったくご愁傷様だな」

そのまま嵯峨は三機の共和軍のM5を突破して共和軍の基地の上空に達した。

共和軍の基地上空。嵯峨は機体を旋回させた。そして共和軍の基地はすでに三機のフランス製のアサルトモジュールが着陸しているのが見て取れた。基地の防衛隊の兵士が十重二十重の包囲網を敷いているのが上空からでも見える。

「先客がいたか。ありやあ東モスレム解放同盟の機体だな」

嵯峨は下を見やりながら頭を掻いた。フランスを中心とした軍事企業体の輸出向けアサルト・モジュール『シャレード』。アラブ連盟加盟国をはじめとした国に輸出され成功を収めた機体とされている。その褐色の機体が三機、共和軍のM5に取り囲まれていた。

「ほう、あの隊長機は『ベンガル・タイガー』だな」

嵯峨がゆっくりと旋回しつつ高度を落としながら隊長機の画面を拡大して、その肩に描かれた虎のマーキングを見てつぶやいた。

「アブドゥール・シャー・シン。解放同盟のエースじゃないですか」

クリスは目を見張った。

アブドゥール・シャー・シン。西モスレム国防軍を除隊して東モスレム解放運動に身を投じた志士。ゴンザレス政権との対立を続ける東モスレム三派の兵には『ベンガル・タイガー』の二つ名で呼ばれる猛将である。

「こりやあ繋がっても話にならんかなあ」

そう言いながらさらに高度を下げ、基地の上空で旋回を続ける嵯峨。クリスは基地よりもその隣を流れる河に沿った街道に設けられた検問所を見ていた。黒くその北兼台地側に見えるのはすべて人間の頭だった。高度が下がるに従って、難民達が検問所の兵士達と問答を続けている様が見て取れる。

「早く出るってんだよ馬鹿野郎」

嵯峨が独り言を言う。振り向けばシャムも同じように旋回を続け

ていた。追跡してきた邀撃機は、基地上空での戦闘を嫌って近くの森に着陸してレールガンを構えている。

「北兼軍閥所属機に告ぐ！現在、我々は……」

「うるせえバーカ！とつとと降ろさせろ！そのアラブ人と目的は同じだ！喧嘩するつもりはねえよ！バーカ！」

嵯峨がいきなり怒鳴りつけたので、オペレーターの女性士官は驚いたような顔をした。そして、その話している相手が北兼軍閥の首領、嵯峨惟基中佐であることに気づき、立ち上がって画面から消えた。

「臨機応変。戦場じゃあ何が起きるかわからねえんだ。少しは頭を使えつての」

そう言う嵯峨はまたタバコに手を伸ばすが、クリスの表情が視界に入ったのか、その手を止めた。

「嵯峨惟基中佐。それでは第三滑走路に着陸していただけますでしょうか？」

管制部長と思われる恰幅の良い佐官の指示を聞くと、嵯峨はM5四機が待機している滑走路に着陸した。シャムのクローム・ナイトはそれに続いて静かに着陸を済ませた。

静かに着地する嵯峨の四式とシヤムのクローム・ナイト。

「シヤム。そのまま待機している」

「了解！」

わざとらしく敬礼する少女にクリスの頬は緩んだ。

「すみません、ホプキンスさん。右側のラックにヘルメットが入っているでしょ？」

嵯峨は帽垂つきの戦闘帽を脱いで操縦棹に引っ掛けると振り向いてきた。クリスはその奇妙なヘルメットがあるのを見つけた。頭と顔の上半分を隠すようなヘルメット。そして手を伸ばして持ち上げると、その重さは明らかに鉛でも出来ているような重さだった。

「なんですか？これは」

クリスからそれを受け取るとにやりと笑ってそれを被る。

「まあ、これからの茶番に必要な小道具ですわ」

そう言う嵯峨は愛刀兼光を手にコックピットを開いた。こちらに駆けて来る兵士達を見つめる嵯峨。

「嵯峨惟基！投降の目的を……」

「誰が投降したって？あつちの連中と目的は同じだ。話し合いに来たんだよ。あそこの難民の引き取りだ！」

嵯峨はそう言うとそのまま四式の右手を伝って地面に降り立つ。

「おいおい、熱烈歓迎と言ったところか？あんた等の同盟国の文屋さんも乗ってるんだ。下手なこと書かれなくては銃は降ろした方が得策だな」

クリスはカメラを兵士達に向ける。

「写真は撮るんじゃない！貴様は……」

「ああ、報道管制？あの騒ぎの写真は上から撮ってたんだ。共和軍の非人道的な……」

嵯峨の言葉に兵士達に動揺が走る。

「わかった。ではその刀を置いてもらおう。それに身体検査をさせてもらうからそのふざけた仮面を外してもらおう」

嵯峨が笑い始めた。彼の真似をして四式の右手に飛び移っていたクリスはその突然の行動を見つめていた。

「なにが可笑しい！」

「いやあ共和軍の皆さんは勇敢だなあと思ってたね。こいつを外して身の安全が図れると思ってるんだ。まあ、知らないってことは人を勇ましくする物だったのは歴史の教えるところでもあるがね」

嵯峨はそう言いながら歩み寄ってきた兵士に兼光を手渡した。

「そいつは慎重に扱ってくれよ。一応、胡州の国宝だ。傷一つで駆逐艦一隻ぐらいの価値が落ちるからな」

そんな嵯峨の言葉に兵士は顔を青ざめさせた。

「ほんじゃあ基地の隊長にご挨拶でも……」

「動くんじゃない！」

防衛隊の隊長と思われる佐官が部下の兵を盾に怒鳴りつける。

「なんすか？そんなに怖い顔しないでくださいよ。気が弱いんだから」

嵯峨がポケットに手をやると、兵士が銃剣を突きつけてくる。

「タバコも吸えないんですか？」

「タバコか、誰か」

佐官は兵を見回す。一人予備役上がりと思われる小柄な兵士がタバコを取り出した。

「遼南のタバコはまずいんだよなあ」

「贅沢を言うな！」

「へいへい」

嵯峨はタバコをくわえる。兵士の差し出したライターで火を点すと再び口元に笑みを浮かべながら話し始めた。

「あそこのお客さんは何しに来たんですか？」

兵士達が振り返る。同じように三機のシャレードは取り囲まれたままじつと周りの守備隊の動向を窺っていた。佐官は一瞬躊躇したが、嵯峨ののんびりとした態度に安心してかようやく盾代わりの部下をどかせて堂々と嵯峨の前に立つと口を開いた。

「難民の兼陽への避難の為の安全を確保しろと言うことを申し出て来ているんだ。なんなら……」

嵯峨はそれを聞くと大きく息を吸ってタバコの煙で輪を作って見せた。

「じゃあ、あんた等にレールガンの雨を降らしに来た訳じゃないんだからさ。とりあえず降ろしてやったらどうです？」

そう言っって煙を佐官に吹きかける嵯峨。その態度に明らかに機嫌

を損ねたように佐官が嵯峨に顔を寄せる。

「貴様に指図されるいわれは無い！」

そう言つと佐官は拳銃を抜いた。

「怖いねえ。シヤム。ちよつと脅してやるから管制塔にでもレールガンを向ける！」

佐官の顔を見ながらにやにや笑つ嵯峨。

『了解！』

シヤムのクロームナイトが手にしたレールガンを管制塔に向ける。

「わかつた！司令官に上申するからそこで待つように！」

それを見て佐官は待機していた四輪駆動車に乗り込んで本部らしき建物に向かつた。

「さてと、偉いさんもいなくなつたわけだ。ちよつとは肩の力抜いた方が良いんじゃないですか」

嵯峨の言葉に戸惑つ兵士達。彼らの顔を見ながら嵯峨は満足げにタバコをくゆらせた。

「あー」

一人の若い下士官が微笑みながら顔を覗き込んでくる嵯峨の独特な雰囲気能耐え切れずに声をかけてきた。

「はい、何でしょう」

嵯峨はそう言うときわえていたタバコを、ズボンのポケットに入れていた携帯灰皿に放り込む。

「あなたは本当に嵯峨中佐なんですか？」

彼の指摘ももつともなことだとクリスは思った。北兼軍閥の指導者として多くのメディアに流布されている重要人物がほとんど手ぶらで敵陣にやってくるなど考えられないことだ。

「ああ、仮面はしてますが本人ですよ」

そう言うときまたタバコを取り出し火をつける。

「ああ、なんで俺が自分で出てきたかって聞きたいんでしょう？まあ、アサルト・モジュールでの敵中突破、それにその後の交渉ごととか、任せられる人物がいなくてねえ。どこも人手不足ってことですよ」

そう言いながら笑う嵯峨。兵士達はお互い顔を見合わせた。

「しかし、我々がここでああなたの身柄の拘束をするとか……」

「ああ、それは無理」

中年の兵士の言葉をすぐさま嵯峨はさえぎった。

「なんでこのヘルメットしてると思います？」

嵯峨の口元が笑っている。こういつときの子供のような目つきを思い出してクリスは危うく噴出すところだった。

「趣味ですか？」

下卑た笑いを浮かべる無精髭の古参兵。その表情に嵯峨は笑みで返した。

「あのねえ、コイツは思念波遮断の効果のあるヘルメットでしょね。」

たとえば人間の心臓の動脈はどれくらいの太さがあると思いますか？」

謎をかけるように嵯峨は兵士達を見回した。

「まあ、答えはどうでも良いんですがね。噂には聞いてるんじゃないですか？遼州王家の血を引くものに地球人には考えられない力を持つものがあるってこと」

嵯峨はそれだけ言うともたタバコをふかす。彼の狙いはみごとに決まっていた。人間の心臓の動脈、王家の力。

一つの都市伝説として知られる『王家の力』。それは透視、空間干渉、思念介入と言った超能力者の部類に入るような力を持った存在がいるらしいというものだった。遼南王家は一切その件には沈黙を守っていただけに真実味がある。兵士達の顔が不安に包まれる。

「安心していいですよ。俺は今のところそんな力を使う気は無いですから」

「じゃああなたは力を使えるんですか！」

幼く見える少年兵士が叫んだ。

「どうでしょうね。否定も肯定もできませんね、使えるかもしれない……あるかもしれない。そんなところでしょうか？不気味ですよ？それが俺の切り札だね」

そう言うと嵯峨はヘルメットの下から見える頬を緩めた。

「しかし、何ですかねえ。あちらさんにもらみ合いは疲れたでしょうに」

嵯峨はようやくクックピットから降りようとしている三派連合の隊長機を見つめていた。

「人の心配をしている場合じゃ……!!」

剣を預かっていた若い兵卒が急に剣を落としそうになった。傷がつけば駆逐艦一隻分の金額を請求されると思っていた彼が無理に手を伸ばしたのが悪かった。剣は地面に転げ落ちると誰もが思った。

しかし、剣は滑るように地面を飛んで嵯峨の手に握られた。

「危なかったなあ。ちゃんと持つといってくれないと」

嵯峨の言葉を最後まで聞くだけの度胸のある兵士はいなかった。彼らはそのまま蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

「なんだよ。人のものが傷つくかもしれないって言うのにな」

「嵯峨中佐！」

クリスのその言葉に嵯峨は振り向いた。仮面の下ではいつもの困ったような顔をあるに違いない。

「見ました？」

嵯峨はそう言うのとポケットを漁る。

「釣り糸、忘れたなあ」

「そうじゃないでしょ！今のはなんなんですか！」

確かに今の動きは嵯峨が剣を操っているとしか思えなかった。当然すべてを見ていたクリスにはこの芸当が手品などで無いことは分かっている。

「ちよつとしたお座敷芸。と言うことでどうです？」

嵯峨はそう言うとき今度は自分の軍服のポケットからタバコを取り出して火をつける。

「それがちよつとしたお座敷芸？それなら……」

「ああ、なんならアメリカ陸軍に問い合わせてくださいよ。俺が知っている以上にあちらさんは俺のことを良く知っていますから」

嵯峨はそう言うのと剣を腰の金具に取り付けた。本部のビルと思われるところで逃げ出した兵士が上官に何かを訴えているのが良く見える。

「まあ、初めて見る人には刺激が強すぎたかねえ」

タバコの煙が目にしみたクリスの表情を察して、嵯峨はタバコを携帯灰皿に放り込むと、四輪駆動車でこちらに向かってくる上官を待っているように直立不動の姿勢をとった。

「こいつはどうも」

降りてきた基地の幹部に嵯峨は敬礼をする。初老の共和軍の中佐は怪訝そうな視線を嵯峨に送る。

「嵯峨惟基中佐。難民の件で話をしたいとのことだが……」

「やっぱり基地司令は出てきませんか。それじゃあこっちから出向きましょう」

そう言って歩き出そうとする嵯峨の前に運転してきた士官が立ちはだかる。

「貴官の要求は基地司令に聞かせる！このまま帰りたまえ！」

「このまま帰れだ？なんなら帰るついでにここを血の池地獄に変えても良いんだぜ」

これまでと明らかに違うどすの利いた恐喝染みた口調の嵯峨。一同は明らかに怯んでいる。嵯峨はさらに追い討ちをかける。

「あんた等は状況がわかってるのかよ。あちらの三派の機体。そして俺とあの白い機体。現状じゃあこの基地を攻撃できる機動部隊は二つはあるってこと。それにあの難民の群れだ。ここの基地の鉄条網が破られたら乱入してきた難民になぶり殺しにされることくらい考えが回るんじゃないの？」

仮面の下だが、クリスはその口調から嵯峨が下卑た笑いを浮かべていることが想像できた。

「ならなぜこれまで攻撃してこなかった！」

白いものの混じる髭を直しながら、どうにか体勢を持ち直した少佐がそう叫んだのは無理も無いことだった。

「あのねえ、ここを攻撃するのは簡単ですよ、それは。だけどねえ、北兼台地の入り口であるここを維持するのは俺も難しいと思いますよ。うちが何機のアサルト・モジュールを持っているかは言うまでも無くそちらさんでつかんでいるでしょうが、もしここをすぐに北

兼台地制圧の拠点にしようと思えば、この馬鹿みたいに目立つ台地の上、さらに街道の周りには障害物は何も無い。稜線沿いに砲台を並べりゃこの基地は良いのだ。本気でここを守るにはざっと見てあと三倍のアサルト・モジュールが必要になる」

そう言うつと嵯峨は再びタバコに火をつける。

「一方、俺がここを攻めたとして近隣地域制圧のために必要な歩兵部隊、治安維持に必要な憲兵部隊、それに右派民兵の奇襲に備えての機動部隊。必要になるものばかりですわ。とてもじゃないが、今はこの基地は落とせないっすよ。今はね」

『今は』と言うことを強調する嵯峨。共和軍の少佐は言いたいことが山ほどあると言う表情で嵯峨をにらみつける。

「怖い顔しないでくださいよ。俺はシャイなんでね。だからこんな仮面をつけないと……」

「ふざけるな！」

「そうですか」

聞き分けの無い子供をあやすような声を漏らした後、嵯峨はヘルメットに手を当てた。将校が、しまったと言う顔で嵯峨に手を伸ばす。だが、嵯峨は何事も無かったようにヘルメットを脱ぎ捨てた。悪戯を咎められた子供のような視線が共和軍の士官達を射抜いた。

「まあ、何度も言ってますが、喧嘩しに来たわけじゃないですからね」

足元に手にしていたヘルメットを放り投げる嵯峨。

共和軍の士官の顔が青ざめた。目の前にいるのはニュース映像でもよく出てくる北兼軍閥の首魁、嵯峨惟基のそれだった。

なぜ彼が奇妙なヘルメットを被っていたのかは、先ほど逃げ出した兵士から聞かされていた。

「なんすか？取って食うわけじゃ無いんですから。いい加減、司令官殿にお目通りをお願いできませんかねえ」

クリスは一向に嵯峨がヘルメットを拾いそうにないと見てそれをまた持ち上げた。今度は嵯峨は彼に見向きもしない。その視線は共和軍の初老の佐官に送られている。

「それでは少し待ちたまえ」

そう言つと佐官は車の中の兵士に目配せした。

「あと、あそこの勇者も仲間に入れてやったほうが良いんじゃないですか？」

嵯峨はタバコの煙の行く先で押し問答を続けている東モスレム三派の英雄、アブドウル・シャー・シン中尉に目を向ける。

「わかった。これから調整する」

佐官はそのまま無線機に小声でささやいている。嵯峨はそれを満足げに眺めながらタバコをくゆらせる。

「まだつすか？」

嵯峨特有の自虐的な笑みがこぼれる。画像通信でもないのに頭を下げる佐官を見てクリスも噴出すのを我慢するのが精一杯だった。

「嵯峨中佐。来たまえ。それと記者の方は……」

「茶ぐらい出してやんなよ。わざわざ地球のアメリカからいらつしやつてるんだからさ」

『アメリカ』と言つ言葉強調して見せる嵯峨。そして隣に寄せられた四輪駆動車の後部座席に乗り込んですぐに腕組みをしながらクリスに目をやる。その緩んだ表情にクリスは呆然としていた。

「それじゃあ、君。記者の方を案内してくれ」

苛立っている佐官と目が合った小柄な下士官がクリスの案内役に指定された。嵯峨を乗せた車が本部のビルへと向かう。義務感からか恐怖からか黙っている共和軍の伍長のあとに続くクリス。視線をシンのほうに向ければ、パイロットスーツ姿のシンが同じように基地警備兵に囲まれながら本部に向かって歩き出していた。

「地球……アメリカからとはずいぶん遠くからいらっしやいましたね」

皮肉の効いた言葉を言っただつもりだろうか、クリスは頬を引きつらせる伍長を見ながらそう思った。彼らの同盟軍であるアメリカの記者が敵である北兼軍閥の首魁と行動を共にしている。この伍長でなくても面白くは無いだろう。カービン銃を背負っている彼は時々不安そうな視線を基地の隣の検問所に向けている。今のところ難民も警備兵も動くようには見えない。だが、クリスは何度と無く同じような光景を目にしてきた経験から、その沈黙が日没まで持つものではないことはわかっていた。

共和軍支持の右翼民兵組織と人民軍が組織した解放同盟。そして、北兼軍閥の息の入った王党派ゲリラ。彼らがこの混乱を利用しないほうがおかしい。嵯峨の余裕のある態度も、基地守備隊の将校たちの暗い表情も、彼らが次の状況をどう読んでいるかという証明になった。

格納庫の隣の休憩室のようなところにクリスは通された。

「会談終了までここで待っていただきます。そこ！お茶でも入れたらどうだ！」

伍長はぼんやりとクリスを眺めている白いつなぎを着た整備兵を怒鳴りつける。明らかに士気が低い。クリスが最初に感じたのはそんなことだった。

共和軍は北天包囲戦での敗北から、北兼軍閥との西兼の戦いでも魔女機甲隊に足止めを食らい、撤退を余儀なくされていた。中部戦線では人民軍の総攻撃が乾季にはあるとの噂が流れている。そして北兼軍閥と共に人民軍側につくことを表明した東海の花山院軍閥の態度は兵達まで噂になっているのは確かだった。そして共和軍の切り札ともいえるブルゴーニュ候の南都軍閥は東モスレム三派との小競り合いで次第に体力をそぎ落としていることも彼らの耳には届いているのだろう。

「安心しなさいよ！私等は話し合いに来ただけなんだから！シン少尉がアスジャーソン師の親書を……」

「うるさい！そこで静かに座っている！」
二人の東モスレム三派軍のパイロットを連れて休憩所に入ってくる。叫んでいるのは女性パイロットだった。どこかで見たことがあるな。クリスはそう思いながら釣り目の少女の顔をちらちらと眺めていた。

「あら、篡奪者のところの記者さんかしら？」

あからさまな敵意をクリスに向ける少女。言葉に敵意や殺意が乗ることがあるのは戦場を潜り抜けてきたクリスも良く知っている。この十五、六と言った少女は明らかにクリスに敵意を抱いていた。細い目に敵意を持ってにらみつけられるとクリスも自然と睨み返している。

「やめなよライラ。君の伯父さんもあの人々を救う為に話し合いに来たんだ！だから……」

「何よ！ジェナンまで！あの男が話し合い？どうせこの基地を落とす機会を狙っているんでしょ？それに何もしいと思っても、この基地の戦力を偵察して攻勢に出た時の資料にでも……」

ジェナンと呼ばれた青年はライラと呼ばれた少女の頬に手を伸ばした。少女の言葉が止まった。クリスは先ほどの二人の言葉から職業的に必要な項目を質問として纏めることに成功した。

「ライラさん、で良いんだよね？失礼だが君のフルネームは？」

「さすが記者さんね。でも名前を名乗る時は自分から名乗るのが礼儀じゃないの？」

ライラの涼しい視線がクリスを打った。

「ああ、私はクリストファー・ホプキンス。一応フリーのライターで……」

「アメリカ合衆国上院議員、ジョージ・ホプキンス氏の長男ですか」

ジェナンと呼ばれていた長髪の浅黒い肌の青年が言葉を継いだ。

「良くご存知ですね。じゃああなたから自己紹介を願えますか？」

クリスは青年に向き直った。

「僕はアルバナ・ジェナン。見ての通り東モスレム三派のアサルト・モジュール乗りです。そして彼女が……」

「私はムジャンタ・ライラ。残念だけどあなたを乗せてきた人でなしの姪に当たるの」

クリスはようやくこの少女のことを思い出すことに成功した。

ムジャンタ・ライラ。

東海に拠点を持つ花山院軍閥は、ゴンザレス政権の登場と共に東海の支援を得て遼南共和国からの独立を宣言した。その皇帝に据えられたのはムジャンタ・バスバ。ライラの父、嵯峨の同じ母親を持つ弟である。

二年前。北兼軍閥は人民政府に協力を求められ、花山院軍閥を攻めた。花山院軍閥は猛将として知られる花山院康永少将を中心に善戦するが、突然奇襲をかけた北兼軍閥相手に敗北を喫した。攻撃指揮を取っていた嵯峨は、弟、バスバの引渡しを条件に兵を引くとの条件を出した。自身の保身の為、軍閥の首魁である花山院直永はムジャンタ・バスバの妻子を嵯峨に引き渡した。嵯峨は躊躇無く弟の首を落として東海街道に晒した。兄の翻心に激怒した康永はバスバの妻子を連れ東モスレムを頼って落ち延びて行った。それが嵯峨の悪名を高めた東海事変の顛末だった。

敵意むき出して、クリスの方を見つめてくるライラの気持ちもわからないではなかった。

「お湯持って来ました」

二十歳にも満たない共和軍の少年兵がポットと湯のみ、そして急須などをテーブルに置いてまわる。

「なぜ、あなたはあの人でなしの取材をしているんですか？」

「やめるんだ、ライラ」

「いいでしょ！私はその記者さんに用があるの」

強い調子でジェナンに言い放つと、ライラはクリスに迫ってきた。「君はあだ討ちでもするつもりなのか？」

クリスの問いに少女はテーブルを叩く。

「当たり前よ！あの卑怯者は花山院直永を騙してお父様を殺したのよ！軍閥の頭目に収まっているのうのと暮らしている権利なんて無い

んだわ！」

まわりの共和軍の兵士達は黙ってライラを見つめていた。

「感情に流されているが言っていることはもつともな話だ。私も嵯峨と言う人物が持つ残酷さを取材する為にこの遼南にやってきたんだから」

クリスは少年兵に継がれた日本茶を口に含んだ。遼南の南部地方の茶畑は地球でも珍重される南陽茶の産地である。この甘みを含んだ茶を飲めることは遼南の取材を始めた時からの楽しみだった。

「じゃあなぜそんな残忍な男の乗る特機なんかで取材にまわってるのよ！」

クリスの一息ついたような顔にライラの苛立ちはさらに募った。

『俺もだいぶあの昼行灯に毒されてきたな』

そんなことを思いながらクリスは湯飲みをテーブルに置いた

「そうだな。私もよくわからない」

クリスの言葉に、ライラの表情が侮蔑のそれに変わった。だが、クリスは言葉をつないだ。

「しかし、彼は一からこの北兼台地の北に広がる地域の軍閥の首魁となった。そして彼を慕う多くの兵士達が今も戦っている。その理由を私は知りたいんだ」

クリスはそう言うときライラの顔を見た。戸惑いのようなものがそこにあつた。クリスは彼女に多くを語るつもりは無かった。戦場で、憎しみと悲しみを経験した人々を取材しながら得た作法。彼ら自身が今の自分を落ち着いてみる事が出来なければ語りかけるだけ無駄なことだ。そんな教訓が頭の中をよぎっていた。

じつとクリスをにらみつけるライラ。だが、今の彼女には何を言っても無駄だとあきらめ、クリスは再び自分で急須にお湯を入れた。「難民の状況はどうなんですか？」

ジェナンと言う東モスレム三派の士官は、落ち着いた調子で自分達を取り巻いている兵士達に声をかける。兵士達は困惑していた。彼らも今の状況を把握できてはいないのだろう。

「増えてはいるが減る見込みは無さそうと言うのが現状だな」

通信部隊の士官と思われる、いかつい体格の男が現れた。兵士は彼に敬礼をする。

「クリストファー・ホプキンスさん。お目にかかれて光栄ですね」

口ひげを蓄えた男は右手を差し出した。

「どちらで私のことを？」

「西部に向かったアメリカさんの部隊が軍の機関紙を残していきましてね、暇に任せて読んでみたんですが……」

男は静かに笑みを浮かべた。半袖の勤務服から伸びる腕に人工皮膚の継ぎ目が見えるところから、サイボーグであることがわかる。

「お名前聞いてもよろしいでしょうか？」

「一地方基地の将校の名前なんか聞くのはつまらないでしょう？」

どこかなれなれしい調子で話しかけてくる男にクリスは興味を覚えた。

「一応、読者の意見と言うものも聞かないといけないと思っているので」

そんなクリスの言葉に、どこか棘のある笑みを男は浮かべた。

「成田信三って言います。ここの通信施設の管理を担当していますね」

男は目をライラの方に向けた。ライラの目は憎しみに燃えた目と言ふものの典型とでも言うべきものだった。

「通信関連の責任者ならご存知でしょう。難民の方は……」

「ジェナン君。聞いているよ君の噂は、なんでも北朝の血を引いている東モスレムの若き英雄。いいねえ、若いつてことは」

そう言いながら成田は部屋の隅に置かれた紙コップを手に取ると、自分の分の茶を注いだ。

「難民の北兼軍閥支配地域への移動と言うことでまとまってきたよ、話し合いは。上を飛んでる東和の偵察機の映像がアンダーグラウンドのネットに流出して大騒ぎになってるからな。もし、こここの検問で銃撃戦にでもなったら基地司令の更迭どころじゃ話がすまなくなりそうなんだな」

成田は悠然とそう言うつとクリスの正面に腰を下ろした。

「しかし、ライラ君だったかね。そんなに嵯峨と言う男が憎いかね」

成田は茶を口に含みながらつぶやいた。

「父の仇ですよ！……憎いに決まってるじゃないですか！」

ライラはクリスに当り散らした後で、少しばかり冷静にそう答え
た。

「殺されたから殺す。悲劇の連鎖か。あの御仁にも娘さんが二人い
たと思っただが、今度は君が彼女達に狙われることになるわけだな」

一瞬、ライラの表情が曇った。そのようなことは考えたことも無
い、そう言う顔だ。クリスは何故成田がそれほど嵯峨の肩を持つの
か不思議に思いながら二人のやり取りを眺めることにした。

「それは……覚悟してます」

「本当にそうかね？今の今まで気がついていなかったような感じに
見えるけど」

ライラは戸惑っていた。伯父の双子の娘、茜と楓。クリスは嵯峨
の執務机の上、いつも荷物の下に隠してある写真のことをクリスは
知っていた。そこには大戦中に取られた嵯峨と妻のエリーゼと双子
の乳飲み子の写真と、セーラー服の少女と胡州海軍高等予科学校の
制服を着た少女の写真が並んでいた。

嵯峨の妻、エリーゼ・シュトルベルグ・嵯峨は前の大戦の最中、
戦争継続に反対する嵯峨の義父、西園寺重基を狙ったテロにあい死
亡していた。セーラー服の少女は嵯峨茜。現在は東和の女学院高等
学校付属中学に通っているという。予科の制服の妹、楓は胡州海軍
第三艦隊で研修中だとクリスは話好きな楠木から聞いていた。

ライラも二人の従妹のことは知っているようだった。明らかにそ
れまでの憎しみばかりに染まっていた視線はうるたえて、成田とク
リスの間を泳いでいる。

「迷うなら見てみることだな。嵯峨と言う人物を。それから考えても遅くは無いだろ?」

「あなたは何でそんなに嵯峨惟基の肩を持つんですか?」

肩を震わせながら、ついにつつむいたライラはそう言った。

「なあに、人間長く生きていればいろいろ学ぶこともあるというとき。この三十年。遼州ではいろんなことが有り過ぎた。嫌でもなんでも覚えちまうんだよ、心がね」

そう言うとき成田は茶を飲み干してそのまま立ち上がった。

「さあて、仕事でもするかなあ。もう会合も終わったみたいだしね」

軽く歩哨達に敬礼すると成田はそのまま待合室から出て行った。

クリスはライラの方に目をやった。彼女は明らかに迷っていた。

それも良いだろう。若いのだから。クリスはそう思いながら急須にお湯を注いだ。

成田と入れ違いに入ってきた将校は、静かにクリス達を眺めていた。その極めて事務的な感情を押し殺した顔に嫌悪感を感じながらもクリスは茶をテーブルに置いて立ち上がった。

「会談は……」

目だけでクリスを見つめる将校。

「今、終了したところだ。難民の誘導は君達に一任することになる」

忌々しげに吐き捨てるその浅黒い肌の小男に、クリスは言いようの無い怒りを感じながらも、そのまま黙って歩き回る彼を見つめていた。

「すべての元凶は東モスレムのイスラム教徒達にあるわけだが……」

「いえ、言葉は正確に言うべきです。あなた方と同じ命令系統で動いた親共和軍派のイスラム系民兵組織の行動と言うべきですね」

ジェナンの声が鋭く響いた。クリスはそれが先ほどまでライラをたしなめていた温和な青年の言葉とは思えず、ジェナンの顔をまじまじと見つめた。

小男は鋭く視線をジェナンに向けた。

「すると、君はすべての責任は共和軍にあると言うのかね？」

「違いますか？」

ジェナンの笑み。それは明らかに小男を挑発していた。

「大体、東モスレムの独立など無理なんだ！資源はどうする？経済は？すべて我々遼南に依存することになるんじゃないか！」

「遼南だけが東モスレムの頼みではありませんよ。最近では内乱の続く遼南ルートよりも西モスレムからのルートで貿易が行われていますから」

静かに、冷静に、若いジェナンの言葉は待合室に広まった。小男

の顔が赤く染まり始める。言うことすべてを切り返されている彼。クリスもこういう短絡的な士官には泣かされてきたということもあり、ニヤニヤ笑いながら小男の次の言葉を期待していた。

「こちら、いじめちゃあ駄目じゃないですか」

突然間拔けな声が響いた。嵯峨だった。クリスはライラの方を見つめた。先ほどの戸惑いは消え、憎しみに満ちた視線を嵯峨に向けて送っている。その後ろから髭を蓄えた若いアラブ系の青年が現れた。

アブドゥール・シャー・シン少尉。東モスレム三派のプロパガンダ映像では何度と無くその勲功と共に掲げられた写真を見てきたクリスだった。

「難民の誘導はジェナンとライラ、それにここには居ないがナンバルゲニア・シャ……」

「居るよ！」

突然彼らの背後で元気な少女の声が響いた。そこにはシャムがいつもの民族衣装を身に着けて、なぜかメロンパンをかじりながら立っていた。

「おい！後ろのはなんだ！」

ライラが叫ぶのも無理は無い。シャムの後ろには熊太郎がライラをにらみながら鎮座していた。

「ああ、この子は熊太郎。太郎って名前だけど女の子なんだよ」

シヤムは無邪気にそう答えた。じつとシヤムはライラを見つめる。ライラも負けじとシヤムをにらみつけた。

「ああ、良いかね」

話を切り出したのはシンだった。髭を撫でながら静かな調子で話し始める。

「ライラ、我々の目的を忘れないでくれよ。目的は敵討ちでも議論でもないんだ」

シンの目がライラを捉える。彼女は上官の面子を潰すわけにも行かず、黙ってうつむく。

「現在、この基地の兵員が給水車を手配して難民に支給を始めている。ここでの暴発はとりあえずすぐには起きないだろう。それは専門家もそう分析している」

今度はシンの視線は嵯峨の方を向いた。水の支給と言う懐柔政策。おそらく嵯峨が提案したのだろうとクリスは思った。

「だが、ここから北兼軍の支配地域までの50キロの道のりは共和軍支持の右派民兵組織の支配下にある。残念だが、この基地司令には彼らに攻撃停止命令を出す権限がないということだった」

その言葉に共和軍の兵士達は動揺していた。シンは淡々と言葉を続ける。

「しかし、難民に対する攻撃にはこの基地の所属部隊には毅然とした態度を取ってもらうということではまとまっている。そこでだ。ジエナン！ライラ！」

「はい！」

二人は立ち上がって直立不動の姿勢をとった。

「君達は先行して脱出ルートへの安全の確保を頼む。攻撃があった場合には全力でこれを排除するように」

「了解しました！」

ジェナンは良く通る声でそう答えた。ライラは腑に落ちないような表情を浮かべていた。

「そしてナンバルゲニアくん」

「シヤムで良いよ！」

メロンパンを食べ終えて一息ついていたシヤムに視線が集まった。

「君は最後尾について脱出の確認をしてくれたまえ」

「了解しました！」

シヤムは最近覚えた軍隊式の敬礼をした。

「私は上空で待機する。今回の行動は人道的な処置として東和政府にも話がつけてある。彼らも偵察機と攻撃機を派遣して右派民兵組織の襲撃に備えてくれるそうだ。そして嵯峨中佐」

「はい？」

相変わらず間拔けな返事をする嵯峨。

「先行して受け入れ準備をお願いします」

「ああ、まあ俺が直接顔を出さなきゃならないこともあるでしょうからね」

そう言つと嵯峨はタバコに手を伸ばした。

「ライラ」

嵯峨はタバコに火をつけながら彼をにらみつけている少女の名前を呼んだ。少女は気おされまいと必死の形相で嵯峨をにらみつけている。恐怖、憎悪、敵意。そんな感情を鍋で煮詰めた表情。クリスはそれがどの戦場で同じ目を見たかを思い出そうとした。

「すまねえな。俺はしばらくは死ねねえんだ」

嵯峨はそう言っただけでタバコの煙を天井に吐き出す。その姿にライラは肩を震わせながら精一杯強がるような表情を浮かべた。

「しばらく？どこかの誰かに八つ裂きにされるまでの間違いじゃないの？」

声を震わせて皮肉をこめてそう言うライラに、いつもの緊張感のかけらも無い嵯峨の視線が向く。

「安心しろよ。俺はそう簡単に討たれるほど馬鹿じゃねえからな。この戦争が終わったら俺のところに来い。この首やるよ」

そう言いながら嵯峨は自分の首をさすった。それだけ言っただけで嵯峨はポケットから携帯灰皿を取り出してタバコをもみ消した。

「さあホプキンスさん。出かけましょうか」

振り向いて歩き始める嵯峨。啞然とする一同を振り向くことも無く自分の愛機に向かって歩き出す。

「本当にそのつもりなんですか？」

「何がですか？」

クリスの言葉にとぼけてみせる嵯峨。とぼけた表情で悲しく笑う嵯峨。広い舗装された基地を嵯峨は刀を腰の金具から外して肩に乗せて歩く。

「ホプキンスさん。あのね……」

検問所の前に給水車が並んでいる。難民は共和軍の兵士達から水の配給を受けていた。

「まあ口に出しても嘘っぱいから止めとこうかと思っただんですがね、一応俺も人間なんで言わせて貰いますよ」

そう言くと嵯峨は路面に痰を吐いた。品のない態度にいつものようにクリスは嵯峨をにらむ。

「この国には、こないかかれた騒ぎであふれかえっていやがる。親子が憎みあい、兄弟が殺し合い、愛するものが裏切りあう。遼南の現状とはそんなもんです。俺もその運命には逆らえなかった」

四式の前で立ち止まる嵯峨。彼はただ呆然と自分の機体を見上げていた。

「俺の首一つでその悲劇が終わりになるなら安いもんでしょ。ホプキンスさん。こう考えることは間違ってますかね？」

嵯峨の視線がクリスを射抜く。その視線はこれまでのふざけたような影はまるで無かった。父には玉座をめぐり命を狙われた。妻は故国の正義を信じると言うテロリストに殺された。弟は政治的駆け引きに利用されることを恐れて殺さざるを得なかった男の視線。それはクリスが見たどんな人物の瞳とも違うものだった。

言葉が出なかった。クリスはただ黙っていた。そのまま四式の手を伝ってコックピットにたどり着いた嵯峨が、後部座席に乗るはずのクリスを待っていた。

「私には答えられませんよ。あなたに比べたら私は幸せすぎたかもしれないから」

そう言っただけで立ち尽くすクリスを呆れたと言うように肩を落として見つめる嵯峨。

「あのねえ、俺は自分を不幸だとは思っていませんよ。楽があれば苦がある。それが人生。それで良いじゃないですか」

後部座席に乗り込むクリスにそう言いながら、嵯峨はいつもの帽垂付きの戦闘帽を被りなおした。

「そんなじゃあ、出ますよ」

嵯峨はそう言うのとコックピットハッチと装甲板を下ろした。全周囲モニターがあたりの光景を照らし出す。そんな中、クリスの視線は検問所の難民の群れを捉えた。水の配給が開始されたことで、混乱はとりあえず収束に向かっているように見えた。

「じゃあ、行きましようか」

そう言うのと嵯峨は四式のパルスエンジンに火を入れる。ゆっくりと機体は上昇を始める。クリスは空を見上げた。上空を旋回する偵察機は東和空軍のものだろう。攻撃機はさらに上空で待機しているのか姿が見えない。

「とりあえず飛ばしますから!」

嵯峨の声と同時に周りの風景画動き出す。重力制御型コックピットにもかかわらず、軽いGがクリスを襲った。

「そんなに急ぐことも無いんじゃないですか?」

クリスの言葉に、振り返った嵯峨。すでに彼はタバコをくわえていた。

「確かにそうなんですけどね。もうブツが届いているだろうと思うとわくわくしてね。そういうことってありませんか?」

にんまりと笑う嵯峨の表情。

「ブツ?なにが届くんですか?」

クリスはとりあえず尋ねてみた。嵯峨の口は彼の最大の武器だ。その推測が確信に変わった今では、とりあえず無駄でも質問だけはやってみようという気になっていた。

「特戦3号計画試作戦機24号。まあそう言ってもピンとはこないでしょうがね」

嵯峨は再び正面を見据えた。北兼台地に続く溪谷をひたすら北上し続ける。相変わらずロックオンゲージが点滅を続けている。その

赤い光が、この渓谷に根城を置く右派民兵組織の存在を知らせている。

「特戦計画。胡州の大戦時のアサルト・モジュール開発計画ですか？」

クリスのその言葉を聞いても、嵯峨は特に気にかけているようなところは無かった。

「新世代アサルト・モジュールの開発計画。そう考えている軍事評論家が多いのは事実ですがね。ただ、それに一枚噛んだ人間からするとその表現は正確とは言えないんですよ」

そう言い切ると灰皿にタバコを押し付ける嵯峨。

「汎用、高機動、高火力のアサルト・モジュールの開発計画は胡州陸軍工廠の一号計画や海軍のプロジェクトチーム主体での計画がいくつもあつた中で、特戦計画の企画は陸軍特戦開発局と言う独立組織を創設してのプロジェクト。独立組織を作るに値する兵器開発計画。興味ありませんか？」

嵯峨はいつものように機体を渓谷に生える針葉樹の森すれすれに機体を制御しながら進んでいった。

「精神感応式制御システムの全面的採用による運用方法を根底から覆す決戦兵器の開発。なんだか負ける軍隊が作りそんな珍兵器の匂いがふんぷんするでしょ？」

嵯峨はそう言うのとタバコを吹かした。思わずクリスが咳き込むと嵯峨は振り返って申し訳無さそうな顔をする。

「まあ、俺は文系なんで細かい数字やらグラフなんか持ち出されて説明はされたんですが、いまいち良くわからなくてね。ただエンジンの制御まで俺の精神力で何とかしろっていう機体らしいですよ」「そんなことが可能なんですか？……相当パイロットに負担がかかることになると思うんですが」

クリスの言葉に嵯峨はまた振り返った。

「結果から言えば可能みたいですよ」

そう言うのと再び嵯峨は正面を向く。

「それがどう言う利点があるんですか？」

「それは俺にもよくわからないんでね。説明を受けた限りではエネルギー炉の反物質の対消滅の際に起きる爆縮空間の確保に空間干渉能力を持ったパイロットによる連続的干渉空間の展開が必要とされて、そのために……あれ？なんだったっけなあ」

嵯峨は頭を掻いた。

「やっぱ明華の話ちゃんと聞いたときゃよかったかなあ。まあ、あいつも要は俺しか乗れないような化け物アサルト・モジュールが来るってことで納得しちゃったからいまさら聞けないんだよなあ」

そう言うのと嵯峨は高度を上げた。東和の偵察機はこちらに警告するわけでもなく飛び回っている。

「対消滅エンジンですか？あれは理論の上では可能でもアサルト・モジュールのような小型の機動兵器には搭載できないと言うのが……それと空間干渉って……」

「空間干渉と言うのは理論物理学の領域の話でね、まあ私も聞きかじりですが、インフレーション理論によるとこの宇宙のあらゆるものに外の存在への出口みたいなものがあるって話なんですよね」

「ワームホールとかいうやつのことですか？」

クリスの言葉に再び嵯峨が振り向いて大きく頷いた。

「そう言えばそんなこと言ってました。それでなんでも俺にはそのワームホールとやらに直接介入可能なスキル。これを空間干渉能力とか言っちゃいましたけどそれによる安定したワームホール形勢のアストラルパターン形成能力があるらしいんですわ。そこでその何とか能力で干渉空間を対消滅炉内部に展開して出力の調整を行うということらしいですよ。まあなんとなくコンパクトに出来そんな言葉の響きではありますかね」

嵯峨はそう言うときまたタバコに火をつけた。

「しかし、そんな出力を確保したとしてどうパルスエンジンや各部駆動系に動力を伝えるんですか？それにパワーが強すぎれば機体の強度がそれに耐えられないような気がするんですけど」

そんなクリスの言葉に嵯峨は頷いた。

「そこが開発の最大のネックになったんですよ。エンジンの出力に機体が耐え切れない。既存の材質での開発を検討していた胡州の開発チームは終戦までにその答えを出すことができなかったそうです。まあ技術者の亡命などを受け入れて研究は東和の菱川重工業に引き継がれたそうですがね」

嵯峨はのんびりとタバコの煙を吐き出した。煙が流れてきて再び咳をするクリス。

「ああ、すいませんねえ。どうもタバコ飲みは独善的でいかんですよ」

「それはいいです、それより東和はそれを完成させたのですか？」
その言葉に嵯峨は首をひねる。そして静かに切り出した。

「不瑕疵金属のハニカム構造材のフレームとアクチュエーター駆動部のこちらにも干渉空間パワーブローシステムの導入するのがその回

答らしいんですが、俺も実際乗ってみないとわからないっすね」

「わからないって……」

「なあに、すぐに」対面できますから。ほら基地が見えてきましたよ」

嵯峨の言つとおり、本部ビルだけが立派な基地の姿が目に見え込んできた。

着陸時のパルスエンジンを絞り込んだ振動がクリスの体を包んだ。格納庫の前、すでに連隊所属の二式の起動は完了していた。本部前には楠木がホバーに乗り込もうとする歩兵部隊に訓示をしている。

「出撃ですか？難民保護の為？」

「なあと、右派民兵組織を殲滅させる為ですよ」

そう言つて振り向いた嵯峨の目が残忍な光を放つ。

「戦闘を仕掛けるつもりなんですか？でもそれでは共和軍を刺激して難民達が巻き込まれることになるんじゃないか……」

クリスが叫ぶ声はコックピットを開く音に飲み込まれていった。

ホバーに乗り込む楠木の後ろにハワードがカメラを片手についていくのが見えた。

「現在、右派民兵組織は共和軍とは別の指揮命令系統で動いていることは確認済みです。そして先ほどの会談で難民の移動が完了するまで共和軍は右派民兵組織への支援は行わないと言う確約を受けました……」

「それじゃあまるでだまし討ちじゃないですか！」

「『まるで』じゃないですなあ。完全なだまし討ちですよ」

コックピットから降り立った嵯峨が四式の掌で濁った瞳をクリスに向けてきた。

「隊長！出撃命令を！」

二式のコックピットから身を乗り出す明華の姿が見える。

「待てよ。それより俺の馬車馬どうなってる！」

クリスは後部座席から体を引き抜いた。そしてそのまま嵯峨と同じように四式の掌に降り立つ。

「ああ、それなら菱川の技術者の人が最終調整をしているはずよ」
明華はそのままヘルメットを被る。

「隊長。一切無事で」

歩いてきたつなぎの整備兵はキーラだった。そしてその後ろに冷却装置の靄に浮かんだ黒いアサルト・モジュールの姿が見えた。

「これが……？」

クリスは見上げた。その周りを青いつなぎの菱川重工業の技術者達が駆け回っている。

「特戦3号計画試作戦機24号。コードネーム『カネミツ』」

「まじでそれにすんのか？」

背広を着た菱川の研究者と言葉を交わしていた嵯峨が振り向いて叫ぶ。

「我々もそのコードネームで呼んでいましたから」

「マジかよ。そんな気取った名前なんてつけなくても良いのに」

嵯峨は嫌そうに自分の機体を眺めた。ダークグレーの機体。その右肩のエンブレムは嵯峨家の家紋『笹に竜胆』。そして左肩には顔のようなものが描かれている。

「嵯峨中佐。あの左肩の顔……いや面のような……」

「あれですか。あれは日本の能に使われる麵でしてね『武悪』と言
うんですよ」

嵯峨は振り向くとそう言いきった。

「武悪？」

思わずそつたずねたクリスを振り返ってまじまじと見つめる嵯峨。
「俺は悪党ですから」

そつ言つと嵯峨はゆっくりとその黒い機体に向けて歩き始めた。

「ホプキンスさん。どうします」

ただ立ち尽くしているクリスに振り向いた嵯峨は子供のような無邪気な笑みを浮かべて尋ねてきた。

「別に良いんですよ。俺がシヤムを今回の作戦から外した訳もわかったでしょ？今回はかなり卑劣な手段を取らせてもらうつもりですから。なにせ人民派ゲリラの中にはうちとは組みたくないと言ってる連中も居ますからね。それに対する牽制も兼ねて今回はかなり卑劣な作戦になる予定なんで」

「その機体は複座ですか？」

クリスが搾り出した言葉にすでにパイロットスーツを着ていた菱川の技術者が戸惑っている。

「菱川の人。今回はデータ収集は後にしてくれませんか？」

その嵯峨の言葉に青いつなぎの菱川の社員は一步引いた。クリスは嵯峨の隣に立った。エレベータが上がり、冷却装置で冷やされたカネミツから白い蒸気が上がる中、コックピットの前に到着する。端末を片手にコックピットを覗き込んでいたキーラが顔を向ける。彼女は出来るだけ感情を表に出すまいとしている。クリスは彼女を見てそう思った。

「火器管制ですが……」

「まあ良いよ、実戦で調整するから。それより四式のオーバーホール頼むぜ。もうちょっとピーキーにした方が俺には合ってるみたいだ。遊びがありすぎてどうも」

「わかりました」

クリスから顔を背けるようにしてキーラは降りていく。

「あいつが責任感感じることじゃねえんだがな」

嵯峨は頭をかきながらクリスに後部座席に乗るように促す。コックピットに入るとひんやりとした冷気がクリスの体を包んだ。嵯峨

はそれでも平気な顔をして七分袖のまま乗り込んでくる。

「寒くないですか？」

そんなクリスの言葉に、嵯峨は笑みで返した。

「おい、出るぞ」

そう言うと嵯峨はコックピットハッチと装甲板を下ろす。鮮やかな全周囲モニターの光。クリスの後部座席にはデータ収集用の機材が置かれている。

「あの、嵯峨中佐。本当に私が乗って良かったんですか？」

「ああ、その装置は自動で動くでしょ？こっちはこの機体の開発にそれなりの投資はしてきたんだ。わがままの一つや二つ、覚悟しておいてもらわないと」

そう言うと嵯峨はカネミツに接続されたコードを次々とパージしていく。

「さて、戦争に出かけますか」

嵯峨は笑っている。クリスの背筋に寒いものが走った。

「セニア！明華と御子神のことよろしく頼むぜ。それとルーラ！」
「はい！」

長身のルーラだが画面の中では頭が小さく見える。

「レムは初陣だ。まあとりあえず戦場の感覚だけ覚えさせる。飯岡もできるだけ自重するように。今回は俺の馬車馬の試験が主要目的だ。あちらさんの虎の子のM5が出てきたら俺に回せ！」

セニアもルーラも落ち着いたものだった。レムもいつもの能天気な表情を保っている。

「まあ今回はあいつ等も出したくは無かったんですがね」

嵯峨はそう言うと言とエンジン出力を上げていく。

「なるほどねえ。前の試験の時よりかなり精神的負担は少なくなってるな。これなら使えるかも」

「中佐！兵装ですが……」

「法術兵器は俺とは相性が悪いからな。レールガンでかまわねえよ」

キーラはすばやく指示を出し、四式と同形のレールガンをクレインで回してくる。『法術兵器』と言う聞き慣れない言葉に戸惑うクリスだが嵯峨に聞くだけ無駄なのは分かっていた。

「今回は機体そのもののスペックの検証がメインだからねえ」

レールガンを受け取ると嵯峨は一步カネミツを進めた。エンジン出力を示すゲージがさらに上昇している。

「大丈夫なんですか？」

クリスは思わずそう尋ねていた。嵯峨は振り返ると残忍な笑みを浮かべる。

「そんなに心配なら降りますか？」

「いいえ、これも仕事ですから」

クリスのその言葉を確認すると嵯峨はパルスエンジンに動力を供

給する。

「いやあ、凄いなえこの出力係数。最新型の重力制御式コックピットじゃなきゃ三割のパワーで急発進、急制動かけたらミンチになるぜ」

のんびりとそう言うつと嵯峨は機体をゆっくりと浮上させる。

「楠木。歩兵部隊の出動は？」

「はい、すべて予定通りに侵攻しています。呼応する山岳部族も敵の訓練キャンプの位置への移動を開始しています」

「それは重畳」

嵯峨は余裕のある言葉で答える。

「じゃあ行きますか」

機体が急激に持ち上げられる。パルスエンジンが四式の時とは変わって悲鳴を上げるような音を立てた。

「ほんじゃまあ、ねえ」

そう言うつと嵯峨はそのまま一直線に溪谷にカネミツを滑らせた。

正直なところクリスは乗ったことを後悔していた。

『やはりこの人は信用は出来ない』

そんな言葉が意識を引き回す。カネミツの速度は四式をはるかに凌ぐ。音速は軽く超えているらしく、振り返れば低空を進むカネミツの起こす衝撃波に木々がなぎ倒されているのが見えた。

「こんなに機動性上げる必要性あるのかねえ」

嵯峨はそう言いながらも速度を落とすつもりは無いようだった。

「見えた！」

嵯峨はそう言うと急制動をかけた。コックピットの重力制御能力は四式のそれとは比べ物にならないようで、嵯峨のくわえたタバコからの煙も真っ直ぐに真上の空調に吸い込まれている。

「さあて、まずは運動性能と装甲のテストかな」

そう言う嵯峨に地面からの対空ミサイルランチャーのものと思われるロックオンゲージが点滅する。

「今度は止まってやるから当て放題だ。やれるならやってみるよ！」

嵯峨の言葉に合わせたように針葉樹の森からミサイルが発射される。五発はあるだろうか、クリスの見ている前で嵯峨が操縦棒を細かく動かす。どのミサイルも紙一重でかわした嵯峨は、そのままミサイルが発射された森に機体を突っ込んだ。

「お礼だよ。受け取りな！」

対人兵器が炸裂する。そして森にはいくつものクレーターが出来ていた。

「おいおい、まだ状況がつかめて無いのかねえ。教導士官はアメリカさん？それともジョンブルか？」

そう言う嵯峨はそのままカネミツを歩かせた。木々をなぎ倒し、進むカネミツに逃げ惑う民兵がアサルトライフルで反撃する。

「おいおい、逃げても良いんだぜ、って言うか逃げるよ馬鹿」

嵯峨はそのままカネミツを停止させた。しかし、なぜか嵯峨はそこで機体を中腰の姿勢に変えた。その頭上を低進する砲火が走る。「なるほど、対アサルトライフル砲の配置は教本通りだな。なら少し教育してやるう」

そのまま発射された地点へと走るカネミツ。森が開けた小山に築かれたトーチ力。そこに嵯峨はレールガンの銃口を突っ込んだ。

「ご苦労さん！」

一撃でトーチ力は吹き飛んだ。そして嵯峨はそのまま山の後ろに合った廃鉱山の入り口を見据える。

「こここの教導士官は馬鹿か？まだアサルト・モジュールを出さないなんて。しばらく眺めてみますか」

嵯峨はそう言うとかネミツを見て逃げ惑う民兵達を後目にタバコをゆつたりとふかす。坑道の一つからようやくM5が姿を現す。

「はい、そつちから撃てよ。そうしないとデータも取れねえ」

嵯峨の言葉を聞いてでもいるかのように5機のM5は左右に展開を始めた。

カネミツはM5の展開を見て跳ね上がる。

「脚部アクチュエーターのパワーは十分か。それじゃあパルスエンジン
の微調整を兼ねまして！」

上空に跳ね上がったカネミツの動きについていけない民兵組織の
M5。ようやく彼らがモニターでカネミツを捕らえられるようにな
った時にはカネミツの左手にはサーベルが抜き放たれていた。

「まずは一機か？」

嵯峨のとぼけた声がコックピットに響く。クリスの目の前で、民
兵のM5が頭から一刀両断にされる。

「次！」

そのまま剣は左に跳ねた。隣でレールガンを構えようとしている
M5の腕が切り落とされる。

「あのねえ、同士討ちってこと考えないのかな？」

再び跳ね上がったカネミツにを狙ったレールガンの砲火が腕を失
った友軍機のコックピットを炎に包んだ。

「落ちて行けば、そんなことにはならなかったんだがな！」

叫び声を上げる嵯峨、滞空しながら残り三機の民兵側のアサルト・
モジュールにレールガンの弾丸を配って回る。

「データにもならねえな。こりゃあしばらく試験を続ける必要有
りかねえ」

そう言うつと嵯峨はカネミツを着地させ、目の前に横穴を空けてい
る古い鉱山跡の中に機体を進めた。クリスはただ呆然とその一部始
終を見ていた。今、画面に映っているのは逃げ惑う民兵と技術顧問
らしいアメリカ陸軍の戦闘服を着た兵士達だった。

「さてと、どこまで入れそうかね」

カネミツはゆっくりと坑道を奥へと進む。嵯峨は自動操縦に切り
替えて、足元のコンテナからアサルト・ライフルを取り出す。

「カラシニコフライフルですか」

嵯峨は折りたたみストックのライフルをクリスに手渡した。

「AKMS。まあ護身用ってことでね」

嵯峨は立てかけてあった愛刀兼光を握り締めている。

「銃なんてのは弾が出ればいいんすよ。さて、自殺志願者もいないみたいですから、奥に行きましようか？」

とぼけた調子で嵯峨は坑道の奥でカネミツを停止させて装甲板とコックピットハッチを跳ね上げた。

「さーて、逃げ遅れた人はいませんか？」

そう叫びながら嵯峨がアサルト・モジュールの整備に使っていたらしいクレーンを伝って地面に降りた。クリスはライフルのストックを展開して小脇に抱えるようにしてその後が続く。

「居ないみたいすねえ。それじゃあお邪魔しまーす」

肩に抜刀した長船兼光を担いで、完全に場所を把握しているようにドアを開く。

「ドアエントリーとかは……」

「ああ、そうでしたね」

クリスに言われて嵯峨が剣を構えながら進む。確かに嵯峨はこの訓練キャンプの内部の情報をすべて知った上でここにいる。クリスには中腰で曲がり角を覗き込んでいる嵯峨を見てそう確信した。ハンドサインで敵が居ないことをクリスにわざとらしく知らせると、そのまま嵯峨は奥へと進む。クリスも軍務の経験はあった。そして室内戦闘が現在の歩兵部隊の必須科目であることも熟知していた。そして何よりも嵯峨は憲兵実働部隊の出身である。室内戦などは彼の十八番だろう。クリスはそう思いながら大げさに手を振る嵯峨の背中が続いた。

さすがに剣を構えるのが疲れたのか、鞘に収めて左手に拳銃、右手にライトを持って薄暗い坑道を進んでいく嵯峨。クリスは二人が進んでいる区画が明らかに何かの研究施設のようなものであることに気づいた。

一番手前の鉄格子の入った部屋をクリアリングする嵯峨。中には粗末なベッドのようなものが置かれている。

「見ると聞くとじゃ大違いだな」

嵯峨はそのままライトでベッドの上の毛布を照らす。毛布には真新しい弾痕が残り、その下から血が流れてきているのが見えた。

「死人に口無しってことですか？」

クリスがそのまま毛布に手を伸ばそうとするのを嵯峨は押しとどめた。

「なあに、もうすぐちゃんと喋れる証人のところに案内しますから」

嵯峨はそう言つと拳銃を構えなおす。そしてライトを消して、クリスに物音を立てないようにハンドサインを送った。数秒後、明らかに誰かが近づいてくる気配をクリスも感じていた。嵯峨は腰の雑嚢から手榴弾を取り出して安全装置を外す。外に転がされた手榴弾飛び出す嵯峨の拳銃発射音が三発。そのまま部屋に戻ると爆風がクリスを襲った。

「大丈夫ですか？」

嵯峨はそう言つとそのまま廊下に出た。かつて人だったものが三つ転がっている。

「あんまり見つめると仏さんが照れますよ。行きましようか」

そう言つと嵯峨は死体を残したままで彼の目的の場所に向けて走り出した。

しばらく通路を走ったところで、嵯峨は止まるように合図した。そのまま腰をかがめ、ライフルを構えながら三メートル程距離をとって音を立てないように立ち止まるクリス。嵯峨は懐から手鏡のよくなものを出し、大き目のドアの隙間に翳す。しばらくの沈黙の後、嵯峨の手が動いた。出されたハンドサインは、三人の敵が部屋の奥で背中を向けているという状況とその一人を嵯峨が撃つたら突入しろと言ったものだった。

クリスの左手が持っているライフルのハンドガードが汗で滑る。嵯峨はすばやく突入した。拳銃の発射音が一つ。クリスが中で見たのは、倒れようとするアメリカ陸軍の制服を着た将校と、白衣の二人の技術者が手を上げる様だった。

「はい、そこまで」
嵯峨はそう言うと二人の技官に銃口を向けていた。
「君は？」

二人のうちアフリカ系の眼鏡をかけた長身の技術者が口を開く。英語である。

「あんだねえ。自分の研究知ってるんでしょ？そうしたらその一番有名な実験材料の……」

嵯峨が英語で返した。発音はかなりイギリス風なのがクリスには気にかかった。

「コレモト・サガ！」
もう一人のアジア系と思われる小柄な女性技官が叫んだ。アフリカ系の技官もその意味に気づき、驚きの表情を浮かべる。

「俺以外にこんなところに文屋さんを引き連れてやってくるような酔狂な指揮官がいるのかねえ」

嵯峨はそう言うと拳銃を降ろしてすぐさま胸のポケットにタバコを探す。イギリス訛りのきつい言葉に思わず渋い顔のクリス。

『目的は？』

女性技官の恐れを秘めた表情に、嵯峨は残忍な笑みで返した。

『言わなきゃ判りませんか？』

そう言うのと嵯峨は電源が入っている奥の端末に歩み寄る。二人の技術者の監視の下、次々と画面をクリアーしていく嵯峨。だが、女性技官にはかなり余裕があった。

『無駄よ。そう簡単にパスワードがわかる訳無いじゃないの！』

『ああ、これでしょ？必要になるキーは』

嵯峨はすぐさまタバコと一緒に取り出していたディスクを端末のスロットに差し込んだ。タバコに火が付く、煙が上がる。端末にパスワードを入力する画面が開く。驚いた表情の女性技官の前で、躊躇せずパスワードを入力する嵯峨。

『はい、ホプキンスさん。特ダネですよ』

嵯峨はそう言うのとクリスの方を向き直った。その時、アフリカ系の男がくるぶしに隠し持っていた拳銃を抜こうとした。

しかし、銃口は嵯峨に向くことは無かった。男の腕は彼の目の前で不自然に下を向いた。男の悲鳴が部屋にこだまする。そして、下に捻じ曲げられた手首からはだらだらと鮮血が流れ落ちた。

「だから、俺は嵯峨惟基なんだよ」

日本語で吐き捨てるように言った嵯峨。同僚に駆け寄る女性技官の表情に恐怖がにじんでいる。

『俺はね、嵯峨惟基なんだよ。あんた等がそうした。パンドラの箱を開けたのはあんた等、アメリカ陸軍だ』

嵯峨は一語一語確かめるような調子で二人に向かい言い放った。

『14年前のことだ』

嵯峨はデータを手元のディスクに移しながらつぶやく。

『ある胡州陸軍の将校がユタ州の秘密基地に連行された。その将校は戦時中の市民への虐殺容疑で銃殺刑を覚悟していた。だが、そんな簡単なことで殺めた命の償いはできなかった』

嵯峨はそう言うのとデータ転送に時間がかかると言うように女性技術者に向き直る。タバコをくわえて笑みまで浮かべる嵯峨に、明らかにおびえている女性技師。

『贖罪が実験動物扱いなんて当然じゃないの！嵯峨惟基。その名の前で何人の無実の人々が死んでいったことか……』

そう言う彼女は目の前の嵯峨に向けてと言うより自分自身を納得させるために話をしているように見えた。

『そう、贖罪だけならその将校は自分の運命を受け入れることができた。だが、そこには彼以外にも住人がいた。貧しさで売られてきた少女。盗みや引ったくりで米兵とトラブルを起こした少年。彼等もその戦争犯罪人の将校と同じ運命を歩むに足る罪を犯したと言っ
のかね』

嵯峨の言葉に女性技師は絶句する。そしてすぐにクリスの顔を見る。

『あれは国益を！そうよ、合衆国への忠誠を誓う技師としての……』

そうクリスに叫ぶ技師。だが、クリスの表情が敵意しか見せていないことを知ると、仕方がないと言うようにだらりと両手を下ろした。

『まあ、いいやそろそろ俺の部下達が到着したところだ。お嬢さん。相棒の腕、そのままほっとくと壊死しますよ』

嵯峨はそう言いながら自分用のディスクへのデータの転送を終え

て、今度は前面の大型スクリーンにデータを送る準備をしている。白衣の研究員達は嵯峨の言葉にそのまま部屋を出て行くことを決めた。

「はあ、久しぶりの英語で緊張しちゃったねえ」

嵯峨はそう言いながらキーボードを叩き続ける。クリスは黙ってその姿を見ていた。目の前のスクリーンに椅子に縛り付けられた男の姿が映った。

「拷問？」

クリスの言葉は次の瞬間に驚きに飲み込まれた。画面の中の男の目の前の机が突然火を噴いた。その業火が部屋を覆いつくす。そして次の瞬間、男がまるでガソリンでもかけられたかのように炎に包まれていく。悲鳴を上げながら火に飲み込まれる男の映像。クリスは目を反らさずに見ることに苦痛を感じた。

「これが彼らの研究ですか？」

しばらく呼吸を整えてからクリスが吐き出した言葉に、表情を押し殺した嵯峨の顔が映っていた。

「いわゆる『パイロキネシスト』の研究資料ですよ。一番ありふれた遼州人が持つ法力の一つ」

嵯峨は画像を停止させるとタバコをふかしている。

「都市伝説ではなかったんですね。遼州人の超能力と言う奴は」

クリスの言葉に嵯峨は静かに笑みを浮かべていた。

「もしそれが与太話で済む次元の話だったらアメリカさんはこんなに兵力を遼南に割く必要も無かったですんじゃないですか？ただの失敗国家の独裁者がくたばるかどうかなんてことは彼らにとって本当にどうでも良いことです。自国の若者の血を流すに値しない存在ですよ」

嵯峨の言葉が終わるまもなく、楠木を先頭とした北兼軍閥の兵士達が飛び込んでくる。

「遅いねえ。もうお話は済んだよ。処置はしておいてくれ」

そう言う嵯峨はクリスの肩を叩いた。

「処置？データを消すつもりですか？」

クリスの驚きの声に楠木の部下の胡州浪人崩れの兵士達が冷笑を浴びせてきた。

「ホプキンスさん。今は遼州人には地球人との違いは無いことにしておいた方が良いんじゃないですか？まあ、知ることが双方にとって幸せかどうか、そこを考えるとこのデータは無いことにしておくべきだと思いましてね」

嵯峨はそう言うと言った。クリスもその後続く。通路に出ると散発的な銃撃戦の音が響いている。クリスは嵯峨と言う男に再び疑問符をつけたまま嵯峨の後に続き、カネミツの待つハンガーへと急いだ。

「御大将！」

突然の声に振り向いた嵯峨とクリスの向かいには楠木が立っていた。

「どうだい、民兵さんの方は」

嵯峨の言葉に楠木は笑みを浮かべた。

「現在、山岳民族部隊と交戦中ですが敵さんももう抵抗が無意味なのはわかってるみたいですから。もうそろそろ決着はつくんじゃないですか」

楠木の言葉に嵯峨は安心したようにハンガーへの道を進む。北兼軍の兵士達が死体や負傷者を運び出している。

「ずいぶん手回しが良い事ですね」

クリスの言葉に嵯峨はにんまりと笑った。

「まあ相手を知らずに戦争を仕掛けるほど俺は耄碌しては居ませんから」

そんな言葉を返す嵯峨をクリスはただ見守っていた。ハンガーに出ると、カネミツの後ろに東モスレム三派のアサルト・モジュールがあった。その足元には、アブドゥール・シャー・シン少尉が北兼軍の将校と押し問答を続けていた。

「嵯峨中佐！」

シンの叫び声が届いて、嵯峨はめんどくさそうに階段を折り始めた。その髭面の下には怒りのようなものが満ちているのがクリスにもわかった。

「これはどう言うことなんですか！」

シンの言葉に頭を掻く嵯峨。取り巻いている兵士達はどこと無くシンの雰囲気緊張を強いられていた。

「どう言うことって、ただの民兵組織の掃討作戦ですよ」

淡々と嵯峨は言葉を並べる。

「しかし今の時期。共和軍との協定の……」

「そんな協定結んではいけませんよ。俺は共和軍への攻撃はしないと
言っただけ。あちらがどう解釈しようが俺の知ったことじゃない」

「しかし……」

食い下がるシンの肩に嵯峨は手を添えた。

「彼らに難民への攻撃の意思があれば出動する。それが俺らの協定
でしょ？未然にそれを防いだのは当然のことなんじゃないですか。

それに今回は油断をしていたこいつ等が悪い」

そう言つと嵯峨は振り返りもせずそのままカネミツに乗り込も
うとしていた。

「それでは私も基地まで同行させてもらいますよ」

「ええ、どうぞどうぞ」

シンの言葉に嵯峨はそう返す。そんな姿を見ながら翻すようにシヤレードに乗り込む。

「実直な好青年ですねえ。うちの餓鬼の婿にでも欲しいくらいだ」
そう言つと嵯峨はタバコをくわえながら黒い愛機に乗り込む。クリスもせかされるように後部座席に座つた。

「なにか言いたいことがありますね、ホプキンスさん」

嵯峨はコックピットのハッチを下ろしながらタバコに火をつける。クリスはその有様を黙ってみていた。

「言いたいことは言つちまつたほうがいいですよ。まあ大体何を良いたいかは見当が付きませんが」

「あそこでの実験はなんなんですか？」

とりあえずクリスが言葉に出したのはそのことだった。嵯峨は頭をかきながらエンジンに火を入れた。

「典型的な人体実験つて奴ですよ。ここらの山岳民族を拉致して法術能力の開発テストを行っている。それがこの基地に親切的なアメちゃんがやってきた理由ですわ」

嵯峨はシンのシヤレードの後ろに続いて坑道を進んだ。

「それはわかります。だが、この基地にいたのは合衆国の軍人だった」

「そうですねえ。まあ法術関連の技術についてはアメリカは貴重な実験材料を手に出れたので非常に進んでいますねえ。東和の次ぐらの研究成果は提出できるレベルなんじゃないですか？」

タバコの煙がクリスを襲う。手でそれを払いながらクリスは言葉を続けようとしたがそれは嵯峨にさえぎられた。

「だが、どちらも法術と言うものの存在を發表していない。今のと

ころそれは存在しないことになっている」

嵯峨はそう言い切って後続のシン達の期待を確認するためだけに振り向く。いつものふざけたような表情はそこにはなかった。

「確かにこの事実が公にされればこの非人道的な実験を認めなければならなくなる」

「まあ、それもあるんですがね。それ以上にもしそれが今、公になれば遼州人に対する地球人の差別感情に火が付くことになるでしょうね。ただでさえ遼州の不安定な政治状況の結果、地球に流れ込んでいる難民の問題で世論は二つに割れてる。税金泥棒扱いされている遼州難民が実は超能力を持ったインベーターと言う話になれば感情的になった地球人の天誅組がハリネズミのように武装して難民キャンプを襲撃する事件が山ほど起きるでしょうね」

淡々と答える嵯峨。彼の表情が珍しく真剣だった。

「だから、今はこのことは見なかったことにしていただけませんか？」

嵯峨はそれだけ言うと基地に向かって機体を一気に加速させた。

「嵯峨惟基中佐。先導お願いします」

「わかりましたよー」

シンの言葉に返す嵯峨はいつものものんびりとした調子に戻っていた。滑るように森の木々すれすれにカネミツが飛行を開始する。

「なるほどねえ、シンの旦那が虎と呼ばれる理由もよくわかるわ。動きに無駄ってものがねえな」

嵯峨はそう言うときまたタバコを取り出して火をつけた。溪谷の峰にちらほらと山岳民族のゲリラ達が嵯峨の機体に手を振っている。

「山岳少数民族の救援劇。そう書いてもらいたいと言うことですね」

クリスの言葉は嵯峨の笑顔に黙殺された。沈黙が続く。クリスは話すつもりが無い嵯峨から意見を聞くとういう意欲を無くしていた。そうして沈黙のまま嵯峨のカネミツとシンのシャレードは基地の格納庫前に着陸した。クリスは周りを見渡した。その風景は出撃前とは一変していた。

紺色に染め抜かれた笹に竜胆の嵯峨家の旗印が人民政府の黄色い星の旗と同じくらいにたなびいている。数知れぬ数の遊牧民のテントが作られ、銃を持った山岳民族のゲリラ達が徘徊している。

コックピットが開く。嵯峨は満足げにその様を見つめていた。クリスが降り立つとすばやく青いつなぎの集団がそれを取り巻いた。

「嵯峨中佐。機体の感触は……」

「遊びが多すぎるよ。あれじゃあ機体の制御に誤差が出る。もう少し調整してくれないと次乗る気無くすよ」

「ですが、あれでもかなり……」

技術主任を問い詰めている嵯峨。その周りの菱川の技術者は機体を固定して装甲板の排除にかかった。

「あれでは話は聞けませんね」

降り立ったクリスの前にシンが立っていた。静かにタバコをくゆらせながら周りの光景を眺めていた。

「さすがに北兼王殿下の御威光という奴ですね。正直これほどにゲリラの支援を受けられるとは……」

本部のビルの前に軍服の支給を受ける列が出来ていた。

「私が出るときはこんな風になるとは……」

「おそらく嵯峨中佐はすべてを計算に入れて情報を流していたのでしょう。山岳民族にとって右派民兵組織とそれを指導するアメリカ陸軍特殊部隊は恐怖の対象でしたから。それに悲劇の北兼王、ムジヤンタ・ラスコーは彼らにとっては今でも彼らを導く若き指導者と言っことなのでしょうね」

そう言いながらシンはそのまま軍服の支給を行っている伊藤のところ近づいていった。

「それであなたはどうするつもりですか」

目の前の髭を蓄えた青年将校シンにクリスは尋ねていた。

「おそらくこの状況は、ゴンザレス政権になびいた背教者達の弾丸が発射された瞬間から仕組まれていた。そして我々にはその状況を受け入れることしかできない」

「それは西部戦線を突破しての帰還を果たすということですか？」

クリスの言葉に、シンはタバコをもみ消すという言葉で応じた。

「それは上層部の指示があればそう動くつもりですが、私個人としては嵯峨と言う人物に興味がある。この状況を作り出した男が何を狙っているのか、それを知らなければ次の手をこちらも打つことができないですよ」

シンの言葉にクリスはハンガーの方を振り向いた。カネミツの前部装甲板は剥がされ、駆動系部品が取り外されて冷却コンテナに収容されている。その様を見つめる嵯峨には技術者が張り付いて各部位の調整に関する説明でもしているのだろう。

「ようこそ、人民軍西部軍管区へ！」

シンに向けて言葉をかけたのは伊藤だった。シンは人民軍の政治将校の制服を着た伊藤を棘のある視線で迎えた。

「やはりその目は見たくも無いものを見たという目ですか？」

「私は無神論者とは関わりたくないんだ」

シンはそう言うと再びタバコを口にくわえる。そしてくわえた紙タバコの先に火が灯った。クリスは目を疑った。ライターを使ったわけでは無かった。それ以前にタバコにシンは触れてもいない。

「そんなに簡単に法術を見せてもいいんですかねえ」

「なあに、この程度の芸当なら地球の手品師だってやることですよ」

伊藤の言葉に笑みで答えるシン。クリスは二人がぐるになって自

分をからかっているような妄想に取り付かれていた。

「パイロキネシス。遼州ではそれほど珍しい能力ではありません。ひところの自爆テロではよく使われた能力ですよ。まあこのくらいに制御できるってのは私の自慢ではありませんがね」

シンは大きくタバコの煙を吸い込んだ。

「それもまた遼州人の法術の特性、『空間干渉能力』の成せる技なんだよねえ」

クリスが振り向いた先にはいつの間にか嵯峨が立っていた。

「機体のほうは？」

「ああ、やっぱり技術屋さんに乗って調整した方が早いらしいんで、それでホプキンスさん。次の出撃の時はシャムの後ろに乗ってもらいますよ」

嵯峨はそう言うのとタバコを口にくわえる。彼のタバコもシンが目を合わせたときには自然に火が付いて煙を上げ始めていた。

「秘術の安売りは命を縮めますよ」

シンにそう言いながら嵯峨は満足そうにタバコを吸った。

「伊藤、志願兵の方はどうなってる？」

嵯峨の言葉に伊藤が我に返った。

「現在五千人になりましたが、この有様ですよ。まあ一万は軽く越えるでしょうね」

伊藤の言葉はもつともな話だった。森から現れるゲリラの流れは本部前まで延々と続いていた。

「偽善者の真似事の効果にしちゃあかなりの成果だなあ」

嵯峨はそう言うとそのまま本部ビルに向かつて歩き始めた。クリス、シン、そしてシンがその後続いた。そして本部ビルの前に一人の男が立っているのが見えた。

「胡州海軍？」

その男の制服にクリスは息を呑んだ。その腕の部隊章は胡州海軍第三艦隊教導部隊の左三つ巴に二引き両のエンブレムが描かれていた。そして胸には医官を示す特技章が金色に輝いている。

「別所！忠さんは元気か？」

嵯峨は気軽にその胡州海軍少佐に声をかけた。クリスはその言葉で胡州第三艦隊司令の赤松忠満少将の名前がひらめいた。そして現在政治抗争の中にいるその主君西園寺基義大公が嵯峨の義理の兄でもあることを思い出していた。

「まあいつも通りというところですよ」

淡々と答える別所と呼ばれた少佐。彼は三人を出迎えるように本部ビルの扉を開いた。

「ああ、ホプキンスさん。紹介しときますよ。彼が胡州第三艦隊司令赤松忠満の懐刀、別所晋平少佐ですよ」

静かに脇を締めた胡州海軍風の敬礼をする男を眺めた。別所の名

前はクリスも知っていた。前の大戦時、学徒出陣が免除される医学生でありながら胡州のアサルト・モジュール部隊に志願。赤松の駆逐艦涼風の艦載機の九七式を駆ってエースと呼ばれた。戦後も赤松大佐のそばにあり、今は西園寺派の海軍の切れ者として知られる男。「私の顔に何かついていますか？」

そのままエレベータに向かう別所が声をかけてきた。

「いえ、それにしても何故？」

「いいじゃないですか。とりあえず部屋で話を聞きましょう。シンの旦那。とりあえず上の食堂で隼と暇を潰しといてください。ホプキンスさんは来ますか？」

嵯峨の投げやりな言葉に、クリスは大きく頷いた。

「じゃあ行きますか」

開いたエレベータに嵯峨は大またで乗り込んだ。

沈黙が続いたエレベータを降りた嵯峨、クリス、別所。彼等は管理部門のあわただしく動き回る隊員達をすり抜けて嵯峨の執務室に入った。相変わらず雑然としている部屋を眺めた後、嵯峨はソファに腰を降ろした。別所も慣れた調子でその正面に座る。クリスも後に続いた。

「西園寺卿からもよろしくということでした」

「ああ、糞兄貴ね。まあ、あのおっさんはほつといっても大丈夫だろ？それより何で来たの」

嵯峨はくわえていたタバコをもみ消すと上目がちに別所をにらみつけた。人を警戒する嵯峨の目。

「うちはただでさえ北天のお偉いさんに目をつけられてるからなあ。助太刀なら断るぜ」

「それほど赤松大佐は親切ではないですよ。まあこの内戦に関する胡州民派の意向を伝えておけと言われましてね」

そう言つと別所はやわらかい笑みを浮かべた。

「いい加減、兄貴と烏丸卿の対立止めてくれないかねえ。ただでさえ今、遼州は爆弾抱えて大変なんだ。遼南、遼北、ゲルパルト、そしてベルルカン大陸。地球人達があちらこちらの戦場を我が物顔で歩き回つていやがる」

嵯峨の義理の兄、西園寺基義率いる民派、そして胡州四大公の末席、烏丸頼盛が率いる官派の対立。先の大戦で敗戦国となった胡州は今、その二つに割れていた。貴族制政治の腐敗が敗戦を呼んだと主張する民派と経済の不調を統制制度の引き締めで解決しようとする官派の対立は遼州の各国を巻き込み拡大していた。

「おっしゃることはわかります。だが、こちらとしても引くわけにはいきませんよ。平民院選挙での官派による妨害工作のことも……」

「だからそんなことじゃないんだろ？俺のところに来たのは」

嵯峨は明らかに別所に敵意を向けていた。緊張感が無いのはいつものことだが、言葉尻が投げやりなのはその証拠だとクリスもわかっていた。

「人民軍の北兼軍閥に対する……」

「嫌だね！」

別所の言葉を聞くまでも無く嵯峨は吐き捨てていた。

「どうせあれだろ？南都のブルゴーニユ辺りに焚きつけられたか。あいつもゴンザレスの後釜狙うんだつたらもう少し自分で手を汚せつてんだ！」

クリスはそのままで聞いて別所の意図、そして西園寺基義の考えがわかってきていた。アンリ・ブルゴーニユ。フランス貴族の血を引く遼南の名門に生まれた彼がゴンザレス政権へのアメリカ軍の支援を取り付けた本人だった。彼の地盤の南都にはアメリカ海軍の基地があり、ゴンザレス政権支援の為、遼南に上陸したアメリカ軍十五万の兵力は南都から運ばれる物資で支えられていた。

「しかし、人民政府の……」

「だからさあ。ダワイラ・マケイとアンリ・ブルゴーニユ。二人のどちらかを信じるといわれたら俺の回答は決まってるんだよ」

それが嵯峨の答え。クリスには興味深い嵯峨の本音だった。遼北の社会主義政権の支援を受ける人民軍に嵯峨が参加することに不自然さを感じていたクリスだが、思いも寄らない嵯峨の本音がその領袖への信頼感であることを知って好感を覚えた。

『この男も人間なんだな』

目の前で困ったように黙り込む別所をにらみつけるのもそう言う嵯峨の人間的な付き合いを優先する人柄と言うことを考えてみれば理解できるところだった。取り付く島の無い嵯峨の態度に、別所はとりあえず姿勢をただし嵯峨の目を見据えることにした。

「まあ仕事の話はこれくらいにしてと……」

嵯峨は立ち上がると部屋に備え付けの冷蔵庫を漁った。手にしたのは日本酒の四合瓶。ラベルは無かった。

「ホプキンスさんは日本酒大丈夫ですか？」

「ええ、好きですよ」

そんな言葉を確認すると湯飲みを三つ嵯峨は取り出して並べる。

「まあ、遠いところ無駄足となるとわかって来てもらったんだ」

嵯峨はそう言いながら湯飲みを注ぐ。

「話は変わるが、東和経由かい？」

そのままなみなりと日本酒が注がれた湯飲みを別所に差し出す。

「ええ、茜様にも……」

「おいおい、様はねえだろ。あんな餓鬼」

そう言いながら酒を舐める嵯峨。

「それより、楓はどうだ？お前が鍛えてんだろ？」

「楓様は非常に筋が良いですね。この前も特戦の模擬戦で苦杯を舐めましたよ」

「へえ、あいつがねえ。道理で俺も年を取るわけだ」

嵯峨はそう言いながら再び立ち上がる。そして戸棚から醤油につけられた山菜の瓶を取り出した。

「とりあえずここいらの名産のつまみだ。酒も兼州のそれなりに知られた酒蔵なんだぜ、胡州や東和の酒蔵にも負けてないだろ？」

嵯峨はニヤニヤと笑いながら別所が酒を飲む様を見つめていた。

「それと康子様から……」

嵯峨はその言葉を聞くと電流が走ったように硬直した。クリスは驚いた。恐怖する嵯峨を想像していなかった自分に。

「どうしたんだ？姉上が……？」

西園寺基義の妻、康子。戸籍上は義理の姉だが、血縁としては康

子は嵯峨の母エニカの妹に当たる。胡州王族の有力氏族カグラヌ
バ家の娘でもあった

「康子様はおっしゃられました……」

「信じたようにやれ。か？」

「はい」

嵯峨はとりあえず肩をなでおろして静かに湯飲みの酒を舐めた。

「それが一番難しいんだがねえ」

そう言うと瓶から木の芽を取り出して口にほうりこんだ。

突然、嵯峨の執務机の上の端末が鳴った。

「はいはい。でますよー」

嵯峨はめんどくさそうに立ち上がると受話器を上げる。別所は瓶の中のキノコを取り上げて口に入れた。

「意外といけますよ」

さすが民派の有力者の懐刀と呼ばれるだけの喰えない男だとクリスは思った。自分の仕事がすべて終わったような顔をしている別所を眺めていた。次々と別所がつまむビンの中の野草にクリスは恐る恐る手を伸ばして口に運んだ。そのえぐい味に思わず顔をしかめた。

「ああ、別所君。ちよつと」

嵯峨は受話器を置くと別所の肩に手を置いた。

「君、軍医でしょ？」

「まあそうですね……」

待ってましたと言うような嵯峨の笑みに、別所は少したじろいだ。「あのね、難民の移送の先発隊で重症の患者を運んでいたVTOLが到着したそうなんでねえ……」

嵯峨はそう言って別所を立ち上がらせる。

「仕事はきつちり頼むわけですか」

「なあに、医者の技量を持つ人間の宿命って奴ですよ。まあ俺は弁護士資格は持ってはいるがあんまり役に立たなくてねえ」

そう言いながら別所を立たせて執務室を後にした。クリスも酒に未練があるものの、二人を追ってまた管理部門の続く廊下に出る。大型の東和の国籍章のついた輸送機がハンガーの前に着陸しようとしているのが見える。その両脇には東モスレム三派のアサルト・モジュールが護衛をするように立っている。

「また食いつかれるだろうねえ」

嵯峨は苦笑いを浮かべながらエレベータに乗り込んだ。

「当然、あの二人は今回の民兵掃討戦のことを……」

「シンの旦那は間抜けじゃないっすよ。おそらくライラは額から湯気でも出してるかも……」

嵯峨はそう言いながら開いたエレベータから降りようとしたが、パイロットスーツを着たライラは拳銃を突きつけながら嵯峨を押し倒した。

「おい！この卑怯者！恥って言葉の意味！お前は知らないんじゃないのか！」

怒鳴り込んできたライラを周りにいたゲリラ達が押しとどめる。

「ライラ！止める！」

ジェナンに羽交い絞めにされてようやくライラは静かになった。

ゲリラ達は銃の安全装置を外している。静かにライラと嵯峨はらみ合っていた。

「おい、ライラ。お前さんは勘違いしてるんじゃないのか？」

嵯峨はライラの体当たりで落ちた帽子を拾いながら切り出した。

「なにがだ！卑怯者！」

「卑怯？いいじゃねえの、それでも」

嵯峨を取り巻いていたゲリラ達がそんな言葉に力の抜けたような表情をした。

「戦争はスポーツじゃねえ。人が殺しあうんだ」

一言一言、嵯峨はいつもの冗談とはまるで違った真剣な表情でライラに語りかける。

「確かに戦争にもルールがある。各種の戦争法規については俺は一応博士号の論文書くときに勉強したからな。だがその法規には今回の俺の行動は全く抵触していない」

「そう言う問題か！」

「そう言う問題なのさ」

嵯峨はそう言うのとタバコを口にくわえる。

「俺は共和軍の基地司令には、難民の安全のために双方が全力を尽くすということを約束したわけだ。当然その障害になるものを俺が叩き潰すつもりだったわけだが……まああちらさんがどう言ってもりだったかなんてことは俺の知ったことじゃないよ」

「詭弁だ！」

叫ぶライラを上目使いに見据えて、嵯峨は一言つぶやいた。

「そつだよ。詭弁だよ」

その言葉にライラを抑えていたジェナンの腕が緩んだ。ライラはそのまま嵯峨の襟首をつかみあげる。

「だが、詭弁で何が悪い。戦争は殺し合いだ。詭弁の一つで命が救われるというなら俺はいくらだって詭弁を労するぜ」

ライラの腕が緩んだ。だが、嵯峨はそれを振りほどこうとしない。

「お前の親父を殺したのも同じ論理だ。あいつは利用されていることに気付かなかつた。王族に生まれちまつた人間は、いつだってそう言う状況に置かれることを考えなけりゃあならねえ。だがあいつにはそれが出来なかつた」

「父上を愚弄するのかわ？」

ライラの瞳に涙が浮かぶ。

「死人に鞭打つ趣味はねえよ。だが、お前も遼南王家に生まれたのならこれだけは覚えておけ。利用されるだけの王族ならいつそいいほうがいいんだってことをな」

その言葉にライラはそのまま床に崩れ落ちた。嵯峨は振り向くことも無く、別所を連れて担架で次々と旧村役場の建物である病院に運ばれていく難民達へと足を向けた。

「なあ、落ち着いてくれ」

「どう落ち着けて言うのよ！」

そうライラは宥めようとするジェナンの腕を振りほどき地面に泣き伏せた。周りで見ていたゲリラ達は彼らの英雄である嵯峨がいなくなると同時にこの少女への関心を失って散っていった。

「ライラさん。あなたは……」

「つまらない慰めなら要らないわよ。あなたも父上の敵である地球人なんだから」

そう言うゆつくりと立ち上がるライラ。彼女は流れた涙を拭うとそのまま本部の外へと向かった。『地球人』と言う言葉が憎しみとともにこの遼州星系では使われることが多いのはクリスも痛感していた。かつて鉄器を発明したばかりの動乱の遼州大陸に入植を開始してから、地球の大国の思惑に翻弄されてきた遼州の人々にとって最大限の敵意をあらわす言葉として使われてきた。

肩を落としてジェナンに支えられて歩く少女もこの地に戦いを持ち込んだ憎むべき地球人として自分を見ている。その現実にはクリスは打ちのめされていた。

「良い所にいたな、ジェナン！ライラ！」

本部の玄関の豪華すぎるエレベーターが開いて現れたのはシンだった。隣の伊藤は頭をかきながら一礼するとそのまま本部の外へと駆け出して言った。

「しばらくここで世話になることになった。それなりに挨拶は済ませてください」

そう言うシンは二人を置いてハンガーへ向かおうとしていた。

「ちよつと待ってください！どう言うことですか！」

驚きの表情でライラは駆け出そうとするシンをつかみとめた。

「聞いてなかったのか？俺達はしばらく嵯峨惟基中佐貴下での作戦

行動を行う」

「しかし、それでは……」

ジェナンの言葉に、シンはにっこりと笑って答えようとする。

「西部から西モスレム経由なら帰還は出来るだろうが、この難民や近代戦も知らないゲリラ達を見捨てるわけにはいかないだろ？」

微笑みながらも、シンの目は少しも笑ってはいなかった。

「わかったよ。私はそれで良いわ。ジェナンはどうなの？」

ライラの一言はクリスとジェナンを驚かせた。

「本当にいいのか？父親の仇なんだろ？」

「今するべきことがある。そうじゃないの？」

ライラはまぶたを涙で腫らしてはいるが、きっぱりとそう言い切った。

「嵯峨中佐を闇討ちするつもりじゃないだろうな？」

意外な決断をしたライラをシンは心配そうに見つめた。

「そんなことはしませんよ。でも、あの男が何をするのか見たいんです」

ライラは沿う言い切ると、嵯峨の消えた野戦病院を見た。

「もし、それが父上の死を無駄にするようなことになったら……寝首ぐらい搔くかもしれないけど」

そうしてライラは無理をして微笑むとゲリラ達が北兼軍に志願する為に並んでいる列を押しつけて格納庫へ走り出した。

「女は強いですねえ」

そう言うつとシンは腰の雑囊からタバコを取り出す。そしてジエナの方を一瞥した後、いつものように何も無いタバコの先に火が灯った。

「僕が見てきます！」

そう言い残してジエナは格納庫の前の人垣に消えた。

「しかし、嵯峨と言う人物。一体何を考えているのやら……」

独り言のようにシンはつぶやいた。クリスはその表情の少ない顔を覗き見た。

「確かに。私もこの数日取材をしてわかったことは、彼は私のような凡人には想像も出来ない人物だということですよ」

「そうは言っていないよ。確かに今の状況を作り出した采配には敬意を表しますよ、揚げ足取りなんていうことは戦場では当たり前が出来事ですから」

そう言い切る若いイスラム教徒の将校を見つめるクリス。その男が思った以上に思慮深い性格だとわかって好意を持って彼の話に聞き入る。

「だが、彼は何のためらいも無く悪名を浴びてでも自分の、いや所属する陣営の優位な状況を作り出す。正義を語り、大義を説いて人を惹きつけるのは容易いことですよ。人間には美名のために死ぬことを喜ぶ連中はいくらでもいますから。しかし、彼は美辞麗句を用いずにこれだけの兵力を集めた。王家の威光などもう何の役にも立たないことを知っているはずの彼に何故……」

「君子豹変す、そんなところではないですか？」

そう後ろから声をかけてきたのは伊藤だった。

「伊藤さん、驚いたじゃないですか」

「すいません、ホプキンスさん。まあ、俺も初めてダワイラ博士を

案内してあの人に引き合わせたときは同じように思いましたよ。あの人は迷いを見せない。迷っているに見えるときは、大体そう見せた方が得な時くらいのものでね」

格納庫前の広場に白いアサルトル・モジュール「クロームナイト」が着陸した。ゲリラ達は歓声を上げ、そこから降りる少女と熊をまるで救世主に出会ったように歓迎している。

「たぶんここまでではすべてが隊長の筋書きの上で進んでいるんですよ。だが、もう一人の脚本家が出てきたときにどうなるか……」

伊藤の面差しに影が差した。

「吉田俊平少佐ですか？」

クリスの言葉にシンがはっとなり伊藤を見つめた。

「この状況だ。共和軍のエスコバル大佐は間違いなくバレンシア機関を動員して北兼台地への侵攻を阻止にかかるでしょうね。そして、その為に自分の手を切ることになるかもしれない刀を手にする可能性は無いとは言えない」

『バレンシア機関』と言う名前にクリスははっとした。遼南共和国政府に対する12度の人権問題抗議議案がフランスの提唱で地球の国連に定義され、そのたびにアメリカの拒否権で抗議は実現してはいないものの、そのうち5つの大量虐殺容疑で知られる非正規特殊部隊。ある意味共和軍の切り札と言える部隊の投入は北兼南部6県確保にどれだけの関心を共和政府が示していると言う証拠にもなり、クリスは興味を持った。

そして吉田俊平。その写真すら一枚も無い伝説の傭兵指揮官の悪名もまたクリスの記憶には嫌と言うほど記憶されていた。そんな考え事をしているクリスを置いて二人は話を続けた。

「シンさん。いい目をしていますね。吉田俊平は傭兵だ。金さえ積めばなんでもする男と言う話ですよ。まあ実在を疑っている人も多いですが、うちの隊長の情報網では名前があがってましてね」

そう言いながら傾きかけた日差しを眺める伊藤。

「現代の義体の製造技術を考えれば吉田俊平の実在は確定でしょう。」

それに東和の菱川財閥。金になるならあの新型機の提供を北兼軍閥に、虎の子の吉田俊平の部隊を共和軍にと分配してもおかしくは無いでしょうね」

シンはそれだけ言うのとタバコをもみ消して吸殻をポケットにしま

う。
「次の一手は共和軍がうつことになるでしょうが、どういう形になりますかねえ。手ごまは限られているはずですから」

そう言うのと伊藤はそのまま降りてきたエレベータに乗り込んで姿を消す。

「嵯峨中佐みたいな話し方をする人物のようですね」

シンがそう言うのにクリスは答えた。

「きつとあれは病気なんでしょう」

そのままクリスは白いアサルト・モジュールの前でゲリラの歓迎を受けているシャムに向かって歩き出した。

バルガス・エスコバルは北兼南部基地司令室から出た。直後に一発の銃声が響き、ドアの前に立っていた警備兵が部屋に駆け込む。

「ずいぶんとわかりやすい責任のとらせかたですねえ」

エスコバルの顔が声を発した共和軍の制服を来た青年士官の方に向く。

「怖い顔することは無いんじゃないですか？新しいクライアントさんですから。それなりの働きを見せないとあなることくらいはわかっていますよ」

彼、吉田俊平少佐の視線の先に、口に拳銃の銃口をつきたてた状態で即死している基地司令が運び出されるのが見える。

「なるほど、では給料分の仕事は出来ると期待していいんだな？」

エスコバルは恐る恐る口を開いた。東和の治安機関特殊部隊とほぼ同じ規格のサイボーグを前にして、彼は緊張していた。実際、吉田についての悪い噂は散々部下達から聞かされていた。血を見ることを恐れないということに自信を持っているエスコバルも、遼州星系だけでなく地球にまで呼ばれて行って敵をおもちゃのように壊して回る吉田の噂は信じたいものでは無かった。もし味方でなければつばを吐きつけているほどに、その冷酷な目つきは同じ特殊部隊指揮官出身のエスコバルにも不気味に見えた。

「それにしてもエスコバル大佐。ずいぶんとアメリカさんに嫌われているじゃないですか。今回の件だってあのかわいそうな基地司令とアメリカの技術顧問団にホットラインが一本あれば避けられた話だ」

「そんなことは言われなくてもわかっている！」

エスコバルの怒鳴り声に、恐れるどころかさらに舐めてかかるように吉田は話を続けた。

「北兼軍としてはこの北兼台地の制圧は、北天の人民軍総司令部か

ら出された手形みたいなもんですよ。もしそれが来月の乾季までに完了しなければ両軍の関係は非常に険悪なものになる。つまりこの一月で俺とアンタの首をそろえて北天のコミュニストどもに納品しないといけないわけだ」

吉田はそう言うつと噛んでいた風船ガムを膨らます。そんな彼を無視するようにしてエスコバルはそのまま司令室に入った。

「そんなに邪険にすること無いじゃないですか。一応前金の分だけの仕事はしようと思っっているんですから」

そう言うつと吉田は拳銃を抜いた。恐怖にゆがむエスコバルの視線には、微笑みを浮かべた吉田の顔を映っていた。彼はそのまま一人の情報将校の方へ近づいていった。情報将校は吉田の方を向き直ったが、次の瞬間にはそのあごから上が無くなっていた。脊髄から伸びるコード。情報将校がサイボーグであることはそれほど珍しくは無い。端末に集中していた女性士官が銃声を聞き振り返り、そして倒れこむ死体の血を浴びて悲鳴を上げた。

「何のつもりだ！」

エスコバルはやつとのことので声を出すことが出来た。

「成田中尉。と言うことになってますね、この男は。本当のコイツの名前、知りたくないですか？」

振り返った吉田の満面の笑みを見て、エスコバルは背筋が凍るのを感じた。

吉田はポケットからコードを取り出すと耳の後ろのスロットにそれを差し込み、反対側を倒れた情報将校のコードを引き抜いて端末に接続した。

「なるほどねえ」

エスコバルは一人感心している吉田をいらだたしげに見つめていた。彼の直属の護衛の兵士達はそんな吉田を腰の拳銃に手を当てながら取り巻いている。

「さすが胡州の侍だ。自分がやられることを計算に入れて情報の大半は消去済みか。こりゃあデータのサルベージには早くて二時間ばかりかな」

端末のモニターがともエスコバルに追えない速度でスクロールしている。

「何が言いたいんだ！第一、胡州浪人なら我が軍にもたくさん所属しているぞ！」

「ああ、この成田と言う男の正体を知らないからそんなことを言うんですね」

吉田が下卑た笑いを浮かべながらエスコバルを見つめた。

「本名は大須賀忠胤。前の戦争じゃあ胡州帝国下河内連隊の情報担当少尉だった男ですよ」

「下河内連隊？」

その言葉にエスコバルは息を呑んだ。かつて、この北兼を通過して敗走した胡州陸軍の中に、異彩を放つ部隊があった。彼等は常に追いつがる遼北軍を撃破しながら、戦友たちを南部のアメリカ軍と亡命政府軍の連合軍が占領する地域へと敗走を続けた。

遼北軍は彼らを『黒死病』と呼んで恐れた。

黒い四式を駆って戦場を駆ける嵯峨惟基率いる下河内連隊。地獄の遼南の熱波を生き延びた不死身の軍団。熾烈な戦いで培った信頼

が、部下達を鬼神と呼ばれる軍団に育てることはエスコバルも手持ちのバレンシア組織の指揮官として知り尽くしていることだった。

「つまりこちらの手はすべて嵯峨には筒抜けだったというのか？」

エスコバルの言葉に頷くこともせず、吉田はガムをかみながら作業を続けていた。

「しかもこの将校さん相当なやり手ですなあ。枝をつけて情報ルートをたどろうとしたけど、心停止と同時にすべてのネットワーク接続記録がパージされるように仕組んであるねえ。情報をサルベージしてもたいしたことはつかめそうにはないですわ」

相変わらず隣に死体が転がっているというのに平然とモニターを眺めている吉田にエスコバルは恐怖を感じていた。ようやく兵士達が担架を運んできた。その上に乗せられた死体を吉田が一瞥した。

「丁重に葬ってあげてくださいよ。彼の仕事は敵ながら尊敬に値しますよ」

「それが裏切り者でもか？」

エスコバルのその言葉に振り向いた吉田は冷たい視線をエスコバルに投げた。

「腐った味方よりは敵の方がよっぽど信頼できると言うのが私の信念でしてね。俺の傭兵としての経験ですよ。こう言う人物は貴重だ。少なくともアンタにはこう言う部下はいないでしょうがね」

そう言うと吉田は再びモニターに目を向けた。エスコバルは彼に殴りかけたい衝動を抑えながら護衛の兵達に移動の合図を出した。

「起きてください！クリスさん！」

ドアを叩く音、そしてキーラの甲高い声が部屋に響く。起き上がったクリスは隣のベッドにはまだハワードは戻ってきていないことを確認した。昨日の一件を記事にまとめて、そのままシヤムとキーラの二人と雑談をしたあと、難民が現れたら起こしてくれるよう頼んでクリスは仮眠を取っていた。

「ああ、ありがとう。来たんだね」

クリスはいつものように防弾ベストを着込むとドアを開けた。

「ありがとうジャコビン曹長」

「キーラでいいですよ」

キーラはそのまま帽子を深く被りなおしながら歩くクリスの後に続いた。

「こう言うのはやはり何度も取材されているんですか？」

白いシヨートの髪をなびかせて着いてくるキーラを振り向くと、クリスは思い返していた。

「あまり無いねえ。どの国も組織も恥は公にはしたくは無いものさ。自分達の政策で生活を破壊された国民がいるという事実は上層部の人間には不愉快以外の何物でもないからね」

そう言うつと上がってきたエレベータに二人は乗り込んだ。

「昨日は徹夜かい？」

「ええ、隊長のあの機体が馬鹿みたいに整備に時間がかかるんですよ。実際、あんなに手間がかかる機体なら今のスタッフじゃ運用は無理ですよ」

そう言われてキーラのつなぎを見てみた。比較的きれいな彼女にしては明らかに油のシミや埃が浮き出して見える。

「これという時の切り札に使っただろうね、あの人は」

そう言うつとクリスは開いたエレベータの扉を抜けて本部ビルの扉

に手をかけた。夜明け直前と言った闇の中にテントが見える。しかし、昨日まで英雄の降臨に沸いていたゲリラ達の姿は見えない。

「ああ、彼等は北天街道までの工事を行う為に移動しましたよ」
「なるほどねえ」

外に出ると、格納庫での作業音以外の音がしないので少し寂しくもあつた。

「補給線の確保に兵力を割くのは隊長の昔の教訓なんでしょうね」

キーラはそう言うとそのまま村のはずれまでクリスを案内して来た。クリスも渓谷に沿って続く細い道を眺めながら、夜明けの寒空を眺めていた。

「しかし、夜通し行軍とは」

「仕方が無いでしょう。北兼台地南部基地の司令官に吉田俊平が招聘されたそうですから」

キーラの言葉に暗澹たる気持ちになりながら、ようやく先頭を走る北兼軍のホバーのヘッドライトが目に入ってきてクリスはそちらに目を向けた。

そんな言葉を聞きながら街道を眺めてみた。近づいてくる重装甲ホバーの上で、北兼軍の兵士が笹に竜胆の嵯峨家の家紋入りの旗指物を振り回している。近づくに連れて、その隣でその兵士の肩を叩いて笑いあっているのがハワードだとわかった。

「クリス！待っててくれたのか！」

ハンガーの前にドリフトで止まったホバーから飛び降りたハワードが抱きついてきた。

「どうしたんだ、テンションが高いじゃないか」

「それより医療班を呼んでくれ。怪我人がいる」

真顔に戻ったハワードの言葉にキーラはそのまま明かりのついてる野戦病院に走った。

「戦闘があつたのか？」

「いや、落石を避けようとして足首を痛めたらしい」

そう言うハワードの後ろから、兵士に支えられて十二、三歳くらいの少女が降り立つ。足首に巻いた包帯が痛々しいが、兵士達の笑顔に釣られるようにして彼女は笑っていた。

「じゃあ難民の本隊も無事なのか？」

「ああ、俺は彼女の手当てが済んだらまた引き返すつもりだがね」「じゃあ俺も付いていくよ」

クリスが答える。少女はクリスの姿を不思議そうに眺めていた。病院から出てきたのは別所だった。

「どうしたんだね？」

別所は駆けつけると、旗指物を持った兵士が指差す少女に目をやった。

「足首か。しかし、それ以上に栄養状態が心配だ。誰か彼女を背負って来てくれないか？」

「じゃあ俺がやるよ」

明るくハワードは言うとかメラケースをクリスに渡して少女の前に背を向けた。少女は恐る恐る大きなハワードの背中に乗っかる。

「じゃあ行きましょう、先生」

ハワードは別所の胡州海軍の制服を気にせずそのまま病院へと向かった。

「楠木少佐！」

キーラは続いて難民を満載したバスの列を先導している四輪駆動車に叫んだ。

「ジャコビンじゃねえか！それより炊事班を起こせ！炊き出しをやるぞ」

広場に止まったバス。屋根の上には家財道具が括り付けられている。ドアが開いても難民達は降りようとしない。

「順番に降りてください！テントがありますから休めます！」

体に似合わない大声を張り上げた楠木の言葉に引かれて降りてきた難民達を見てクリスは衝撃を受けた。

バスを降りてきた難民達に笑顔が無ければ、クリスは目を背けていたのかもしれない。敵基地に群がる彼らを遠巻きに見ると、目の前で見えるのが違うことは覚悟をしていたが、それは戦場に向かうどこのキャンプでも見慣れた光景とは言え、かなりクリスの心をえぐる光景だった。骨と筋だけにやせこけた母親に抱かれて口は開けてはいるが、泣き声を立てる体力も無い乳児。老人は笑ってはいるが、その頬肉のこけた姿が痛々しい。義足の少年。きつと地雷でも踏んでしまったのだらう。屋根の上の包みに手を伸ばす男の右腕のひじから先は切断されていた。

「酷いものだね」

たぶんこのような状況を見るのが初めてと思われるキーラが硬直しながらバスから降りる難民を見ているのを見つけてクリスは声をかけた。

「彼等は逆らったわけではないんでしょ？何故……」

「戦争って言うので戦って死んでいく兵士はまだ幸せな方さ。戦場に住んでいたと言うだけで武器も持たない彼らにとつては生きていくこと自体が地獄なんだよ」

今度は赤十字のマークをつけた北兼軍のトラックが到着する。先ほどの少女の登場で仮眠を取っていた要員まで動員されたようで、野戦病院からは看護婦や医師達がトラック目指して走り出す。

病院から出てきたハワードがクリスのところにカメラを取りに来た。

「クリス、まだ来るぜ」

冷静にそう言うと、ハワードはクリスからカメラを奪い取ってトラックに向かい駆け出していく。トラックから静かに担架に乗った難民達が運び出される。うめき声、泣き声、助けを呼ぶ声。戦場の取材で何度も聞いた人間の声のバリエーションだが、クリスはそれ

に慣れる事は出来なかつた。隣に立っているキーラは初めてこういつた光景を目の当たりにするのだらう。クリスは彼女の肩に手を添えた。

「こんなことが起きてたんですね。私達が訓練をしていた間にも」

「そうだ、そしてこれからも続くんだ。この内戦が終結しても、敗者の残党は民兵組織を作つてゲリラ戦を続けることになるだらう。

それが終わるのもいつになることだか……」

クリスのその言葉に、キーラの目が殺気を帯びて見えた。彼女の怒りにかつて自分が従軍記者をはじめたばかりのことを思い出した。それはアフリカの内戦だつた。記者達は政府軍とアメリカ軍の広報担当者の目の届く範囲だけの取材を許されていた。その難民は栄養状態もそれほど悪くなく、政府軍とアメリカ軍のおかげで戦争が終わろうとしていると答えた。まるで版で押したかのように。

そんな光景に嫌気のさしたクリスが広報担当者の目を盗んで山を越えたところの管理されていない難民キャンプでの光景は今も脳裏に張り付いている。

積み上げられる餓死者の死体、見せしめに銃殺される反政府ゲリラへの協力者、もはや母の乳房にすがりつく力も無く蠅にたかられる乳児、絶望した瞳の遊ぶことを忘れた子供達。クリスはすぐにアメリカ軍の憲兵に捕らえられて、その光景を一切報道しないと誓約書を書かされて、そのままその取材は打ち切りになった。

クリスはそのような昔話を思い出しながら、ただバスを降りていく難民達を見つめていた。

「嵯峨中佐はこれを偽善者ごっこと呼んだが、君はどう思う」

自然とクリスの口からそんな言葉が漏れた。キーラの肩は震えていた。

「ごっこでも何でも、どうして誰もこんなことになるまで手を出さなかつたんですか？」

言葉が震えている。キーラは泣いていた。

「いつもそうだよ。戦争ではいつもこうなるんだ」

声がしてクリスが振り返った先には民族衣装のシャムが立っていた。いつもの明るいシャムではない。彼女の目はようやくたどり着こうとしている溪谷に沿って続く難民の群れに向いていた。車、馬車、牛車。ある者は口バにまたがり、ある者は自らの足で歩いている。クリスもキーラも彼らから目を離すことは出来なかった。日の出の朝日が彼らを照らす。そうなればその残酷な運命を背負った難民達の姿が闇の中から浮き上がって見えた。

髪は乱れ、着ている服は垢にまみれた。こけた頬が痛々しく、その振られることの無い腕は骨と筋ばかりが見える。護衛に出た北兼の兵士から配られたのだらう。難民支援用のレーションだが、いつ襲ってくるかわからない右派民兵組織に備えてか、誰もが手をつけずに大事そうにそれを抱えていた。

「どいてくれ！病人だ！」

サイドカー付きのバイクにまたがった兵士がサイドカーに老婆を乗せて難民の列の中を進んでくる。テントの下に寝かされている病人達の間から別所と看護士達が止まったバイクに駆け寄っていく。

「シャムちゃんは見えたことがあるんだね。こんな光景を」

クリスは黙って難民の様子を窺っているシャムに尋ねた。

「この道をね、いっぱい通つたんだよ、こう言う人が。みんな悲しそうな顔をして北に逃げるんだ。でも誰も帰ってこれないよ」

静かに話すシャムの言葉を聞いて、再びクリスは難民の列に目を向けた。朝日を浴びて空から輸送機がハンガー裏の空き地に降りてくる。国籍章は東和。ハンガーにたむろしていた兵士が着陸する垂直離着陸の輸送機の方に駆け出した。

「支援物資ですね。私も行きます」

そう言うとキーラは輸送機に向けて走り出した。シャムもその後続く。クリスはこの光景を見ながらただ呆然と立ち尽くしていた。

「もう三十年、いやそれ以上かもしれないな。地球人が来ようが関係なくこんな光景が繰り広げられてきた」

後ろで声がしたのでクリスは振り向いた。タバコを吸いながら嵯峨は静かに座っていた。

「見てたんですか？」

「まあね」

そう言いながらタバコをふかす嵯峨。

「しかし、こちらで終わりにしたほうが良いよね」

嵯峨はそう言って立ち上がった。

「あなたにはこの状況を終わりにするべき義務があると思いますよ」

クリスは本部に消えようとする嵯峨の背中に叫んだ。

「そうかも知れませんが。だが俺も神じゃない。でもまあ、ベストは尽くすつもりはありますよ」

嵯峨はそのまま本部に向かった。クリスは再び難民達の方に目を向けた。本部の裏手の倉庫から大量のダンボールを運び出す兵士の一群が現れた。そして輸送機からの荷物を運び出す隊員と合流してテントの下で受付の準備をしている管理部門の隊員の姿が見える。それを仕切っている伊藤を見つけるとクリスはそこに駆けつけた。

「ずいぶんと準備がいいですね」

「なにか問題あるんですか？……そこ！それは炊き出し用の白米だろ？そのまま食えるものを持って来いって言ったんだ！」

伊藤に怒鳴りつけられた政治局の腕章付きの下士官が頭を下げながら持ってきたダンボールを運び出す。

「戦争にはね、タイミングと言う奴があると隊長から言われてましてね。あなたに連絡を取ったのはこの日のためってこともあるんですよ。見ての通り遼南は貧しい。先の大戦では遼州枢軸三国と浮か

れていたが、この有様を見てわかるとおり貧しい国なんですよ」

伊藤の口からの言葉が悔しさに満ちていた。クリスは彼の前に積み上げられていくレーシヨンの山を見つめていた。難民達はすぐにそれを見つけて集まり始める。

「待ってください！数は十分にありませんから！」

受付でキーラが支給品に次々と手を伸ばす難民達に声をかけていた。シャムが大きな鍋の下に入り込み火を起こしている。別所は運び込まれる栄養失調の子供達の胸に聴診器を当てている。そしてワードはそれらを一つ一つ写真に収めていた。それでもまだ難民の列は途切れることなくこの村に向かって続いていた。

「それにしてもこんなところを攻撃されたら一撃じゃないですか？」

クリスの言葉に伊藤は呆れたような視線を送る。

「エスコバルもそれほど馬鹿じゃありませんよ。上空で東和の攻撃機が警戒飛行を続けている。西部戦線では人道にうるさいアメリカ軍を主体とした地球軍が戦闘中だ。どちらも難民に共和軍が襲い掛かれれば手加減せずに攻撃を仕掛けて共和軍が壊滅するくらいのことばかりですよ」

伊藤はそう言うつと上空を見上げた。いつもよりも低い高度を飛ぶ東和の偵察機が見える。

「しかし、スパイを難民にまぎれさせるなどのことはしているんじゃないですか？」

クリスが食い下がるのを見て伊藤は笑みを浮かべた。

「それはあるでしょうね。それに北兼台地南部基地の指揮官が吉田俊平にすげ代わったらいいですからそこはこつちとしては苦しいところですよ」

難民の食料を求めて集まる数が多くなってきた。それに対応するようににまだ帰還したばかりでパイロットスーツを脱いでもないセニア達のパイロット連中までも、隣のテントに詰まれた缶詰の配布を手伝い始めた。

「ああ、あいつ等まで手伝い始めたか。すいませんね、俺も働かなきゃならなくなりましたんで。取材は自由でいいですよ。ここの困窮が宇宙中に知らされたならそれだけ難民への支援も集まるでしょうから」

そう言うつと伊藤はセニア達のところに駆けていった。クリスは一人になると、難民達を見て回ることにした。怪我人はそれほど出ていないようだが、医療スタッフが設置した大型のテントは一杯にな

りつつあった。点滴のアンプルの入った箱が山のように積み重ねられているのが見える。クリスは嵯峨がこのことを予定していたことを確信した。

走り回る別所と、懲罰部隊の階級章を剥がされた制服のままの医師が走り回っている。その周りを駆け回る看護師達も緊張した雰囲気にも包まれていて、クリスは取材をすることを断念した。病院のテントを離れて散策するクリス。ゲリラが残っていたテントには仮眠を取ろうと難民達が次々に腰を下ろしていた。疲れ果ててはいたが、クリスがこれまで見てきたどのキャンプの難民達より目が光に満ちていると感じた。

昨日はカネミツの整備を行っていた菱川重工の技術者達が、それぞれダンボールを抱えて、中に入った水のボトルを配っている。クリスはそんな群れを抜けて村の広場にたどり着いた。いつものように朝の光の中、夜露を反射して光る塔婆の群れ。

一人の少女が花を手向けていた。クリスが近づいていくと、その隣の大きな黒い塊が彼に振り向いた。

「元気か？熊太郎」

そんなクリスの言葉に舌を出して答える熊太郎。シャムは墓の一つ一つに花を配って回った。

「今日もお墓参りかい？」

シヤムは振り向くと静かに頷いた。

「しばらくは君の友達も静かに眠れそうだね」

クリスは静かに墓に額づく。そんなクリスを見ながらシヤムは笑顔を浮かべた。

「でもこれで戦いが終わるわけじゃないよ」

シヤムはきつぱりとそう言い切った。

「確かにそうかもしれないね」

広場は高台になっていて、難民の列が溪谷のへりに消えるまで続いているのが良く見えた。

「これだけの難民をさらに北上させるとなると、難しいかねえ」

「きつと殿下がなんとかしてくるよ」

その声には強い意志が感じられた。クリスはシヤムの瞳を見つめる。熊太郎は黙って二人を見守っている。

「ああ、こんなところにいたんだ！」

そう言って息を切らして走ってきたのはキーラだった。

「二人とも食事を早く済ませてください！それとシヤムちゃん。昨日シヤワー浴びなかつたでしょ」

「だって目に泡が入ると痛いんだよ！」

「駄目！ご飯が終わったら一緒にシヤワー浴びましようね。熊太郎もシヤワーが大好きなんだから」

キーラの言葉に自然とクリスの頬が緩んだ。

「さあ、行きますか」

クリスはそう言っつと立ち上がった。シヤムもそれを見て立ち上がる。

「なんか僕だけ遊んでるみたいで済まないねえ」

「いえ、ホプキンスさんはそれが仕事なんですから」

クリスの言葉に黙って視線を落とすキーラ。

「いつまで続くんでしょうか？」

歩き出したキーラがクリスに尋ねた。彼女の白から銀色に見える髪が台地から渓谷を伝う風になびいている。

「ゴンザレス政権にはまだ余裕があるね。西部戦線では苦戦しているが、中央戦線では激しい消耗戦が展開されているらしいし。北兼台地をどちらが抑えるかで状況はかなり変わると思うよ。当初は地理的価値が無いとされてきたが西モスレムが三派を通じてこの内戦に干渉すると言う状態になればその国境線の喉首に当たる北兼台地は戦略的要衝の意味を持つてくる」

坂道を元気良くシャムが駆け足で下っていく。その後ろにつき従う熊太郎が心配そうにクリスとキーラを見つめている。

「あの人はどこまで先の状況を読んでいるのかな」

クリスはそう言っただけで熊太郎の頭を撫でると急な坂道を滑らないように慎重に下り始めた。

「あそこに並ぶんですか？」

キーラは本部ビルを通り抜けてそのままハンガーの前の大なべに群がる難民の列へと足を向ける。良く見れば人民軍の制服を来た隊員達もその列に並んでいた。

「これも隊長の意向ですので」

そう言つと鍋から百メートル以上離れた最後尾に並ぶ三人。

「すみませんねえ、私は後でいいですから。前にどうぞ」

前に並んでいる老婆が三人に前に行くように薦めた。

「いいですよ、ここで待ちますから」

「お嬢さん兵隊さんでしょ？ だったら……」

そんな老女の一言に首を振るキーラ。

「いえ、いいです本当に」

「そうかい、じゃあ私は少なくとももらおうかねえ」

苦笑いを浮かべるキーラ。クリスもそれにあわせた。列は比較的早く流れていた。準備周到に用意された鍋と椀。いつも最上階の厨房にいる炊事班の面々が手際よく難民や兵士にスープを配っていく。「パンなんだ。私パンよりおコメがいいなあ」

「シヤム！ 贅沢言わないの！」

キーラと熊太郎がシヤムをにらみつける。シヤムは舌を出すそのまま鍋の方に向いた。スープと受け取ったパンを口にする難民や兵士の群れを伊藤達、人民党の政治局員が整理している。

「あの人も苦労性だな」

「今回の難民受け入れの件で北天から呼び出しがかかっているらしいですよ」

クリスにキーラが耳打ちをした。明らかに人民党本部に戻ればかなりの叱責を受けることは間違いないというのにそんなことは関係なく伊藤達は鍋に並ぶ列の周りで食事をしようとする難民達をテ

ントに誘導している。

「本当に材料が足りるのかね」

「大丈夫ですよそれは。ホプキンスさんが隊長と出かけた後に東和の人道物資の空輸がありましたから。数日分は材料の心配はしないで済むって言う話ですよ」

そう言うときーラはようやく渡されたスープレの木の椀とスプーンをクリスに渡す。

「すべては予定通りというわけですか」

クリスは目の前で椀を渡されて目を輝かすシャムの姿を観察していた。

「熊太郎の分ももらったの？」

「あ！忘れてた！すいません、もう一つください！」

シャムは立ち去ろうとする食器を配る炊事班員に声をかけた。

食べる場所が無くて、クリス、キーラ、シヤム、熊太郎は鍋の裏手をぐるりと回った。薪を割る音が響いている。クリスは釣られるようにその音の場所へ向かった。薪を割っていたのはシンとジェナシだった。原木の山を崩して運んでいるのはライラである。

「御精が出るんですね」

キーラはそう言つと原木を一つ、椅子代わりにして座る。クリスもシヤムも彼女の真似をしてそばに座った。

「まあ、このような状態を見て手伝わないわけには行かないだろ？それに北兼台地の戦いの間は世話になるんだ。少しは役にたつておかないと立場も無いしね」

そう言つとシンは原木に斧を振り下ろす。中心を離れたところに振り下ろされた斧に跳ねられて、原木が草叢に転がる。

「見てられないよ。ちよつとかしてね」

すでにスープを飲み終えていたシヤムがシンのはじいた原木を取り上げた。彼女はそのままシンから斧を受け取ると、原木を正面に置く。

「えい！」

滑らかに振り下ろされた斧は的確に原木の中心に振り下ろされ、みごとに薪が出来上がる。

「君、慣れているねえ」

「うん！」

シヤムは褒められて嬉しそうに笑った。

「じゃあ、君のやり方を参考にさせてもらつよ」

シンはそう言つとシヤムから斧を受け取った。

「そう言えば食事はどうしたんですか？」

キーラが碗を空にするとジェナンに声をかけた。

「ああ、シン少尉はラマダンの最中だからと言つことで夜明け前に

食べたいと言うことでもう済ませたよ」

「まあ、ジハードの間は断食の中断も許されているんだが、共和軍には大規模な動きも無さそうだからね中央戦線で一進一退の攻防戦が展開している今、南都軍閥もそちらに出動中。静かなものですよ」

シンは照れ笑いを浮かべながら斧を振り下ろす。

「大変ですねえ」

「そうでもないさ、ようは慣れだよ」

シンが斧を振り下ろすが、また中心を離れたところを叩いて原木は草叢に転がった。

「やっぱりシャムちゃんのようにには行かないな」

シンはそう言うと、原木を取りに草叢に歩いた。

「いつまでそうしているつもりだ？」

シンは原木を拾いながら手に薪を持ったまま立ち尽くすライラに声をかけた。その視線は厳しくクリスをにらみつけている。

「お前の仇は嵯峨中佐だろ？ホプキンスさんは関係無い」

「そうですか？この人の記事一つで、あの人でなしは救国の英雄になるかもしれない」

「それがどうした」

シンは原木を抱えたままライラをにらみつけた。

「英雄つてのはな、敵から見れば悪魔のように見えるものだ。あらゆる人を救うなんてことが出来るのは神だけだ。あの人も人間なんだ。こうして軍に属して戦うことになれば敵には恨みを抱かれる」

「でもあの男がしたのはだまし討ちですよ！」

シンは食って掛かるライラから離れて、再び手にした原木を台の上に乗せた。

「しかし、おかげで東海の戦いでは難民は生まれなかった」

そう言ってシンは斧を振り下ろした。今度は芯を捕らえた斧が原木を真つ二つに裂いた。

「確かに緒戦の奇襲で花山院直永を怯えさせ、そこにつけこんで主君を差し出せと迫ったやり方はきれいとは言えないがな」

そう言つとシンはもう半分に分ろうと斬った薪を立てる。

「だが、それが結果として被害を最小にする方策だったのは事実だ。それは認めてやるべきだと俺は思うがな」

「でも……」

ライラの声を後ろに聞きながらシンは再び斧を振り下ろす。

「納得できないのはわかるよ。いや、納得できる方がどうかしてる。だが、俺が言いたいのは今は敵討ちよりもするべきことがあるんじゃないかってことだ」

割れた薪を拾うとそのままシンは一輪車の荷台に薪を放り投げた。
「ちよつとライラ、気分転換だ。コイツを鍋のところまで運んでくれ」

ライラは不服そうな顔をしながら一輪車に手を伸ばす。

「手を貸すよライラ」

「いいわよ、こんなものくらい一人で……きゃあ！」

ジェナンの助けを断ってぞんざいに伸ばしたライラの手が一輪車のバランスを崩して薪を散らばらせる。

「ほら、言わんこつちや無い」

ジェナンは一輪車を立てる。そして二人は薪を拾い始めた。

「仕事増やしてどうするよ」

シンはそう言うつと自分で原木の山に手を伸ばして、ちよつどよさそうな薪を台の上に乗せた。

「しかし、これからどんな手を打つつもりなのかな、あの御仁は」

そう言うつと森の中では異物のようにはしか見えない保養所だった本部ビルをシンは見上げた。

「英雄を必要とする時代は不幸だと言うが、その通りかもしれないね」

ライラとジェナンが薪を運んでいった後で、ようやく一息ついたシンはそう言いながら斧を地面に置いた。クリスもキーラも食事を終えて、腕を片手に座っていた。

「あなたは嵯峨と言う人物を英雄だと思えますか？」

クリスのその言葉に、タバコに火をつけたシンは含みのある笑顔で答えた。

「英雄と言うのが時代を変える人材と定義するのなら、彼は間違いなく英雄ですよ。北天の包囲戦で見せた彼の共和軍に対する調略活動の腕前は軍政家としての彼の本領を見せたようなことになりましたね」

所詮はゴンザレスの配下の第一軍団に対する恐怖で動いている各州の部隊指揮官の弱み突いての切り崩し。これにより統率を欠いた部隊に以前から気脈を通じていた南部三県出身の指揮官を抱きこんで北天包囲部隊を背後から奇襲し敗走させた嵯峨の知略は現在の共和軍の劣勢と言う状況を作り出した。その事実を知るだけにクリスはシンと言う東モスレムの将校と言う第三者の立場で嵯峨をどう見るかが気になっていた。

「ゴンザレス大統領は北天包囲戦ですべてが終わると思っていたが、直下の精鋭部隊を投入しなかったのが裏目に出たと言うことでしょう。現在は地球の同盟軍に支えられている共和軍の支配地域もどれだけ陥落までの時間を稼げるか、そして自国の兵の損害はどれくらいかと本国の首脳陣の頭をなやませている状況なんじゃないですか」

クリスは手にした腕を握り締めて髭面の青年士官を見つめる。名の知れた戦術家であるシンも嵯峨と言う男をこき下ろすことなどで

きないようだった。

「そしてこんな状況を舌先三寸で作り上げた人間がいる。彼が英雄ではないわけは無い」

シンはそこまで言うといつの間にかくわえていたタバコから煙を吐き出す。

「ですがね、あの人は英雄とは呼ばれたくないらしい」

静かにクリスの顔を見つめるシンの言葉は続く。

「ライラの肩を持つわけではないが、あの人のやり方は時に冷酷で悪意に満ちている。この難民の移動も彼の策謀の結果かと私は疑ってますよ。出来すぎているようにやってきた東和空軍の動きを見ても、あの人物がすべてのシナリオを書いたのは明らかだ。人の不幸を利用するやり口はいつか行き詰る」

「確かにそれはそうかもしれませんがね」

手にした腕を転がしながらキーラはそう漏らした。

「私は思ってますが、あの人は自滅したがっているんじゃないですか？」

クリスのその言葉にシンは静かに頷いた。

「確かにそれは言えるかもしれない。あの人とは昨日かなり長い時間話しこんだわけですが、時折、遠くを見ているようなところがあるんですよ。まるで心に穴でも開いてるような目で遠くを見る。私などそこにいないかのようにね。あの人は守りたいものを守れなかった人だ」

シンの言葉、それは嵯峨の妻エリーゼの死をさしていた。義父を狙ったテロで、胡州の空港に降り立ったとたん暗殺された愛妻。嵯峨の自虐的な笑顔はそこから生まれてきているのかもしれないとクリスは思った。シンはそう言うとき静かに胸のポケットから写真を取り出した。クリスはそちらに体乗り出す。そこには緑の髪のパイロットスーツを着た女性が写っていた。

「恋人ですか？」

身を乗り出したキーラの言葉に恥ずかしそうに頭を掻くシン。

「彼女には今回の作戦のお守りだとは言ってあるんだけどね」

苦笑いを浮かべるシンの顔が生き生きとして見える。クリスはそんなシンを見ながら立ち上がった。

「ノロケ話を聞くほど暇じゃありませんか？」

「そう言うわけじゃないんですが、この本部の主の顔を拝もうと思いませんかね」

クリスはそう言うと腕を舐め続けているシヤムを置いて歩き出した。

「シヤムちゃん！シャワーを浴びるよ！」

「嫌だよ！目が痛い嫌だよ！」

クリスは後ろで叫んでいるキーラとシヤムのやり取りを後ろに聞いて、テントの並び立つ空き地から本部ビルを目指した。

本部ビルの前に子供達の一団が出来ていた。クリスが近づけば、その子供達の手にはカブトムシやクワガタが握られている。

「じゃあ、次の対戦相手は誰だ！」

「はい！アタシ！」

そう叫んだ少女の前、子供達の歓声の中、座り込んでいるのは嵯峨だった。一際大きなカブトムシを手に持った彼が、薄汚れた桜色のワンピースを着た少女のクワガタを受け取ると、板の上に二匹を乗せる。

「じゃあ、これで勝てば十二連勝だぞ！」

「僕のも、次は勝てるよ！」

「馬鹿だなあ、あんまり連続で対戦すると死んじゃうぞ。俺は次はコイツを出すつもりだから」

嵯峨がそう言って取り出したのは大きなクワを翳すクワガタだった。

「じゃあ！はじめ！」

嵯峨の言葉に虫の激闘が始まる。

「あー」

クリスは笑顔を振りまく子供達の間を抜けて嵯峨の隣に立った。

「ちよつと待っててくださいよ！」

嵯峨はそう言うつと自分のカブトムシをせきたてる。目の前の少女も自分のクワガタの角が嵯峨のカブトムシの体の下に差し込まれたのを見て雄叫びを上げる。

「やべえ！」

嵯峨のカブトムシは連戦で疲れたのか、そのままじりじりと後退を始めた。

「行っけー！」

少女の心が届いたようにクワガタはじりじりと土俵の外へと嵯峨

のカブトムシを追い立てる。

「だめか？だめか？」

嵯峨の言葉に戦意をそがれたように、カブトムシはそのまま土俵の下に落ちた。

「やったー！次はアタシが対戦するよ！」

嵯峨は頭をかきながら立ち上がる。子供達は次に誰が少女のクワガタに挑戦するかを決めるじゃんけんを始めた。

「すいませんねえ、ホプキンスさん。つい童心に帰ってしまって」

そう言いながら嵯峨は本部ビルに歩き始めた。

「しかし、ずいぶん用意が良いんですね」

「ああ、あの虫は今朝、採って来たんですよ。まあ、シヤムに取れそうな場所を教えてもらいましたから」

嵯峨はいつものように胸のポケットにタバコを漁っていた。

「ああ、タバコ切らしちまったか」

そう言うつと嵯峨はそのまま本部に入る。人影がまばらなのは早朝だということよりも難民に手を奪われてるからだろう。

「まあ、みんな良く働いてくれますよ」

そう言いながら嵯峨はそのままエレベータに乗る。

「これからどうなるんですか？」

クリスの問いに、表情も変えない嵯峨。

「まあ、北天や遼北には受け入れを頼めるわけも無いですからねえ。とりあえず西部の西ムスリム国境に現在仮設住宅を建設中というところですか」

いつにも無くすばやく動く嵯峨、彼は真つ直ぐ自分の執務室に入った。机の上にはいつの間にか出ていたコンピュータの端末が置かれていた。嵯峨は執務室にどっかりと腰を落ち着けるとその電源を入れる。

「ゲリラは後方の設備建設に従事させるわけですね」

「まあ、あの連中もいつまでも追いはぎの真似事をさせとくわけには行かないでしょ？」

そう言うつと嵯峨は黙々と端末のキーボードを叩き始めた。

「ずいぶん余裕があるんですね」

「余裕？そんなものありませんよ」

一瞬、画面から目を離れた嵯峨の瞳はいつものようにどろんとして生気を感じないものだった。そのままその視線はモニターに釘付けになる。そのキーボードの入力速度は異常と思えるほど早かった。本当にこの人物は北天からの書類を読んでから判断しているのか、クリスには疑問だった。

「今、ここを攻撃されたらおしまいなんじゃないですか？」

「ああ、それはないなあ」

嵯峨は今度はモニターを見つめたままで即答した。

「吉田は金をもらって仕事をしてるんでしょ？ 依頼内容に無いことは絶対しない男だ。まあ、こっちから手を出すまでは動きやあしませんよ」

キーボードを叩く速度は全く落ちることが無い。

「ですが、攻撃は最大の防御で……」

「腕や名前を売る必要の無い兵隊さんなら絶好のチャンスと見るでしょうね。いくら難民が死のうが勝てば良いわけですから」

淡々と作業を続ける嵯峨。

「だが戦争屋で吉田俊平クラスになると金が払えるクライアントは限られてくる。大手の財閥の民間軍事会社や今回みたいに直接政府と契約をすることになるわけですが、あんまりえぐいことをやれば信用に関わる。あいつも今動くことが得策ではないことぐらいわかってるんじゃないですか？」

嵯峨はキーボードを叩く手を止めると、机の引き出しからタバコの箱を取り出した。

「隊長！」

大きな声とともに乱暴に執務室の扉が開けられる。入ってきたのは楠木だった。

「おい、ノックぐらいしようや」

「そんな悠長なことを言う……」

「大須賀のことだろ」

新しいタバコの箱を開けて一本取り出すと火を点す。クリスが楠木の顔を見ていると彼は泣いていた。

「あいつは覚悟していたはずさ。潜入作戦というものはいつだってそうだろ？見つかれば間違いなく殺される。それを覚悟で共和軍に入っただんだ」

「わかってますよ！それは。でも……」

泣いている楠木。鬼の目にも涙と言っ言葉がこれほど当てはまる光景をクリスは見たことが無かった。

「じゃあ泣くより仕事してくれよ。明華が難民の最後尾を警戒してるんだ。いい加減帰してやりたいだろ？」

「わかりました！」

楠木はそう言うのと敬礼をして執務室を後にする。

「作業員が消されたんですか？」

「まあね」

嵯峨は静かにタバコをふかす。視線が遠くを見るようにさまよっている。

「下河内連隊時代からの子飼いの奴だね。楠木とははじめは相性が悪くて俺もはらはらしてたんだがあの地獄を生き延びたことでお互い分かり合えたんだらうな」

煙は静かに天井の空調に吸い込まれていく。

「吉田少佐の仕業ですか？」

「だろうね。共和軍にはそれほど情報戦に特化したサイボーグは多くない。特に北部基地にはあいつしかいなかったはずだから情報の枝をつけて探りを入れるようなことが出来るのは吉田一人だろうね」

クリスはそこで北部基地で出逢った成田と言う士官を思い出していた。

「もしかして大須賀さんは成田と言う偽名を使って無かったですか？」

「良くご存知ですね」

静かにクリスを見つめる嵯峨。だが、嵯峨の珍しく悲しみをたたえた瞳を目にしてクリスは語るのをためらった。

「まあ、俺が吉田の立場でも同じことをしただろうからね。恨んだところで大須賀は戻ってこないんだ」

そう言つと嵯峨はタバコを灰皿に押し付けた。

「そろそろかな？」

そう言つと嵯峨は立ち上がった。

「何がですか？」

「お迎えですよ。一応、ここは人民軍の基地ですから、難民の方達の移動をお願いしたいと思ひましてね」

立ち上がつて伸びをする嵯峨。クリスは彼より先に部屋を出た。

本部の前では子供達の群れを仕切つてゐるのはシヤムだった。熊太郎にはそれより小さい子供達が集まり、撫でたり叩いたりしている。

「楽しいかい？」

大きなクワガタで相手のカブトムシをひっくり返したシヤムがニコニコと笑つてゐる。

「うん！そう言えばホプキンスさんは今度は私の機体に乗るんだよね」

「ああ、嵯峨中佐にはそう言われているけど……」

「よろしくね！」

そう言つとまたシヤムはカブトムシ対決の土俵に集中した。いつの間にか広場には軍のトラックが到着している。クリスはそちらに足向けることにした。移送可能な病人が担架に乗せられてトラックの荷台に運ばれていく。

「クリス、来てたのか」

その様子をハワードは写真に収めていた。

「これだけの数のトラックを集めるとは……」

「それだけあの嵯峨と言う人物に力があるということだろ？力は人を惹きつけるものさ」

ハワードはクリスを振り向きもせずニシャッターを切り続ける。

「難民でも北兼軍に志願したのもいるんじゃないか？」

「ああ、さつき受付をやつていたが、ゲリラ連中と同じく後方送り

だね。右派民兵組織はかなり深くまで潜入しているとか言ってたから警備任務にでも就くんじゃないのかなあ」

「あくまで手持ちの兵力で北部基地を押さえるつもりなのか？あの人は」

語調が強かったのか、ハワードがクリスを振り向いた。

「ずいぶんと入れ込むじゃないか。俺達はあるまで合衆国の敵を取材しているんだぜ」

ハワードの顔に笑みがこぼれる。

「そう言うお前はどうかんだよ」

その言葉を聞くとハワードはゆっくりと立ち上がった。

「誰が正義で、誰が悪などということは単なる立場の違いだと言うことは俺も餓鬼じゃないんだからよくわかるよ」

それだけ言うと彼は再び担架の列にレンズを向ける。

「それぞれが収まるべき鞘に収まった時、この戦争は終わるのさ」

ハワードはそう言うと再び中腰になって、トラックに運び込まれる担架を写真に収めた。

次々と運ばれる病人を乗せた担架。それを積み終わると北への道を急ぐトラック。運転しているのは民族衣装のゲリラである。彼らに支給する軍服は足りていないようだった。

「手回しが良いと、仕事をしていても楽だね」

そう言っただけで話しかけてきたのは別所だった。その隙のない態度に思わずクリスは身を固めた。

「病院の方は？」

「ああ、今は一息ついてるところだよ。今は軽症の患者ばかりだからとりあえず一服しようと思ってるね」

そう言っただけで別所は笑った。どこか人を緊張させるようなところがある。クリスは彼にそんな印象を持った。

「このまま帰られるんですか？」

クリスの言葉に別所は無言で頷いた。出て行くトラック、また入ってくるトラック。今度は子供連れを中心とした難民がトラックに乗り込んでいく。

「嵯峨中佐か。実に欲が無い人だ」

クリスの言葉をはぐらかす別所。クリスはその言葉を不快に思っただけで別所を見つめた。

「わかるよ、君の気持ちも。彼に野心があれば君はここにはいなくなつただろう。しかし、嵯峨中佐には利用されているよ、君達は」

「それで良いんじゃないでしょうか？」

クリスは自然に出た言葉に自分でも驚いていた。

「確かにあの人は人民軍の西部戦線での中核を担わされている。しかも相手はアメリカ軍をなどの地球の精鋭部隊。そして今度は吉田俊平という化け物の相手までさせられることになる。でもあの人はこのくだらない戦いを終わらせる早道としてそれを選んだ」

「ずいぶん入れ込んでるんだね」

別所の言葉を聞いたとき、クリスは自分が迷っていないことに気が付いた。

「確かに、はじめはただの戦争マニアだと思ってましたよ、あの人を。だが、そう言う見方が次第に変わって行って、今こうして彼を頼りに逃げ延びてきた人達を見てわかりました」

「そういう見方も有りますね。北兼王の称号だけではこれだけの民が動くのは説明がつかない。人を惹きつける才能に恵まれている。それは認めますよ」

そう言うと別所は再び病人の待つテントへ向かう。クリスもまた、子供達を写真に写すハワードのところに歩き始めた。

「ああ、いましたね。ホプキンスさん！」

駆けてきたのは伊藤だった。珍しく動揺している伊藤を不思議そうにクリスは見つめていた。

「どうしたんですか？慌てて」

周りの親子連れの難民が不思議そうな顔で、息を切らして立ち止まった政治将校の様子を伺っていた。

「ちよつと……待つてください……」

相当走り回ったのか、伊藤はネクタイを緩めてうつむきながらしばらく息を整えていた。

「大丈夫ですか？」

クリスの言葉に苦笑いを浮かべる伊藤。

「実は嵯峨隊長が会わせたい人物がいると言ったことなので来てくれませんか？」

思い当たる相手が想像できず、クリスは当惑した。難民や胡州海軍の施設である別所で十分クリスは衝撃を受けていた。それを上回る人物らしいと思うと心当たりが無かった。

「あの嵯峨さんがですか？」

「行ってこいよ、俺はしばらく写真を取る」

ハワードはフィルムの交換をしながらクリスに告げた。

「そうか、じゃあ伊藤中尉、お願いします」

ようやく息を整えた隼は愛想笑いをするとそのまま本部へと歩き出した。本部の前では北部への出発を前にしてシヤムに礼をしている親子連れの姿が見えた。彼らから見ても、黙って隣で座っている熊太郎が珍しく見えるらしく、撫でたり引っ張ったりしている。

「こちらです」

そんなほほえましい光景も目に入らないといった伊藤だった。彼がいつに無く緊張しているのはすぐに感じ取れた。本部ビルは相変

わらず閑散としていた。だが、伊藤が厳しい視線を送る先に居る武装した人民軍の兵士が居るところから見て、人民政府の高官が来ているらしいことがわかった。

「本当に私が来て良かったんですか？」

クリスは小声で訪ねるが、伊藤は答えようとはしない。エレベーターに乗り込む。

「なんだよあの仰々しい警備。まるで囚人じゃねえか」

ゆっくりと上がっていく箱の中で、伊藤は吐き捨てるようにそう言った。その憎たらしげにののしる様子をクリスは不思議に思いながらあがつていくエレベーターの感覚を感じていた。着いたのは最上階のロビー。嵯峨が目の前の点滴を受けている老人と話を続けているのが見えた。

嵯峨が目の前のワインを飲んでいる老人に頭をかいて照れ笑いを浮かべているのが見えた。その老人のとなりには点滴のチューブがあるのを見てクリスは苦笑いを浮かべた。クリスはその横顔を見ただけでそれが誰かを知った。

「ダワイラ・マケイ主席……」

「やあ、ホプキンスさん！」

頭の血の気が引いていくクリスを振り返る嵯峨。老人は立ち上がるうとしたところを伊藤に止められた。

「君か、嵯峨君の取材をしている記者と言うのは」

顔色はよくない。ただその瞳の力はダワイラ・マケイと言う革命闘士らしい精神力を秘めているようにクリスには見えた。伸ばされた手に思わず握手している自分に驚きながらクリスは嵯峨の隣の席に座っていた。テーブルの上にはブルーチーズとクラッカーが置かれている。ダワイラはクラッカーを手に取るとブルーチーズを乗せて口に運んだ。

「久しぶりの固形物がこんな贅沢なものだとは……嵯峨君の心遣いにはいつでも感服させられてばかりだね」

そう言って笑みを浮かべるダワイラの青ざめた顔にクリスは不安を隠せなかった。

「そう言ってももらえると用意したかがあるというものですよ」

そう言って嵯峨も同じようにブルーチーズをクラッカーに乗せた。「さすがにワインはまずいのでは……」

「伊藤君は心配性だな。どうだね。実は私が彼を紹介したわけだが、こう融通がきかんと疲れることもあるんじゃないかな？」

「いえ、私の方が伊藤には迷惑かけてばかりで……」

「いや、彼にも君にも良い経験だ。君達のような青年が増えれば遼南にも希望が見えると言う物だよ」

ダワイラはからからと笑う。クリスはその表情から彼の病状がかなり進行していることがわかった。しかも教条派が台頭してきている北天の人民政府。ダワイラの隠密での視察はかなりの無理をしていることだろうということはクリスにも想像できた。そして、そうまでして嵯峨に何かを伝えようとしている覚悟がわかって、クリスはじっとダワイラを見つめた。

「さっきから世間話ばかりしているようだが何を私が言いたいかはわかっているようだね、嵯峨君」

静かにワイングラスを置いたダワイラが眼鏡を直す。沈黙が場を支配した。

「終戦後のことではないですか？」

こちらも静かに嵯峨の口から言葉がこぼれた。

「今の人民政府は腐り始めている」

「ダワイラのその言葉にどこと無く影があるようにクリスには見えた。自分が夢を追って作り上げた国が理想とはかけ離れた化け物に育ってしまった。そうそのかみ締めるようにワインを含む口はそう言いたげだった。」

「まあ権力なんてそんなものじゃないですか？手にしたら離したくなくなる。別に歴史的に珍しい話じゃない」

「嵯峨のその言葉にもどこと無くいつもの投げやりな調子が見て取れた。」

「だがこの国はそう言うことを言えるほど豊かではない。しかし彼らも本来は権力闘争などが出来る状態でないことくらいわかる知恵のある人物だったのだがね。本当に権力は人を狂わせる麻薬だ」

「ダワイラはそう言うかと力なく笑った。」

「その麻薬に耐性のある人物に率いられてこそこの国の未来がある。違うかね？」

「それが私だって言うんですか？買いかぶりですよ」

「嵯峨もワインを口に含む。伊藤が空になった嵯峨のグラスにワインを注いだ。」

「君は生まれながらに知っているはずだ。権力がどれほど人を狂わせるかを。先の大戦での胡州の君に対する仕打ち、義父の片足を奪い、妻を殺し、負けの決まった戦場に追い立てた胡州の指導者達のことを。そしてさかのばればこの国を追われることになった実の父親との抗争劇を」

「まあできれば権力とは無縁に生きたかったのですが、どうにも私はそんな生き方は出来ないようになっていってしまうわ」

「嵯峨そう言うとおどろいた笑顔を浮かべる。」

「そんな君だから頼めるんだ」

その革命闘士の視線は力に満ちていた。頬はこけ、腕は筋ばかり目立つほどに病魔に蝕まれながら、ダワイラは嵯峨をかつての同志を励ましたその目で見守っていた。

「玉座に着けというわけですね」

嵯峨のその言葉に沈黙がしばらく続いた。

「そうだ」

ダワイラの言葉は非常に力強く誰も居ないカフェテラスに響いた。事実上の帝政の復興を認める人民政府元首の発言である。クリスは手に汗を握った。

「しかし、今はそう言うことは言える段階じゃないでしょう。それに俺には今の人民政府の連中に対抗できるだけの人脈も無い。俺はね、独裁者になるつもりはないですから」

「ならば時間をかけてその準備をすれば良い。私と違って君には時間がある。一つ一つ問題を解決していけばいいんだ」

そう言うつとダワイラはワインを一口含んだ。クリスは緊張していた。事実上の一国の国家権力の禅譲。その現場に居合わせることになるとはこの取材を受けた時には考えられない大事件に遭遇している事実緊張が体を走る。

「君は君のやり方で進めば良い」

そう言うつとダワイラは力が抜けたように車椅子の背もたれに体を投げた。

「それにどうやら私の役目は終わったようだ」

「そんなことは無いですよ、あなたにはこの戦いの結末を見る義務がある」

この言葉に嵯峨は真意を込めているようにクリスには見えた。それまでのふざけた様子が消え、にごっているはずの目もするどくダワイラを見つめている。

「ありがとう。私もそうしたいものだ」

そう言うつとダワイラは静かに目を閉じた。

「だがこの戦いが終わるまで私の体は持たないだろう。そのことくらいはこの年になれば分かる」

伊藤は励ましの言葉をかけようと身を乗り出したが、ダワイラは彼を制した。

「癌だとわかったのは十年前だ。ちょうど伊藤君達が武装蜂起を始めた頃だろう。私もその頃は病魔などに負けてたまるかと手術をすることに戸惑いなど無かった」

静かに天井を見つめるダワイラ。その目は非常に穏やかだった。

「私にしか出来ないことがある。私にしか伝えられない言葉がある。そう信じていた。医者が止めるのも聞かずに胃を切って一週間でゲリラのキャンプを視察したものだよ。まるで私が胃を半分切り取った人間ではないかのように彼らの笑顔が元気をくれたものだ」

遠くを見る視線のダワイラを三人が見守っていた。

「しかし、きれいごとでは政治は、人は動かないよ。そのことがわかり始めたとき、今度は癌が大腸に転移したと診断された。このときは少しばかりメスを入れるのをためらったね。ここで私が現場を離れば人民政府は瓦解すると思ったんだ。結局周りの説得で入院することになったが、思えばこの頃から私はもうただの飾りになっていたのかもしれない」

誰も言葉を挟むことが出来なかった。ダワイラの言葉ははつきりとしていた。そして悲しみのようなものが言葉の合い間に感じられた。

「そして北天を首都とする人民政府樹立宣言を発表したのだが、肺に癌が転移していると聞いたときはもう手術はやめることにしたよ。誰もが支援先の遼北の方を向いていることに気づいたとき、私は道を誤ったことを理解したよ。そんな老人がいつまでも権力を握っていることは良いことではない。彼らも私から独り立ちすれば自分の

過ちを素直に認められるようになる、そう思っただ」

「ずいぶん甘い考えですねえ」

そう言ったのは嵯峨だった。そんな彼を一目見ると、ダワイラは満足げな笑みを浮かべた。

「そうだ。私は性善説をとることにしている。いや、科学者は性善説を取らなければ研究など出来ないよ。その技術が常に悪用されるということ的前提に研究をする科学者が居たら、それは人間ではない、悪魔だよ。それは三流物理学者の僻みかも知れないがね」

再び嵯峨を見て笑うダワイラ。彼が北天大学の物理学博士であった時代の面影が、クリスにも見て取ることが出来た。

「国を打ち立てるには理想と情熱が必要だ。だが、それを守っていく為には狡さと寛容を併せ持つ人物が必要になる。今の人民政府には狡さはあっても寛容と言う言葉がふさわしい人物が居ない」

「僕はただずるいだけですよ」

「いや、そう自らを卑下できるということはそれだけ人を許せる人物だと言っている様なものだ、自分の言葉が絶対的に正しいと信じ込んでいる人間は自分を卑下することも、人を許すことも出来ないよ」

ダワイラがそう言ったとき、伊藤の通信端末が鳴った。

「どうやら時間のようだ。ホプキンスさん、だったかね」

「はい」

「この会談の記事は少し発表を待ってくれないかね。いつか嵯峨君がこの遼南を治める日が来た時、その日まで……」

そこまで言うとダワイラは力なく笑った。クリスは何も言えずにただダワイラと言う老革命家のやせ細った手を握り締めた。

「それとこれが今の私に出来るすべてのことだ」

そう言つてダワイラは窓の外を指差した。降下してきた大型輸送垂直離着陸機。黄色い星の人民軍の国籍章が見える。

「では、行こうか伊藤君」

伊藤に押されて車椅子はエレベータに向かう。嵯峨はタバコを取り出し、それに火をつけた。

「どうしてあなたは断つたのですか？王党の復活は……」

「そんなもの望んじゃありませんよ」

タバコの煙を吸い込む嵯峨、彼はまるで何事も無かつたかのように外の光景を眺めていた。渓谷に続く道に北兼軍の二式が見えた。

「ああ、これで難民の流入は一区切りつて所かねえ。搬送の手配はダワイラ先生が済ませてくれたしな」

そう言つと嵯峨は遠くを見るような目つきになった。

「ですが、今の北天の政府は腐っている。ゴンザレスの独裁政治にそれが取つて代わつても何の違いもありませんよ！」

「まあ、そんなんですがね」

嵯峨は室内に視線を移す。エレベータが開き護衛達に囲まれてダワイラが姿を消した。

「一つ一つ物事は処理していかなければならない。明日の敵のことを考えて今の敵に当たれば勝てる戦いも負けることになる」

タバコの煙が天井に立ち上る。

「戦争は勝つか負けるか。二つしか選択肢は無いが、負けたときの悲哀はそれは酷いものですよ。だから勝つ方策を考えてそれを実行するだけですわ」

そう言つと嵯峨は立ち上がった。

「とりあえず仕事でもしようかねえ」

首を回しながらのんびりとタバコをもみ消す嵯峨。クリスマスもあわ

せて立ち上がる。そして思いついたようにエレベータへ向かう足を止める嵯峨。

「そうだ。明華達が戻ってきているでしょうから取材してみたらどうですか？」

嵯峨はそう言つと再び歩き始める。そしてクリスマスもその後が続いた。

「中佐……」

エレベータで北天からダワイラに帯同してきたらしい背広の男に車椅子を預けた伊藤が心配そうな顔で嵯峨を見つめる。

「伊藤、何も言つなよ。俺は私欲で動けるほど素直な根性の持ち主じゃねえんだ」

そう言つと上がってきたエレベータに三人は乗り込んだ。

「さあて、報告書。たたき返されてるかねえ」

執務室の階でエレベータは止まる。嵯峨のいつものシニカルな笑みが見ええる。

「それじゃあ、失礼」

そう言う嵯峨はエレベータを降りた。代わって入ってきたのはキーラだった。

「どうしたんですか、ジャコビンさん」

クリスの言葉に少しキーラの顔が曇った。

「あーあ、これなら東和に移住するんだったわ」

「ああ、遼北の人造兵士移住計画ですか。応募したんですか？」

そう考えも無く発せられたクリスの言葉に、キーラは少し悲しそうな顔をした。

「まあ、いいか。書類取りに来て会えたんだもんね」

誰に話すでもなくキーラがつぶやく。ちらちらとクリスの顔を見るキーラ。だが、クリスには先ほどの会合の余韻が残っていて、彼女の頬が赤らんでいることに気付くことが出来なかった。

何も言葉が交わされることが無かった。一階でエレベータの扉が開くと、キーラはそのままクリスを無視して歩き出そうとした。

「ジャコビンさん！」

「キーラって呼んでくれないんですね」

振り返ってそれだけ言うとキーラはそのまま本部に入ってきた北兼軍の兵士達の中に消えた。クリスはそのまま本部を出た。難民達が陸路を行くトラックと空路を行く輸送機に振り分けられているのが見える。

「あーあ、詰まんないの」

シャムはかごの中のカブトムシやクワガタムシを見つめながらつぶやいている。

「どうしたんだ、一人で」

声をかけたクリスに目を輝かせているシャムがいた。隣の熊太郎も嬉しそうに舌を出している。

「これ、あげるね」

「逃がしてやればいいのに」

クリスの言葉に、シャムは不思議そうにしていた。

「なんか、君。それを食べそうな目をしているんだけど……」

「カプトムシの成虫は食べないよ！」

シャムはそう言い切った。

「じゃあ幼虫は食べるんだね」

「うん！やわらかくて甘いんだよ！」

クリスは昔、地球の東南アジアでの紛争によりこの星へ移民してきた人達が喜んで巨大なカプトムシの幼虫をほおばっている映像を見たのを思い出した。

「それよりシヤムちゃん。君の機体見せてくれないかな？」

クリスの言葉にしばらくまじまじと彼の顔を見つめた後、満面の笑みを浮かべてシヤムは立ち上がった。

「いいよ！次からは私の後ろに乗るんだよね！」

かごを熊太郎の背中に乗せて歩き出すシヤム。彼女は元気良くクリスを連れて格納庫に向かう。

「隊長の機体って大変なんだねえ」

シヤムはそう言うと言と稼動部分と動力炉を外されてフレームだけの姿になっているカネミツを見つめた。その隣には取り外した部品を冷却しているコンテナから湯気が上がっている。

「あれだよ」

シヤムに言われるまでも無く、その白い機体は一際目立っていた。そのまま足元に立つシヤムとクリス。シヤムが自分を『騎士』と呼ぶ理由が、この気品を感じさせるアサルト・モジュールのパイロットであることからよくわかるとクリスは思っていた。どこか西洋の甲冑を思わせる姿は二式が戦闘用の機械にしか見えないことに比べるとかなり優美な姿を誇っているように見えた。

「シヤム、カブトムシくれるんだろ？」

若い整備員が声をかけるのを聞くと、シヤムは熊太郎の背中のかごを彼に渡した。整備員達がそれに群がり、談笑を始めたのを見計らうように、シヤムはそのままコックピットに上がるエレベータにクリスを案内した。

「コックピットは掃除しといたからな！」

下でカブトムシの取り合いをしている整備員が叫ぶ。シヤムは笑いながら彼に手を振った。

「そう言えばこれまでは熊太郎が乗ってたんだな」

「うん！広いからちゃんと椅子を乗せても大丈夫だったんだよ」

エレベーターが止まる。コックピットハッチがシヤムの手で解放され、内部が天井の透明になった部分からの昼の日差しに照らされた。コックピットが広いというより、明らかにシヤムの座席が小さめに出来ていた。

「これははじめからこうだったのか？」

「違うよ。明華ちゃんがアタシが乗りやすい様に調整してくれたの」

そう言うとシヤムはコックピットの前に立った。クリスはその隣から中を覗いた。全周囲モニターが新しい。他の内部装置もすべて二式やカネミツの部品の流用のように見えた。

「中はずいぶん手を入れたんだね」

「明華とキーラがやってくれたんだ。だから凄く乗りやすくなったよ」

シヤムは満面の笑みを浮かべながらクリスの顔を見つめた。

「そう言えばクリスはキーラのこと嫌いなの？」

コックピットに頭を突っ込んでいたクリスは、背中を見ているシヤムの言葉に思わず咳き込んだ。

「何言ってるんだ、それに会ってからそう日も経ってないし……」

「恋に時間は関係ないって明華も言ってたよ」

振り向いたシヤムがニヤニヤと笑っている。

「だから、俺は取材に来ただけだ。たぶん北兼台地の戦いが終われば国に帰るつもりだ」

「えー！クリス帰っちゃうの？」

驚いたように叫ぶシヤム。クリスは困惑した。

「そんなに驚くこと無いじゃないか。北兼台地が人民軍の手に落ちれば地球各国の部隊は撤退を決断する国も出てくるだろう。今度、遼南に来たらそちらの取材をするつもりなんだ」

シヤムはしばらくクリスの言葉が理解できないと言う顔をしていたが、どうにか彼女なりの理解が出来たところでなんとなく下を向いた。

「あつ！」

そのままシヤムが凍りつく。何かとクリスが下を見れば、工具箱を落としたのか工具を拾い集めているキーラがいた。クリスは何も言えずにいた。下のキーラはシヤムの視線に気付いて上を見上げた。キーラとクリスの視線が合った。そしてお互い避けるように目を反らした。

「あんまり大人をからかわない方が良さぞ」

クリスはそう言うのと再びコックピットの中を覗きこむ。

「重力制御システムは既存のものを使っているみたいだな」

「きぞん？なにそれ」

帽子を直しながらシヤムが訪ねる。

「そう言えばエンジン出力と関節動力装置のバランスはどうしたんだ？この前はかなり技術者にエンジンを絞れと言われていたみたいだけど……」

クリスの前に立つシャムが不思議そうな顔で見つめ返してくる。

「無駄よ。シャムにそんなこと聞いても」

はしごを上つて来てそう言ったのはキーラだった。

「その問題はかなり改善しているわ。カネミツの予備部品を組み込んでみたのよ。規格があっていたから使えたんだけど、それでも出力の70パーセントくらいで動かしてもらわないといけないけどね」

キーラはそう言うとクリスを見た。先ほどのシャムの言葉を聞いていたクリスは笑顔を作ろうとするが、どこと無く不自然な感じがした。それを見て少し失望したような顔をしたキーラはそのままクリスの隣に立ってコックピットの中を覗きこんだ。

黙り込む二人に戸惑うシャム。

「何してるの！」

叫び声の主は明華だった。三人で下を見ると、パイロットスーツの明華が手を振っている。

「これから昼の炊き出しの仕事があるから降りて来なさいよ！」

そう言っていると明華は更衣室に向かう。

「そんな時間だったんだね」

そう言っているとクリスはエレベータに向かう。キーラもシャムもなんとなくその後が続いた。彼等はハンガーの前を見た。すでにまだこの基地で出発を待っている難民達は炊き出しのテントの前に並びだしている。輸送機を待つ群れには隊員がレーションを配布していた。「相変わらず手際がいいね」

「伊藤中尉はこう言うことは得意ですから」

キーラはそれだけ言うところを下を向いてしまう。難民達の群れに頭を下げられながら、キーラは早足で炊事班がたむろしているテントに向かった。

「シャムちゃんはこの人達をどう思うんだ？」

クリスの問いに行列に加わろうとしていたシャムが振り向いた。それまでひまわりのように明るく黒い民族衣装の帽子の下で輝いていたシャムの笑顔に影が差す。

「おとうが言っただけど、戦争では弱いものが一番の被害者なんだよ。戦えるのは強い人だけ。その人達は何でも手に入るけど、弱い戦えない人はみんな持つてるものを取られちゃうんだ」

シャムの視線がさらに何かを思い出したような悲しげな光を放つ。「だからね、アタシは戦わなければいけないんだよ。騎士なんだから」

シャムの決意にも似た言葉を聞いてクリスは少しばかり胸が痛ん

だ。

「でも君は子供だろ？」

「騎士は騎士なんだよ。戦う意思と力があるから弱いものを守って戦えっとおとうは言ってた。それにおとうやみんなの墓があるんだ。みんなが見ているから一人だけ逃げるなんて出来ないよ……」

そこまで言うとシャムはしゃくりあげ始めた。クリスは難民達からまるで子供を苛めている外国人と言う風に見られて思わず頭を掻いた。

「なんだ、クリス。子供を泣かせるとは許せないなあ」

難民達を写真に納めるのも一段落着いたのか、レーシヨンの箱を開けるのをその棍棒のような褐色の腕で手伝っていたハワードが冷やかしの声を上げた。

「別にそんなつもりは……」

ハワードの顔を見ると、少しばかりシャムは安心したように涙を拭った。彼女の隣には熊太郎が心配そうな顔をしながら座っている。「じゃあお手伝いをしよう」

そんなクリスの言葉にようやくシャムは笑顔を取り戻した。

「ホプキンスさん何をしてるんですか？」

パンを難民に渡す手伝いを始めたクリスに声をかけたのは伊藤だった。

「ああ、とりあえず僕に出来ないことがないかなあとと思って」

「別にそれは良いんですが、取材はどうしたんですか？」

「これも取材の一環ですよ」

そう言うクリスの肩を叩いて伊藤は感心したような笑みを残して人ごみに消えた。未だに難民の群れは止まることを知らない。新しくやってくるのは車やオートバイで逃げてきた難民達。徒歩で来た人々は休憩を済ませるとすぐに輸送機で後方に向かっていた為、残されたのは比較的若い人々だった。若い男の中には軍への志願手続きを終えて似合わない軍服に身を包んでいる者もいた。

「なんだ、お前も志願したのか！」

スープを盛り分けている若い炊事班員がそう声をかけるところから見て、どうやら彼も朝の志願兵受付に応募した口らしい。あちこちで着慣れない軍服を笑いあう若者の姿が見える。

「ようやく終わったみたいですね」

クリスは隣の太った炊事班員に声をかけた。ふざけあう元難民の隊員達だけが残された広場を見て、彼は満足げに頷くと空になった鍋を持ち上げようとした。クリスが手を貸してかまどから持ち上げられた鍋を駆け寄ってきたつなぎの整備班員に渡す。

「いやあ千客万来だけどなあ、夜は作り過ぎないようにしないと材料が無くなっちゃう」

両手を払いながらその太った整備班員が笑った。クリスもそれにあわせて笑っていた。右派民兵組織が壊滅した今、この基地にとつては北兼台地南部基地への侵攻作戦の準備に取り掛かる絶好の機会であることはどの隊員も自覚しているところだった。炊事班の補助

をしていた管理部門や通信部門の隊員は早速本部ビルに駆け足で向かっている。

「ご飯食べたの？」

そう言って近づいてきたのはシャムと熊太郎だった。

「いやあ、そう言えば忙しくて食べられなかったなあ」

そう言うクリスにシャムは手にしたパンを差し出した。

「コーヒーくらいなら詰め所にありますけど……」

シャムの後ろから近づいてきていたキーラ。クリスは何を言うべきか迷いながら彼女を見つめた。その白い髪が穏やかな午後の高地の風になびく。思わずクリスも彼女に見とれていた。

「じゃあご馳走になりますよ」

そう言ってクリスは嬉しそうにハンガーに向かうキーラの後を続いた。

踏み固められた畑の跡を通り抜けると、いつものようにハンガーが見える。カネミツの前では菱川の青いつなぎを着た技術者が日の光を浴びながらうたたねをしていた。白いつなぎのこの部隊付きの整備班員は帰等した二式のチェックも一段落着いたというように、だるそうに歩き回っていた。

キーラは軽く彼らに手を振るとそのままクリスを連れて詰め所に入った。中には明華と御子神、それにジェナンとライラがコーヒ―を飲んでいた。

「班長！どうですか？二式は」

キーラの言葉に明華はただ手を振るだけだった。それを見ると少し微笑んだキーラはそのまま奥のコーヒ―メーカーに手を伸ばした。「飲んじやったんですか？」

「あ、一応空になったら次のを作る決まりだったわね。ごめんね」明華がそう言うのとキーラに軽く頭を下げた。コーヒ―メーカーを開けたキーラは使い古しの粉を隣の流しに置いた。

「ホプキンスさん。とりあえずかけてみてください」

キーラの言葉に甘えてクリスは空いていたパイプ椅子に腰掛ける。天井を見上げてぼんやりとしている御子神。コーヒ―をすすりながら何も無い空間を考え事をしながら見つめているジェナン。借りてきた猫とでも言うつようにそのジェナンを見つめているライラ。

「そう言えばミルクは無かったんでしたっけ？」

「そうね、しばらくはどたばたが続くでしょうから、手が空いたところで発注しておいてね」

相変わらず上の空と言うように明華が答えた。

「許中尉」

クリスの呼びかけにだるそうに顔だけ向ける明華。

「確か君は15歳……」

「16歳ですよ」

強気そうな明華だが、さすがに疲れていると言つように語氣に力が無い。

「私の年で出撃は人道的じゃないと言つつもりなんですよ？別にいいですよ」

そう言いながら微笑んだ明華が惰性で目の前のマグカップに手を出した。

「すっかりぬるくなっちゃったわね。キーラ、私のもお願い」

そう言つと明華はマグカップをキーラに渡す。

「それと、シヤムはいつまでここでじつとしてるの？」

明華の視線をたどった先、詰め所の入り口で行ったり来たりしているシヤムがクリスの目に入った。シヤムは照れながら熊太郎に外で待つようにと頭を撫でた後、おっかなびっくり詰め所に入ってきた。

「ココア！」

シヤムの叫び声が響く。どたばたが気になったのか奥の仮眠室からレムが顔を出した。

「レム！」

シヤムが抱きつこうとするのを片手で額を押さえて押しとどめる。「お嬢さん、私に触れるとやけどしますぜ！」

「何かっこつけてんのよ、バーカ」

明華の一言に頭を掻くレム。さすがにシヤムの大声を聞きつけてルーラが出てきた。

「何？何かあつたの？」

「何も無いわよ。コーヒー飲む？」

コーヒーメーカーをセットしたキーラが二人を眺める。

「私はもらおうかしら」

「それじゃあ私はブルマン」

「レム。そんなのあるわけ無いでしょ、と云うかどこでそんなの覚えてたの？」

呆れる明華。

「いやあ隊長が時々言っただけでいい」

「あの人にも困ったものよね」

そう言いながら明華は手にしていた二式の整備班が提出したらしいチェックシートを眺めていた。

「なんだか軍隊とは思えないですね」

クリスがそう言っていると明華は頭を抱えた。

「確かにそうかも知れないわね。周同志もそのことは気にかけてらっしゃるみたいだけど」

「ああ、あの紅茶おばさんの言うことは聞かないことにしてますんで」

「レム！」

口を滑らせたレムを咎めるキーラ。レムは舌を出しておどけて見せる。

「紅茶おばさん？」

「ああ、周少将のイギリス趣味は有名だから。紅茶はすべてインド直送。趣味がクリケットと乗馬と狐狩り。まあ遼北の教条派が肅清に動いたのもその辺の趣味が災いしたんでしょうね」

明華はそう言うのと再びチェックリストに集中し始めた。

「なんかにぎやかだな」

そう言いながら入ってきたのはセニアだった。

「コーヒーなら予約は一杯よ」

キーラの言葉にセニアは淡い笑みを浮かべる。

「シヤムも飲むのか？」

「アタシはココア！」

「だからココアはもう無いの！」

やけになって叫ぶキーラの声にシヤムは困ったような顔をしてクリスを見上げた。

「あのー静かにしてくれないかな？」

そう言ったのは一人二式の仕様書を読み続けていた御子神だった。ジェナンとライラと言えば、呆然と人造人間と明華、シヤムのやり取りを見つめていた。

「はい！入ったわよ」

そう言うときーラは明華、クリス、レム、ルーラ、御子神、ジェナン、ライラそして自分のカップを並べた。

「私のココアは？」

「だから無いんだって！」

しょんぼりと下を向くシヤム。

「すみませんねえ」

ジェナンはそう言うときーラをすすった。

「あの……」

ライラはカップを握ったまま不思議そうにきーラを見つめた。

「そう言えば東モスレムにはあまり私達みたいなのはいないらしいわね」

きーラはその言葉にレム、ルーラ、そしてセニアがライラに視線をあわせる。

「確かにあまり見ないですし、もっと感情に起伏が無いとか言われていて……」

「酷いわねえライラちゃん。私達だって人間なのよ。うれしいことがあれば喜ぶし、悲しいことがあれば泣くし、まずいコーヒーを飲めば入れた人間に文句を言うし……」

「レム。文句があるならもう入れないわよ」

カップを置いてきーラがレムをにらみつける。

「レムさんの言うとおりだ。ライラ。偏見で人を見るのはいけないな」

ジェナンはそう言うのと静かにコーヒーをすすする。

「いいこと言うじゃないの、ジェナン君。それに良く見ると結構かっこいいし……」

「色目を使うなレム！」

「なに？ルーラちゃんも目をつけてたの？」

「そう言う問題じゃない！」

「あのーもう少し静かにしてもらえませんか？」

レムとルーラのやり取りとそれにかみつくタイミングを計っているライラの間に挟まれた御子神が懇願するように言った。

「無駄じゃないの。こんなことはいつものことじゃないの」

平然と機体の整備状況のチェックシートをめくりながら明華はコーヒーをすすすっていた。

「ぶつたるんでるぞ！貴様等！」

そう叫んで入ってきたのは飯岡だった。ランニング姿のまま机の上のタオルで汗を拭う。

「あ！それ私の！」

レムの言葉にタオルを眺める飯岡。

「別にいいだろうが！ランニングから帰ってきたところだ。汗をかくのが普通だろう！」

「それじゃあ雑巾にしましょう」

「リボンズ！俺に喧嘩売ってるのか！」

怒鳴りつけた飯岡だが、彼を見つめる視線の冷たさに手にしたタオルを戻した。

「それじゃあシャワーでも浴びるかな……」

「ここにもシャワーあるよ」

シヤムの一言に口元を引きつらせる飯岡。

「うるせえ！俺は本部のシャワーを浴びたくなっただんだ！」

そう言つとそのまま飯岡は出て行った。

「全く何しにきたんだか……」

コーヒーをすすりながらチェックリストの整理が終わった明華が立ち上がる。

「皆さんは何で戦ってるんですか？」

突然のジェナンの言葉に明華は視線を彼に向けた。

「私は任務だからよ」

そう言つと明華はチェックリストを手に出て行く。

「私は何かな……」

言われた言葉の意味を図りかねて天井を見上げるレム。ルーラも答えに窮してとりあえずコーヒーを啜っている。

「私はね。騎士だからと思っただけ……」

そう言つとシャムは腰に下げている短剣に目をやった。そして力強く言葉を続けた。

「もうね、出しちゃ駄目なんだよ。私みたいにおとつを殺されたり、熊太郎みたいにおかんを殺されたり。もうそんなことが繰り返されちゃ駄目なんだ。だから戦うんだよ。もう私達みたいな悲しい子供ができない為に」

そう言つとシャムは腰の短剣の柄に手をかけた。

「君は強いんだな」

ジェナンはそう言うのと下を向いた。ライラが心配そうに彼に寄り添うように立つ。

「いいわねえ、ジェナン君には彼女が居て。あーあ私も素敵なお嬢様が欲しいなあ」

「私では駄目なのかね？ルーラ君」

レムはそう言いながらルーラの顔に手を伸ばそうとする。ルーラはその手を払いのけた。

「何をやっているんだか……」

「そう言うセニアはどうなのよ。やっぱり隆志君一筋？」

「俺がどうかしましたか？」

悪いタイミングで仕様書から目を上げた御子神。全員の視線が彼に集中する。

「何でしょうか？」

「ニブチン！」

「最低！」

レムとルーラにけなされて、何のことかわからずに首をかしげる御子神。そこに入ってきたのはシンだった。彼は微妙な控え室の空気を観察しながらクリスに目で訪ねてきた。

「ジェナン君が何の為に戦っているのかって話題を出したんですよ」

「なるほど、ジェナンらしいな。俺は信念のために戦っているな。モスレムの同胞の苦しみ、ゴンザレスの圧制への人々の叫び。それに俺なりに出来ることがあると思って東モスレムにやってきた」

シンはそう言い切るとセニアと御子神を見た。

「ブリフィス大尉、御子神中尉。嵯峨隊長が呼びだ。南部基地攻略作戦の会議だ。急ぐように」

そう言つとシンはすぐ去っていく。

「動きが早いな。さすがに百戦錬磨の指揮官ではないというところ
だろうな」

ジェナンはそう言いながら爪を噛んだ。すぐさまライラの右手が
飛んだ。

「ジェナン！その癖みつともないわよ」

「それじゃあ行つて来るわ」

「僕も……」

立ち上がったセニア、仕様書を机に投げて後を追う御子神。

「お熱いわねえ。そう思いませんか？ホプキンスの旦那」

ニヤニヤと笑いながらレムがクリスに話しかけてきた。

セニアと御子神が出て行くのを見守るクリス達。

「それにしても早いわね」

「たぶんここまでの手順は嵯峨中佐は準備していたみたいだよ」

クリスのその言葉にジェナンとライラは頷いた。

「本当に？あの人一体何手先まで読んでるの？」

「相手が投了するまでじゃないの？」

ルーラの叫びにレムが淡々とこたえた。そんなレムの言葉にクリスは共感していた。

『あの御仁なら、そこまで考えていなければ戦争を始めたりしないだろうな』

嵯峨がわざわざ追放された故郷に帰ってくるのに郷愁と言う理由は曖昧に過ぎた。彼はどこまでも軍人だった、それも戦略を練る政治家としての顔さえ垣間見えるような。情で動く人間とは思えない。嵯峨とは相容れないゴンザレスと言う男の政権でどれほどの人間が傷つこうが彼には他人事でしかない。その濁った瞳にはすべての出来事が他人事にしか映っていないはずだ。クリスはそう確信していた。

クリスは思い出していた。嵯峨惟基がかつて胡州の国家改造を目指す政治結社の創立メンバーの一人であったことを。そして陸軍大学校時代、嵯峨は既得権益を握った貴族制度が国家の運営にいかにも多くの障害となると言う論文を发表し新進気鋭の思想家として胡州の若手将校等の支持を得ていた人物であるということ。

しかし、彼は結婚の直前、自らの著作をすべて否定する論文を新聞に发表し論壇を去った。彼の以前の過激な思想に不快感を持つていた胡州陸軍軍令部は彼を中央から遠ざける為、東和共和国大使館付きの武官として派遣した。それ以降、彼は決して自らの思想を吐露することを止めた。

この取材に向かう前に嵯峨と言う人物を知るために集めた資料からそのような嵯峨という人物の過去を見てきたクリス。そして今の仙人じみたまるで存在感を感じない嵯峨と言う人物の現在。そう言った嵯峨の過去を目の前の部下達が知っているかどうかはわからない。だが、今の嵯峨にはかつての力みかえった過激な思想の扇動者であつた若手将校の面影はどこにも無かつた。そして彼の部下達はただ嵯峨を信じて彼の實力に畏怖の念を感じながらついてきている。「だから、二式の性能でM5はどうにかなる相手なの？」

ぼんやりと考え事をしていたクリスの目の前でルーラがキーラを問い詰めていた。

「確かにM5はバランスは良い機体よ。運動性、パワー、火力、格闘能力。どれも標準以上ではあるけど、ただアメリカ軍のように組織的運用に向いている機体だから南部基地みたいに指揮系統が突然変更されたりする状況ではスペックが生かせない可能性が高いと言つてるのよ」

「吉田少佐にはそのような希望的観測で向かうべきじゃないですよ。百戦錬磨の傭兵だ。甘く見れば逆に全滅する」

キーラの言葉をジェナンがさえぎつた。
「ずいぶん弱気ね」

つい口に出したというライラの言葉にルーラが目を向ける。

「そうじゃないわよ！ルーラが言ってるのはちよつと急ぎすぎじゃないかと……」

「やはりびびってるんじゃないの」

ルーラとライラがにらみ合いを始めた。きつかけを作つたキーラとジェナンはただ二人をどう止めるべきか迷っていた。

「ったくなんだって言うんだ……」

そこに入ってきたのは飯岡だった。彼はタオルを首からさげながらぶつぶつとつぶやいて空いたパイプ椅子に腰掛ける。

「なにか会ったんですか？飯岡さん」

話題を変えようとキーラは飯岡に話を投げた。

「ああ、見慣れない団体が会議室の周りにうるちよろしてるんだ。帯刀している士官風の奴も居たからあれは胡州浪人だな。なんだって今頃そんな奴等が……」

そう言うつと飯岡は目の前にあつた飲みかけのセニアの冷めたコーヒーを飲み干した。

「あーあ」

ルーラがそれが御子神の飲んでいたコップだと気づいて声を上げる。

「御子神さんに教えておこう」

「ガサツなんだから本当に」

レム、キーラが飯岡の手にあるカップを見つめる。

「なんだよ！喉が渴いたんだから仕方ないだろ！」

言い訳する飯岡だが、クリスは彼の言葉に興味を持っていた。

「見たことの無い胡州の軍人？」

逃げるように彼女達から視線を反らした飯岡に尋ねた。

「ああ、文屋さんなら心当たりあるかな？一応、人民軍の制服は着ていたが、どうも北天の連中とはまどつてる空気が違う。それに楠木の旦那と話をしていたから隊長の関係者だと思っただがな」

今度は誰も手にしそつに無いのを確認してから机の上の団扇で顔を扇ぎ始めた飯岡。

「胡州陸軍遼南派遣公安憲兵隊。前の戦争でゲリラ掃討で鳴らした嵯峨惟基の部隊だ」

それまで黙って飯岡の話聞いていたジェナンが放った言葉は周りの空気を凍らせる意味を持っていた。

「でもそれってそのまま隊長の下河内連隊に再編成されて南兼戦線で全滅したはずじゃあ……」

キーラのその言葉にジェナンは静かに後を続けた。

「公安憲兵隊は市街地戦闘でその威力を最大限に発揮する部隊なんだ。確かに上層部の恣意的な人事で嵯峨や楠木と言った幹部はそのまま下河内連隊に再編成されて全滅したけど多くはそのまま胡州の占領地域でのゲリラ狩りや国内の不穏分子の摘発に回されたと聞いている」

「つまり幹部連から引き離された兵隊達が隊長を慕って加勢に来たって話ですか？」

レムの言葉にジェナンは頷いた。

「公安憲兵隊はそのやり口で一兵卒に至るまで戦争犯罪者として指名手配がかかっている。つまり彼らには頼りになるのは嵯峨惟基という人物しかいない。元々大貴族の私領として拡大した胡州星系のコロニー群。閉鎖的なその環境なら戦争犯罪人を多量に抱え込むことなんて造作も無いことだ。そうじゃないですか、ホプキンスさん」

ジェナンに話題を振られたクリスは静かに頷いた。

「次にあの人物がどう言う行動を取るか。それを僕は見定めるつもりだ」

そう言うつと彼は静かに話を聞いていたライラに視線をあわせた。

ライラはジェナンの瞳がいつもと違う光を放っているのを見て少し困惑した。

「そうなんだ。ふうん」

いつの間にか存在を忘れられていたシャムと熊太郎が冷蔵庫からアイスを取り出して食べている。

「おい、なんで熊連れてるんだ？ここは人間の……」
思わず愚痴る飯岡。

「フウ！」

熊太郎のうなり声で驚いたように飯岡が後ずさる。

「しかし、そうなると隊長は市街戦を行うことを考えてるってことなのかしら。でも、北兼南部基地は市街地からかなり離れているわね。隣の普真市はそれほど大きな町でもないし、戦略上はただ北兼台地の中心都市、アルナガへの街道が通っているだけだし……」
「いや、わかったような気がする」

嵯峨の意図を測りかねているルーラに対し、ジェナンははっきりとそう答えた。

「どう言うこと？」

「今は言えないな。ホプキンスさんの目もある」

「君は僕の事を信用していないと言うことか」

「当たり前でしょ？あなたはアメリカ人だ。遼州に介入を続ける政府の報道関係の人物を信用しろと言うほうが無理なんじゃないですか？」

ジェナンは鋭い視線をクリスに向けながら笑った。

「そうだよな。ホプキンスさん。すいませんが席外してくれますか？」

珍しくレムがまじめな顔をしてそう言った。

「シャムちゃん。一緒にお墓参りしてきたら？これからたぶん忙しくなるから暇が無いわよ」

ルーラは食べ終えたアイスのカップをシャムから受け取って流し

に運ぶ。

「クリス……」

少し表情を曇らせながら仲間を見やるキーラが居る。

「そうかもしれないですね」

そう言いながらクリスは立ち上がると、よく事態が飲み込めていないシヤムにつれられて控え室を出た。

「ああ、また組み立てるんだね」

シヤムが立ち働いている菱川の青いつなぎの技術者の群れを眺めた。冷気が開いていくコンテナから流れ出し、ハンガーを白い霧に包んでいく。フレームだけになったカネミツには検査器具を持った技術者が群がり、再び組み立てを待っている。

「あれって大変そうだよねえ。動かすたびにああやって組み立てないといけないんでしょ？」

シヤムにそう言われてクリスは黙って頷いた。カネミツは嵯峨にしか扱えない機体だと聞いていた。それがくみ上げられるということは嵯峨が出撃することを意味している。正面から決戦を挑む。クリスにはその覚悟のようなものをくみ上げられるカネミツから感じていた。

ゲリラが去り、難民が去った本部前のテントは手の空いた歩兵部隊と工兵部隊の手でたたまれている最中だった。

「元気だねえ！」

「今度、あんぱんあげるからな！」

シヤムを見つけた兵士達が声をかけるのに笑顔で手を振って答えるシヤム。

「人気者だね」

「まあ、これが人望と言うものだよ……うん」

シヤムは腕組みをして頷いている。おそらく誰かに吹き込まれたのだろう。笑顔のシヤムを熊太郎が後ろから突いた。

「こら！」

シヤムは熊太郎に声を上げるが、熊太郎は身を翻すと、そのまま急な坂を上り村の中心へと駆け上がっていく。シヤムはそれを追って走り始める。戦闘服や作業着の兵士達の中で、黒に色とりどりの色で刺繍を施した民族衣装を着ているシヤムの姿がいつの間にか自然に思えていることに気付いてクリスは笑った。人間は慣れて行くものだ。キーラ達人造人間もいつの間にかこんな生活に慣れてきている。砂利道の傾斜が緩やかになり、そして平らになる。目の前には墓の群れが広がる。その前で笑いながら追いかけてつこを続けるシヤムと熊太郎。

「少なくともこれはあんまり見たい光景じゃないな」

粗末な墓を見ながらクリスは独り言を言った。中心の墓。それはシヤムの義理の父親、ナンバルゲニア・アサドの墓である。遼南帝国最後の輝きを放った名君ムジャンタ・ラスバ大后の治世、北方遊牧民に生まれたアサドは軍に志願。遼州で発見された古代遺跡の中に見つかった人型兵器のレストアされた『人機』、後のアサルト・モジュールの精鋭部隊『青銅騎士団』の団長となった。

だが、それは短い栄光にしか過ぎなかった。

今から二十九年前、ラスバは一人の遼州人の自爆テロにより急逝した。一説にはそれは彼女の長男である第三十四代皇帝ムジャンタ・ムスガの差し金とも言われた。ムスガは保守勢力に推されていた。計略に長けた女帝である母ラスバに暗愚と評され廃嫡されたムスガ。花山院家やブルゴーニユ侯はラスバが重用した人材の排除に奔走した。その中にアサドの名もあった。資料では青銅騎士団の団長を罷免されてからのアサドの消息はまるで無かった。

クリスの目の前にはその運命に翻弄された騎士が眠っていた。その娘、シャムは元気に遊んでいた。夕方と呼ぶにはまだ早い太陽が照りつける。クリスに気付いたシャムは熊太郎と一緒にクリスの隣に立った。

「お参りするの？」

静かに訪ねてくるシャムの帽子がずれているのに気付いて、クリスはそれを直してやった。

「おとうが見てるからね。それにグンダリも」

「グンダリ？それは君の刀の名前じゃないのか？」

クリスのその言葉に静かに視線を落としてしまうシャム。彼女は隣の墓を指差した。

「これがグンダリの墓。アタシの初めての友達」

シャムの瞳が潤んでいるのがわかった。

シヤムは腰の帯から刀を抜いた。彼女の140cmに満たない身長にちょうど良く見える小ぶりの剣である。

「クリス達が来た森あるでしょ？」

シヤムは北に見える森を眺めた。クリスも釣られてその深い緑色の山を見上げた。

「アタシはねずっとあの森で一人で居たんだ」

「どれくらい……」

そう言いかけたクリスを制するようにシヤムは言葉を続けた。

「数えたこと無いからわからないくらい長い間ずっと一人だったの。昔ね、女王様からこの森を守るように言われて、ずっと一人でいたんだ。それが当たり前だと思っていたし、困らなかったからね」

シヤムはそう言いながら剣を撫でた。

「でもある日、おとうに会ったんだ。怪我をしていたんだよ、足を挫いたって言うてた。アタシは看病してあげたんだ。そしたらうちに来ないかって言われて。でも約束があるからって言ったんだけど、寂しいだろって言われて……」

「寂しかったのかい？」

そんなクリスの言葉に、静かにシヤムは頷いた。

「それでこの村に来たの」

クリスはシヤムの言葉に当時のこの村の姿に思いをはせた。見慣れた山岳民族の部落である。遼州羊やジャコウウシが群れを成して歩き回り、子供が笑い、女達が機を織るありきたりな村。そんな村の暮らしがあつたのだらうということは、壁が崩れ、柱が倒れ、屋根が抜けた民家の残骸を見れば簡単に想像がついた。

「村だね。はじめは誰もあたしと喋ってくれなかったの。鬼だとか魔物だとか。会うときは笑っているんだけど、おとうのいないところではみんなおとうの気まぐれだって笑ってたんだ。みんなアタシ

が一人でいると逃げ出しちゃうし……」

「でも友達が出来たんだろ？」

クリスが水を向けてやると、シヤムの顔に笑顔が戻った。

「グンダリは違ったから、他の子供とは。アタシが笛を落として泣いていたんだよ。そしたら『これ、アンタのдар？』って。それで一緒に話すようになったんだ」

腰の横笛を撫でてシヤムは笑う。

「グンダリは村長の娘だったんだ。いろんなことを教えてくれたよ。テレビを見せてくれたのもグンダリだったんだ。村にはテレビは村長の家と学校にしかなくて。学校のテレビは触っちゃいけないって言われてたけど、グンダリのテレビはアタシも見てもいいって言ってくれたんだ」

嬉しそうに話すシヤムの姿にクリスは釣られるようにして微笑んだ。

「でもね。三度目の春を迎えた時、北兼王が拳兵なさると言うことで大人はみんな銃を持つようになったんだ。おとうもクロームナイトを持ってきて北兼王に従うって言うってたんだけど……」

そこまで話したところでシヤムは下を向いてしまった。

北兼王、ムジャンタ・ラスコーは父ムスガの治世に不満を持つ軍人・官僚に担がれて北兼の独立を宣言し、事実上の謀反を起こした。遼南皇帝ムジャンタ・ムスガは軍備の増強に努める遼北の侵攻を恐れるあまり、制圧を優先して非道とも言える作戦を取った。

何百と言う村が無差別に焼かれた。北兼に組したものは乳飲み子に至るまですべてを殺しつくしたその作戦はアメリカをはじめとする地球諸国との断交と言う抗議を受けるほどに問題を複雑化させることになった。その後、遼南は反地球の立場を取るゲルパルト・胡州の連合に支援を仰ぎ、地球との全面戦争にひた走っていく元凶ともなったこの戦い。

しかし、ここでクリスは気付いた。

兼州崩れと呼ばれたこれらの騒乱は、北兼王であるムジャンタ・ラスコー、今の嵯峨惟基が十歳の時の戦いである。今、その張本人は三十二歳、二人の娘まで抱えている。しかし、目の前にいるシャムはどう控えめに見ても十歳に見えるかどうかと言ったところだった。「シャム。君は……」

不老不死。三百年ほど前、地球人がこの星に植民を始めた頃にこの星に住む地球人が始めて出会った知的人類『リヤオ』と名乗る人々にはそんな言い伝えがあったことをふと思いついた。東アジア動乱で故国を追われたアジアの難民。彼等がこの地に捨てられるようにたどり着いた頃、あたかも事実のように流行した都市伝説。『リヤオ』、現在では遼州人と呼ばれる人々は不老不死であると。

だが、それはただのデマだったことは三百年と言う時間がそれを証明していた。それでも伝説としていくつかの不死伝説が無いでは無かった。棄民政策で冷遇された地球系移民と迫害された『リヤオ』の人々は胡州のテラフォーミング機関防衛の軍と連携し地球からの独立を掲げて決起した。その中心に一人の巫女がいた。

彼女は七人の騎士と呼ばれた家臣と胡州駐留軍提督大河内中将の支援を得てアメリカ・中国・ロシアの同盟軍を撃破、遼州星系は地球の植民惑星としては初めての独立国となった。その独立協定締結の三年後、巫女である初代遼南皇帝、ムジャンタ・カオラは娘のレミを残して行方をくらませた。七人の家臣も時を同じくして姿を消したと言う。

遼州人なら誰でも知っているその伝説。そして今でもカオラはこの地を巡り、彼等を見守っていると言う伝承。

「そう言えば君は……」

そうクリスが切り出そうとしたところで背中に気配を感じて振り返った。

「ああ、どうも」

そう言って立っていたのは別所だった。

「取材の邪魔をしちゃったみたいですね……」

そう言うのと別所は頭を掻いた。その後ろにはシャッターを切っているハワードがいる。仕方なくクリスは立ち上がると別所と向かい合って立った。

「あの人は何をするつもりなんですかねえ」

別所はそう言うのと伸びをした。シヤムを見つけたハワードは今度は墓を眺めているシヤムの姿を撮りはじめた。

「私は復讐だと思ってここに来ましたが、どうやらそうではないことだけはわかりましたね」

クリスはゆっくりと立ち上がった。別所はただ墓を見つめている。この場所に立った人は必ずこの墓の群れを見つめてしまうものだ。そう思いながらクリスは目の前の現役の胡州軍人の姿を見た。現在、胡州の情勢は不安定であることが知られていた。

民主化と国際協調路線を掲げて支持を広げる西園寺基義派とそれに抵抗する枢密院と陸軍の対立はいつ暴発してもおかしくない状況にあった。別所の上官で彼をこの地に差し向けた赤松忠満海軍大佐は西園寺家の大番頭と呼ばれる人物であり、海軍の中でも切れ者として知られる男だった。

「嵯峨さんは復讐なんて言うちんけな目的で危険に飛び込むほど酔狂な人じゃありませんよ」

別所はクリスにそう答えた。確かに今のクリスにもそう思えた。だが、その先が見えなかった。

「それじゃあ、私は帰りますね。まあ結局無駄足だったということですか」

そう言い残して別所は坂を下ろうとした。ふと腕時計を見たクリスの目の先に四時を指す針が見える。クリスはそのまま別所について坂を下りた。本部の前には一人、嵯峨がタバコを吸いながら突っ立っていた。

「おう、別所。帰るのか？」

嵯峨はそう言いながらタバコの灰を携帯灰皿に落とす。

「そうそう胡州を離れられる身分ではありませんから」

「皮肉のつもりかよ」

そう言うつと嵯峨は不敵に笑った。彼の兄、西園寺基義が嵯峨の帰国を待っているのは間違いなかった。だが彼はこの地を離れないという確信がクリスにもあった。

「そうだ、嵯峨中佐。楓さんに何か伝えることとかありませんか？」

別所のその言葉に、嵯峨は思い切りむせた。

「……あれか？そうだな。迷惑はかけなければやりたいようにやれよって伝えてくれよ。こんな親父を持つちまった以上いろいろあるかも知れねえが、俺が出来ることは何も無いしな」

突然の娘への伝言に戸惑う嵯峨を見ながら別所は軽く敬礼した。

「別所さん。本当にコイツで良いんですか？」

そう言うつて伊藤が運んできたのはバイクだった。

「これから作戦が開始されるのに伊藤さんに手間を取らせるのもなんですから」

そう言うつと別所は渡されたヘルメットを被ってエンジンをかける。

「すまねえな」

嵯峨はそう言うつと吸いきったタバコを灰皿に押し込む。

「御武運を！」

そう言うつと別所はそのまま坂道を登って姿を消した。

「そう言えば伊藤中尉」

クリスは消えていく別所を見つめながら仕事に向かおうとする伊藤に声をかけた。伊藤は不思議そうにクリスの顔を見る。

「作戦会議に出た人達が見慣れない集団を見たと言うことなんですが……」

そのクリスの言葉に政治将校伊藤隼中尉の顔が険しくなる。

「それはノーコメントで」

ある程度予想できた話だと思いつながら本部に降りていく伊藤に続いた。シャムもまたクリスの後に続く。彼女に付き従う熊太郎をハワードがしきりに撮影していた。

「胡州公安憲兵隊つてご存知ですよねえ」

坂を下りきったところだとぼけたように伊藤が言った。クリスは軽く首を横に振った。伊藤はそれが嘘だと分かっていると言うように笑顔でクリスを見つめた。知らないわけが無かった。遼南は先の大戦が始まる以前も東モスレムの分離独立運動。遼北の反政府ゲリラ活動。そして南部のシンジケートによる裏社会などの不安定要因を抱えていた。

その活動はゲルパルト・胡州・遼南の三国枢軸の戦況の分析が悲観的なものとなり始めたとき、一気に噴出することとなった。遼南の武装警察のふがいなさに遼南は胡州に対テロ特殊部隊の派遣を要請した。それが当時の遼南方面軍司令部付き憲兵嵯峨惟基憲兵少佐であり彼に与えられた特殊部隊、胡州公安憲兵隊だった。

突入作戦を得意とする彼らの非道な作戦行動は一定の成果を上げた。北天を牙城とする人民軍の要請を受けつつも遼北が参戦を渋ったのは彼らにより直接指導可能なゲリラ組織が数多く殲滅されたことがきっかけとさえ言われる部隊。

伊藤が彼らの名を口にした事はクリスにとって重要なことだった。

ゲリラ殺しの名を受けた彼らが今再び嵯峨を迎えて動き出していることを知りながら政治将校である伊藤がそれを暗示させる発言をしていると言う事実を北天の上層部が知ればどう言うことになるかわかっていた。

「知らないことがいいこともあるということですよ」

クリスの方を見ながら伊藤は笑った。

「そう言えば嵯峨中佐は……」

「留守です」

伊藤はそれだけ言うとクリス達を置き去りにして本部のビルへと消えていった。

クリスはそのままシャムと一緒にハンガーに向かった。主が留守だと言うのにカネミツのくみ上げが急ピッチで進んでいる。2式の周りでは出動を前にした緊張感を帯びた整備兵が走り回っている。

「忙しいねえ」

シャムは熊太郎の喉を撫でながらその様子を見つめている。ハワードは整備員の邪魔にならないように注意しながら写真を撮り続けている。

「あ、ホプキンスさん！」

ただ立っているだけのクリスに話しかけてきたのはキーラだった。「大丈夫ですか？かなり忙しいみたいですけど」

クリスの言葉にキーラは疲れたような面差しに笑みを浮かべた。

「まあ戦場に向かえる状態に機体を整備するまでがうちの仕事ですから」

そう言うのとクリスの隣に立ってハンガーを眺めていた。パイロット達の姿は無い。詰め所にいるのか仮眠を取っているのかはわからなかった。

「決戦ですかね」

クリスの言葉にキーラは頷いた。

「吉田少佐が指揮権を引き継いだと言ってもすぐに納得できる兵士ばかりじゃないでしょう。それにこの一週間の間、難民の流入による交通の混乱で資材の輸送が混乱していると言う情報もありますから」

キーラの言葉でクリスは何故嵯峨がこの基地を留守にするのかわかった。情報戦での優位を確信している吉田はすでに嵯峨不在の情報を得ていることだろう。だからと言って打って出るには資材の確保が難しい状態である。必然的に北兼軍の動きを資材の到着を待ちながら観察するだけの状態。今のようならみ合いの状態が続き

北兼台地の確保の意味が次第に重要になっていく状況でもっとも早く戦況を転換させる方法。

それはバルガス・エスコバル大佐の殺害あるいは身柄の確保である。

難民に潜ませた共和軍のスパイがこの基地の情報を吉田に報告しているだろうと言うことはこの基地の誰もが知っていたことだ。そして壊滅させられた右翼傭兵部隊の壊走にまぎれて北兼が工作員を紛れ込ませていることも嵯峨も吉田も当然知っているだろう。

敵支配地域に尖兵を送り、協力者を通じて潜入、作戦行動を開始する。クリスはこの一連の行動が嵯峨のもっとも得意とする作戦であることに気付いていた。

「要人暗殺、略取作戦……」

そうつぶやいたクリスを不思議そうに見るキーラ。

「出撃は明朝ですよ。休んでおいたほうがいいんじゃないですか？」

キーラの言葉を聞くとクリスはとりあえず本部に向かう。シャムは黙ってクリスを見送った。

本部は主を失ったと言うのに変わらぬ忙しさだった。事務員達はモニターに映る北兼軍本隊のオペレーターに罵声を浴びせかけ。あわただしく主計将校が難民に支給した物資の伝票の確認を行っている。

「要人略取戦……いいところに目をつけたな」

カリカリとした本部の雰囲気におおされそうになるクリスにそう言ったのはカメラを肩から提げたハワードだった。

「すべては予定の上だったんだろ？、多少の修正があったにしろ」

クリスはそう言うのとエレベータに乗る。

「待ってください！乗りますから」

そう言うてかけてきたのは御子神だった。

「中尉、そんなに急いで何かあったんですか？」

クリスのその言葉に肩で息をしながらしばらく言葉を返せない御子神。

「明日の出撃の時間が決まったので……」

そう言うつと御子神は一枚の紙切れを出した。動き出すエレベータ。御子神はそのまま背中を壁に預ける。

「02:00時出撃ですか。ずいぶんと急な話ですね」

クリスの言葉に御子神はにやりと笑う。

「先鋒はセニアさんの小隊です」

そのままエレベータは食堂にいた。難民対策で休業状態だった食堂にはようやく普段の日常が戻り、忙しく働く炊事班員が動き回る。そんな中、窓際のテーブルでセニアとレム、ルーラが食事を始めていた。

「ずいぶん早いですね！」

そう言うつと黙々と食事をしている女性パイロットの群れにレンズ

を向けるハワード。

「撮るなら綺麗に撮ってくださいね」

そう言っつて白米を口に運ぶレム。セニアはデザートプリンをサジですくっている。

「先鋒には便乗できる機体はありますか？」

クリスの言葉に御子神は呆れたような視線を送る。

「シヤムもセニアさんの小隊付きですよ」

食堂のカウンターでトレーをつかんだクリスは周りを眺めてみた。パイロット以外で食堂にいる兵士はいない。

「歩兵部隊は動かないんですか？」

その言葉に御子神は厨房を覗いていた目をクリスに向けた。

「それなんです、楠木さんが隊長の方について行っちゃったので……」

そこまで言っただけで御子神がはっとした顔になる。

「別にそのくらい予想がついてますから。バルガス・エスコバルとその直下のバレンシア機関潰しですね」

そう言うクリスに曖昧な笑みを浮かべる御子神。クリスは黙って部屋を見回す。そこには出撃前の割には緊張感が欠けているようにも見えた。

「遅いっすよ！御子神の旦那！」

そう言いながら和風ハンバーグステーキを食べているのはレムだった。明華は静かにラーメンの汁をすすっている。隣のルーラとセニアは餃子定食を食べていた。

「じゃあ僕はカレーにするかな……」

そう言う御子神の向こう側に一人ライスに卵スープをかけたものを食べているシンがいた。

「何を食べているんですか？」

呆れたように尋ねる御子神をにらみつけるシン。

「ムハマンドの預言書で決められたもの以外口にできるか」

吐きすてるようにそう言うと、シンは味が薄いのかテーブルの上の醤油をご飯にかける。

「シン少尉は敬虔なイスラム教徒なので……」

隣でカツカレーを食べているジェナンが言葉を添える。隣でボールシチをスプーンで救いながらライラが頷く。

「でも卵スープ……」

「私はこれが好きなんです！」

突っ込むクリスにシンはそう言い切った。

「いいじゃないか何を食べようが。俺がクリスの前に組んでたライ

ターはユダヤ教徒だったけど、せっかく潜入した九州の右翼民兵組織のキャンプで出されたカニ料理にばろくそ言ってそのままアメリカ兵に突き出されたこともあるぞ」

ハワードはそう言いながら受付でカレーうどんの食券を買う。

「俺はビーフシチュー……」

クリスは食券売りの事務官の女性に声をかけた。

「それはダミーです」

受付の若い女性事務官が答える。

「じゃあミートソーススパゲティー……」

「それもダミーです」

クリスは啞然とした。

「じゃあ何でこんなにメニューがあるんですか？」

「隊長の指示でダミーのメニューをつけたほうがなんとなくカッコいいということ……」

そう言う事務官に肩を落とすクリス。

「じゃあ卓袱うどんで」

そう言う御子神から遼北元を受け取ると事務官はプラスチックの食券を渡した。

「なんでそんなのがあるんですか！」

クリスの言葉に事務官はもう答えるのをやめたと言つように無視を決め込んだ。

「それは隊長の趣味じゃないですか？」

苦笑いを浮かべながら食券を持って歩いていく御子神。

「なんで卓袱うどん？」

口元を引きつらせるクリスは食券を持ってどんぶりモノコーナーに向かう。

「はい！カレーうどんお待ち！」

そう言って炊事班の女性からどんぶりを受け取るハワード。

「悪いね」

そう言っているとクリスを置いてそそくさとパイロット達のテーブルに座るハワード。

「じゃあお先に」

卓袱うどんを受け取った御子神が去っていく。

「はいカレーお待ち」

皿を受け取ったクリスはそのまま御子神の隣の席に座った。

「しかし、君達も何も知らされていないんだね」

クリスの言葉に反応したのはシンだけだった。

「おそらく隊長は南部基地には現れないでしょうね。胡州公安憲兵隊。要人略取作戦を本領とする特殊部隊だ。普通に考えれば狙いは一つ」

明華が静かに汁をすすっている。

「胡州帝国遼南方面公安憲兵隊。通称『嵯峨抜刀隊』か……」

カレーうどんをすするハワード。

「その多くが戦争犯罪人として今でも追われる身分ですからね。まあ隊長の莊園でかくまっていたんじゃないですか？」

淡々と卓袱うどんを食べる御子神。胡州帝国の貴族制を支えている『莊園』制度。移民の流入によるコロニーの増設の資金を出した胡州有力者が居住民への徴税を胡州政府から委託されたことをき

かけとして始まった制度。西園寺、大河内、嵯峨、烏丸の四大公以下、800諸侯と呼ばれる貴族達の荘園での実権は先の敗戦でも失われることは無かった。特に嵯峨家は中小のコロニーを含めると125のコロニーの二億の民を養う大貴族である。先の大戦の戦争犯罪人をかくまうことくらい造作も無いだろうとクリスは思った。

「しかし君達を取材してわからないことが一つあるんだ」
クリスの言葉にセニアが顔を上げる。

「あの御仁がなぜ遼南にこだわるんだ？あの人にはこの土地には恨みしか持っていないはずだ。彼を追放し、泥を被るような真似を強要され、そして勝ち目の無い戦いに放り込まれたこの土地で何をしようというんだ？」

クリスのその問いに答えようとする者はいなかった。

「あの人は、なにか遠くを見ているんじゃないですか？」

しばらくの沈黙の後、御子神は口を開いた。

「遠く？」

クリスの言葉に御子神はしばらく考えた後、言葉を選びながら話し始めた。

「遼州人と地球人。あの人はその力の差は前の戦争で嫌と言うほどわかったはずです。だけど、同じ意思を持つ人類としてどう共存していくか。それを考えて……」

「まさかそんな善人ですかねえあの御仁は」

ハワードの言葉に視線が彼に集中する。さすがに言い過ぎたと思つた彼は視線を落としてそのまま食事を続けた。

「共存の理想系は東和だ。あそこはほとんど遼州系の住民のはずだが、この二百年、国が揺らいだことは無い」

そう言ったのはシンだった。ようやく奇妙な食材を飲み下して安心したように机の上にあつたやかんから番茶を注いでいる。

「そんなことを考えているようには見えないんですがね」

そんなクリスの言葉にまた場が静けさに包まれる。

「御子神ちゃんは親へのあてつけではつきりわかるからいいけど、あのおっさんはそんなことを言える年でもないし」

レムが冷やかすような視線で御子神を眺めている。

「レム。あのおっさんとは聞き捨てならんな」

そう言って出てきたのは飯岡だった。影の方で食事を済ませたよう手で手には缶コーヒーが握られている。

「じゃあ飯岡さんはどう考えるんですか？」

全員の視線を浴びて一瞬飯岡は怯んだ。

「強きを憎み、弱きを守る。それが胡州侍の矜持だ。俺はそのためにここに来た。あの人も同じく遼南にやってきた。確かに身一つで

駆けつけた平民上がり俺に対してあのお方は殿上人だ。当然軍閥の一つや二つ仕切っていてもおかしいことじゃあるまい？」

そう言い切る飯岡だが、クリスはその言葉に納得できなかった。

正確に言えば、その場にいる誰一人納得していない。

「胡州も波乱含みだからな。ある意味自分の力量でどうにかなる遼南の方が、しがらみだらけの胡州よりは御しやすかったと言っことじゃないですか？」

御子神のそんな一言が一同の心の中に滞留する。クリスもそれが一番あの読めない御仁の考えに近いだろうと納得した。そのようにして箸を薦めながらのやり取りはあまり意味があるものではなかった。クリスはそう思いながら周りを見渡した。

「そう言えばシャムはどうしたんですか？」

クリスの言葉に御子神はすぐに答えた。

「ああ、彼女なら食べ終わってますよ。どうせいつもどおり墓参りでしょう」

御子神はそう言うとやかんを引き寄せて番茶を湯飲みに注いだ。

北兼台地第三の都市、賀谷市。かたにし 廃ビルの中で嵯峨は目の前のプロジェクターに映る情報を追っていた。

「ゲリラの方々の協力に感謝と言うところだねえ」

そう言って暗がりの中でタバコに火を点す。

「主力は現在、賀谷南部の鉾山地区の警戒に出動中。さらに二時間後には空港で原因不明の爆発が起こる予定になっています」

楠木のその言葉に、判ったとも言おうように左手を上げる嵯峨。

「各ポイントの制圧状況はどうだ？」

その言葉を待っていたかのように黒い戦闘服の男がプロジェクターの画面を切り替える。賀谷市中心部の建物をあらわす地図の交差点の近くのすべてのビルに印があった。

「このように現在すべての中佐の指定した地点は制圧完了しています」

そう報告する黒い服の男の表情は硬い。

「いつでも準備はできているわけですよ」

そう言つと賀谷市役所を示す地図を拡大して見せる楠木。だがその言葉に嵯峨は苦虫を噛み潰したような表情を変えることは無かった。

「バレンシア機関の動きはどうなんだ？」

嵯峨の言葉に楠木と黒い戦闘服の男は顔を見合わせた。

「制服着た兵隊が市役所20名ほど確認されています。その他、直接市役所を攻撃可能なビルに私服の連中が張り付いていますよ」

楠木のその言葉を聞きながら、嵯峨は頭を掻いた。

「あまりに教科書どおり過ぎるねえ。地下道や手前の川にもまず間違いない戦力を割いてきているはずだ。それに……」

「そちらも計算に入ってますよ。祭りが始まると同時にガスを使う予定です」

楠木の言葉に一瞬表情を曇らせた嵯峨だが、すぐにいつものよう
なせせら笑うような表情を浮かべた。

「マスタードガスか。俺達には似合いの汚い作戦だな」

そう言うのと再びタバコを口にくわえた。

「それじゃあ各隊員に伝達しろ、状況を開始する」

嵯峨はそう言うのと腰に下げていた朱塗りの太刀を握り締める。黒
い戦闘服を着た男はそのまま出て行った。

「楠木。これ以上お前が悪名を背負う必要は無いんだぜ」

くわえたタバコをくゆらせる嵯峨に、笑顔で答えたのは楠木だっ
た。

「入るよ」

そう言いながらクリスは一つの廃屋の崩れかけた扉を開いた。その中にはシャムと熊太郎が寄り添うように座っていた。天井は崩れ、空が見える。シャムはそんな空を見上げるわけでもなく呆然とただ座っていた。

「どうしたんだ。元気が無いじゃないか？」

そう言うクリスに向けて笑いかけてくる笑顔が痛々しく感じて、彼は思わず天を見上げた。次第に夕焼け色に染まり始めた空が崩れた屋根の合い間から見る事ができる。光っているのは第四惑星胡州だろう。

「明日なんだね」

シャムはそう言うと熊太郎の喉を撫でてやった。気持ちいいと言うように熊太郎が目を細める。

「戦力的にはかなり拮抗しているからね。しかも相手は伝説の傭兵吉田俊平少佐だ……」

「わかってるよ。みんな黙ってるけど、明日はたくさん人が死ぬんだよ」

悲しげな瞳がクリスを捉えた。

「確かにそうだろうね。南部基地を落とされれば、それまで静観していた反政府組織やゲリラが一斉に雪崩を打って人民軍側に寝返るだろう。吉田少佐も馬鹿じゃない。それなりの戦力を用意してくるはずだ」

そんな言葉に再びシャムは下を向いてしまった。

「お話できないのかな……。その吉田って人」

静かに、熊太郎に話しかけるようにシャムはつぶやいた。

「これが戦争だ。今なら引き返せる。なんなら俺が……」

「嫌だよ逃げるのは！」

クリスの言葉をさえぎるようにシャムは叫んだ。

「アタシがいなくても誰かが代わりに戦うんだから同じことだもん！だから逃げないんだ！それに……」

「騎士は敵に後ろを見せるものではない……て言うんでしょ？」

クリスは後ろからの女性の声振り返った。そこに立っていたのは明華だった。

「私もね、いろいろ調べたのよシャムちゃんのこと」

そう言うと彼女は熊太郎のそばに座ってその頭を撫でた。

「遼南帝国初代皇帝、ムジャンタ・カオラの下に集った七人の騎士。彼らは地球から捨てられた私達の先祖の自由のために立ち上がり戦った」

涙を拭きながら明華を見つめるシャム。

「その中にシャムラードと名乗る少女がいた。彼女は戦いを嫌いながらも剣を振るい敵を蹴散らし、そして胡州での大河内家の義勇軍が決起するまで遼南を根城に戦いを続けた」

「明華さん、それは伝説の世界の話じゃないんですか？」

クリスは明華の言葉に飲まれながら口を開いた。

「ムジャンタ・カオラと七人の騎士が遼州独立戦争の終結後、どう言う生き方をしたのかまるでわかっていないのは事実でしょ？」

そう言って明華はクリスを見上げた。

「そんな馬鹿な！もう二百年以上前の話じゃないですか！」

クリスの言葉を無視するように明華はそのままうつむいているシヤムの肩に手をおいた。

「ホプキンスさんも気付いているでしょ？彼女の話信じるとすればシヤムは四十過ぎのオバサンと言う結果になるじゃないの」

そう言いながら振り向く明華にクリスは言葉を返せなかった。この村が襲撃されてから二十年以上の年月が経っていることは間違いなかった。そしてそうなれば目の前の少女の年齢も計算できなくなってくる。

「二人には黙ってて悪かったけど、内緒でシヤムちゃんの体組織の鑑定させてもらったのよ」

立ち上がると明華は何事も無いように話し始めた。

「結果から言えば、彼女の細胞は老化も変性も起こさない奇妙なものだったのよ。つまりシヤムちゃんは何年をとらないってことが分かったの」

クリスは完全に打ちのめされた。シヤムは明華の言葉の意味がわからないようではんやりと明華を見上げている。

「遼州は超古代文明の生体兵器の実験場だと言う仮説も聞いたことがあるでしょ？兵器なら耐用年数が長ければ長いほど良いわよね。当然、戦争には熟練した軍人が必要になるから、この子みたいに不老不死であれば言うことはない……」

シヤムが不思議そうに見つめてくるのに答えるようにして笑みを浮かべる明華。

「不老不死ねえ。信じがたい話だな」

クリスはそう言っていると立ち上がった。

「第一もしそうだとしたらもう地球文明がここに根ざして三百年だ。噂や自称三百越えの人物の話は聞いた事があるが、体細胞分析でこ

とごとく否定されているって聞いてるけどな」

そんなクリスの言葉を聞いても明華はただ微笑みを浮かべるだけだった。

「私も今でも信じていないわよ。ただ、シヤムちゃんはどこにいる。そして二十五年前の北兼崩れの際に北兼側として滅ぼされた村で暮らしてきた。間違いなく言うるのはそれくらいのことよ。シヤムちゃんの体細胞分析の結果も私が隊長に報告して処分させたわよ。つまらないことに使われたら面倒だしね」

明華はそう言うつと再びシヤムの肩を叩いた。

「今できることをやればいいのよ。確かに暴力でしか物事を測れない時代かもしれないけど、きっとその先にはそうでない未来があるはずだから」

そう言うつて明華はそのまま廃屋から出て行つた。

「そうだよね。いつか変えなきやいけないんだよね」

自分に言い聞かせるようにシヤムはつぶやいた。クリスは明華の言葉とは関係なく、何者であろうと関係なく、目の前のあどけない少女を見守ることを決意した。

北兼台地南部基地。アサルト・モジュールの格納庫の前では慌しげに出撃待機状態に移行するべく、整備員達が走り回っていた。それを隊長室から眺める吉田の口元には笑みが浮かんでいた。いつものようにガムを噛み、時折それを膨らまして見せながら副官の報告を聞いていた。しかし、それはどれも吉田にとっては既知の話ばかりだった。

吉田の通信デバイスの塊である脳は常に各軍の諜報機関のデータベースに直結している。西部戦線で共和軍と多国籍軍が建て直しを図るべく東モスレムの北部の山岳基地に集結していることも、その阻止のため東モスレム三派軍の主力が北上していることも、遼北で人民党の教条派の失脚が相次ぎ現実路線の周首相派が代議員大会を開く為の準備を水面下での調整が進んでいることも事実として彼は知っていた。

「嵯峨は出てこない。間違いないんだな」

ライトで照らされた基地を眺めながら吉田は確かめるようにそうつぶやいた。

「まず間違いありません。それと共和政府軍は掴んでいませんが、現在生存が確認されている元胡州陸軍遼南公安憲兵隊出身者の多くが遼南に入国しているのは確かです……」

副官の言葉が途切れたのは吉田が椅子にどっかりと腰を下ろしたからだった。吉田の特注品の戦闘用義体の重さでしっかりとしたつくりの椅子がきしむ。

「嵯峨の抜刀隊か。エスコバルの旦那もついてないな」

そう言いながら副官を見上げる吉田の頬に笑みが浮かぶ。嵯峨の抜刀隊といえば先の大戦では量何の利権に対する胡州の切り札とも呼ばれた部隊だった。要人略取作戦に特化した非正規戦のプロフェッショナルとして地球圏の特殊部隊と暗闘を繰り広げた猛者達であ

る。エスコバルのバレンシア機関等はその練度や土気の高さに於いて比べるべくも無いことくらいは当然のように吉田も知っていた。そしてその多くが非人道的な作戦遂行の責を問われて嵯峨の所領で隠遁生活を送っている彼らだが、動くとなれば吉田でも彼等を止めることはできないことも知っていた。

「しかし、よろしいのですか？ ほぼ確実に賀谷市に潜入していますよ、あの男は」

吉田の微笑みの意味を理解しかねた副官の言葉に、さらに狂気を秘めたサイボーグの笑みは深いものになった。

「それは俺のペイの中には入っていないからな。あくまで南部基地の管轄領域の死守が今回の仕事のすべてだ。それ以上働いても損するだけだぜ」

副官は吉田にそう言われて黙り込む。再び吉田は立ち上がると基地のハンガーを眺めた。灰色の機体がライトに照らされて白く輝いて見える。遼南共和国がアメリカの資金と東和共和国の技術、そして帝政時代の『ナイト』シリーズの蓄積を生かして作られた次世代型アサルト・モジュール『ホーンシリーズ』のバリエーションとして作られた吉田専用の高品位アサルト・モジュールの姿がそこにあった。

「こっちはわざわざ『キュマイラ』まで持ち出しているんだ。この基地を一ヶ月間死守したらそれで契約は終了。共和政府のどこかの部隊に引き継いでとっとと東和の本社に帰ればこの仕事は終わりだ」

ライトに照らされたアサルト・モジュール『キュマイラ』の頭部センサーから伸びる二本の角が見える。

「嵯峨の『カネミツ』が動かないなら勝算はこちらにあるんだ。エスコバルの旦那の首とこの基地。二兎を追った茶坊主にはそれにふさわしい死に場所を用意してやるのが礼儀と言つものだろ？」

そう言つて副官の方を振り向く吉田。その残忍な笑みに彼は恐怖を覚えていた。

爆発音が響いたのはまだ嵯峨達がトラックの荷台で座っている時だった。すでに銃声は町中のいたるところで発せられていた。混乱する共和軍の警戒網を通り過ぎるのはあまりにも容易く、刀の柄を握る焼酎の染みだ嵯峨の手に力が入ることは無かった。

市役所の庁舎に繋がる市議会議場の車止めに停まったトラック。外では警戒する共和軍の兵士達がすぐさまこれを止めようと駆け寄るが、鈍いサウンドサプレッサー付きのサブマシンガンの発射音が彼らの言葉を消し去った。荷台から黒尽くめの嵯峨の直参の隊員が降り立っていく。嵯峨もまた刀に手を伸ばしながらその後ろに続く議場の入り口に立つ警備兵はすでに胸部に二三発の直撃弾を食らって虫の息だった。彼らの守る議場入り口の鍵をポイントマンの小柄な男の手のショットガンが破壊する。ようやく異変に気づいた守備部隊が彼らのトラックを包囲した時には嵯峨の率いる突入部隊は市役所庁舎に向かう渡り廊下への侵入を開始していた。

目の前に現れた人物にはすべて隊員の主力火器AKMSの7.62ミリ弾が叩き込まれた。そして隊員は一つ一つの部屋をクリアリングしながら進む。人影を見つuckerたびに、手榴弾が投げ込まれ、一斉掃射が浴びせられる。

嵯峨は的確にターゲットに向かう部下達の姿を満足げに眺めながら、タバコに火を点した。部隊は階段に突き当たると、予定された脱出路確保のために下に向かう部隊とエスコバルの暗殺のために上に上がる部隊に別れて進む。

「田舎の特殊部隊が動き出したみてえだな」

嵯峨はエスコバル暗殺部隊の先頭に立って、ようやく愛刀『長船兼光』を抜いた。ここまで来てようやくエスコバルご自慢のバレンシア機関が動き出したようで、上にへの階段を登る嵯峨の耳元にも激しい銃撃戦の音が響いてくる。四階の制圧のために三名の部隊員

を残すと、そのまま嵯峨は四人の下士官を率いて最上階の五階へと駆け上がった。

何も無い空間にアサルトライフルのマズルフラッシュが浮かび、嵯峨の手前の壁に弾痕が記される。

「おい、光学迷彩かよ。やっぱり税金で装備そろえている連中はやるのが違うねえ」

タバコをくゆらせながら嵯峨はそう漏らした。すぐさま彼はハンドサインを送る。最後尾につけていたグレネードランチャー射撃手が、ちかちかと光るマズルフラッシュの中央に対人榴弾を打ち込んだ。

爆風が廊下を包み、煙の中で内臓を撒き散らして呻く敵兵が転がっていた。走り出したサウンドサプレッサー付きの拳銃を持った嵯峨の突入部隊のポイントマンがもだえ苦しむ敵兵の頭にとどめの銃弾を撃ち込んだ。

「お前等はここで待て。後は俺の仕事だ」

嵯峨はそう言うと市長室に繋がる狭い廊下を歩き始めた。

ゆっくりと特殊作戦時に愛用の地下足袋のおかげで音も立てずに歩いていく嵯峨。市長室の扉が開き、飛び出してくるバレンシア機関の兵士だが、嵯峨の手に握られた刀はその胴体にぶち当たり、そのまま防弾チョッキごと先頭の兵士を二つに裂いていた。もう一人の男が銃口を嵯峨に向けようとしますが、男を引き裂いた嵯峨の刀の切っ先がまるで当然とでも言うように男の喉笛に突き刺さり、大量の返り血を嵯峨に浴びせて息絶える。

「もう終わりですかね」

嵯峨はそのまま引き抜いた刀を左肩に担いで市長室に入っていく。目の前で拳銃を机の上に置いたままじつと嵯峨の顔を見つめるエスコバル大佐がいた。

「やはり……来たのか」

そう言うてうっすらと恐怖をまとった視線を嵯峨に送るエスコバルを見て、嵯峨は立ち止まった。

「いつかはこうなる。あんたもわかっていたんじゃないですか？」

頬についた返り血を拭いながら嵯峨は微笑んだ。そんな嵯峨にエスコバルはただ引きつった笑みを浮かべるだけだった。

「お互いこうなることは決められていたのかもしれないな」

エスコバルはそう言うて執務机から立ち上がった。拳銃に手を伸ばすことすらせず、丸腰のままソファーに腰掛けて灰皿にくわえているタバコのフィルターを押し付ける嵯峨の正面に座った。

「それにしてもアレですね。あんたの部下達。あいつ等が遼南最強とは……」

嵯峨はそのまま利き手ではない右手で胸のポケットからタバコを取り出す。左手にはまだ血を滴らせる太刀が握られていた。

「確かにあなたから見れば素人同然でしょう」

そう言うてエスコバルも吸いかけの葉巻を取り出すと、机の上の

ライターで火をつける。そのままエスコバルからライターを受け取った嵯峨もくわえているタバコに火を点した。

「だが、我々には守るべきものがあつた。だからこうして殺されるものの代表としてあなたの前に立つことができたわけですよ」

自らの運命をようやく悟つたようにエスコバルは葉巻をくゆらせろる。『殺されるものの代表』と言う言葉を聞いて嵯峨は眉をひそめた。抜かれたままの剣からはバレンシア機関の隊員の血が流れ落ちている。憲兵隊の隊長として、混成連隊の殿として、そして今は軍閥の首魁として、何人の血をコイツは吸ってきたのだろうか？そんな疑問が頭をよぎって、嵯峨は乾いた笑みを浮かべた。

「確かにあなたは良くやつたと思いますよ。米軍の情報支援も無い、前線を知らない將軍達は自分の私腹を肥やすことにしか関心が無い、そして部下達は亡命後の生活設計ばかりを頭に描いている。それじやあ戦争にはなりませんわな」

嵯峨の右手のタバコの灰が床に零れ落ちる。そんな様子をエスコバルは満足そうに眺めていた。

「君の流儀で言うなら敗者には何を語る資格もありはしないよ」
そう言つてエスコバルは立ち上がった。そのまま彼は執務机に置かれた拳銃を手に取る。

「そうでもないですよ。事実、北兼崩れでこの国を追われ、先の大戦ではアメリカ陸軍のモルモットに去れた負け犬が言うんですから間違いないですね」

そう言つて笑いかける嵯峨だが、それを見つめるエスコバルの瞳は弱弱しく光った。彼は拳銃を右手に持ち、軽くスライドを引いて薬室に弾丸が入っていることを確認する。

「何か言い残すことはありませんか？」

そのまま拳銃のハンマーを起こすエスコバルに嵯峨は尋ねた。

「いまさら何を言つても仕方がない。家族ならとうにアルゼンチンに移住してずいぶん経つ、もう私が気を使うことは何もない」

そう言つとエスコバルは素早く拳銃を口にくわえて引き金を引いた。そのままその体は執務机に倒れこんで痙攣した。こもつたような銃の発射音に警戒にあたつていた抜刀隊の黒づくめの兵士が二人飛び込んできた。

「慌てんなつて、エスコバル大佐は義務を果たした。そのままそこに寝せてやれよ」

そう言つと嵯峨は死体の処理を二人に任せて立ち上がった。

「楠木、終わつたぜ」

小型通信機に嵯峨が語りかける。

「撤収準備は順調に進んでいます。制圧射撃をしていた支援部隊の連中から順次引き上げを開始しています」

楠木の感情を殺した声に静かに嵯峨は頷いた。

「全く、権力なんて持ったところで疲れるだけだつて言うのにな」
そう言いつつ嵯峨は静かに階段を降り始めた。彼を追い抜いて降

りていく部下達。時折、敵の残党に遭遇するらしく、銃声が断続的に響いている。

嵯峨は吸い口の近くまで火の回ったタバコを投げ捨ててもみ消す。「俺の仕事はここまでだ。シンの旦那はどう動くかな」

彼の頬に抑えがたいとでも言うような笑みが浮かんでいた。

「寝付けなかつたんですか？」

本部に入るクリスの顔を覗き込むようにしてキーラが声をかけてきた。

「君こそ夕べは徹夜だったみたいじゃないか」

まだ日は昇らない深夜一時。ハンガーは煌々と明かりが照らされている。

「私達の任務はこれからしばらくは待機ですから。それよりシヤムちゃんの後部座席に乗るんじゃないですか？結構あの子、無茶するかもしれないよ」

そう言つてキーラは笑つた。本部のビルは出撃前と言つこともあり、引き締まつた表情の隊員が行き来している。その中から御子神を先頭にパイロット達が姿を現した。軽く会釈をするだけで、彼らの表情はどこか固まつていた。その最後尾におまけのようについてきたシヤム。相変わらずの黒い民族衣装のまま、入り口の隣で彼女を待つていた熊太郎が駆け寄るのをどこかぼんやりとしたように眺めている。

「ああ、ホプキンスさん」

クリスにかける声もどこか頼りない。キーラはつなぎのそでで顔についていたオイルを拭くと、シヤムの被っている帽子を直してやる。

「大丈夫？眠れなかつたの？」

「違うの」

シヤムは頭を振りながら焦点が定まらないような瞳でクリスを見上げた。

「本当に大丈夫かい？」

クリスが声をかけるが、シヤムはそのままハンガーへ向けて歩いていく。心配そうな唸り声を上げて見守る熊太郎。

「元気出せよ！」

シャムの被っている帽子を叩いたのはライラだった。

「ライラちゃん……」

驚いたように帽子を被りなおすシャム。その様子をジェナンとシンが笑顔で見つめている。

「昨日の元気はどうしたんだよ」

ライラは上機嫌だった。だが、彼女の額に浮かんでいる脂汗をクリスは見逃さなかった。戦場に立つ恐怖を紛らわす為になどと明るく振舞って見せているのは間違いなかった

「うん大丈夫だよ。ホプキンスさんも安心していいから」

そう言つとキーラにつれられてシャムはハンガーへと歩き始めた。

きらめく照明の中次々と起動準備に入るアサルト・モジュールを見ながら、静かに愛機クロームナイトに足を向けるシャム。

「一番機出ます！」

セニアの機体が接続されていた機器をパージして歩き出す。他の機体も待機状態で、コックピットを開けたまま整備員と怒鳴りあっている光景が続く。

「ナンバルゲニア機！起動準備はどうだ」

クロームナイトに取り付けられたはしごを先頭に立って上りながら、キーラは仕様書を読んでいる整備員に声をかけた。

「かなりアクチュエーター関連がこなれてきましたからねえ」

眼鏡をかけた男性の整備員がそう言うと言いつつ手にしている仕様書をキーラに手渡した。

「じゃあ、俺から乗るか」

そう言うと言いつつ仕様書をのぞきこむキーラをよけるようにしてクリスはコックピットに体をねじ込んだ。小柄なシャムのシートの後ろの簡易シートに腰を下ろし、安全ベルトを装着する。続いてシャムが黙ったまま自分のシートに腰を下ろし、慣れた手つきで機体状況のチェックを始めた。

「シャムちゃん。あんまり無理させないでね。隊長のカネミツの予備部品が届くのが来週以降になりそうだから」

そんなキーラの声にシャムは覚悟を決めた表情で頷いた。コックピットの中に身を乗り出していたキーラはそのまま身を引いた。ハッチが閉められ、装甲板が降りる。全周囲モニタが起動するのを確認すると、クリスは手持ちの携帯端末を覗いた。

そこには一通のメールが届いていた。クリスと親しい東和駐在のアメリカ陸軍の武官からのものだった。そこには東和訪問中のアメリカ国務長官と、東和首相菱川重三郎の会見の予定が組まれている

と言うこと、さらにその後の昼食会後に秘密裏に教条派から政権を奪い返したばかりの遼北人民共和国の周首相派として知られる在東和大使が同席しての会議が予定されていると言う内容だった。

「クリスさん。なんか難しい顔してるね」

ようやく笑顔に戻ったシャムが声をかけてきた。

「そうだね、どうもこの戦いが持っている意味は僕が考えるより大きいのかも知れないな」

そんなクリスの言葉に首をかしげるシャム。

『シャムちゃん、そのまま出れるわよね！』

「うん！いけるよ！」

シャムはそう言うと機体から機器をパージしてハンガーの前に並んでいる二式の群れに向かって機体を歩かせた。

ゆっくりと機体を固定していた機器を避けるようにして進むクロームナイト。対消滅エンジンはうなり声も上げず、クリスにはなぜ動いているのか不思議になるような感覚が訪れていた。足元で誘導する整備員に従ってそのまま、まだ暗い夜空の下に姿を現す。

「シャム！貴様のクロームナイトが一番足が速い。いけるか？」

セニアの言葉にシャムは静かに頷く。

「クリスさん、行きますよ」

そう言うとシャムはパルスエンジンに火を入れた。軽い振動の後、静かに周りの風景が落ち込んでいく。

「高度は百メートル以下にしる！上空の東和空軍機に捕捉されると面倒だ」

セニアの声を待つまでも無く、クロームナイトは北兼台地に向かって渓谷を滑るようにして飛び始めた。

「ナイトシリーズか。さすが遼南の盾と呼ばれた機体だ」

クリスはすでに巡航速度に達している加速性能に感心しながら前を向いているシャムを後ろから眺める。

「質問、いいかな？」

つい文屋魂で、息を整えながら操縦桿を握っているシャムに声をかけた。

「うん、まだブリーフィングとか言うお話会で教わった地点まで時間が有るから大丈夫だよ」

シャムは振り向いてそう言った。

「なんで君は戦うんだ？たぶん嵯峨の隊長は君には難民と一緒に避難するようしつこく迫ったはずだ。だけど君は今ここにいる。もう戻ることは……」

「友達だから」

言葉をつむぐクリスをさえぎるようにしてシャムは笑顔を浮かべ

てそう言った。

「もう一人ぼっちになりたくないんだ。熊太郎がいて、隊長がいて、セニアがいて、飯岡さんがいて。みんながいるからあたしはここにいる。もう一人ぼっちなんて嫌だから」

そう言い切ったシャムはにこりと笑うと漆黒の溪谷へと目を移した。レーダーには後続の二式の反応が映し出される。高高度にはいつものように東和空軍機がへばりついてきていた。

「東和の偵察機か」

苦々しくクリスはそうつぶやいた。東和空軍は常にこの戦いを監視すると宣言している。遼南中部以北に飛行禁止区域を設定し、航空戦力の使用に対し実力行使も辞さないという状況は人民軍にも共和軍にも利もあれば害もあった。たとえばこうして限られた戦力で攻撃をかけると言う状況においては、非常にその害の部分が浮き彫りになる。

東和空軍の偵察機のデータを盗み見ることくらい、共和軍に鞍替えした吉田俊平少佐には容易いことだろう。彼は十分にこちらの手の内を知った上で迎撃体制を整えることができる。そう思いながらクリスは見えもしない東和空軍の偵察機を見上げた。

突然割り込みの通信が入り、クロームナイトの全周囲モニタにウインドウが開いた。にやけた表情の青年将校、嵯峨中佐の姿が大写しにされる。

「はい、皆さんご苦労さんですねえ」

そう言いながら頭を掻く嵯峨。クリスはあっけに取られて画面の中の嵯峨の顔を見つめた。頬のあたりに赤いシミがある。良く見ればそれはどす黒い新鮮な血液だった。嵯峨も気付いているようで左腕で拭おうとするが、その左の袖にも大量の黒いシミが浮かんでいた。

「隊長？」

シヤムはウインドウの中の嵯峨に目を奪われた。

「さて、共和軍の皆さん。あんたらの大将のエスコバル大佐。自決しましたよ」

嵯峨はあっさりと言いつと、隣から手渡された焼酎の小瓶を口に含んだ。

「まあ、現在共和国大統領府が後任の人事を急いでいますが、まあどれほど人材があるのかは俺の知ったことじゃ無いんでね」

そう言うのにんまりと笑う嵯峨の目に浮かぶ狂気をクリスは背筋の凍る思いで見つめていた。

「吉田の旦那。あんたも雇い主がおつ死んだと言つのにご苦労なことでですねえ。確かにここで白旗上げればあんたの傭兵としての命脈が尽きるのはわかってますよ」

嵯峨は明らかにこの状況を楽しんでいる。クリスは確信した。

「腕と勇名があんたクラスの傭兵になると給料の査定に響く話だ。飼い主がくたばった後でもその尻拭いもせずに引き下がったとなれば、どの武装勢力も民間軍事会社もあんたを買ってくれなくなる」

そう言つて嵯峨は再び焼酎の小瓶を傾ける。

「まあ、降伏しろとは言わねえよ。だが頭は使っておくほうがいいな」

嵯峨の表情はまるで子供のそれだった。悪戯好きの子供がまんまとわなにはまった教師を見下すような表情で彼は話を続ける。

「そう言うわけなんで、俺の部下の皆さんは空気読んで適当に暴れてこいや」

それだけ言うと突然振り向いて歩き出す嵯峨。さらに誰も映っていない状態でウィンドウだけが開いている。

「あれ？まだ回ってるの？ちゃんと切つといた方が……」

中途半端なところでウィンドウは閉じた。クリスはただ呆然とその光景を眺めていた。

「なんだよ、空気を読んで暴れるって？」

クリスの言葉に振り返ったシャム。その表情には不思議な生き物を見つけたような大きな目が輝いていた。

「邀撃機上がった！三機……まだ増える！」

セニアの声がコックピットに響いた。

「ちよつと揺れるけど我慢してね」

シヤムはそう言うつとさらに加速をかける。クロームナイトの重力制御コックピットにより、マイルドに緩和されたGがクリスの全身を襲つ。

「シヤム！そのまま無視して突っ込め！吉田が出てくるはずだ」

セニアの指示に頷くシヤム。モニタの中の点のように見えた共和軍のM5が急激に大きくなる。朝焼けの光の中、そのいくつかが火を放つた。次の瞬間、振動がクリスを襲う。

「直撃？」

「違うよ！」

そのままシヤムは速度を落とすことなく、滞空しているM5をかわして突き進む。

「敵機、さらに五機出てきた！御子神とレム、ルーラはシヤムに続け！私と飯岡と明華で先発隊は落とす」

「じゃあ私達は御子神中尉についていきますよ」

指示を出すセニア。その言葉に続いて進む東モスレム三派のシン少尉、ライラ、ジエナン。

「クリスさん。また揺れるよ」

そう言うつと同じように五つの豆粒が急激に拡大し、そこから発せられた光の槍をかわすようにしてクロームナイトは進む。クリスはただ敵基地を目指し突き進むシヤムの背中を見ながら黙り込んでいた。

「一気に落とすよ！」

シヤムはそう言うつと再び視界のかなたに現れた五つの点に向けて加速をかける。抜いた熱式サーベルを翳して、そのまま制動をかけ

る。シヤムの急激な動きについていけない敵のM5の頭部が、そのサーベルの一撃で砕かれた。

「邪魔しないでよ！」

クロームナイトの左腕に仕込まれたレールガンの一撃が、モニターを失い途方にくれる敵機のコックピットに吸い込まれた。そして爆炎がその後ろからライフルを構える二機目のM5の視界の前に広がった。

「もらうよ！」

シヤムは視界にさえぎられて慌てて飛び出した二機目のM5の胴体にサーベルをつきたてる。そしてそのままパルスエンジンでフル加速をかけ、串刺しにされたM5を中心に一回転した。クロームナイトの背中に張り付いていた敵のM5の大口径レールガンの火線はシヤムの機体ではなく、友軍のM5のバックパックに命中して火を噴いた。

「こりやあずいぶんとやるもんだなあ」

吉田はまだ北兼共和軍南部基地を出ていなかった。灰色の、最新鋭遼南兵器工廠謹製のホーンシリーズをベースにして、吉田の要請に沿った形でカスタムをくわえた、アサルト・モジュール「キユマイラ」のエンジンにはすでに火が入っていた。

上空で戦況を観察している東和空軍の偵察機の情報も、進軍を続けている嵯峨の遊撃隊の本隊の画像も吉田の脳髓に直結したデータモニタには入っていた。

「隊長！出ますか？」

吉田の直下の手ごまである三人が乗ったカスタム済みのM5が待機している。

「まあ慌てることは無いさ。共和軍の連中がどこまでやるのか。今後の参考までに見て置こうじゃないの」

そう言っただけを噛む口元に笑みを浮かべる。

『遼南帝国の遺産、ナイトシリーズか。どこまでやれるか楽しみだねえ』

北兼軍がパイロットのいないカネミツ以外の全アサルト・モジュールを出撃させていることは知っていた。そして吉田に戦力の出し惜しみをするつもりはさらさら無かった。嵯峨と言う勝負師が仕掛けたこの一撃。それを凌ぎさえすれば、とつと荷物を纏めて遼南を後にするつもりだった。

それ以上共和軍に恩を売る必要などまるで感じていない。分の悪い陣営にとどまって、馬鹿な戦いに精を出す職業軍人のしがらみとは無縁な傭兵稼業。雇い主のエスコバルが死んだ今となっては、小規模部隊を仕切らせたら右に出るものはいないと言う嵯峨の飼犬どもの鼻をへし折って名を上げるのが、この戦いの吉田にとっての意味だった。

「しかし、二式の性能は予想以上ですね」

顔に傷がある吉田の部下が味方の一機が、突っ込んでくるクロームナイトに続く第二波に落とされたのを確認してつぶやく。吉田に言葉を返すつもりは無い。

長い時間、戦場を傭兵として世の中を渡ってきた吉田は、部下とは言え他の兵達と付き合うことなど考えたことも無かった。情をかけても死ぬ奴は死ぬ。高価な全身義体のオーバーホールにかかる費用のことを考えながら戦う戦場では、味方はただの手ごま、敵は金なる木に過ぎない。それが吉田の信条だった。

「エスコバルのおっさんがもう少しましな奴だったら、二式のデータもかっぱらえたのに……馬鹿な大将を持つと苦労するぜ」

そんな吉田の脳内領域に意識化された視界の中で、先頭を切つて味方の第三波を殲滅したクロームナイトの姿が大きく映る。

「クロームナイトを落とせば、それなりに次の仕事を探す時は楽になるかねえ」

そうつぶやきながら吉田は機体に取り付けられていたコードをパージして出撃体勢に入った。

『戦闘中の共和軍、人民軍所属特機パイロットに告ぐ！貴君等は東京都声明に規定された飛行禁止区域内での空中戦闘行為の禁止の事項に抵触する行動をしている。速やかに機体を停止させ、着陸して指示を待ちなさい！さもなければ……』

シヤムが上昇して逃げようとする最後のM5のバックパックをサベルで切り落とした時、モニターにヘルメット姿の東和空軍の重武装攻撃機からの警告が入った。

「シヤム！その場で着地。そのまま陸路を進め！」

セニアの声に、シヤムは機体を降下させる。

「どうせ攻撃なんてするつもりが無いのにな」

そう言いながらクリスは上空に旋回している対アサルト・モジュール用のレールガンを搭載した戦闘機の影を見上げた。

「でも『ぶりーふいんぐ』と言うお話会ではこの指示があったら着陸しろって言うってたよ」

そう言うとそのままシヤムはパルスエンジンを吹かす。そのままクロームナイトは一気に高度を下げ、渓谷の中洲に着地した。

「誰もいないみたい」

シヤムはそう言うつと、しばらく周囲を警戒した。各種センサーは沈黙を守っている。

「しくじりました！脱出……うわ！」

一瞬開いた飯岡機のモニターがすぐに消えた。

「やられた？撃墜か？」

クリスはその何も映っていない画面を見つめる。

「やらなきゃね」

そう言うつとシヤムは再びパルスエンジンで機体を十メートルくらいの高さまで上昇させる。

「せっかくお友達になれたのに。せっかく一人ぼっちじゃ無くなっ

たのに……」

そう言つと、急加速をかけて突き進む。

「熱くなるんじゃない！」

さすがのクリスもそう叫んでいた。取材している部隊の隊員が死ぬことには慣れていた。そして、そのことをきっかけにして、理性を失つてさらに敵の罠に深く入り込んでいく指揮官をどれほど多く見てきたか、クリスにとってシヤムの甘さは死に繋がる危うさを孕んでいるように見えた。これまでも死の危険は戦場記者にはつき物だとは思っていた。だが、シヤムのような純真な子供が死に向かっているのを見ると、クリスはさすがに叫びたくなっていた。

シヤムはクリスの言葉を十分反芻したと言うように速度を落とすで、そのまま森の中に機体を沈めた。そして、振り返ってクリスの顔を見た。シヤムの瞳は潤んでいた。クリスは黙って彼女の頭を撫でた。

「冷静になるんだ。このまま川沿いに進めば敵の防御火線の中に突っ込むことになる。そうなったらこの機体の不瑕疵装甲でも撃ち抜かれるぞ。この山の尾根まで行って敵の様子を見るんだ」

そう言いながらクリスは空を見上げた。警戒飛行を続ける東和空軍の攻撃機の数はずらに増えていた。条約などと言うものを平然と無視できるだけの度胸を吉田が持っていたとしても、この数を相手にするほど馬鹿ではない。クリスはそう思いながら、彼の言葉に頷いたシヤムを見守っていた。

東和の偵察機の映像を傍受していた吉田はその意味を理解していた。それは電子信号に過ぎないが彼には映像化してそれを認識する必要は無かった。二進法のコードが脳髄に達すればそれだけで状況を把握するには十分だった。

「突っ込んできたクロームナイトのパイロット。ナンバルゲニア・シヤムラードって言ったか？馬鹿じゃねえみたいだな。それとも遼南の七騎士の記憶が蘇ったか？」

自然と吉田の頬が緩む。東和の偵察機にはダミーの情報を流して、まだ吉田達の三機のアサルト・モジュールは基地にへばりついていると偽装している。

「さあ、それなりに楽しめるお客さんだ！金の分だけは仕事をしろよ！」

吉田は僚機に声をかけた。しかし、吉田は彼等を当てにしてはいない。

『遼南の七騎士か……噂どおりならあんた等には勝ち目はねえよ』
傭兵達は闇に消えていく。それを笑みを浮かべて吉田は見送った。

「ここですばらく様子を見るんだ。あの基地には波状攻撃をかけるほどの戦力は無い。今までののは基地の初期戦力だ。吉田少佐が指揮を取っているからには、彼直属のアサルト・モジュールを投入してくるはずだ。それを待ち伏せる。わかったね？」

クリスの言葉にシヤムは頷いた。確かに彼の命がシヤムの双肩にかかっていると言うことでかけた言葉ではあるが、それ以上にこの少女の死を恐れている自分がいることに気付いてクリスは思わず笑

みを漏らした。それを嬉しそうに覗き見て、再びシヤムは尾根伝いに南下を続けた。

突然、シヤムは機体を伏せさせた。その真上を火線が走る。

「見つかった！」

そう言うクリスにあわせるようにシヤムはモニタを望遠に切り替えていた。重装甲ホバー車の長いレールガンの銃身が尾根の反対側に消えていく。

「待ち伏せ？」

シヤムはそう言うと言つと機体を立て直す。

「当然だろう。ここは共和軍の勢力圏だ。それなりの戦力を用意しているはずだから注意……！」

今度は川の方からの火線がクロームナイトの肩を掠める。しかし、クリスにはそれが敵の砲手が引き金を引く前にシヤムの機動によって避けられたものであることがわかっていった。

『この娘は読んでいるのか？それとも避けている？』

クリスは目を凝らす。さらに三発の火線が四方からクロームナイトを狙うが、すべて紙一重で外れる。

「避けているのかい？」

恐る恐る尋ねるクリスにシヤムは軽く頷いた。

「大丈夫いけるよ!」

クリスの問いに答えずにそう言ってシヤムは機体をジャンプさせた。クリスは止めようと手を伸ばしたが、シヤムの頭に手が届くこともなかった。シヤムのクロームナイトのレールガンは、正確に重装甲ホバーの上面装甲を撃ち抜いていく。

「まだいるよ。今度はおっきいの!」

着地してすぐにシヤムは機体を崖の下に進めた。すぐさま彼女が着地した地点に火炮が集中しているのが見える。

「見つけた!」

シヤムはかすかに光る森の中の一群に地対地ミサイルを撃ち込んだ。そしてすぐに移動を開始する。崖に沿って続く舗装の壊れかけた道を進んでいたかと思うと、次の瞬間には河原に機体を着地させる。今度は移動する敵からの掃射を浴びるが、そのことは想定しているように対岸の森に機体を進めている。

「アサルト・モジュールだ!」

クリスの声を受けて振り向くシヤムは大きく頷いた。

「こっちだってやられてばかりじゃないんだ!」

そう言うともM5の改良型と思われる機体にレールガンを撃ち込む。しかし、敵の動きは早くむなしく火線は森の中に消えていく。

「動きが早い、吉田の手持ち部隊か?」

クリスの言葉を待つまでもなく、シヤムは相手の機体の速度に合わせて森の中を抜け、河原を越えて対岸の道路にたどり着く。敵のパイロットもそれを読んでいたようにレールガンを放つが、シヤムが微妙に速度を先ほどよりも上げていたのでそれは渓谷の街道の路肩をえぐるだけだった。

「もう一機の気配がするんだけど……」

シヤムは周りを見渡す。夜間対応のコックピットのモニターが緑

色に染まった周囲の森を浮かび上がらせる。彼女をつけまわしていた機体は河原に降りてシヤムを誘っているように見える。シヤムはそれに乗せられず、そのままそれを無視して再び対岸を目指した。

「そこ！」

誘いをかけている機体の火線軸上に隠れていたM5の上半身が、シヤムの抜き切りのサーベルの一撃で両断された。そのまま炎に包まれる敵から、誘いをかけていた敵機に目を向けるシヤム。その姿に怯えたように後退する敵機にシヤムはパルスエンジンをふかして急接近した。

「これで終わり！」

そう叫んだシヤムの言葉の通り、クロームナイトのサーベルがM5のコックピットに突きたてられた。

「おかしい。変だよ」

最前線の部隊を壊滅させたと言うのにシヤムは緊張した表情を崩していなかった。わずかな間隙を利用してレールガンの弾丸の入ったマガジンを交換する。

「吉田少佐のことか？基地で待ち受けるつもりじゃないのか？」

「そう言うクリスにシヤムは首を振った。」

「いるよ、近くに。でも味方がやられても助けに来ないなんて……」

そう言っただけでシヤムは機体を森の中に沈めた。

「確か吉田少佐の機体はナイトシリーズのリバイバル版のホーンシリーズのカスタム機だ。詳しい性能は俺も知らないけど……」

その時一発の高収束レーザー砲がクロームナイトの右肩をえぐった。

「来た！」

シヤムはそのまま機体をいったん街道に飛び出させる。今度はレールガンの高初速のカリフォルニウム弾が掠める。

「見えないよ！どこかにいるはずなのに！」

右肩の損傷は軽微だった。そのまま川に降り、対岸の崖を上り高台に出る。そこでも高収束レーザー砲の連射が襲い掛かる。シヤムはある程度そのことを予定していたようで、そのままきびすを返して川に下りる。

「相手も移動しながらの攻撃みたい。場所がつかめないよ！」

泣き言を言うシヤム。だが、彼女は再び森の中に入ると、これまでより深くの森に機体をねじ込んだ。レールガンの掃射で木が次々と倒されていく。シヤムは発見される前に森の奥へと後退する。

「どうした！シヤム！」

セニアの声が響く。彼女達もこちらに進軍できていないと言う現

状を考えれば、遊撃部隊による先頭部隊の挟撃と言う戦術を吉田が
取ったことがクリスにも分かった。

「仲間を呼ぶんだ！相手は一機。それに……」

「駄目だよ！この人は凄く強いから」

クリスの言葉を拒否してシヤムは敵を誘うような後退を続ける。

正確な射撃を何とかかわしながら機体を引かせる。

『これが遼南の七騎士か……』

その巧みな戦闘テクニックにクリスは脂汗を流した。

『誘いをかけるのはわかる。だがなぜ支援を呼ばない。一機で十分とでも言うつもりか?』

吉田は水中で機体を沈めたまま状況を監視していた。自軍の自走ホバーをハッキングしての攻撃をクロームナイトは凌いでいた。しかも明らかに誘っているような後退を続けている。

『馬鹿だという情報だが、それでもないみたいだな』

東和の偵察機の映像でクロームナイトに対する攻撃の精度はもう5、6回は致命傷を与えることができる精度で行われていた。だが攻撃を仕掛けてもすべて回避される。

『そう言えば七騎士の展開するフィールドの中では時間軸さえゆがめることができると言うが、まさかそんなことは……』

その時クロームナイトは動いた。すぐさま吉田は『キュマイラ』を上昇させる。水面が爆風に飲まれる。

『そんなことができるなら、俺はとっくに落とされている。それとも!』

そのまま相手の目を水面に釘付けにするために、友軍のホバーをハッキングして掃射を仕掛ける。

「どこにいるの!」

シャムは飛び出してきた重装甲ホバーを撃ち抜いて叫んだ。

「酷い奴だな。味方を盾にしている」

クリスはそう言いながらクロームナイトが着陸した地点で炎上しているホバーを覗き見た。脱出しようとした指揮官の背中が炎に包まれて痙攣している。

「シャム。相手は血も涙も無い傭兵だ。情けをかける必要なんて無いんだ」

そんなクリスの言葉にシャムは首を振った。

「違うよ！悲しい人なんだよ。戦うことしかできない悲しい人。アタシは森の中で暮らしていて戦い以外のことがあるのを知ってたけど、この人は戦いしか知らないんだ。そんなの悲しすぎるよ！」

レールガンの掃射を軽々とよけるシャム。

「同情はやめた方がいい。君が死ぬことになる」

そう言うクリスのことばにシャムは振り向いた。シャムは泣いていた。口元が悲しみのあまり震えている。

「同情じゃないよ！この戦いを終わらせるのに必要なことだよ！」

そう言うのと再び正面を向いて機体を加速させる。角の特徴的なホーンシリーズの灰色の機体がジャンプして逃げ去る様が目に入った。

「見つけた！」

そう言うのとシャムはレールガンを投げ捨て、サーベルへのエネルギー供給を増やした。

「まずい！格闘戦に持ち込まれたら！」

吉田は背後に岩盤が露出した崖に押し付けられていく機体を持ち直そうとした。その時、『キュマイラ』のパルスエンジンに強烈なダメージを感じた。

「伏兵だと！」

そのままキュマイラは岩盤に押し付けられた。

「これで！」

崖にめり込んだキュマイラをにらみつけるシャム。そう言うとセンサーを腹部の動力ケーブルが集中している部分に突き立てた。キュマイラは右手を振り下ろそうとするが、腹部を破壊されたことによる動力ユニットの不調で軽く払ったクロームナイトの腕の一撃に敵のキュマイラはセンサーを落とす。シャムは左腕で頭部を握り締め、センサーを完全に破壊する。

そこまでしてシャムは突然クリスを振り返った。その表情は穏やかで、非常に落ち着いていた。

「危ないけど付き合ってたね」

そう言うとシャムは装甲版を上げて、コックピットを開いた。

「ほう、面白れえ餓鬼だな」

センサー系はほぼ一部の通信機能以外は停止していた。エンジン

は無事だが動力の制御機能が停止、完全に負けは決まっていた。

「まあ、挨拶ぐらいはしておくかな」

そう言うと吉田はコックピットを開いた。目の前に少女がいる。その後ろの座席に乗っているのはアメリカ人のジャーナリスト。

「確か、クリストファー・ホプキンスとか言ったな。コイツを人質に……」

「負けが決まったんだ。いまさらつまらねえこと考えないほうがいいんじゃないの？」

不意に拡声器で叫ばれて吉田は驚いて振り返った。漆黒のアサルト・モジュールがそこにそびえていた。肩の笹に竜胆の家紋。そして武悪面。

「嵯峨惟基？何でコイツが……」

吉田は驚愕しながらサーベルを構える黒いカネミツに目を奪われていた。

「驚いてもらって光荣だね。吉田さんよ。ネットを流れる情報だけがすべてじゃないんだ」

そのまま嵯峨はキュマイラの上半身を叩き落とした。

「隊長！」

クリスの目の前でシヤムが涙を浮かべて叫ぶ。

「一応、コイツも一流の傭兵だ。加減をするだけ失礼だろ？」

そう言つと躊躇することもなく、嵯峨はキュマイラのコックピット周りの装甲を引き剥がした。クリスは開いたコックピットから吉田の姿を見た。固定された下半身がもげて、そこからどす黒い血が流れている。そのまま被っていたサイボーグ向けのヘルメットを外し、吉田のにやけた面が朝日に照らされた。

「駄目だよ！」

シヤムはそう言つとそのままシートベルトを外してクロームナイトを降りる。そのまま無様に転がっているキュマイラの上半身に駆け寄るシヤム。クリスもその後が続いた。手を差し伸べるシヤムに、弱弱しい笑みを浮かべる吉田。

「止めでも刺そうつてか？」

そう言つ吉田の余裕の表情をクリスは不審に思つて、いつでもシヤムを抱えて逃げられる心構えで吉田に近づいた。

「違うよ。違うんだよ」

シヤムの目に涙が浮かぶ。吉田はそれが理解できないとでも言うように眺めている。

「吉田の。これで二回目か？俺に関わるとお前さんもろくな目にあわないな」

いつの間にかカネミツを降りていた嵯峨が吉田に声をかけた。

「もう二十年ですか。あなたの命を取り損なつたのが今の無様な負け方の原因と言つところですか？」

自由にならない体を嵯峨に向けた吉田。『北兼崩れ』と呼ばれる動乱。この北兼の地の王として独立を願い立ち上がった少年皇帝の前に傭兵として頭角を現そうとしていた目の前のサイボーグが立ちはだかつていたとしても不思議ではないとクリスは思った。

「そうですねえ。あの青っ白い餓鬼一人の命すら取れなかったあんなだ。相性って奴があるんじゃないですか？」

そう言う嵯峨はタバコに火をつけた。

「お前さんについてはいろいろ調べたよ。しかし東和の軍事会社の名簿。東和の戸籍。遼南の入国記録。すべてが明らかに改ざんされたデータだよ」

「ほう、あの成田と言う情報将校以外にもルートがあるんですか。これじゃあ勝てないはずだよ」

そう言う口元から流れるどす黒い血を拭う吉田。

「情報の有益性は外務武官でも憲兵隊でも実戦部隊でも立場によって変わったりはしねえよ。使い方次第で目的に近づく効果的な手段となるもんだ」

そう言う嵯峨は口からタバコの煙を吐いた。

「お前さんに情報って奴の重要性なんて説教するには、俺じゃあ役不足なのはわかっているがね。だが、ネットの海で拾った情報の信憑性を論議するより、手っ取り早く足を使う。それが真実に近づく一番の方策だつて言うのが俺の主義なんでね」

嵯峨はそう言いながら吉田にタバコを差し出す。

「ああ、僕はタバコはやりませんよ。健康の為にね」

下半身を失いながらも、吉田はにやりと笑いながらそう言った。

「今頃、東モスレム三派の部隊が北兼台地南部基地になだれ込んでいる頃合だなあ」

とぼけたようにつぶやいた嵯峨の言葉に、一瞬吉田の表情が驚愕のそれに変わった。そして次の瞬間にはまるで火の付いたような爆笑に変わる。

「つまり俺はアンタの掌で踊っていたわけですか」

そう言い終わる吉田の瞳に光るものがあるのをクリスは見逃さなかった。そんな吉田を心配そうに見つめるシャム。

「面白れえよ、あんた。久しぶりに楽しめる仕事だったよここの仕事は。だが、しばらくは休みが取りたいもんだね」

「でも……」

シャムがつぶやくと、吉田はシャムとクリスを見上げた。

「そのチビも結構面白れえ顔してんな」

「酷いよー!!」

シャムはそう言うのと頬を膨らませる。

「褒めてるんだぜ、俺は。世の中面白いかつまらないか。その二つ以外は信用ができない。信用するつもりも無い。アンタ等についていけば面白いことになりそう……」

突然、吉田の体が痙攣を始めた。

「時間切れか。また会うときはよろしくな」

嵯峨はそう言うつと痙攣している吉田の胸元に日本刀を突き立てた。吉田はにんまりと笑った後、そのまま目をつぶって動きを止めた。

「死んだんですか？」

クリスのその言葉に首を振る嵯峨。

「これはただの端末ですよ。本体は……まあそれはいいや」

それだけ言うつと嵯峨は刀を吉田から抜いて振るつた。鮮血が大地を濡らす。

『隊長！敵勢力はほぼ壊滅！指示を願います！』

スピーカーから響くセニアの声。

「さてと、三派のお偉いさんに挨拶でもしに行きますか」

そう言うつと嵯峨はカネミツに乗りこむ。シヤムも頷くとそのままクロームナイトを始動させた。

散発的な銃声が響く北兼台地南部基地にクリスとシヤムは降り立った。

「まだ続いているんだね、戦いは」

コックピットを開いて流れ込んでくる熱風に黒い民族衣装を翻すシヤム。クリスは基地の中央で両手を頭の後ろに当ててひれ伏し、東モスレム三派の兵士に銃を向けられている共和軍の兵士達を眺めていた。

「手でも貸しましょうか？」

クロームナイトの足元で、タバコをくわえた嵯峨と、書類に目を通している隼の姿を見つけたクリスは首を振ってそのままシヤムの後ろをついて機体を降りようとした。

「危ない！」

白い機体の腕から落ちそうになったシヤムを書類を投げ捨てて支える伊藤。

「慌てても何にもならないぜ」

そう言って笑う嵯峨。

「まもなく我々の陸上部隊も到着します。今のところ組織的な抵抗は受けていませんよ」

伊藤はそう言うのと散らかした書類を拾い始める。その姿を見て、三派の兵士達も飛んできた書類に集まってきた。

「エスコバルの旦那が死んだんだ。奴等も抵抗が無意味なことくらいわかってるだろうにな」

タバコを投げ捨ててもみ消した嵯峨。その視線の先には炎上する町並みが見えた。

「そう簡単に戦争は終わるものじゃありませんよ。戦争は簡単に始まるが、終えるのにはそれなりの努力が必要になる」

クリスの言葉に振り返る嵯峨。一瞬、威圧的な色がその瞳に浮か

んだが、すぐにそれはいつもの濁った瞳に変わった。

「確かにそうですねえ。あいつ等は三派に降伏したらイスラム教徒以外は殺されると吹き込まれているみたいですね。そして俺達は単なる無頼の輩で人殺しを楽しみにしていると思ってるんだから」

そう言いながら伊藤の方に目を向ける嵯峨。伊藤は自分の腕の政治将校を示すエンブレムを見て首をすくめた。

「隊長！」

ようやくたどり着いた二式を降りたセニアと御子神が駆けつけてきた。後ろからうなだれてくるレムとその肩を叩きながら声をかけるルーラ。

「飯岡は？」

その嵯峨の言葉に視線を落とすセニア。

「戦死しました。コックピットに直撃弾を受けましたから即死ですよ」

御子神の言葉に、嵯峨はそのままタバコを手を取った。

「なんど聞いても慣れないな、戦死報告って奴は」

クリスはそのままうつむいて本部の建物に向かう指揮官に声をかけることができなかった。

そのまま伊藤に案内されて嵯峨は基地の司令室に向かった。そんな三人を襲う死臭。クリスにもその原因はわかっていた。基地の一角を掘り起こしている三派の兵士は疫病予防のためにガスマスクを装着していた。

「ゲリラ狩りの被害者ですか」

思わずハンカチで口を押さえながらクリスが先を急ぐ嵯峨に尋ねた。

「まあそんなところでしよう。私も昔やりましたから」

そう言う嵯峨の目は笑ってはいなかった。クリスも笑えなかった。嵯峨は胡州帝国の憲兵隊の出身である。胡州軍の組織的ゲリラ討伐戦の末、彼が『人斬り新三』の異名を持つことになったこともクリスは知っていた。階下から匂う死臭にハンカチで手を押さえながらそのまま司令部のドアを開いた。

涼しい空調の効いた部屋にたどり着いて、ようやく三人は忌まわしい匂いから解放された。モニターはほとんどが銃で破壊され、処分が間に合わなかった書類の束が床に散乱している。それを抜けて嵯峨は先頭を切って階段をのぼる。時々、ターバンを巻いた三派の将校が嵯峨の襟の階級章を見て敬礼する。

そのまま二階の廊下を突き当たり、歩哨の立っている司令室にたどり着く。

「嵯峨中佐ですね」

そう言うと浅黒い肌の歩哨が軽く扉をノックした。

「どうぞー！」

中で大声が響いた。嵯峨はためらうことなく扉を開いた。室内には窓から庭を見下ろしているグレーの髪の将官が立っていた。

「嵯峨惟基中佐、到着しました！」

直立不動の姿勢をとった嵯峨が敬礼をする。三派の指揮官と思し

き男が振り返るのをクリスは眺めていた。東アジア系の顔立ちだが、クリスには髭が無いところから仏教徒か在地神信仰の遼州人か分かった。その眉間によせられた皺がその男の強靱な意志を示していた。

「東宮がそう簡単に臣下に敬礼などするものではありませんよ」

穏やかにそう言った男の顔眺めて、クリスはその人物のことを思い出した。

かざんいんやすなが
花山院康永中将。遼州東部の軍閥の首魁、花山院直永の腹違いの弟。そして嵯峨の實の弟に当たるムジャンタ・バスバ親王の忠臣として知られる猛将が穏やかに嵯峨を眺めていた。

「なあに、今の俺はただの遼南人民軍の指揮官ですよ。さらに加えて言えば党のおぼえはきわめて悪い」

そう言いながら隣の隼を見つめる嵯峨。伊藤は頭を掻きながら苦笑いを浮かべた。

「その主席が亡くなられたそうじゃないですか」

そう言う花山院の言葉にクリスは目をむいて青年指揮官を見た。

嵯峨の表情には変化は無かった。隣の伊藤も動じる気配が無かった。

「その顔は知っていたとでも言うようですね。もしかして暗殺……」

花山院はそこまで言うて言葉を飲み込んだ。嵯峨は腰の軍刀に手を伸ばしている。

「下手な推測はしないほうがいい。そう思いませんか？」

そう言うのにんまりと嵯峨は笑った。

「そう言うなら私は何も言わないことにしましょう。我々はこの基地を引き渡した後、再び東モスレム領内に後退する予定ですが、後退のルートはこちらの設定した順路でよろしいですか？」

「こちらで指定できることではないんじゃないですか？現状として多国籍軍の背後を取っている以上、いつ彼らの総攻撃を受けるかもわからないですから。最良の策をとるのが指揮官の仕事じゃないですか」

そう言うつと嵯峨はポケットに手を伸ばした。花山院は机の上の灰皿を差し出した。それを受け取った嵯峨はタバコに火をつけてくつろぐ。

「残念なことですが、捕虜は引き渡していただきますよ」

タバコをくゆらす嵯峨の隣に立つ伊藤の言葉に花山院は顔をしかめた。

「そう言う顔をなさる気持ちもわかります。捕虜の共和軍兵士はお

そらく懲罰大隊に編入されて督戦隊の射撃標的になるんでしょうか
ら」

そう言う伊藤の言葉を飲み込んだと言うように頷きながら聞いた
花山院は今度は嵯峨の顔を見た。

「うちはただでさえ上の評判が芳しくありませんからね。残念だが」
花山院は今度はクリスを見つめてきた。

「取材の条件で、そう言った情報は流すことは……」
クリスがそこまで言ったところで花山院は机を激しく叩いた。

「彼らが何をしたと言うんですか！」

誰もが同じ思いだった。そしてそれがどうしようもないことであ
ると言うことも皆がわかっていることだった。

「まあ気持ちも分かりますが……情報ついでに、現在共和軍の三個軍団が降伏を打診してきていますね」

タバコの煙を吐き出す嵯峨。

「三個軍団！十万以上の兵力じゃないですか！あなた方は……」

「まあうちは千人いないんでね。遼南軍ですから、飯がまずいとかうどんがかつお出汁だとか噂を流せば脱走してくれるんじゃないですか？」

そう言っただけ笑う嵯峨。クリスも半分呆れながらその顔を見ていた。

「それでは後は任せましたよ」

そう言っただけ逃げるように部屋を出て行く花山院。

「さてと」

そう言いながら司令室の椅子に身を沈める嵯峨。

「捕虜の武装解除は進んでるかねえ……」

端末を操作する嵯峨を呆れながら見つめるクリス。

「なんでそんなに余裕があるんですか？十萬の捕虜を確保するなんて……」

「ああ、無理ですね。まあ俺も予想はしてたので小麦粉の買占めと製麺工場の確保はしているんですけどね」

クリスの言葉にすぐに答えた嵯峨。

「俺が胡州軍の将校だったら穴を掘らせて機関銃でなぎ倒して片付けますがそうはいかないんでね。とりあえずうどんとそれを茹でる水の確保には気をつけますが」

そう言っただけにやりと笑う嵯峨。確かにこの男が胡州軍の憲兵隊長ならばそれぐらいのことは平然とやるだろうとクリスにも想像できた。そして遼南軍の伝説を思い出した。彼等はいつもうどんを食べる。それがアフリカの砂漠や大麗のコロニー外の真空であろうが彼等は水をふんだんに使っただけうどんを茹でるのは習慣である。もしそ

の水がなければすぐに脱走を始めるのが遼南軍である。そんなことを考えているクリスをぼんやりと見つめる嵯峨。

「だが、俺は一応北兼軍閥の首魁と言うことで名が通ってる。それに近くに米軍等の地球勢力の大部隊が展開中なんでね、降伏部隊の掃討なんかをすれば米帝は撤兵を視野に遼北と交渉しているテールを蹴るのは間違いない」

嵯峨の不気味な笑みにクリスの目はひきつけられる。

「まあこれで北兼台地の制圧には時間がかかることになりそうだな」

頭を掻きながら嵯峨は端末に映っている白旗を掲げた共和軍基地の映像を眺めていた。

「まあじつくりとやりましょう。楠木さん達も動いているんじゃないですか？」

伊藤の言葉に嵯峨は眉をひそめる。

「あいつも胡州軍気質が抜けない奴だからな。指揮官を二三発ぶん殴るくらいはやるかも知れねえな」

慣れた手つきで葉巻の吸いながら散らばる大き目のガラスの灰皿を取り上げてタバコの火を消す嵯峨。

「まあ手綱は締めとくさ」

はつきりとそう言うと嵯峨は再び取り出したタバコに火をつけた。

「それでは降伏部隊の……」

そう言っただけで部屋を出ようとした伊藤だが、その正面には先ほど部屋を出たばかりの花山院が戻ってきていた。

「どう言うことだ！」

そう言っただけで花山院は机を叩く。ただ呆然と嵯峨はその顔を見つめていた。

「そんな怒鳴られてもなにがなんだか……」

「降伏した共和軍の河北師団が我々が迂回した米軍の通信基地を北兼軍の指示と言っただけで攻撃したんだよ！」

唾を飛ばしながら怒鳴り散らす花山院。

「それで？」

まるで表情を変えることなく嵯峨はつぶやいた。

「守備兵力は50人前後だ。攻撃したのは一個師団1万五千だそう。それがわずかな兵の制圧射撃を浴びて壊走、我々の後方予備部隊を巻き込んで戦線が混乱している。それに乗じてアメリカ軍の部隊が逆侵攻を開始したそうだ！」

空気が一気に緊張した。クリスも伊藤の顔色が青ざめていくのがわかる。だが、嵯峨は達観したようにタバコをつまんでいた左手を灰皿に押し付けた。

「ようは降伏部隊に焼きを入れろってことですか？」

不敵な笑いを浮かべて立ち上がる嵯峨。

「ホプキンスさん。ちょっと用事ができましたんで……。そう言えば明日には西モスレムに発たれるんでしたよね」

そう言いながら嵯峨は人民軍の軍服の襟を直して見せる。

「はあ」

そう返事をするクリスに嵯峨はにやりと笑って見せた。

「まあ何とかしますよ。三派の人達には無事に東モスレムに帰って

もらいます。伊藤！そう言うわけではらくは留守にするから。楠木にはこう言う事態を予想して話をつけてある」

そう言うのと嵯峨は立ち上がった。

「出撃ですか？」

そう言うつクリスに情けないような笑みを浮かべる嵯峨。

「俺の馬車馬を見たらアメちゃんも少しはおとなしくなるでしょうからね」

そう言うのと嵯峨は真っ赤に顔を染めている花山院の肩を叩いて司令室を出て行った。

「まったく……だから遼南の軍隊はうどんを茹でるしか能が無いって言われるんだよね」

そう独り言を言う伊藤。

「ああ、すいませんねえ。それじゃあまもなく後続の部隊も到着するでしょうから」

そう言う伊藤は司令室からクリスを連れ出した。

「しかし、こんなに降伏部隊を受け入れる余裕はあるんですか？」

思わず質問したクリスに隼は首を振った。

「無理ですね。しばらくは進軍どころか補給の確保で精一杯でしょう。どうか物資の空輸を東和に許してもらうのができるかどうかということですが」

クリスは廊下から外を見た。捕虜になった共和軍の兵士に東モスレム三派の兵士達がパンを配っているのが見えた。

「パンで満足しますかねえ」

そう言う伊藤は笑顔を浮かべる伊藤。中庭の捕虜達を眺めている二人の隣に黒い棍棒のような腕があった。

「やあ、無事みたいだな」

ハワードはそう言うと一緒に庭の捕虜達に目を降ろした。

「ここから南は大変らしいじゃないか。まあゲリラの方が強いから逃亡する共和軍の兵士も無茶はしないだろうがな」

そう言う伊藤は窓を開けたハワードが庭の捕虜達をカメラに納める。

捕虜達のはじめは何が起きたのかわからないと言う顔をしていたが、それがカメラと知ると笑顔で手を振り始めた。

「あーあ。同じ遼南人としては恥ずかしいですねえ」

「ああ、まあ遼南でも北都と央都じゃあ氣質が違いますから」

そう言う伊藤は肩を叩くクリスに隼は死んだような目をしてつぶやいた。

「私は先祖代々央都の育ちですよ。大学に行く時に北都物理大に入っただけですから」

そう言う言葉にクリスは笑うしかなかった。

「まあ仕方ないですね。それとハワードさん。三派の兵士が居る間は自重して下さいよ。彼らとの関係は実にデリケートなものですから」

そう言うつと捕虜から目を離して、伊藤は廊下を歩き始めた。先ほどまで目立っていた黄土色の三派の軍服を着た兵士の姿が消え、緑色の人民軍の兵士が荷物を抱えて三人の横を通り過ぎていく。

「これからが大変そうですね」

伊藤はそう言うつとクリス達を階下へ降りる階段へと導いた。

「伊藤中尉！」

一階の踊り場でたむろしている女性兵士に声をかけられた伊藤。そこにはセニア達が自動販売機でコーヒーを買ってくつろいでいた。彼等の中から御子神が缶コーヒーを三つ持って近づいてくる。

「大変だそうじゃないですか、南部は」

そう言う御子神の表情はセニアやレム達と違って悲壮感に満ちていた。

「そう言えば御子神さんも央都の出身だったね」

コーヒーを受け取った隼はすぐさまプルタブを開けてコーヒーを飲み始めた。

「特に信念を持たない兵士の圧力に屈したんでしょね。彼らにとつては支配者が誰であろうが変わりません。力の恐怖に怯える政府と密告の危険に震える政府。どっちであろうと生きていることがその恐怖に耐え忍ぶ前提条件ですから」

そう言う御子神にクリスは驚いた。

「御子神さん。あなたも学生運動家出身と聞いていたんですけど……」

クリスの言葉に一瞬戸惑ったような顔をしていた御子神だが、一口コーヒーを口に含むと話し始めた。

「確かにそうですね。いつか時代を変えられる、そう思っていました。でも現実はそのほど甘くないのを知るのには三年と言う時間は十分すぎますね。隣の北都山脈を越えている人民軍の部隊を取材に行ったらどうですか？」

そう言うつと引きつった笑いを浮かべる御子神。

「手段を目的と勘違いしている連中だ。何を言おうが無駄なんだよ」

宥めるようにセニアが言った。一瞬で空気が重く滞留することに

なる。

「それじゃあ降伏した部隊は北兼の本隊に引き渡されるんですか？」

そう尋ねたがパイロットの表情は変わらなかった。クリスは悟った。降伏した共和軍の兵士達に与えられる試練。武装解除された彼等は人民軍中央軍団に送られる。そこで脱走兵や他の降伏した部隊と一緒に遼南中央縦貫鉄道の貨車に詰め込まれる。送られる先は最前線。手榴弾を二、三個渡された彼等は督戦隊の掃射を受けながら共和軍との交戦している人民軍正規部隊の最前線に回される。地雷や共和軍の掃射を避けて立ち止まれば督戦隊の砲火に倒れ、突撃すれば共和軍の弾幕に挽肉にされる。

クリスもパイロット達も彼らの運命を変えることができない自分を恥じていた。

「なーに、しけた面してるんだよ！」

その声の主に全員が視線を向けた。熊がいた。熊太郎、そしてシヤム。

「伊藤。お前さんがしっかりしてねえと本当に降伏した連中は督戦隊の餌食になるぜ」

熊の後ろから出てきたのは楠木だった。そのまま彼は若いパイロット達の前を通り、悠然と自動販売機でオレンジジュースを買う。

「楠木さん。そうまで言うならなにか策でもあるんですか？」

そう言う伊藤を、プルタブを空けながらぼんやりと眺める楠木。周りの視線が彼に集まってもまるで気にする様子もなく、そのままジュースを口に含んだ。

「知らないのか？ ついに遼北でクーデターだ。うちの魔女軍団の親父さんが政権を取ったぞ。情報関連の連中は大忙しだ。東和でも今はそのニュースで持ちきりだぜ」

そう言うが残ったジュースを一気に飲み干す楠木。北兼人民共和国、周喬夷首相。北兼軍の主力軍といえる女性パイロット兵士ばかりで構成された嵯峨惟基中佐の従妹周香麗大佐の『魔女軍団』の亡命劇の立役者でもある遼北革命の闘士。教条派と呼ばれる人民党の急進勢力に押さえつけられてきた彼の決起が近いと言うことは多くの隊員も感じていた。嵯峨が北都の遼南人民軍に参加した理由も、その時期が近いと言う証明だった。

「あの人が動く。そうなれば無駄に兵士を損失する作戦はクライアントのイメージに関わることになると言う話ですか」

伊藤は納得がいったというように頷いた。

「ねえ、魔女軍団って魔女がいるんだから魔法を使えるの？」

まったく何もわからないと言うように首を左右に向けるシヤム。そんなシヤムをレムが抱きしめた。

「違うわよ。そうね、あなたももう立派な人民軍の英雄なんだから周香麗大佐も会ってくれるわよ。ねえ、クリスさん！」

急に話題を振られたクリスは動揺した。意外にまめなところのある嵯峨である。クリスが周大佐と会話をしたことくらい伊藤を通じてここにいる全員が知っているのは明らかだった。

「まあ見た感じ気さくな人でしたね」

「そう、それで紅茶おばさん」

そう言ったルーラをセニアがにらみつけた。失言に思わず手を当てるルーラ。パイロット達はそれまでの重い空気を追い払う為というように笑っていた。

「そんなに樂觀できるんですか？」

ハワードの言葉に顔を上げたセニア。笑顔を消し去ると彼女はハワードを見つめた。

「遼南の弱兵は銀河の常識よ。もし自分たちのところに魔女軍団の銃の筒先が向けばどう言うことになるかと言うことをわからないほど北都の連中も馬鹿じゃないわ。しかも今度は支援元の遼北さえ、中央山脈越えで攻めてくるかもしれないとなれば勝手に兵士を使い捨てるわけには行かないわね」

ハワードは頭を掻きながらセニアの言葉に聞き入っていた。

そのままパイロット達の雑談が続く。さすがにクリスとハワードにはいづらい雰囲気になった。

「ホプキンスさんとバスさん。こっちに」

そう言っただけを利かせる楠木。クリスとハワードはそのまま司令部の外へと招きだされた。ついてくるのは会話についていけないシヤムと熊太郎。そのまま楠木は司令部の前に止められていた装甲車両のドアを開いた。そこにくりつけられた空き缶の灰皿を確認すると、タバコを取り出した。

「楠木大尉も吸うんですか？」

そう言ったクリスに苦笑いを浮かべる楠木。

「まあね、隊長みたいなチエーンスモーカーじゃないけど、作戦が終わった時とかはコイツで気分転換するのが習慣でね」

楠木はゆっくりと使い捨てライターを取り出してタバコをつける。

「どうですか？踏ん切りはつきましたか？」

クリスはその質問に戸惑った。

「間違っていたなら訂正してください。あなたはここに取材をしに来たわけじゃない。あることに、しかも個人的なことに決着をつけるために来た。そうじゃないですか？」

楠木の言葉にクリスは金縛りにあつたように感じた。

「どう言う意味ですか？」

興味深そうにクリスの顔を覗き込んでくるハワードの顔を見ながらクリスは額ににじみ出る汗を拭いた。

「言ったとおりの意味ですよ。あなたの記事はこれまでに何も読ませていただきませんでしたよ。だがその流れ、その意図するところ、言おうとしている思想みたいなものが今回のうちの取材とはどうしても繋がらなかった。それが気になって、俺なりにあなたを見ていたんですよ」

タバコの煙がゆつくりと楠木の口から空へ上がる。クリスは逃げ道が無いことを悟った。

「確かにそう思われても仕方ないかも知れませんが、どちらかと言えば特だねを物にすることがメインの仕事にはもう飽きていましたから。東海の花山院軍の虐殺の取材を始めた頃は、地球人以外は悪である。そう言う記事を書いて喜んでいた、だけど何かが違うと思いはじめた……」

そこまで言ったところでハウードの視線がきつくなっているのを見つけた。クリスはそれでも言葉を続けた。

「悪というものが存在して、それを公衆の面前に暴き立てるのがジャーナリストの務めだと思っていました。どこに行ってもいかに敵が残忍な作戦を展開していて自分達がそれを正す正義の使者だと本気で信じている馬鹿にであう。それが十人も出会えばあきらめのよくなものが生まれてくる」

そんなクリスの言葉をタバコを口にくわえながら楠木は表情も変えずに聞いていた。その隣のシャムと熊太郎もじつと言葉をつむぐクリスを眺めていた。

「それは違うよ！」

突然のシヤムの言葉にクリスは戸惑った。

「正義とか悪とか、アタシにはよくわからないけど守りたいものがあるから戦う。アタシが知っている戦いはそれだけ。もし、それが無いのに戦うなら、それが悪なんだよ」

熊太郎を撫でながら言ったシヤムの言葉。楠木はそれを目をつぶって聞くと口からタバコの煙を吐いた。

「結構いいこと言うじゃないか、シヤム。ただ大人になるといろいろ事情があるんだよ。まあ、ホプキンスさんは結論を出したということ。俺達はこの戦いに結論をつけねえとな」

そう言うつと楠木は手を上げた。彼の視線の先で三派の基地へと帰還しようとするシンの指揮下のアサルト・モジュールが目に入った。

「あいつ等も自分のいるべき場所に戻るわけか」

再びタバコをふかす楠木。クリスはシヤムを眺めていた。

「ホプキンスさん！」
そう言つて司令部の入り口から飛び出してきたのはキーラだった。どうしました？」

クリスのぼんやりとした顔に、キーラは眉間にしわを刻んだ。

「どうしたのじゃないですよ！聞きましたよ、明日出られるそうですね」

白いつなぎに白い肌、そして短い白い髪がたなびいている。

「ああ、ハワードさんちよつと話があるんで……」

「そうですね。シヤムちゃん！ちよつと熊太郎と一緒に写真を撮らせてもらつてもいいかな？」

楠木とハワードは気を利かせて嬉しそうに二人を見つめるシヤムと熊太郎をハンガーの方へと誘導する。

「クリスさん……」

言葉にならない言葉を、どうにか口にしようとするキーラ。クリスも彼女のそんな様子を見て声を出せないでいた。

「たぶん、これから二式の整備で手が離せなくなるんで……」

そう言いながらくるりと後ろを向くキーラ。クリスは彼女の肩に手を伸ばそうとするが、その手がキーラの肩にたどり着くことはない。

「そうですね。帰還したばかりだけど西部での戦闘は続いている以上、常に稼働状態でないとこの基地を押さえた意味がないですよ」

クリスの言葉に、キーラは何か覚悟を決めたように振り向く。

「ジャコビンさん！」

名前を呼ぶクリスの胸にキーラは飛び込んでいた。

「何も言わないでいいですよ。何も言わないで」

キーラはクリスの胸の中でそう言うと、ただじっとクリスの体温を感じていた。

「帰ってくるん……いえ、また来てくれますよね」

ゆつくりと体を離していくキーラを離したくない。クリスはそう感じていた。初めてであったときからお互いに気になる存在だった。それなりに女性との出会いもあったクリスだが、キーラとのそれは明らかに突然で強いものだったのを思い出す。

「いえ、又帰ってきますよ」

そう言って笑う自分の口元が不器用に感じたクリスだが、キーラはしっかりとその思いを受け止めてくれていた。次々と通り過ぎる北兼の兵士達も彼らに気をきかせてかなり遠巻きに歩いてくれている。

「それじゃあ、これを……」

クリスはそう言っていると自分の胸にかけられていたロザリオをキーラに手渡した。

「これはお袋の形見だね」

クリスの手の中できらめく銀色のロザリオ。キーラはそれを見つめている。思わず天を仰いでいた自分に驚くクリス。そんな純情など残っていないと思っていたのに、キーラの前では二十年前の自分に戻っていることに気付いた。

「そんな大切なものを私がもらって……」

「大切だから持つていてもらいたいんだよ。そして必ず返してくださいよ」

クリスの言葉に、キーラはしっかりとロザリオを握って頷いた。

「わかりました……でもクリスさんに返しても良いんですか？本当に受け取ってくれますか？」

「いたずらっぽい笑みを浮かべるキーラに頭を掻くクリス。」

「大丈夫さ、きっちり取り返しにくるさ」

そう言ってキーラがロザリオを握り締めている両手をその上から

握り締めるクリス。

「キーラ！早く来てよ！とりあえず機体状況のチェックをするわよ！」

小さな上司、許明華が手を振っている。お互い明華を見つめた後、静かに笑いあったクリスとキーラ。

「つたく！チビが野暮なことするなよ！」

「楠木大尉！そんなこと言ってもあんな二人見てたら邪魔したくなるじゃないですか」

無粋な明華をしかりつける楠木。ハワードは気がついたようにクリスとキーラにシャッターを切った。

「ハワード！あんまりつまらないことするなよ！」

「何言ってるんだ。俺とお前の仲じゃないか！」

そう言っただけでシャッターを切る続けるハワード。さらに司令部から出てきたセニア達パイロットや伊藤までもが生暖かい視線を二人に送ってくる。

「じゃあ、ホプキンスさん！」

交錯する視線に耐えられなくなったキーラがそのまま明華の方に走り出した。

「必ず返してくれよ！」

そう叫ぶクリスに向けて、キーラは右手に持った口ザリオを振って見せた。

「なにぼんやり外なんて見やがって。センチメンタルになる年でもないだろ？」

一枚、クリスの顔写真を撮るとハワードはそう言っただけでクリスを茶化した。

「俺もそうは思っただがね。こうして時代が変わって……」
突然呼び鈴が鳴った。

「アタシが出ようか？」

そう言ったシャムをハワードが押しとどめた。ニヤニヤと笑うハワードの顔に一撃見舞いたい気分になりながらクリスは立ち上がった。そしてそのままドアに手をかけて振り向く。ハワードに釣られてシャムもなにやらニヤニヤと笑っている。

もうドアの外で待つ人が誰なのかクリスにも想像がなかった。

「あつ、あの」

少佐の階級章をつけたキーラがそこに立っていた。白い髪は以前より長く、肩まで届いてぬるい廊下の風になびいていた。

「久しぶりだね」

そう言ったクリスだが、振り向けばハワードがなにやらシャムにささやいている。遼南内戦の取材を終えたあの日から、クリスは毎日キーラにメールを送るのが日課になっていた。彼女のメールの言葉には不条理な暴力が支配する戦場の掟が書かれていた。死んだ仲間、投降する敵兵、そして不足する物資。そしてクリスは遼州の政治家や活動家を訪ねる取材を続けながら彼女からのメールを待っていた。

今、そのキーラが目の前にいる。

「まあ、入ってくれ。あまり良い部屋とは言えないがね」

そう言ったクリス。うつむき加減のキーラがそのまま部屋に入る。それだけで楽しいとでも言うようにシャムは笑顔を浮かべながらハ

ワードに何かをささやいている。

「そう言えばシャムちゃんも久しぶりね」

会いたいと言う思いが実現したと言うのにクリスマスもキーラも言葉を切り出せないでいた。

「ああ、そうだ。吉田少佐に呼ばれてるんだよな。シャム、お前も来いよ」

「なんで？」

ハワードに腕を引っ張られながらシャムが抵抗する。だが、小さなシャムはそのままハワードにひきづられて行く。

ドアが閉まると同時に、クリスはキーラを抱きしめていた。

「返しに来たの……これ」

そう言うとキーラは胸元にクリスから預かったロザリオを見せた。

「ありがとう。実はお願いがあるんだ」

クリスはゆっくりとキーラを離すと静かにその口にした。髪を掻きあげながらクリスを見つめるキーラが軽く頷く。

「それをもらって欲しいんだ」

その言葉に一瞬キーラが戸惑った表情を浮かべる。

「君も仕事があると思うんだ。しばらくまだ遼南は荒れる。いろいろとすることもあるだろうし、君の手がこの国に必要なのはよくわかる。だから約束の……結婚の約束のつもりにそれを預かっていてもらいたいんだ」

そう言い切ったクリスの瞳をキーラの赤い瞳は見つめていた。

「本当にいいの？私で」

キーラの言葉に頷くクリス。そして二人の顔は自然と近くなった。強く、抱きしめたキーラの体の温度を感じながらクリスはキーラの唇を味わった。一瞬、だがそれは永遠にも思える時間。クリスとキーラの心は一つだった。

そう、それは一瞬だった。

「おいつす！……あつ失礼しましたねえ……」

「嵯峨……陛下！」

ドアから堂々と入ってきて、二人を見つめて帰ろうとするのは着流し姿の嵯峨の姿だった。

「なんで……ここに？」

クリスは一瞬キーラと見つめあった後、静かに彼女を手放した。

「おい、吉田！聞いてねえぞ！俺が野暮天になっちまったじゃねえか！」

隣の窓に向かって怒鳴る嵯峨。そしてそこからはなぜか壁を登ってきた吉田が顔を覗かせる。

「いやねえ、こう言うのを見るとつい邪魔したくなるのが人情でしょ

？」

吉田は悪びれることも泣く、部屋の窓の鍵を外から綺麗に開けて中に入ってきた。

「おい、そりやどこの人情って。お前等もなあ、先にこう言う雰囲気なら一言なあ……」

嵯峨の後ろからは出かけたはずのハワードとシヤム。それに遼北に帰ったはずの明華、今は東和でフリーライターをしている楠木、そしてニヤニヤと下品な笑顔を浮かべるレムがいた。

「君達もしかして……」

そう言うクリスを後目に吉田はそのままベッドの横の植木鉢に手を突っ込むと小さなマイクを発見する。

「誰だ？こんなの仕込んだの……」

吉田の問いに手を上げるレム。

「なんだかなあ……」

天を見上げるクリス、隣には笑うキーラの幸せそうな顔があった。

翌日、嵯峨惟基はクーデターに関する詳細を発表。同時に、東和・遼北・西モスレム・ゲルパルト・大麗の大使を臨時首脳府に招聘、政権の正当性を伝えた。

各大使はそろってこれに支持の意向を示した。

これによりムジャンタ王朝は後遼王朝として成立することとなった。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2516e/>

遼州戦記 墓守の少女

2010年10月8日13時09分発行